
黒衣の守護者

アラヤシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒衣の守護者

【Nコード】

N36020

【作者名】

アラヤシキ

【あらすじ】

仮面の剣士『ジューダス』は、自身の存在が消えてなくなると思いながら、時間の修正に巻き込まれた……。しかし、自分の存在は確かにまだある。そこに現れた謎の男『アルテ』と、昔の想い人マリアンに良く似た女性『セルシア』との出会いが、ジューダスを新たな戦いの舞台へと導く……

このお話は、T O D , T O E , T O S , T O A , T O V , T O W R M 2 の主人公とヒロインと出会う、ジューダスを主人公とした二次

創作です。

序章 仮面の剣士（前書き）

このお話は、T O D・T O E・T O S・T O A・T O V・T O W R
M 2の主人公とヒロインと出会う、ジューダスを主人公とした二次
創作です。

こういった話が苦手な方、あるいは本編のネタバレを好まない方、
そしてオリジナル要素に嫌悪感を持たれる方はご注意ください。

序章 仮面の剣士

この話は、複数のシリーズタイトルを合わせて作った二次創作です。

シリーズを超えた話の展開が苦手な方や、シリーズ本編のネタバレを好まない方は閲覧されないことを推奨します。

数人、オリジナルな設定のキャラクタも登場します。

序章

波が押し寄せてくる。

黒い波は、そのまま世界を飲み込んで終わらせてしまうような感じだった。

それほどまでに圧倒的な黒。その中で、細かく光る破片が、漂うに動いているから、目の前にある黒い壁が波であることを理解できる。ゆっくりと、光の欠片が迫ってくる。

よく見れば、その欠片の一つ一つには風景が映りこんでいた。どこの世界の風景か、自分のもといった世界のものか、それとも良く似た別の世界のもののか。

理解は出来ない。けれども、欠片の中の風景は間違いなく本物である事は確信できた。

よく出来た絵画の類ではない。間違いなく、生きた風景、生命の息吹を感じさせるものだった。

「あ」

そこで、自分の事を思い出した。

自分は、もう居ないはずの存在だ。どうしてかは分からないが、こうして思考し、疑問を持ち続けることで、自分が生きていることを実感できている。

死んだはずなのに、何故。

もう一つ、重要な過去を思い出した。自分は死んだのではない。無くなっただけだ。

まるで、世界の意志が自分の存在を否定したかのように、自分は自分という存在そのものを抱えたまま消えたのだ。

時間の修正。あるべき物はあるべき場所へ。

仮面を被った風変わりな剣士は、在りえない存在だったから、在りえない場所へ還されたのだ。

だというのに、自分は今、確かな実感を持っている。生きている。未だに生きている。

それともこれは、死のふちに見る夢なのだろうか。

生きているという実感さえ幻で、自分は消える直前に無限とも言える時間の感覚に戸惑いながら、こうして存在しているだけなのだろうか。

「いいや、違う。君は生きている。少なくとも、この瞬間においては」

まどろみの中、遠くから声が聞こえた。

警戒心よりも先に、その声に安心した自分がいた。

まるで、生きているという事実、安堵を覚えたみたいだった。

「!!」

即座に意識が覚醒する。

声のした方を視線で捉え、身構える。

しかし、周囲は白い靄に包まれていて視界が悪く、声の主の姿を視認する事はできなかった。

今のは、幻聴などでは無い。自分の声でなかった以上、この場には自分以外の誰かがいる。

そう理解し、少年は剣を鞘から抜こうとした。

「な……に？」

剣が無い。直前まで自分が確かに所持していたはずの剣が、どこにも無かった。

（直前……？）

自分の考えに違和感を抱く。直前とは、何時のことだろう。自分がどうしてここにいるのか。

自分は先ほどまで、どこに居たのか。

直前まで確かに存在していた自分の疑問は、現状のおかしさと自分以外の何物かへと向けられる警戒心によって散漫している。

「ふふ……大丈夫。私は、君の敵じゃないよ」

「……」

白い靄が晴れていく。声の主の姿がうつすらと浮かび上がる。

「どうも。はじめまして、ジューダス……いや。リオン・マグナス……かな？」

「……」

そう呼ばれて、少年は目を大きく見開いていった。目の前に居る男に、むき出しの警戒をぶつける。

しかし、男はそんな少年の様子を意に介さず、話を続けようとした。

「私は『アルテ』。ここに君を招待したのは、私の意志なんだ、ジューダス……リオン」

アルテと名乗った男は、青くゆったりとしたローブを身に纏っていた。

金色の長髪が印象的な男だった。後ろ髪は彼自身の足元に達するほどに長い。

中性的な印象の見た目だった。声が男性特有の低音で無かったならば、女性に間違われてもおかしくない。

「……ジューダスでいい。リオン・マグナスは、とうに死んだ男だ」
「そうかい？それを言ったら、ジューダスはそもそも『始めから存在していない』男になってしまうのだが」
「……」

ジューダスは目の前の男に疑問を抱いた。

リオン・マグナスの名前を知っていることもそうだったが、ジューダスという存在にに対して男が告げた事実も、他人が知りえるはずの無い情報である。

それを知っていたという事実が、ジューダスにはただ不気味であった。

「貴様……何者だ」

「名前は先ほど告げただろう？『アルテ』という名前だよ」

「茶化すんじゃない。僕は、お前が何故『そこまで知っている』のか聞いているんだ」

「ああ。そういう意味か。すまない。会話は出来る限り簡略にして欲しい。回りくどい表現は、私は苦手なんだ」

「……ああ。単刀直入に言おう。貴様、どこまで知っている？そして……何故知っている？」

ジューダスの質問に、アルテはすぐに答えなかった。
どう答えたものかと、思索し続けている。

敵意を見せないその仕草は、まるで女神が赤子を前に微笑むようなものだった。

アルテはしばらく考えた後、納得したように頷くと、後ろを振り向いた。

「セルシア……私の部屋から、モニターを持ってきてくれ」

アルテが声をかけた方向は、まだ白い靄がかかっていてよく見えな
いが、どうやらその方向には彼の私室があるらしい。

「はい。少し待っていてください。……球状のものでいいですよね？」

「ああ。出来れば汚れていないものを」

「……どれも汚れています。貴方の管理がいい加減なものだから」

「では、その中で一番汚れていないものを」

「……」

白い靄の奥から聞こえる声は、女性のものだった。

可憐な声だと、ジューダスは思った。なんとなく、自分の思い人と
印象が重なる声であると感じていた。

ほどなくして、黒いローブを纏った人影が白い靄の奥から姿を表
した。

だが、フードを深く被っているため、顔がよく見えない。

小柄な女性だった。元々ジューダスも小柄な体格だが、そのジュー
ダスと同じかそれよりもやや低い身長である。

「……お待たせしました」

女性は無愛想な感じでそう言った。
ゆつくりとアルテの傍まで行くと、水晶玉をアルテに手渡した。

「見ていてくれ。これが、私が収集した情報だ」

そう言うと、アルテは水晶玉に手をかざす。

やがて、水晶玉が怪しげに輝くと、そこにつつすらと何かの影が映り始めた。

「そう遠くに居ると、よく見えないだろう？こっちに來たらどうだい」

「……けっこうだ。ここからでも見える」

「そうかい？では……見ていてくれ。これが、君に付随して流れてきた情報だよ」

水晶玉の輝きが徐々に薄れ始め、その中で映りこんでいた映像がより鮮明に見えるようになってきた。

水晶玉の中には、いくつかの人影が見える。

そのうちの一人は、まだぼやけていてよく見えないが、間違いなくジューダス自身であった。

（……ああ。なるほどな）

これは過去の映像であると、ジューダスはすぐに理解した。

今、映し出されている映像は、かつてのジューダスのたびを俯瞰の視線から捉えたような映像だった。そこには、『感情』は込められていないが『事実』だけはただひたすらに正確に投影されていた。
やがて映像は終了し、アルテがジューダスの方を見た。

「君の辿ってきた遍歴は、まあ、かいつまんだ程度にだが、私は把

握しているんだよ」

「なるほどな。いつの間にか、僕にはストーカーが付きまとうていたという事か」

「心外だなあ……私は、君がここに辿り着く直前まで、君の存在そのものを知らなかったのだよ。いわば、偶然の産物さ。この事態は、ね」

「……何？」

そこで、はたと疑問が浮かんだ。

この男と出会う直前に感じていた疑問が、今はつきりと浮かび上がったのだ。

ジューダスは改めて、自分の両手を眺める。

そこには確かな自分の腕がある。握り締め、掌を開き、その動作を何度も繰り返し返すことでその感触を確かめる。

そして、確信する。自分は間違いなく、確かな肉体を持った上で……「生きている……だと？僕が、何故……」

段々と思考が鮮明になっていく。同時に、自分の存在が在りえない事に気が付いた。

ジューダスは、自分のもといた世界が時間の修正によって書き換えられたため、本来在りえない存在として消滅したはずだ。だとういうのに、自分がこうして思考し、生きていることが確認できる。

「どういうことだ……なぜ」

「偶然の産物……と言っただろう？君は、よく出来た存在抹消者だよ」

アルテが球体に映し出されていた映像を消した。ジューダスと目をあわせ、一瞬哀れむよう表情を見せる。

「君は確かに存在する存在……『ジューダス』という固体であることに間違いは無い。だが、その固体を容認する事は世界には出来ない。」

君は正しい時間の流れにおいては、君はリオン・マグナスとして死

んでいる。その時間の流れに世界が修正された以上、君はリオン・マグナスとして死んでいるべきだ。

だが……こういうのは結構いい加減なシステムでね。本来、時間の流れに正しいとか正しくないとか無くてね。だから、間違っている時間の流れとやらの中にいた存在でも、確かに在る。在る以上は生きているのさ」

「……」

「修正は確かに存在すら抹消する。ただどね、在る段階のものを、そのまま修正の及ばない範囲に回避させることで存在を保つことは出来るんだよ。つまりそれが君だ。ジューダス。君は世界の修正によって消滅する前段階にあつたが、それを私がここに強引に連れて来たんだよ」

「連れて来た……だと？」

「より正確に言えば、流れ着いた……という感じかな。君は世界の修正が起こる際、どうやら特別な場所にいたみたいだね。その影響だろうけど、君は随分とハッキリとした存在を保ったままここまで流れ着いたんだよ」

アルテは話し終えると、傍にいるローブ姿の女性に水晶球を手渡した。

ローブの女性は、顔を隠したまま再び白い靄の中に消えていった。

ジューダスは去っていく黒い背中を見つめながら言った。

「あいつも、僕と同じように時間の修正とやらの巻き込まれた人間なのか？」

その質問に、アルテは微笑を見せながら首を振る。

「彼女は違うよ。彼女は、何をしたのか分からないけど、空間の断裂を引き起こして、その裂け目に自分から飛び込んでしまったんだ」

「……ほう？」

「どうやら意図しない出来事だったらしいね。どちらかというと、彼女のような存在のほうがここには流れ着きやすいんだ。私の親は、どういった形であれ世界から弾き出された者をここに連れ出し、と

ある機会を与えるよう、私に指示している」

「……」

「端的に言ってしまうえば、『世界を救う奴隷になるか』否か……その選択を与えるんだよ」

ジューダスの鋭い眼光がアルテを射抜く。

今の話のどこに不機嫌になる要素があったのかと、アルテはジューダスの瞳を不思議に思いながら、話を進めた。

「ここには通常の死とはかけ離れた存在が来る。そして、そういう人たちに生命を与える代わりに、あるお願い事をするんだ」

「それがお前の手下となって行動する……という事か？」

「そう」

「……くだらん」

ジューダスはそう言うのと、アルテに背を向けた。

「どうかしたかい？」

「死んだ者……存在を抹消された者。まあ、どちらでもいい。そういう連中を呼び起こして、自らの手足として行動させる者に心当たりがある。そういう連中に従うのは、気に食わないんだ」

「……ああ。そうか」

エルレイン、そしてミクトラン。自分を死の淵から連れ出し、傀儡に仕立て上げようとした者達を思い出す。どちらも、世界にとって害悪であった。少なくともジューダスはそう考えている。

「僕を従えるつもりならば、残念だが諦めてもらおう。僕は、死の淵から救い出されたことに感謝するつもりは無い」

「……世界を救うという目的であってもかい？」

「世界を救うことが必ずしも世界のためになるとは限らん」

聖女は、世界を救うために世界を滅ぼすと言った。世界を救うと口にする連中には、時折エルレインのような壊れた思想の持ち主もいる。例えばそれが壊れていなくても、ジューダスにとっては気に入らない思想だった。

だから、アルテの提案もまた、そうした壊れた類であると、ジューダスはそう疑っている。

「困ったな……丁度、大きな仕事があつてね。彼女一人じゃ荷が重いだろうから、君にも協力してもらいたかったんだが……」

アルテは微笑みながら頭をかく。

「……彼女？」

ジューダスが問いかける。

するとアルテは、思い出したように口を開けた。

「ああ、そうだ。すっかり忘れていた。彼女のことをちゃんと紹介しなくちゃいけなかったね」

「……」

「おい。セルシア、来てくれ。ジューダスに君の事を紹介しなくては」

アルテが呼びかけると、黒いローブを纏った女性が再び靄の奥から現れた。

再び見るその姿は相変わらず頭をフードで隠していて、どんな顔をしているのが見えない。

「彼女はセルシア。彼女はね、君よりも1年ほど早くこの場所に辿り着いていたんだよ」

黒いローブの女性は、ゆつくりとジューダスの傍にまで歩みを進める。

ジューダスは、一応の警戒をしながら、女性からの行動を待った。
「……」

女性は全く喋らなかつた。

ジューダスも、どうしたものかと反応に困る。

すると、セルシアと呼ばれた女性がアルテに向かって話しかけた。

「……アルテ。ジューダスにお願いすることについて説明しなくては、彼が納得するかわからないでしょう」

「……だから、世界を救うと」

「それではダメなんです。それは、私達人間の間では一、二を争うほどに胡散臭い言葉なんです」

「……そうかい？」

アルテは暫く黙つたが、閃いた様な顔を見せると、霧の中に消えていった。

彼が戻ってきたとき、そこには先ほどと見せられた水晶球と同じようなモノがいくつか、彼の周囲を浮いていた。

「見ていてくれ」

そして、それぞれの水晶球が輝きだす。

「……なんだ。また映像か」

ジューダスが怪訝な顔をしながら、それぞれの水晶球に映し出される光景を見つめる。

「……草原？」

「いや、これは『世界』だ」

アルテは言いながら、水晶球に映し出される光景を見つめる。

それはまるで、親が愛する子を見守る際に見せる眼差しに似ていた。ジューダスは、水晶球が映している光景を見比べていった。

「……なんだ。これはそれぞれ違う世界なのか？」

「その通り。ここに映されているのは、どれも『空間』を共有することも無ければ『時間』を共有することも無い、全く別の『次元』に配置された世界たちなんだよ」

それぞれの水晶には、最初は草原しか映し出されていなかったが、

徐々にその光景が遠退き、広範囲を見渡せる視界に変わっていった。
「不思議なものだろう。世界が違うというのに、映し出される景色はどこと無く似ているだろう？」

「……」

「まあ、根本が違うとそもそも知覚すら出来ない場合が多い。例えば、精神世界『バテンカイトス』というものがあるが、そこには物体が無い。生命が精神によってのみ構築されている世界があるんだ」

「……」

「興味ないかい？」

アルテの話を無視しながら、ジューダスはある水晶が映す映像に釘付けになっていた。

「……馬鹿な」

ぼそりと呟いたその言葉には、ジューダスの驚愕が込められていた。彼の視界には、一つの都市が映っていた。

そこは、甚大な被害を受けた都市であった。まるで、大量の土塊が天から降り注いだような光景である。

ジューダスは、その景色に見覚えがあった。

「ダリル……シェイド……」

紛れもなく、王都ダリルシェイド……ジューダスが元々『存在していた世界』がそこに映し出されていた。

「理解してもらえたかな？……『運命の皮肉』というのかな……君は、君を弾き飛ばした世界を、これから救いに行くことになる……と。君はまだ承諾していなかったね」

アルテは微笑を見せながらジューダスに近付く。

ジューダスは呆然としたまま、水晶に見入っていたが、やがて小さ

く笑うと、アルテに対して挑戦的な表情のまま向き合った。

「……どうかしたかい？」

「『運命の皮肉』？はっ……はははっ！」

突如笑い出したジューダスに、アルテは戸惑うが、ジューダスは構わずに続けた。

「ははは……！！……何だ。貴様の目的は」

「……世界の救済……って言うのは、うさんくさいんだっただね。君にはある『異常事態』を解決してもらいたいと思っているんだ」

「……どんな異常だ」

「今、ここに映し出されている全ての世界が、突然『繋がった』」

アルテがそう言うのと、ジューダスは笑みを止め、厳しい表情に変わった。

「有り得ない事態だが、起こりえないことでもない。君たちの世界の常識では無いが、私の知る限りでは良くあることだ」

「……繋がった、というのは、どういう意味だ」

「特定の空間を介して、それぞれの世界の行き来が出来るようになった。それと同時に、こちらでは観測できないイレギュラーが起きている」

「……僕のもといた世界に、どんな影響が起こっている」

「どこの世界でも共通の『魔物』が発生している。細かく調べる事はできないが、既に被害はあるんじゃないかな」

ジューダスはしばらくアルテを睨み続けたが、やがて視線を外し、アルテとセルシアに背を向けた。

「悪いが、断る」

その返答がアルテには予期していないものだったらしく、彼は驚きを浮かべる。

「……なぜ、だい？」

「……死人が、今を生きる者達の戦いに口出しする権利は無い」

「……だから、君は死んでいないんだ。生きている以上、世界に働

きかけるのは間違いでは無いだろう?」

「そういう意味じゃない」

ジューダスはそこで振り向くと、まるでアルテを見下すように笑った。

「僕は、既に世界を敵に回した男なんだ。そんな男がのうのうと『世界を救う』ために、再び舞い戻る?

……そんな事、僕は望まないし、世界だって望みはしないだろう」

「……ほう?」

どうやらアルテは、ジューダスの過去まで完全に把握できていなかった様だった。

ジューダスがある事情から世界のために戦うという選択を破棄したことを、アルテは知らない。

「罪人が世界を救う事は間違いだと、そう言いたいのかな?」

「いいや違う。世界を救うのは、救いたい奴の勝手だろう。だが僕は望まない。それだけの話だ」

「……参ったな。確かに君の言うとおりなのかもしれないが……生憎私は、そういった人間の感情の機微には疎くてね……」

アルテは困ったように笑うと、セルシアの方を見た。

「どうするセルシア。彼はどうやら、今回の事件に関わるつもりは無いらしい。君独りで、行動してもらえるかな?」

アルテの問いかけに、セルシアは相変わらず顔を見せないまま答えた。

「構いません。多くいる『守護者』の中で、私とジューダスが呼ばれた。つまり、今回の異常事態に関わっている世界に、私の故郷もあるということでしょう」

セルシアは言いながら、ジューダスの傍に近寄る。

「ならば、私は向かいます。自分の故郷を守るために戦いましょう」

「……そうか」

「……ジューダス。貴方がどういった理由で世界を救うという大儀を放棄するのはわかりませんが……貴方ほどの実力者が頑なに拒

むという事は、私達には分からない大きな事情があるんでしょう」

セルシアは言いながらジューダスの横を通り過ぎる。

「僕の実力が分かるのか」

「先ほどの映像と、貴方の纏う気迫から伝わってきます。貴方は強い。だというのに……いえ、いいです」

「……何が言いたい」

「私は行きます。世界を救うことは、間違っではない筈ですから」

セルシアはそう言う顔にかかっていたローブを取った。

ようやく露になったセルシアの素顔に、ジューダスは今までで一番驚いた。

驚愕に目が見開かれる。セルシアは、ジューダスのその驚愕の表情の理由に思い至らず、首を傾げる。

「どうかしましたか？」

ジューダスにはその言葉は聞こえていなかったらしい。

彼は、やっとの思いで、小さく声を発した。

「……マリアン」

セルシアの素顔は、空恐ろしいほどまでに、彼の生涯で愛した唯一の女性の顔と似ていた。

美しい黒髪に、大きな瞳。

表情こそ違うが、彼の愛した女性と瓜二つである。

「……どうかしめたか？」

再度、セルシアはジューダスに呼びかけた。

よほど驚いた顔をしていたのだろう。セルシアの表情は不機嫌なものになっていた。

「……いや。昔の知り合いに似ていたのな。驚いただけだ」

嘘では無い程度にごまかして伝える。まさか自分の思い人に似ていたなどと悟られたくは無かった。

ジューダスがそうごまかしていると、アルテは手を叩いて近付いてきた。

「ほう……これは何か運命的じゃないかな？君の知り合いとセルシアが良く似ていたなんて、いやはや」

「何が言いたい？」

「その知り合いの少女を守るためにも、異変の解決に乗り出すべきなのではないかな、という事だよ。ジューダス」

アルテはそう言うのと、にこりと笑った。

邪気の無い笑みだが、ジューダスには皮肉に笑っているようにしか思えなかった。

「……異変の内容は、世界同士が繋がった、ということだったな」
ジューダスがそう言うと、アルテはゆっくりと頷く。

「それが、どうして世界の危機だと言い切れる？」

「異世界への侵攻の可能性があるからさ」

「可能性だけか？」

「それだけじゃない。それぞれの世界に、今までいなかったであろう新種の魔物が現れ始めているって、先ほど言っただろう？」

「……」

黙り込むジューダスに、アルテはなおも笑みを崩さない。

それはまるで、ジューダスがアルテの依頼を断るはずが無いと確信しているかのような表情であった。

「……僕は」

呟いて、ジューダスは目を閉じた。

黒衣の守護者

続く

まどろみの中で、過去を見る。

花を摘むのが好きな女がいた。

やけに自分に親しくしてくる女であった。

赤髪の男は、自分の信念とやらのために戦う男であった。

その男が戦う姿を、自分はどいつも気持ちで見っていたのだろう。

黒い男と会った。

死神かと思われたその男は、どこぞの聖職者だった。

そんな男との出会いは、きっと祝福されるべきものだった。少なくとも、自分はそう思った。

銀色の剣士と出会った。

なんとも歪な理由で修羅に堕ちた男だった。

協力してくれるらしかったから、自分は仮初めの契約はしておいた。

ああ。そしてこれは、世界の見る夢だ。俺の見る夢だ。

黒い波が押し寄せてくる。その波には、色々な輝きを放つ宝石が散りばめられている。それはきつと世界の姿の断片なんだろう。目の前にまで迫った断片は、粉々に砕けて消える。割れた時の音が心地よい。綺麗な反響は、まるで鈴の音のよう。

その輝きが、その音が、世界の可能性なのだとしたら……可能性の追求こそが、世界の存在価値のはずだ。

少なくとも、俺はそう感じている。

同じことの繰り返しになった世界は、きつと世界自身の意志で殺される。

だから自分がいる。だからアレがいる。

それがきつと、俺の存在理由。

だから。

俺は。

意味のために。

理由のために。

世界を。

愛する世界を。

愛していない世界も。

たくさんの世界を

。

序章 仮面の剣士（後書き）

この小説は、別サイトでも掲載した作品です。より多くの方に読んでもらいたいと思い、こちらでも投稿しました。

……マルチ投稿って大丈夫なんですかね。

このお話は、前書きにも書いてありますが、登場人物が限定的な上にオリジナルキャラクターなどもジューダス達に絡んできます。なので、読める方は限られてしまうと思いますが、出来る限りにテイルズキャラたちを格好良く、そして物語そのものは辛辣にかいて行きたいと思いますので、よろしかったらこの物語にお付き合ってください。

感想や、小説のここが読みにくいなどの注意点がございましたお待ちしております！
では、失礼します。

一章二話 二刀の理想論者と極光の剣士（前書き）

この話は、複数のシリーズタイトルを合わせて作った二次創作です。

シリーズを超えた話の展開が苦手な方や、シリーズ本編のネタバレを好まない方は閲覧されないことを推奨します。

数人、オリジナルな設定のキャラクターも登場します。

一章一話 二刀の理想論者と極光の剣士

黒衣の守護者、二刀の理想論者と極光の剣士

異世界と繋がった。そういう噂は、ロイドの元にはすぐに届いていた。

世界再生から半年。二つに分かれていた世界は統合され、まだ世界情勢が危うい中、このような異常事態が起こるなどと、一体だれが予想できただろうか。

少なくともロイドにとっては、早急に解決すべき問題であることに間違い無かった。

シルヴァラントとテセアラ。その両者が共存していく上で解決しなくてはならない問題は山ほどあるのだ。だというのに、それ以上の問題が積み重なるのは捨て置ける問題ではない。

だから、異変と何か関係がありそうな事はすぐに調査するのが今のロイドの主な行動目的となっていた。

「バラクラフ王廟……か」

崩れたバラクラフ王廟の跡地に、ロイドは訪れた。

大樹の暴走の際に崩れてしまったのだが、最近になって、内部はそれほど崩れきっていないことがわかった。

そのバラクラフ王廟跡地にて、不穏な噂が流れている。

異変と共に出現が確認されるようになった魔物が、この王廟跡地から出てくるような姿が目撃されたというものだ。

この王廟跡地に、異変と関わる何かがある。ロイドはそう睨んで、行動に移した。

「グミもちゃんとあるし、ボトルもある……大丈夫だよ、ロイド」
ロイドの傍からコレットが話しかける。

二人は、エクスフィア回収の旅の途中であつた。しかし、今回の異変が発生してから、二人は異変の解決を優先させることにした。

「よし……行こうコレット。何が起こつてるのか確かめないと」

ロイドはそう言つて、崩れた王廟跡地の、かろうじて残っていた入り口に足を踏み出した。

中は以前訪れたときよりも複雑に入り組んでしまっていた。

無理も無かつた。大樹の暴走は恐ろしい災害であつたし、それだけの災害の中で原型をとどめていることこそ奇跡的なものだった。

「トラップが停止してるだけ、マシなのかな……」

周囲を警戒しながら歩く。

僅かな物音すら聞き逃さないよう、天使化の力を借りて細心の注意を払う。

「ん……？」

曲がり角の置くから小石の転がる音が聞こえた。

コレットの方を見る。コレットにも聞こえていたらしい。ロイドはそれを確認すると、二刀の剣を鞘から抜いた。我流の二刀流を披露する瞬間が来たようだ。コレットも、チャクラムを両手に構える。

(……来い！)

曲がり角から姿を現したのは、体長１メートル５０センチ程の狼のような形をした魔物であった。

しかし、その姿は全身黒ずくめに目の部分だけ赤く染まっているという奇妙なものであった。

その魔物はすぐにロイドに向かって飛びかかった。前足には鋭い爪が生えており、それで獲物を切り裂くのだ。

金属の衝突音が遺跡内部に響く。

魔物が振りかざした爪を、ロイドは丁寧にガードしていた。

なおも魔物は爪を両方の前足を使って振り回す。その連撃をロイドは左手の剣を使っていなし続けた。

(相変わらず、単調な攻撃だ)

ロイドにとって、魔物の攻撃はそれほど脅威では無い様子であった。彼は、ここに来るまでに何度か同種の魔物と戦闘を繰り広げたが、その過程でこの魔物の攻撃のパターンを見切っていたのである。

個体差こそあるものの、慣れてしまえば防御にてこずることは無い。ロイドはそう判断し、自身は防御に徹していた。

そして、ロイドが防御に費やしていた時間は、そのままコレットの詠唱時間となる。

「エンジェルフェザー！！」

3つの光りの輪が魔物目掛けて飛んでいく。コレットの得意とする天使術の一つだ。

光の輪は魔物のわき腹に直撃し、その体を光熱で引き裂いた。

「シギヤアアアアアッ！！」

絶叫をあげる魔物。怯んだその隙をロイドは逃さない。

「空破衝！！」

懇親の力を込めた突きを、魔物の脳天に直撃させる。魔物は頭を貫かれ、絶命したかのように見えた。

「シギヤ……ガアアッ！！」

「……！！……なっ！？」

しかし、魔物は倒れない、弱々しく右前足の爪を振りかざす。

「くっ！」

バックステップで避けるロイド。魔物はその爪で何も無い虚空を切り裂くと、そのまま動かなくなり絶命した。

「……ふう。ビビッた」

「ロイド、大丈夫！？」

「ああ……頭を貫かれても攻撃してくるなんて、こいつ……本当に生き物か？」

かいた冷や汗をぬぐいながら、ロイドは倒れた魔物を見下ろした。異変と共にその存在が確認された黒い狼のような魔物。その魔物の危険性を改めて認識しながら、ロイド達は更に奥へと歩みを進めた。

リッド・ハーシエルにとって、ファラ・エルステッドの好奇心に身を任せた行動に振り回されるのは日常であり、そんな日常を文句を言いつつも楽しんでいた節がリッド自身にもあるという事は自覚している事柄である。

しかし、グランドフォールを止めて世界を救うというあの旅の中で、その行動力が恐ろしいまでに非日常へと連れ込む力を持っていると

いう事は、充分に理解したはずであつた。

だというのに、今回もまた、ファラの行動力に付き合つた結果として『異世界』に渡つてしまった自分達がいるという事実に対して、リッドは自分が反省していないのでは無いかと疑つた。

「だからさ、ファラ……探検するなら一度戻つて、キールとメルデイを連れて来た方がいいって」

前を歩く幼馴染に声をかける。しかし、ファラは一向にその言葉を善しとしない。

「でも、私達で調べられるうちに調べたほうがいいよ」

「だからー。俺たちだけじゃ危ねえって言つてるんだよ」

「でも、あの異世界に渡る為の亀裂が出ている今しかチャンスが無いんだよ？」

「だからー。その亀裂が消えちまつたら、俺たち帰れなくなっちゃうだろ？」

「……だいじょーぶ！イケるイケる！」

「……イケねーって」

このようなやり取りを、この遺跡に入ってからどれだけ繰り返したのだろうか。リッドは自問する。答えのない自問に意味は無いと気付くまでに数分を要してしまつた。

リッド自身、この異変を解決したいという思いが強いのはファラと同様である。それは、リッドの中に元々根付いていた正義感に基づくものでもあり、幼馴染を心配するが故の行動でもあつた。

しかし、ファラの無鉄砲とも言える前向きさに些か驚いているのも事実である。まさか、世界を飛び越えることをものともしないとは、流石のリッドにとつても予想以上の行動力であつた。

「ん？」

ふいに、リッドの足が止まる。

「??どうしたの、リッド」

リッドが止まったことで、ファラも動きを止めた。見れば、リッドは自分の背後を睨んでいる。

「……ファラ、気をつける。何かいる」

「！」

リッドは呟きながら剣を抜いた。ファラもリッドの横に並び、戦闘態勢をとる。

構えた二人の前方から、黒い狼が現れた。

「シギヤアアアアッ！！」

叫び声と共にリッドを八つ裂きにせんと魔物が飛びかかる。

「はあっ！」

気合の掛け声と共に、リッドは剣を振りぬき、飛びかかる魔物を吹き飛ばした。

吹き飛ばされた魔物を追撃するために、ファラが駆け寄る。

「はあっ！たあっ！三散華！！」

魔物の頭を連撃で攻撃し続ける。たまらず魔物は後方に飛びのく。

「魔神剣！！」

それを見越したリッドは魔神剣を放つ。地を這う衝撃波が魔物の前足を切り裂いた。

「シギヤアアアア！！」

バランスを崩し、のた打ち回る魔物。それに止めを刺すために、リッドは高く飛びあがり、その剣を魔物の頭に突き刺した。

「……！！」

突き刺した剣はそのまま、リッドは前を向いて驚愕する。

先ほど自分とファラが仕留めた魔物が、今度は3体……こちらに向かってゆっくりと迫ってきていたのだ。

（……やべえ）

狭い遺跡の通路の中で、リッドとファラの二人だけでこの魔物を3体相手にするのは危険すぎる。

リッドの頭の中で最大限の警戒が響く。

「……リッド、こっちに逃げよう」

ファラが小声でリッドに呼びかけるが、リッドは首を振る。

あの魔物達は既に自分達を視界に納めている。逃げて追ってくるだけだろう。ましてや地形がよくわからない遺跡の内部で、逃亡が上手く行くとも思えない。

「……やるしかねえみてーだな」

リッドがごくりとつばを飲み込む。すると、3体の魔物達の内の1体がリッドに向かって飛びかかった。

「くっ！」

それをジャンプしてかわすリッド。しかし、2体目が空中のリッドに襲い掛かる。

「リッド……！」

ファラが叫ぶ。リッドが2体目の攻撃を何とかガードする。しかし空中では威力を殺せるはずもなく、リッドはそのまま後方に吹き飛ばされる。

「っ……！！ファラ、前だ……！」

3体目の魔物がファラに向かって飛びかかる。かろうじてからすが、他の魔物がファラを取り囲んだ！

「やべえ、ファラ……！」

リッドが駆け寄る。魔物達は同時にファラに飛びかかる。ファラも、せめて一矢報いようと魔物のうちの一体に拳の狙いを定めた。

その時であった。

「魔神連牙斬っ……！」

「エンジェルフェザー……！」

通路の置くから地を這う3つの衝撃波と3つの光の輪が飛来してくるのが見えた。

それぞれの攻撃はそれぞれの魔物に辺り、ファラの周囲から魔物を吹き飛ばす。

一瞬、何が起きたのか分からなかったリッドであったが、魔物達を駆逐するチャンスであると即座に判断し、一気に魔物を仕留めにかかると。

ファラも、攻撃態勢に入る。

1分もかからないうちに、地面には新しく3体の魔物の死体が転がった。

「……助かったあ」

リッドが安堵と共にその場に座り込む。

「腰が抜けちゃったの？まだまだなあ、リッドは」

対してファラがぴんぴんとしている。先ほどまでピンチに陥っていたのは果たしてどちらであったのか。

「大丈夫か！？」

通路の奥から駆け寄ってくる人物の方を見る。

二刀流の剣士と、金髪の少女であった。この二人に助けられたらしい。

「ああ、大丈夫……助かったよ、ありがとな」

「本当にありがとう！」

ファラが満面の笑みでお礼を言うと、駆け寄ってきた二人も安心してように笑った。

「俺はロイド。ロイド・アーヴィングって言うんだ」

「私はコレット・ブルーネル」

二人は、すぐに自己紹介をした。まるで、人に名前をたずねるにはまず自分から名乗るのが礼儀だと言わんばかりの早い自己紹介であった。

「俺はリッド・ハーシェルって言うんだ」

「私はファラ・エルステッド。よろしくね、ロイド、コレット！」

まるでこれから長い付き合いでも始めるのかという位にファラの挨拶は親しみを込めたものであった。

「私達、実は異世界から来たんだけど……ロイドとコレットはこの世界の人の？」

ファラが尋ねると、ロイドとコレットはかなり驚いた様子を見せた。無理も無いとリッドは思った。異世界に渡る人物は確かにいるが、そんなものごく少数であるからだ。それも、何かと問題のある自分物であることが多い。

犯罪者が自身の逃亡先として異世界を選ぶ、という例があった。

「うん。ここは私達の住んでいる世界なんだけど……」

「二人は、どうしてこの世界に……？」

ロイドとコレットが尋ねる。

「私達は『異変』について調べるために、亀裂を渡ってきたんだ」
ファラがそう答えると、ロイドは感心したようにへえ〜と呟いた。
リッドは「ファラに連れて来られた」と訂正しようかと迷う。

それよりも先にロイドとコレットが口を開いた。

「じゃあ……他の世界でもこういう異変が起こってるのは間違いないのか……」

「それに、私達と同じことしてる人がいるだなんて、心強いね！」
そう言われ、ファラの目が輝く。リッドはあちゃあと思った。

「もしかして、二人も異変の調査を！？すごい！私達、運命に導かれたんだよ！」

「なんでそーなるんだよ！」

「だってそうじゃない！異世界に覚悟して渡った先で、こんなにすぐに同じ目的を持った人と巡り会えるなんて……！」

「……あのなあ」

底抜けに明るいファラの発想に、リッドはやれやれと首を振った。気がつけば、ロイドとコレットもまんざらでも無い様子であった。一緒に異変を調査しようという事になるのだろう。

「よろしくな！リッド、ファラ！」

ロイドが明るい笑顔と共に、握手を求めてきた。
リッドは最初こそ頭をかいていたものの、にやりと笑って握手に応じた。

「ああ……無鉄砲な奴が増えるんだけど、よろしく頼むぜ。ロイド、コレット」

ファラの言うとおり、これも運命だとリッドは受け入れた。

王廟跡地を探索して数時間。王廟の最奥地に辿り着くロイドたち。
風の精霊と戦ったことのある舞台に上がる。

今は多少崩れていたものの、ここも当時の名残が残っていた。

「……何だ。ここまで探しても何もないなんて」

ロイドが呟く。ここに来るまで、めばしい戦果は得られなかったからだ。

「……異変に係るもの……か」

リッドもロイドに続いて周囲を見渡すが、特に何も見つけれなかった。
でいた。

王廟の最上階。外界と吹き抜けになっているこの舞台上に吹き付ける風は強い。

ロイド達が諦めて戻ろうかと思案し始めていた頃。

「あ、何かな、あれ」

コレットが崩れた瓦礫に埋もれていた黒い宝石を、天使化による視覚強化で見つけた。

「ん？……本当だ。他の瓦礫とちよつと違うな……」

ロイドもそれに気付いたようで、その黒い石に近付く。

すると突然、どこからともなく声が響いた。

ロイドとコレットにとって、その声は聞き覚えのある、驚くべき声であった。

「あーあ。見つけちゃったね……このまま立ち去るなら、見逃すつもりだったんだけど」

子供の声であった。リッドとファラは、突然響いた子供の声に驚く。ロイドとコレットは、互いに顔を見合って何かを確かめている様子であった。

「……誰だ」

ロイドが周囲に警戒心を剥き出しにしながら、その声の主に問いかける。

彼の中には既に一人の人物が浮かび上がっていたが、その人物は既に死んでいるはずなのだ。声がする筈が無い。

だからこそ、彼は「誰だ」と聞き返した。

その言葉に、声は笑って返事をした。

「あはは……気付いているくせに、何をそんなに怖がっているんだい？ ああ、そうか……僕とこうして言葉を交わしている現実を否定したいのかな？……世界再生の英雄、ロイド・アーヴィング」

そして声の主は現れた。

透き通るような子供の声を、憎悪と皮肉に染まらせながら。舞台の外からその『天使』は舞い降りた。

「久しぶりと言うには、半端な出会い方だけだね。僕としては充分さ。こうして……お前に復讐する機会が得られたんだから」

「……ミトス……！！」

ロイドとコレットが驚愕を表情に浮かべながら、現れた金髪の眩しい天使を見た。

リッドとファラは何が起こったのかわからないでいるが、少なくとも

も目の前にいる子供が、自分達にとって何か良くないものである事は認識していた。

「……本音を言えば、僕だってこんなくだらない事に付き合わされるのは御免なんだけどね……」

ミトスは皮肉っぽく笑いながら呟いた。その言葉の意味するところは何なのか、ロイド達はわからなかった。

「でも、望んでしまった以上、役割は与えられるんだ。仕方の無いことなんだよロイド……僕にとってお前は、憎むべき敵なんだからなあ……！」

そう叫ぶと、ミトスはその右手に光の剣を出現させ、咄嗟にロイドに切りかかった。

それを全力でかわすロイド。ミトスの剣さばきが早い。

「……何が起こっているのかわからねーけど、やるしかないみたいだな」

ロイドも剣を抜く。二刀の剣『ガグンラース』を引き抜き、ミトス目掛けて構える。

それと同時に、残りのメンバーも戦闘態勢に入った。

「コレット！あの子は……敵なの！？」

ファラがコレットに向かって叫ぶ。するとコレットは悲しそうな顔をしながら頷いた。

「そつか……じゃあ、気は抜けないね」

「ああ」

リッドが剣を上段に構えながら走り出す。

それを察知したミトスが、剣を横に薙いだ。

途端に、剣先から光の刃が現れ、リッド目掛けて飛翔した。

「く……！」

それをジャンプしてやり過ごすリッド。その反応のよさに、ミトスは一瞬驚いた顔をした。

「……異世界の戦士……ね。大したものだよ」

「そうかよ。なら、諦めて消えてくれねーか」

「……まさか。僕がお前たちごときに遅れを取るとでも？」

ミトスが詠唱を開始する。

ロイドが駆け寄るが、ミトスの高速詠唱に間に合わない。

「レイ！」

光の球がリッドの頭の真上に現れたかと思うと、そこから何本もの光のレーザが降り注ぎ、周囲を破壊していった。

「うあつ……！」

リッドの左腕にレーザが掠った。たまらず飛びのくリッド。ファラがリッドに駆け寄るが、ミトスはそれも見逃さない。

瞬間移動でロイドから距離をとると、再び高速詠唱を開始する。

「ホーリーランス！」

光の矢が、リッドとファラを取り囲む。

「二人とも、危ない！」

逃げ場を失ったリッドとファラを庇うようにコレットが駆け寄る。

そして、四方から降りそそぐ光の矢を、レデュース・ダメージを發動させながらその一身に受け止めた。

「きゃあつ……！」

しかし、いかに防御術を發動させていてもミトスのホーリーランスの威力は相殺しきれるものではなかった。直接的なダメージこそ無いものの、コレットは身動きがとれなくなってしまふ。

「この野郎っ！動き回りやがって！」

瞬間移動を繰り返し、高速詠唱を發動させる。それがミトスの作戦だと見抜いたロイドは、とにかくミトスに追いつけるように全力で走る。

しかし追いつけない。ロイドの速度では、ミトスの瞬間移動で煙に

巻かれてしまう。

「あはは……君は最後に殺してやるよ、ロイド……僕の影」

ミトスはそう呟くと同時に、高速詠唱を開始する。

「影は影らしく、光に飲まれて消えてしまえっ……！……レイー！」
光の球が再びリッドたちの上空に現れる。

「させるかよ！」

リッドはコレットを抱えると、光の攻撃が届かない地点まで一気に飛んだ。

ファラもリッドに追従する。

「逃げられると思うな！」

しかし、ミトスはそれを見越した上で、剣から衝撃波を発動させた。

「ファラ！」

「任せて……！」

飛来する衝撃波は、両手が塞がっているリッドではかわせない。リッドとコレットの前にファラが立つと、両足を揃えて衝撃波を迎える。

「はあああ！！獅子戦吼！！」

ファラが両手から放ったのは、強力な獅子の闘気であった。

獅子戦吼はミトスの衝撃波を見事に相殺する。

「ちっ！」

舌打ちするミトス。

再び、瞬間移動を行う。ミトスの天使化によって得られる速度の上昇は、ロイドやコレットの比では無いのだ。

瞬発力を極限まで高めることによって得られるその移動は、ミトス本人の視覚すら途絶えさせるほどの速度を誇る。

だから、次の瞬間移動を終えた直後、ロイドがどこにもいないことにミトスは驚いた。

「……何！？」

周囲を見渡すが、ロイドがいない。

いるのは、リッドとファラとコレットだけだ。

「こつちだ、ミトス!!」

突如、上空から声が聞こえた。

(……上!?)

ミトスが見上げると、そこには太陽を背に落下してくる一体の天使の姿があつた。

ロイドも天使化できるという事実を、ミトスは失念していたのだ。

「うおおおおおっ!!」

「うあっ!!」

ミトスの右肩に、ロイドの剣が突き刺さる。

その際、ミトスは光の剣を取り落とした。

そのままミトスは地面に仰向けに倒れた。剣を刺したままロイドが着地する。

「……終わりだ、ミトス」

ミトスの視界からは、陰になっていてロイドの顔がどんな表情を浮かべているのかよくわからない。

しかし、間違いなくこの男は不機嫌な顔を浮かべているはずだと、ミトスは思った。

思つて、いきなり腹立たしい気持ちが膨れ上がった。

「……甘いよ、ロイド」

ミトスはそう言つてにやりと笑つた。

「危ない、ロイド!!前!!」

ファラが叫び、ロイドは咄嗟にミトスから視線を外して前を見た。すると、例の黒い狼がいつの間にか現れ、ロイドに向かって飛びかかってきた。

「うわっ!!」

たまらず飛びのくロイド。ミトスの右肩からロイドの剣が外れる。

ミトスは血を流していたが、その血がどこもなく黒く淀んでいるように見える。

「僕はね……お前の実力をよくわかっているつもりだ。一度ならず二度までも、僕を倒したのは……お前が初めてなんだからな」

ミトスは笑いながら、後ろにゆっくりと歩いていく。そしてその周囲を、黒い狼達が3体、次々と地上から染み出るように現れ、囲んでいく。

「だから、最低限の策は用意してある……この状況で、僕を止められるかな？」

急激にミトスの周囲に満ちるマナの濃度が上がる。

ロイドには覚えがあった。これはミトスの切り札『インディグネイト・ジャッジメント』を使用する合図だ。

「くそっ!!」

何とか詠唱を止めようと走るが、黒い狼達が邪魔をしてミトスのもとに辿り着けない。

「やべえ!!」

「……格の違いを教えてやるよ」

ミトスがうつすらと笑う。詠唱の準備が終ったらしい。

万事休すかと思われたその刹那、更なる異変がおこった。

パァン　と、乾いた破裂音が鳴り響いた。

同時に、ミトスの詠唱が防がれた。ミトスは、その左腕から突然、血を滴らせていた。

「ぐっ……!!誰だ!!」

ミトスが左腕を押さえながら叫ぶ。すると、ロイド達が上ってきた石段に新たな人影が二つあった。

「これが私の武器です……ジューダス」

「大したものだ。あの距離で敵を攻撃できるなんてな」

そこには、仮面で顔を隠した黒衣の少年と、同じく黒のローブを身に纏った女性がいた。

女性の手には、ロイドたちにとっては見慣れない『銃』と呼ばれる武器が握られている。

対する仮面の少年の手には、右手に長剣、左手に短剣が握られていた。

「異変の解決に来た、部外者だ」

仮面の少年はそう言うと、周囲の黒い狼達に向かって切りかかる。

その姿を見たリッド達は、新たな登場人物に追従するが如く、黒い狼達に同じように攻撃していった。

「くそっ！」

3体の黒い魔物は、リッド、ファラ、仮面の少年の3人によって壁役の意味を失ってしまった。

「ミトスっ！！」

ロイドが駆け寄る。

「ロイドっ！！」

ミトスも、左腕に魔力を結集させて、ロイドを迎え撃つ。

ロイドがミトスに向かって跳躍し、ミトスがそれを光の球で包み込む。

「がっ！」

「うおおおおお！！」

勝利はロイドに輝いていた。

ミトスの体を、ロイドの剣が貫いていた。

「くそ……今回は、ここまでか」

ミトスがそう言うと、急にミトスの体から黒い靄が発生した。

「な、なんだ！？」

ロイドが驚いて離れる。するとミトスの体から発生した靄はミトス

の体を包み込み、そのまま靄が小さくなっていく。同時に、ミトスの体もその場から消滅していった。

「いいか、ロイド……今回は、だ。お前がこの出来事に関わるって言うんなら、次があるという事を、覚えておくんだね……」

何も無くなった空間から、恨みに染まったミトスの声が響き渡った。その言葉を、ロイドは厳しい顔つきのまま受け入れた。バラクラフ王廟の祭壇の上には、いつまでも寒々しい風が吹き付けていた。

一章一話 二刀の理想論者と極光の剣士（後書き）

1章1話目でいきなり話を進めまくったのは、この話がどんな雰囲気に進んでいくかを知ってもらうためでした。

もうね。自分でも詰め込みすぎ&省略しすぎだろうと思っていたのですが、まあこれで私の脳内妄想がどの程度の物なのかを知ってもらおうと思い、GOサインを出した次第でございます。

はてさて、こんなミックス話を展開して言って大丈夫なのか。大丈夫だとして、ちゃんと最後までこの妄想を形にするという正義を私が貫けるのか！？（そもそも正義じゃねーって話ですが）お暇な方、あるいは物好きな方、いらっしやいましたらお付き合いいただけたらと思います。

時間軸的には、全ての世界でエンディングを向かえてからそれほど時間が経っていない頃になります。なので、エターニアはインフェリアとセレスティアに分かれた直後になりますし、シンフォニアは世界統合されてから半年……ラタスク前という、既に原作との設定に不都合の生じる設定となっております……（爆）

ですが、二次創作、脳内妄想の立場を遺憾なく発揮させるにはこの方法だろうと考え、あえて突っ走っております、ご容赦ください（汗）

それでは、失礼します。

一章二話 暗黒の宝珠（前書き）

この話は、複数のシリーズタイトルを合わせて作った二次創作です。

シリーズを超えた話の展開が苦手な方や、シリーズ本編のネタバレを好まない方は閲覧されないことを推奨します。

数人、オリジナルな設定のキャラクターも登場します。

一章二話 暗黒の宝珠

黒衣の守護者 一章二話 〱暗黒の宝珠〱

「逃げられた……のか？」

ミトスが去った後、風の音がうるさいバラクラフ王廟の祭壇にて、リッドが呟いた。

ロイドはそれに頷きで返す。

「まあいいさ。異変に……ミトスと、この黒い石が関わってるって分かっただけ、戦果はあつたって事だからな」

ロイドはそう言つと、黒の石に近寄る前に、仮面の少年と黒のローブを着た少女の方を見る。

「さつきはありがとうな。えっと……俺はロイドって言っただけど、二人は？」

「私はセルシア、です」

「……ジューダスと名乗っている」

ロイドは「そっか、ありがとう」と言つと、改めて黒い石の方を見

た。

そして、それに近付いていく。

「待て」

ジューダスがそのロイドの行動を制止した。

ロイドが振り返り、どうかしたのかと問おうとした途端、黒い石が突然強烈に輝き始める。

「な、なんだあ!？」

咄嗟にその場を離れるロイド。すると、黒い石が瓦礫を押しつけて空中に浮かび上がり、その輝きをどんどん強め始めた。

そして、その輝きが一瞬鎮まると、黒の石の周囲を極端に濃い黒の靄が包み込み始めた。

「……先ほどの黒い狼を見たときも思っただが。この黒い石……魔物を生み出す石なんじゃないか？」

ジューダスがそう呟くと、黒い石から発生した靄は見事に巨大な魔物へとその姿を変貌させた。

それは、黒い体で出来たゴーレムであった。

「おいおい……」

リッドが半ば呆れながら呟く。黒いゴーレムは、優に4メートルはあるであろう巨体であった。

これほど巨大なモンスターを、先ほどの戦いの疲れが残った状態で相手にしなくてはならないのかと思うと、骨が折れると感じた。

「ふん。一気にけりをつけてやる」

しかし、ジューダスがそう言うと同時に走り出すと、後はまるで芸術作品でも見ているかのような気分にさせられた。

ジューダスはゴーレムの右腕部分に足をかけるとそのまま跳躍し、ゴーレムの頭を切り裂いたのだ。

無論、ゴーレムもその一撃で沈むほどやわでは無い。しかし、その

一撃によつてゴーレムの体躯が大きく揺れた。

その揺れた体躯に追撃を加えるが如く、セルシアと名乗った女性はその手に握られた『銃』から魔弾を次々と打ち込む。

ゴーレムは胴体部分にその魔弾を受け止め、たまらず仰向けに倒れこんだ。その隙について、ジューダスがゴーレムの左腕を切り落とす。

体を捻るようにして起き上がるゴーレム。残った右腕でジューダスを潰そうとするが、それを難なくかわすジューダス。

そして、今度は右腕を切り落とす。両腕をあっけなく落とされたゴーレムは、しかしそれでも立ち上がり、ジューダス達を踏み潰さんと足を上げ始める。

「崩龍……斬光剣」

それを見切ったジューダスは、高速移動を繰り返しながらゴーレムの両足にダメージを連続して与えていった。

バランスを崩し、再び崩れ落ちるゴーレム。その姿は、まるで立ち上がることを覚えたばかりの赤子のものであった。

再び仰向けに倒れたゴーレムに対して、ジューダスとはじめとばかりにその頭に剣戟を叩き込む。

その一撃が致命傷となったのか、ゴーレムはそれきり動かなくなり、そして……

「また、霧が……！」

ゴーレムの体を霧が包み込んだかと思うと、その姿はいつの間にか元の黒い石に戻っていた。

ただ、今度はその怪しい光を失った状態であった。力を使い果たしたという事だろうか。

そう考え、ジューダスはその黒い石を剣でつついた。何の反応も無い。どうやら、今の黒い石は無害であるらしい。

「ふん。時間の無駄だ」

ジューダスはそう言うと、黒い石をその手に掴んだ。

「す、すげえ……」

ロイドとリッドが同時に呟く。その場にいた誰もが、ジューダスの高速の剣さばきに見とれていた。

「この黒い石が世界が繋がったという異変とどういう関係があるのか……詳しく調べてみる必要があるそうだな」

「そうですね。早速アルテに情報を渡しましょう」

ジューダスとセルシアは、手に取った黒い石に何かを取り付けている。

リッドたちには分からなかったが、コレがアルテに石の成分や作用を伝えるための道具であり、コレを用いることでアルテに情報を渡しながらジューダス達は調査が出来るのである。

結局のところ、ジューダスはアルテの願い事を聞きいれる覚悟をしたのであった。

彼は、世界を救うという大義名分に興味は無かったが、自分のもっていた世界でマリアンやスタン達に被害が及ぶことを善しとは出来なかったのであった。彼らを守るという過程において他の世界を救うという事になるのだが、それならばそれで構わないと考えたのである。

ジューダスにとって世界は救うべき対象ではなかった。ただ、己の

身に科せられた罪を償うことを目的に戦う決意をしたのであった。

「……これで、アルテの元に石の情報が伝わったはずですよ」

セルシアはそう言うと、石につけた装置を取り外し、懐にしまいこんだ。

「あ、あのさ」

ふいにロイドに呼びかけられ、ジューダスとセルシアは彼の方を見る。

「二人は、どうしてここに？」

「……私達の目的は、このあらゆる世界を巻きこんでいる異常事態を解決することです」

「じゃあ、俺たちと目的は同じなんだな！」

「……はい？」

ロイドの表情が生き生きとしている。まるで新しい仲間を見つけたかのような喜びに満ち溢れていた。

その表情に、ジューダスは心当たりがあつたし、また厄介なことになるのではないかと憂えた。

「待て……何を考えている」

「何って……目的は同じなんだろ？ だったら、俺達は仲間って事で、協力して……」

「……本気で言っているのか？」

「お、おう」

ジューダスのただならぬ気配に、ロイドは一瞬怯むが、それでも負けじと彼を見る。

ジューダスはしばらくロイドを睨んでいたが、セルシアの方を見ると、戸惑いの表情を見せた。

「おい……いいのか。僕達以外の連中を巻き込んでも」

「……もし問題があるならば、アルテから指示がある筈です。今は構わないのではないですか？」

ジューダスはまだ納得し切れていない様子であったが、やがて首を振ると、改めてロイドの方を向いた。

「素性の知れない相手に、随分と協力的な態度をとるな？」

「へ？」

「僕達はまだ、お前たちと相容れる関係であるとは言っていないぞ」「だって……さっき、目的は異変の解決だって言っていたじゃないか」

「確かにそうだが、そのために僕達は様々な世界を移動することになるかもしれないんだ。そこまで付いてくるつもりは無いだろう」「いいぜ」

「……何？」

ロイドがあっさりと、異世界に渡ることになるかもしれないという事を承諾したことに、ジューダスは呆気に取られた。

「どの道、異変を解決しないと俺達だってやるべき事が出来ないんだ。だったら、一秒でも早く、この異変が解決するようにした方がいいからな」

にやりと笑いながら語るロイドの表情に嘘は無い。ジューダスは、目の前にいる男が本気で異世界に渡ってでも異変を解決しようと考えているのが見て取れた。

（……戦力が増えるのは、歓迎すべきことなんだろうがな）

ジューダスの中では、いまひとつ納得し切れていなかった。彼自身が、あまり人と親しくない性格であることも関係していたが、異世界というあまりにも突飛な場所に向かうことに恐れを抱いていない者達に不信感を抱いたというのが本音であった。そこまでしてこの世界を異変から救いたいというのであろうか。

「……まあ。いいだろう。とりあえずは、この場を離れるとしよう。もうここには用は無いだろうからな」

ジューダスがそう言って、バラクラフ王廟から出ようとする。

「いいや。君たちには無くても、私には用がある」

遺跡内部へと続く階段の下から、低い声が響いた。

それが新たな敵の来訪であると理解したジューダス達は、即座に身構える。やがて現れた人影は、長剣を腰に構えた男性であった。後ろ髪を結っている。伸びた顎鬚が、見た目を実年齢以上に上げている風貌をしていた。

彼らは知らない。それが先ほどのミトスと同様、異世界にて暗躍をしていた『ヴァン・グランツ』と呼ばれる人物であることを。

「その黒の石を、こちらに渡してもらおうか」

現れた人影は、ジューダス達に剣を向けながら話す。その様子に、その場にいた全員が戦闘態勢に入った。

「断る。これが何なのか分かっていない以上、僕達がこれを保管する」

「それでは困るのだよ。それは、今は力を失っているが、こちらで管理すれば再び力を取り戻すのだからな」

「それはつまり、再び異変を呼び起こすということだな？」

「然り」

「……」

男は、そのまま剣をジューダス達に向けたまま口を開いた。

「私の名はヴァン・グランツ。お前たちがやがて敵対するであろう物の協力者であり……下僕だ。お前たちが此度の出来事を解決するというのなら、必然、我々は相對することになる」

「……聞きたい事がある」
リッドが口を開いた。

「この黒い石は何なんだ。さっき、魔物になったんだけどよ」

「答える必要が無いな」

「……あんたにとって、必要なものなのか」

「それには答えよう。否だ」

「……なに？」

「私にとっては必要なものではないと言ったのだ。だが、私に命令を下すものがいてな……その者の命令に齒向かう事も出来ないからこうしてわざわざ足を運んできた次第だ」

「……ってことは、組織ぐるみで動いてんだな。あんたらは」

「先ほどのミトスという少年と戦っただろう。つまりは、そういう事だ」

そこでロイドが驚きの声を挙げる。

「ミトスもあんたらの仲間なのか!？」

「仲間ではない……同士ではあるが、彼も私も、進んで今回の事態に参加しているわけでは無いからな……半端に目的を共有している程度では、仲間とは呼べまい」

「でも……おかしいだろ。ミトスは、もうずっと前に死んでるんだぞ!？」

ロイドがそう叫ぶと、その場にいたヴァンを除く全員が驚いた。ジューダスのみ、死者が活動することにそれほど驚きはしなかったが「なあ、どうなんだ! あんたは、ミトスがどうして蘇ってるのか……なんで俺たちとこうして戦うことになったのか、知ってるんじゃないのか!？」

ロイドの問いに、ヴァンは顎に手をやって考え込む。

やがて、ふっと笑うと、口を開いた。

「蘇ったわけでは無い。彼も、私も……」

「……え？」

「話のもういいだろう。お前たちが私の要求に応えない以上、私がとるべき行動はただ一つなのだからな」

ヴァンがゆつくりと剣を突き出す構えをとる。

それが、何かの技の予備動作だと悟ったジューダスが、即座に周囲に注意を促した。

「気をつける、何か来るぞ！」

「まずは小手調べだ……光龍槍！！」

ヴァンの剣先から龍の形をした光が飛ぶ。

それをかわすジューダスとセルシア。

セルシアが横っ飛びにかわしながら、銃を発砲する。

「甘いな」

その弾道を見切ったヴァンは、軽く剣で弾丸を受け止める。しかし、防御に回ったヴァンに近づく影が3つあった。

「行くよリッド！」

「ファラ……あんまし出過ぎるなよ」

「お前ら余裕だな……」

ファラ、リッド、ロイドの三人が一気にヴァンに接近戦を仕掛ける。

ヴァンは防御を解くと、近付いてくる三人を睨む。

「来い……！！」

「うおおお！！」

まず、リッドが切り込む。体ごと反らしてその一撃をかわすヴァン。ついで迫るファラの連続攻撃を、全て剣でガードする。ファラの素早い身のこなしにも難なくついていく目の前の敵にリッドとファラ

はより警戒心を強める。

そして、飛天翔駆を放つため空中に飛んでいたロイドが、高速落下でヴァンに迫る。

鳴り響く金属の衝突音。

ヴァンは厳しい顔つきのまま、ロイドを睨む。

その鋭い眼光に、ロイドが怯む。

「こちらの……番だ！」

ヴァンが気合の掛け声と共に剣を振る。たまらずロイドは後方に跳んだ。

それを追いかけるヴァン。素早い移動でロイドの着地点に切りこむ。

「な……」

「吹き飛ば……烈破掌!!」

ロイドの胸元で、ヴァンの拳から溢れていたオーラが炸裂する。そのあまりの衝撃に、ロイドは吹き飛ばされた。

「がつ!!」

「ロイド!!」

「まだだ!!光龍槍!!」

吹き飛んだロイドに追い討ちをかけるように光龍槍が迫る。牙を剥き出しにして襲い掛かる光の龍は、そのままロイドの右腕を貫いた。

「ぐあつ……しまった!!」

噴出す鮮血が、ロイドの戦闘不能を周囲に知らせる。素早い連撃から一撃で相手を仕留める高威力の技の行使。

ヴァンは、ミトスとは違った意味での強敵であった。リッド達も不用意に近寄らず、次のヴァンの行動を捉えるように周囲を回る。

「どうした……世界を救った英雄なのだろう?こんなものなのか」

挑発するように、ヴァンが言葉を投げる。

その挑発に、ロイドは痛みを堪える顔をしながら睨みで返す。まるでそれは、世界を救った英雄であることを馬鹿にされたのではなく、皮肉に笑われたような気がしたからだ。

「くそ……腕が上がらねえ」

負傷した右腕を上げることが出来ず、ロイドの二刀流は封じられてしまったらしい。

「後は俺達に任せろ、ロイド」

リッドがそう言って、ヴァンを睨む。

「そうそう。さっき大活躍したんだから、今度は私達に任せて、休んで」

フアラも拳を構える。

コレットが駆け寄り、ロイドに回復薬となるグミを手渡した。これで、いくらか傷の回復が早まる。

しかし、グミで応急処置を施しても治るような傷では無かった。少なくとも、この戦闘中に回復する事は無いだろう。

「コレット……俺の事はいいから、皆を手伝ってやってくれ」

「ロイド……」

コレットは目を閉じて、小さく頷いた。

そして、ヴァンに向き直る。

ヴァンは、周囲から向けられる戦意に動じることなく、その姿勢を崩すことは無い。

「来い」

小さく呟いた。それが合図となったのか。リッドがヴァンに駆け寄る。その反対方向からは、ジューダスが接近した。

「はあ!」「ふん!」

二人同時に切りかかる。それをヴァンは上空にジャンプしてやり過ぎす。

そして、その体勢からリッド目掛けて足を振り下ろした。特技、崩蹴脚だ。ヴァンは滅多に使わない技であるが、ヴァンの流派には確かにある剣を使わない技の一つである。

その攻撃がリッドの頭に入った。吹き飛ばしリッド。

入れ替わるようにファラが接近していた。ヴァンの着地後の硬直を狙って、技を叩き込む。

「掌底破！三散華！獅子戦吼！！」

華麗な連撃が決まる。ヴァンはその全てをガードしたが、後ろから迫っていたジューダスに対処できない。隙だらけの背中目掛けて、ジューダスが接近する。

「ふん……守護氷槍陣！！」

しかし、ヴァンは甘くは無かった。体を一回転させて地面に自分を囲うように剣先で円を描くと、その周囲から氷の柱が何本も現れたのだ。

「くっ！？」

咄嗟にかわすジューダスであったが、左足に傷を負ってしまった。

ファラも吹き飛ばされ、右腕を庇うようにうずくまった。どうやら、ファラも負傷したらしい。

（……随分と、厄介な技を持っているな）

舌打ちをしながらジューダスは、先ほどの自分の突撃を失策だったと後悔していた。敵は一人とはいえ、多勢に無勢であることを承知の上で挑みにきているのだ。周囲を守護する技を用意していると考えるべきだった。

しかし、ジューダスがより慎重になっている中、明らかに熱くなっている者が一人いた。

リッドだ。

「ファラ、大丈夫か！？」

慌てて駆け寄り、彼女の状態に気を使う。そして、ファラの無事を確認すると、ゆっくりとヴァンのほうに向き直った。

その目には、静かな怒りが込められている。

「ほっ……」

ヴァンがリッドの気迫に感じるところがあつたのか、小さく笑う。リッドは、ゆつくりと剣を構えると、そのままヴァン目掛けて接近した。

その時突如、ジューダスの後方から銃声が聞こえた。セルシアの攻撃がヴァン目掛けて飛んでいく。

「はっ！」

しかし、ヴァンは即座に自分の周囲を粹護陣で囲むと、セルシアの銃弾を無効化した。銃弾は遠距離まで攻撃が及ぶが、敵がシールドを張ってしまうと弾かれてしまうことが多い。火力に難のある得物である。

粹護陣が解けると、ヴァンとリッドが激突する。リッドは、強引な、しかし決して無駄の無い太刀筋でヴァンを攻めた。対するヴァンも、丁寧に防御しながら、その重い一撃をリッドの隙を見つけては放つ。両者の剣が拮抗状態にもつれると、ヴァンは不意に何かを察知した様子を見せて、その場から飛びのいた。

しかし、その判断は一步遅かった。

「ジャツジメント！！」

コレットが術の詠唱を完成させていた。降り注ぐ光の柱は、無差別に周囲にいる敵を破壊する。

ヴァンは飛びのいたが、ジャツジメントの効果範囲からは逃げ切れない。そして運悪く、光の柱の一本がヴァンの右腕を掠めるように激突した。

「ぐう、ぬ！？」

「うおおお！！」

その隙を逃すまいと、リッドが駆け寄る。そして、渾身の力で連撃を放った。

「猛虎連撃破！！」

虎牙破斬の4連続攻撃。怒涛の攻撃を、しかし負傷した右腕で握る剣でヴァンは防ぎきった。

「まだまだあ！！」

しかし、それで終りではなかった。

「龍虎……滅牙斬っ！！」

リッドは高く飛び上がると、その剣にありったけの闘気を纏わせる。そしてそのまま落下すると、ヴァンの剣と激突し、周囲を破壊しつくす強力なオーラが彼らを包み込む。

地面から競りあがるのは、リッドの闘気が爆発した結果か、ヴァンが迎え撃った闘気か。

やがてまばゆい光が収まると、そこには膝をついているヴァンと……同じように膝をついているリッドの姿があった。

相打ち。秘奥義を用いたリッドであったが、目の前の達人の剣の前には相打ちにならざるを得なかったらしい。

「……ふ。やるな」

ヴァンがそう呟くと、彼の体をミトスのとくと同じように黒い靄が包む。

「待てよ……逃げんのか？」

リッドがそう言うと、ヴァンは笑った。

「そうだな……敗北は認めよう。だが、私はまだまだ利用される身でな……それに、遣り残したこともある」

「……遣り残し？」

「それを果たすまでは、例え一度死んだこの身であろうとも、醜く足掻くまでだ」

そう言い残すと、ヴァンは黒い霧に包まれ、やがて霧ごと消滅した。

「勝ったのか……」

リッドはそう呟くと、その場にへたり込んだ。

彼の周囲に、他のメンバーが集まる。ロイドは、コレットに肩を貸してもらっていた。

「なんか……俺達、やばい連中を相手にしちまってんのかもな」

ロイドが言った。

「当然だな。世界を渡って暗躍しようとしている連中なんだ。一筋縄ではいかないだろう」

「でもよジューダス……お前は戦うんだろ？」

「……ああ」

「なら、やっぱり戦力は多いほうがいいんじゃないか？さっきの戦いだって、危なかったんだし」

「……どの口が言っているんだ」

ジューダスは呆れたと言わんばかりにやれやれと首を振った。

「とにかく、一度人のいる場所に行きましょう。ここでは、ろくに休息を取れなさそうですし」

ジューダスの横から、セルシアが提案する。

「あ……じゃあ、ここから一番近い旅人の宿を目指そう。私、案内するよ」

コレットが笑顔でそう言うと、ようやく全員の顔から緊張感が抜けた。

疲れた体を何とか押しながら、彼らは休息の場を目指す。

彼らの長い戦いは、これから始まる。

一章二話 暗黒の宝珠（後書き）

まさかのヴァン師匠の登場なのに、ヴァン師匠と関わりのあるルーク達はいないという、お祭りゲーにはよくあるシチュエーションでした。

アラヤシキでございます。

今回の、大まかな雰囲気は知ってもらえたと思います。連戦に次ぐ連戦に、ジューダス達は疲れ切っていますが、冗談じゃありません。私も疲れました。でも楽しかった……

こんな感じで、ジューダス達を主軸に物語りをすすめていくつもりです。ヴァンとミトスは、何故蘇ったのか！？蘇ったわけではないという、ヴァンの言葉の意味は何なのか！？なんて煽っても、イマイチ乗れないですね。とりあえず、転換点その一な話でした。

それでは、失礼します。

一章三話 異世界渡航（前書き）

この話は、複数のシリーズタイトルを合わせて作った二次創作です。

シリーズを超えた話の展開が苦手な方や、シリーズ本編のネタバレを好まない方は閲覧されないことを推奨します。

数人、オリジナルな設定のキャラクターも登場します。

一章三話 異世界渡航

黒衣の守護者 一章三話 異世界渡航

バラクラフ王廟跡地から、ジューダス達は疲れた体を押して旅人が利用できるように解放された旅人の宿に辿り着いた。
元々この建物は、マーテル教の巡礼を行う者達が利用するために開放されていた宿なのだが、旅人の利用も多い。

「ようやく、休める、なあゝ！」

ベッドにばかりとロイドが倒れこむ。他の者達も、皆思い思いの姿勢でくつろぎ始めた。

「ああ……疲れた」

「ロイド、お疲れ様」

「ああ。コレットも……それに、皆も。ありがとうな」

ロイドがそう言うのと、リッドは頭をかきながら答えた。

「別にいいって。最初に助けられたのは俺たちの方なんだからよ」

「そうそう！あの魔物に囲まれたときなんて、ロイドとコレットがいなかったら危なかったもん！」

フアラがにこやかに笑いながらそう答える。

すると、ジューダスが口を開いた。

「……先ほどの戦い。ヴァンと名乗っていた男と、金髪の子供……あいつらは、お前たちの世界の住人なのか？」

「……ヴァンの方は分からない。だけど、ミトスは……知っている」
ロイドはそう答えると、体を起こしてジューダス達の方を見た。

その目は、真剣な眼差しであり……辛い過去を思い出しているよう

な表情でもあった。

「ミトスは……この世界を滅ぼそうとしたんだ。そして、それを俺たちが止めた」

ロイドは語り始めた。ロイド自信が経験してきた、旅の記憶。その旅の中でロイドは多くの敵と戦い、その最後に、ミトスという少年と……かつての英雄と戦ったのだということを。

かいつまんだ程度にだが、ジューダス達にとってはそれで充分であった。ロイドの話から得られた情報から、現状のおかしさがより一層際立った。

「つまり……あのミトスという子供は、既に死んでいる筈の存在なんだな？ だというのに、あの通りお前達に戦いを挑んできた」

「ああ……」

「……異変とは、世界が繋がったり魔物が現れた以外にも、死者の復活まであるのか？」

ジューダスが確認するように言うと、それには賛同しかねるとロイド達は首を振った。

「死者の復活なんて、噂でも聞いたこと無かったぞ」

「うん……」

「私達が元々いた世界でも、そんな噂は聞いたことが無かったなあ……ねえリッド？」

「ああ。俺も聞いたことねえなあ」

どうやら、死者の復活はミトスという少年にのみ適用されているらしい。となると、あの少年はやはり特別な存在という事になるのだろうか。

特別だと？ 誰にとってだ……？

ジューダスは更に自分の疑問を深める。

ミトスとヴァンが、何者かによって選択された存在なのでは無いかと仮定すると、この異変の背後には意志を持った何者かがいるとい

うことになる。それにヴァンも言っていたのだ。『協力者であり……下僕だ』と。ということは、ヴァンも何者かの命令……あるいは、依頼によって動いていたと考えるのが妥当だ。

この異変の背後には、誰がいる。少なくとも、自然災害のような類ではないということだろう。

「ん？」

そこでジューダスは、もう一つの疑問に思い至った。

「待て……リッドとファラは、この世界の住人では無いか？」

「へ？そっただけど……あれ、言ってなかったか？」

「初耳だ。どうやってこの世界に来たんだ？」

ジューダスの質問に、ファラが口を開く。

「え？私達は、空間に出来た亀裂を通ってきたんだけど……ジューダス達は、違う方法で来たの？」

「……そっだな。違う方法だ」

ジューダスはそので、アルテという謎の男からの依頼で動いていることを話すべきかどうか迷った。

話したところで、突拍子も無い話である。

「だが、話しても仕方が無いことだ」

ジューダスはそう言うと、立ち上がって窓の外の景色を眺めた。

「私とジューダスは、少々特殊な環境から来たんです。なので、皆さんのように異変について詳しくも無ければ、空間の亀裂についても知りません」

セルシアが淡々と語る。

「ただ、私達は皆さんに有益な情報を提供できる立場でもあります。もうしばらく待っていてもらえませんか。上手く行けば今日中にも、情報が届くかもしれませんので」

「情報？」

コレットが首を傾げる。

「先ほどの黒い石……あれに関して、調査を進めています……私達の『依頼主』が」

セルシアはそこまで話すと、もう語る事は無いといった具合に黙り込んだ。

話題が途切れ、場の空気が一瞬止まる。

「あゝ、そうだ」

そこでリッドが口を開いた。

「セルシアの武器……それって何なんだ？似たようなものなら見たことあるんだけどよ」

「私の武器ですか？これは……」

セルシアが懐から件の武器を取り出す。銀色の銃身がきらりと光った。

「銃と呼ばれるものです。私のは小型のフルオート、7発まで弾丸を装填できるタイプです」

「……は？」

「……ああ、そうですね。私のもといった世界では、こうした銃器を扱う戦士もいたんです。皆さんにとっては珍しい武器かもしれないませんが」

「ああ。俺の仲間……フォッグって言うんだけど、そいつも飛び道具は持ってたんだよ……晶霊砲っていうドデカイやつだったけど」

「……晶霊砲……ですか？」

「ああ。あの迫力はすごかったな。自分の体くらいある武器を使って、晶霊弾をぶっ放すんだよ」

「……流石に私では、そんな大きな重火器は扱えないです」

セルシアの無表情に、一瞬だが嫉妬のような感情が表れた。それを見逃さないコレット。

「セルシアも頑張れば、晶霊砲を使えるようになるかもよ？」

コレットのこの一言に、ファラが戸惑う。

「コレット……晶霊砲って見たことないのかも知れないけど、あれ、女の子が扱ってたらすごいミスマッチな武器なんだよ……」

「？そっなの？」

「ああ……なんか、セルシアが晶霊砲振り回してたら、俺引くな……」

リッドがセルシアの細身を見て、フォッグとは程遠いと考えた。

夕飯時になり、ロイド達は宿屋が提供する食事を食べていた。

シルヴァラント領の宿の食事のため、それほど豪華ではないが、疲れた彼らの体には丁度良い献立であった。

「おかわりを貰いに行ってくるかな」

「はやっ！リッド、さっき食べ始めたばかりだぞ？」

「へへ！上手い飯だから食が進んじまってよ。じゃ、行ってくるわ」

リッドがご飯の器を持って席を立つ。その行動力に呆れるジューダスであった。

「幸せそうなやつめ……」

「あら！幸せならそれでいいじゃない！私もリッドがご飯をもらい食べてるのを見ると幸せそうだなって思うよ！」

ファラがフォローに入る。

その言葉に、ジューダスも小さく頷くと「まあ……そうだな。当人がそれで幸福だと言うのなら、それで良いんだろう」と呟いた。

「そうそう！皆で食べればご飯はおいしいよ！」

「コレット……それはちよつと違うな」

「そうだぜ？俺は別に一人で食ってても美味いけどよ」

リッドがご飯を山盛りにして戻ってきた。

「一人で食べるご飯がおいしいなんて、リッドって引きこもり……？」

「な」に言っただよファラ。どんな時でも飯を美味しく食べるつてのが、食材に対する礼儀だろ？」

「真理ですね。どのような時であれ、神からの贈り物である食材には感謝すべきです」

「ほら。セルシアもあー言ってるぜ？それじゃ、いっただっきまーす」

リッドがご飯をせつせと口にかき込む。

「まあ、その通りなんだけど……でもご飯は皆一緒に食べたほうがいいじゃない」

「それも真理です。神の食材を、皆で感謝の意を示しながら食べるのは良い行いです」

セルシアが再び合いの手を入れる。

そこで、ジューダスが口を開いた。

「セルシア……お前も食事をするのが好きなだけなんじゃないのか？」

「……否定はしません。私は食べるという事は好きです」

確かに見れば、セルシアの食事はほとんど空になっていた。皆よりも食べるペースが1・5倍ほど早い。

「でも何だか楽しいし、不思議だね！異世界の人たちとこうしてご飯を一緒に食べれるなんて！」

コレットが満面の笑みでそう言うと、他の者達もしみじみと頷いた。「異世界か……どんな所なんだろうと思ってたけど、案外思ってた以上のギャップは無かったな」

「そうだね。はじめてセレスティアに渡った、あの時のほうが異世界に渡ってきたんだって、思ったよね」

リッドの言葉にフアラが頷く。

すると、ロイドが興味深げに話しに食いついてきた。

「お？リッド達も、異世界に渡った経験ってあるのか？セレスティアって？」

「ああ。俺たちの世界は、インフェリアとセレスティアって二つの世界がくっついていた世界なんだよ」

「私達は、その両方の世界を旅したことがあるんだ」

コレットが身を乗り出す。

「詳しく聞きたいな」

そこで、リッド達はかつての旅の話始めた。メルディという空から降ってきた少女との邂逅。キールという、勉強にいそむ少年と協力して旅を開始した。そして、異世界に渡り、長い戦いを経て、世界を救ったこと。

「えっと……つまり、リッド達も、その」

ロイドが口をパクパクさせながら、リッドを見る。

その様子に、ジューダスは別段驚いた風でもなく、呟いた。

「ああ。お前と同じ、世界を救った者ということだな」

「な、なんでそんな冷静なんだよ！」

「さて、な。世界を救った者という存在に、僕も縁があるからじゃないか」

「……って事は、ジューダスも？」

「僕は救っていない。救った奴に協力してただけだ」

カイルに同行するという事はそういうことだろうと、ジューダスは内心で思った。

「すげえな……そんな奴らが一同に介するなんて」

リッドが呟く。

しかし、ジューダスは皮肉に笑いながら口を開いた。

「当然と言えば当然だな」

「何でだよ？」

「異変なんて呼ばれていて、まだ何が起きているのか良くわからない状況なんだ。だというのにここまで熱心に解決に乗り出す個人など、世界を救ったことのあるような馬鹿にしか勤まらないだろう」

夜。

皆が寝る前の雑談を楽しんでいた頃、それは訪れた。

「ジューダス。アルテから連絡が来ました」

「……そうか」

セルシアが懷から円盤状の機械を取り出す。ロイド達はそれを食い入るように見つめた。

やがて、円盤から文字が浮かび上がる。

「……黒の石の詳細は現時点では不明だそうです。調査に時間がかかる」と

「なんだ……何もわからないってことじゃないか」

「ですが、同じような反応をこの世界だけでも数箇所見つけられたそうです」

「……数箇所？まだいっぱいあるってことか？」

「ええ。恐らく」

ロイドは驚く。確かに、魔物はどこから出現したのか分からない存在だったのだ。あの黒の石が一つだけならば、バラクラフ王廟が魔物の出現地点だと、もっと早くに判明していただろう。

「しかし、違う次元にも同じような反応があるそうです。つまり、

この世界以外にも、あの黒い石があるということですね」

「……」

「当面の目的として、それぞれの世界の黒い石を回収。また、世界を一通り渡ってみることが提案されています。この世界の黒の石を全て回収するのではなくて、別の世界に飛んで、そこで同じように黒の石を一つ、見つけるという手順です」

「この世界の黒の石を全部集めないのは、何でだ？」

「恐らく、不可能だからでしょう。黒の石の数は多いみたいですし、一つ回収している間に別のところに設置されてしまう可能性がある

からでは無いでしょうか？」

ロイドは少し納得のいつていない様子であつたが「わかった」と呟くと、セルシアに続きを促した。

「なお、道中で協力者を得られたのなら、巻き込んでしまつて構わない……とのことです」

「いい加減だな」

ジューダスが呆れる。しかし、今後の方針の目処はついた。

これからジューダス達は、数ある異世界を巡り、そこで黒の石を集める。集めた黒の石を分析し、敵の下に辿り着くのが目的だ。

「俺たちも協力していつてことだよな？」

ロイドが確認するように聞く。

その問いに、ジューダスは頷きだけで返した。

「よつし！それで、俺達はこれからどうすればいいんだ？」

「どこかの空間の亀裂を通つて、新しい世界を目指すべきでしょう」
ロイドの質問に、セルシアが淡々と返す。

「それじゃ、私達が通つてきた亀裂が残っているかもしれないから、それを使う？」

ファラが提案する。ファラの言う亀裂とは、バラクラフ王廟内にあつたロイドたちの世界とリッドたちの世界を繋いでいた亀裂のことだ。

「まあ、他に行く宛ても無いしな……まずはそこを目指すでしょう」
「目指すつつつても、明日だろ？俺は今日はもう寝るぜ」……」

リッドが欠伸をしながら言う。確かに、今から王廟に向かうのは危険すぎるし、亀裂がまだ残っているのかどうかの確認も含め、行動を起こすのは明日でいいのだろう。

ジューダスはそう考え、今日のところは休息を取ることを優先させた。

Interlude『ヨミガエリ』

うるさい。さつきからギリギリと耳鳴りが。

うるさい。黙れ。僕は、確かに望んだが、それを叶えるつもりはお前らには毛頭ないだろう。

分かっているんだ。分かっているのに、お前達に行動を共にすることを誓わされるなんて、気に入らない。

ああ、でも。望んでしまったが最後のだろう。こんな卑怯な手法で僕を使役するなんて、気に入らない。

「使役は不可能だよ。あくまで俺達に出来る事は、協力要請だけさ。協力してくれるって承諾したのは、他ならぬ君の意思の筈なんだけどな」

いいや違う。確かに望みはしたが、お前たちにはそれを叶える術は無いはずなんだ。絶対に。僕が4000年かかっても出来なかったことを、部外者であるお前たちが叶えられる筈が無い。

「それは分からぬよ……部外者だからこそ叶えられる願いがあるやもしれぬではないか」

……とにかく。今はお前たちの魔術の恩恵に従っているだけだが、何時までもこのままでいられると思うな。僕は、僕の思うがままに、

動く。

「それでいいって。当分は、敵を見つけたら倒してくれる仲間が欲しかったんだからな」

……。
……。
……。

そんなやり取りを遠くで眺めていて、以下に我々が滑稽な存在であるのかを思い知らされた気がする。

我々は既に死んだ身。故に、この身がこうして活動を再開するなど不条理そのもの。だというのに、我々がこうして生きているのは、我々が『死んでいない』からに他ならない。

代償は何も払っていない。参考にしたただけだ。しかし、その意志まで参考にするのは、些かやり過ぎではなからうか。

……まあ、いい。

ミトスのいう事ももつともだ。彼も言ったとおり、奴らに我々の目的を果たす力があるとは思えない。だがそれでも、可能性があるという時点で、我々はそれに縋るしかない、そんな愚かな存在なのだ。……別に、それを諦めるつもりも無いがな。

私には、私の目的がある。例え利用されているだけだとしても、この身はその目的を果たすために活動し続けるのだ。

それこそ、傀儡となるための暗示にすぎないのだと、分かっている。……もだ。

私はヴァン。我が故郷を預言の呪縛から解き放つために、全てを賭けて戦うのみ……。

……。。
……。。
……。

Interlude out

翌朝、ジューダスが目を覚ますと、他の者達はほとんど眠ったままであつた。

気にせず、ジューダスは旅の支度を開始する。

「ジューダス、おはようございます」

セルシアに呼ばれた。どうやらセルシアの方が先に起きていたらしい。

「ああ」

「早いですね」

「お前もな。他の連中はまだ寝てるといふのに」

「ええ。いつも早く目が覚めてしまうんです」

どうやら意識して早起きを心がけているわけでは無いらしい。

「ジューダス……貴方は、彼らを巻き込みたくないのですか？」

「……何？」

セルシアが無表情のまま問いかける。

「貴方はどうも、ロイドやリッドと一緒に行動することに抵抗があ

るように思えました」

「……いいや。ただ、あまりに気楽に旅に付いて来ようとする奴が苦手なだけだ」

「そうですか」

「…… こういう連中に心当たりがあつてな。危機感を持ち合わせていないわけではないが、どうにも人よりも緊張感が欠けている。器がでかいと言えはそうなるんだろうが、命を賭けた戦いに赴くというには、少しばかり不安を募らせてくる。まあ…… そういう奴に限って、実力は本物だからますます質が悪いんだがな」

「…… ジューダスのかつての知り合いに、ロイドやリッドのような人たちがいたのですか？」

「…… ああ」

そう呟くと、ジューダスは目を閉じた。思い出すのは、まだ仮面を付けていなかった頃の旅と、仮面を被つてからの旅の二つの記憶。共に妙な連中と過ごした時間であつたが、ジューダスにとって決して無為な時間ではなかった。むしろ、人生の中で得られる様々な事について考えさせられたような旅でもあつた。

あの旅が己を成長させるきっかけになつたとは思っていない。だが、決して否定することの出来ない時間であつた事は間違いない。ジューダスにとって、その二つの旅はやはり特別なものだった。

「まあ、昨日の戦いを見る限りでは、頼りになる連中だろう。本人達も付いてくる事を望んでいるんだ。付き合つてもらふとしよう」

「そうですね…… 私達の旅には、困難が付き物でしょうから」

セルシアはそう言うのと、懐にしまいこんでいた銃の調整を開始した。ジューダスも、アルテから与えられた剣の手入れをする。不思議な軽さと切れ味を誇った剣ではあるが、かつての友『シャルティエ』と比べれば、やはり見劣りのする剣であつた。

やがてリッドが目覚め、ファラが目覚める。二人はそのままロイドとコレットを起こすと、皆で旅の準備を開始した。

「さあ。行くぞ。異世界に飛んで、今は黒の石を回収することを目的にしてな……」

バラクラフ王廟跡地を目指して歩き出す。

その先に待ち受けるのは、新たな世界であり、そして……彼らにとっても未知の、新たな脅威である。

ジューダス達はそれに挑む。異変を解決し、己が使命を全うするため……。

一章三話 異世界渡航（後書き）

今回は、戦いは無いほのぼの回となっております。

日常的な会話を意識しましたが、まあ展開を意識しすぎて早足になってしまった気もします。けれど、このくらいのペースでやらないと、すごい分量になってしまうんですよね、きっと……

これからジューダス達は新しい世界に赴きます。テルカ・リュミリス。ヴェスペリアの世界ですね。そこで新しい仲間を得るのか、新しい敵を作るのか、といった具合です。

セルシアを食いしん坊キャラにしたのは、書いている途中でひらめいた誤算です……よく食べる女の子って良いと思うのは私だけですかね？……なんでもありません（汗）

読んでくださり、ありがとうございました！

二章一話 黒の断罪者（前書き）

この話は、複数のシリーズタイトルを合わせて作った二次創作です。

シリーズを超えた話の展開が苦手な方や、シリーズ本編のネタバレを好まない方は閲覧されないことを推奨します。

数人、オリジナルな設定のキャラクターも登場します。

二章一話 黒の断罪者

黒衣の守護者 二章一話 黒の断罪者

迫り来る魔物を、左手に握った剣で払い落とす。馬車はまだ無事だ。しかし、残り4体の魔物のうち2体は強力な『黒い狼のような魔物』だ。いかにユーリ・ローウェルが強力な剣士であり、武具魔導器の代わりとなる新しい装備品によってかつての力を取り戻していたのだとしても、一人では馬車を守りきれない。

そもそも、まともな護衛をつけずに商人の馬車が街道を走ってくることで自体に問題があるのだと、ユーリはぼやいた。異変が起きてから、世界中のあらゆる場所で黒い狼のような姿をした魔物が目撃され、この魔物が強力な魔物であるから、十分注意するようにという警告が知れ渡っているはずなのに。

「バウツ！ウォーン！！」

だが、ユーリも流石に一人で複数の魔物を相手にするほど無茶ではない。彼の正義感ならばそうした無茶も辞さないだろうが、今回はちゃんと横に相棒がいる。その相棒の活躍もあり、馬車を包囲する魔物も、いまだ馬車本体に攻撃できてはいない。

「ラピード！雑魚を頼む！俺はあの黒いのを斬る！」

「バウツ」

一人と一匹が同時に駆け出す。ユーリは真っ直ぐに強敵である黒い狼を狙っていった。対する黒の狼は、強靱な前足の爪を振りかざし、ユーリに向かって突撃する。

「幻狼斬！」

高速で黒の狼に接近すると、そのまま背後に回りこむように切り付ける。黒の狼は、ユーリのあまりのスピードについて行けず、敵の姿を見失う。

「はぁ！」

ユーリは、そのまま背後から連続で切りつける。黒の狼も流石にたまらないはずだ。だというのに、黒の狼はそのまま轉身すると、傷付けられた体を庇うことなくユーリに向かって攻撃する。

「！！」

バックステップで距離をとる。先ほどまでユーリのいた空間が切り裂かれ、ユーリは舌打ちする。

目の前の黒い狼は、通常の魔物とはかけ離れた存在である。傷ついたことを意に介さず、ただ眼前の獲物を仕留めるためにその行動を続ける……。

「さっさとくたばりなァ！絶風刃！！」

ユーリは剣先に闘気を集中させると、風の力に変換しそれを解き放った。ユーリが振った剣から放たれた風の刃は、黒の狼の体を見事に切り裂く。

「シギヤアアア！！」

だが、まだ倒れない。黒の狼はそのしつこい生命力で、半分になった体を引きずりながらユーリを攻撃しようととびかかる。

これには流石のユーリも驚き、更にバックステップで距離をとろうとした。

「！！後ろにも……」

しかし、彼の後ろから別の黒い狼が迫っていた。こちらの狼は未だに無傷の存在である。獲物を後方から勢いよく仕留めにかかる。

側転してその攻撃をかわすユーリ。魔物が爪を振りかぶって追ってくる。さらにバック宙で避けながら移動する。

「こいつら……」

剣を構えなおし、じりじりと近付いてくる黒い魔物を睨む。先ほど、絶風刃を喰らわせたほうは絶命したようだが、もう一体は獲物を引き裂こうとつずつしている。

面倒な敵だと思っていた、その次の瞬間。ユーリは、自分はもはや手を出す必要は無いと理解した。

「魔神剣！！」

凜とした声が響き、地を這う剣圧が魔物の足に直撃する。黒い狼は倒れこむと、そのまま白い騎士の手にかかって絶命した。

「よお。まさかお前がじきじきに現れるなんてな、フレン」

「そういうユーリこそ。まさか君が帝都に戻ってきているなんて、知らなかったよ」

フレンとユーリは互いに笑顔で挨拶を交わすと、魔物に襲われていた馬車に近付いた。

そして、馬車の内部に隠れていた人間に挨拶をする。

「へ、へへへ……助かりましたよ」

「いえいえ。騎士として、人々を守るのは当然の責務ですから」
フレンはそうにこやかに笑うと、懷から縄を取り出した。

「例えばそれが、麻薬の売人であろうとも、ね」

「……ぐう……やっぱりバレてやがったか」

馬車の内部にいた人間はそう観念すると、大人しくなってフレンによって両手を縛られた。

ユーリはその光景を驚き混じりに見つめる。

「な、なんだそりや。そいつら、犯罪者だったのか!？」

「ああ。騎士団の調査で、今日のこの時間、大量の麻薬を載せた馬車が帝都入りすることはわかっていたんだ。予め手配した人相書きとも一致したからね」

「おいおい……」

呆れながら呟くと、ユーリは遠くからやってくるもう一つの人影を見た。

「あれは……エステルか？」

「え、何だつて!？」

フレンが驚くと同時に振り向くと、そこには確かにエステルが居た。
「ユーリ、大丈夫です!？」

「……お前が来たせいで、色々大丈夫じゃなくなった気はするぜ」
「???どういう意味……あ、フレン」

「エステリーゼ様……何故ここに」

フレンは呆れたといった風にエステルに言った。エステルは恥ずかしそうに笑うと「下町に出かけていたときに、ユーリが戦っている姿が見えて、加勢しなくてはと思ったんです」と言った。

しばらくして、ラピードが魔物を蹴散らしたのだろう。ユーリの元に戻ってきた。

「ラピード!？」

「グルル……」

しかし、よく見るとラピードは負傷していた。どうやら、黒い狼の他にも強力な魔物がいたらしい。

ラピードの怪我をエステルが治療するが、傷が深いため、すぐには治らない。

「……ラピード、しばらくは安静だな」

「クウーン……」

「いつつ……」

そこで、馬車の内部にいた売人が痛がる声が聞こえた。どうやら、ユーリが駆けつける前に怪我をしていたらしい。

エステルがフレンの方を見て確認を取ると、その怪我人を治療術で治療する。

「へへ……皮肉だな。ブタ箱入りが確定したつてのに、そのおかげで命が助かったんだからよ……」

「……こういう犯罪は、もうこれっきりにしてください」

「……どうかな。こうでもしなきゃ生きていけねー奴等つてのはいるもんなんだぜ。お嬢さん」

どうやら売人はエステルの立場を知らないらしい。

彼はそのまま言葉を紡ぐ。

「しかし、不運だったな……せつかくあのおかしなクオイの森を抜けて、帝都まで来れたってのによ……」

「……？クオイの森がどうかしたのか？」

「知らないのか？クオイの森が、迷いの森になっちまったって噂ですよ」

「……迷いの森」

ユーリはさてと考え込む。もともと曰くつきの中ではあったが、あの森そのものが迷いの森と噂されるほど、入り組んだ地形であっただろうか。

「それによ……ザギって暗殺者、知ってるか？奴の幽霊が出るとかって噂まであるんだよ」

「ザギだって！？」

ユーリが叫ぶ。その声に売人は驚いていたが、言葉を続けた。

「お、おう。森に入って迷った奴の話だと、『3時間くらい迷い続けていたら、ザギを見かけた』ってよ……野郎は半年前の出来事で死んだらしいんだけどよ……」

「……ザギの、亡霊ね」

ユーリは呟くと、そのまま踵を返して帝都の下町。ユーリの自宅を目指して歩き始めた。

後の処理は全てフレンに任せるといった風に、彼は背中を見せた。

自室に戻ったユーリは、そのまま鞆に旅に必要な最低限の道具を詰め込む。そして、ゆつくりと立ち上がると、自室から出て行った。扉を開けてすぐに、エステルが居る事に驚くユーリ。

「お前……」

「ユーリ……クオイの森に行くんです？」

「……いいや。飯を食いに行くだけだよ」

「じゃあ、付き合ってもいいです？」

「……おい」

呆れた感じに答えるユーリだが、エステルはどことなく楽しそうにしている。

「せっかく公務もひと段落して、お休みをいただけたんですから、誰かと出かけたいと思っていた所なんです！」

「だったらフレンでも誘ったらどうだ？」

「……フレンはフレンのお仕事がありますから、無理です。ユーリは、ギルドの仕事でお休みを貰っているから、ここに戻ってきているんですよ？」

「……まあ、そうだけだよ」

「じゃあ、是非今日一日、ユーリと一緒に出かけたいです！」

「……クオイの森に行くんだぞ」

「構いません！」

真面目な顔で頷くエステルに、ユーリはいよいよ説得は無理だと悟り、仕方なくエステルの同行を許可することにした。

まあ、急げば今日中には引き返せるよな。

迷いの森と化したと言う、クオイの森を目指して、負傷したラピードを置いてユーリとエステルの旅が始まった。

「あれ？あれー？」

「おいファラ……ここ、ラシュアンの森じゃねえぞ」

開口一番、驚きの声を上げるリッドとファラ。

ジューダス達は、無事にバラクラフ王廟跡地に戻り、リッドの案内の元、空間の亀裂のあった場所に辿り着けた。そして、意を決して空間の亀裂に飛び込んだところ、こうしてこの場に辿り着いたのであった。

しかし、辿り着いた場はリッドたちの故郷とは違ったらしい。どうやら、ここはリッド達も知らない全く別の森であるようだ。木々はうつそうと生い茂り、太陽の光がほとんど地面にまで届いていない。まだ明るい時間のようだが、森全体は暗い雰囲気包まれていた。

「どういうこった？行きと帰りは違うつてことなのか？」

リッドが頭をかきむしりながら呟く。ジューダスはふむと頷くと、周囲を見渡す。

「リッド……お前たちの住んでいる世界では無いのだな……ここは」

「ああ、どうやらそうみたいだ……」

「……まあいい。とりあえず、黒の石が近くに無いか探してみるぞ。あのバラクラフ王廟とか言う場所と同じなら、案外、近くに黒の石が置いてあるかも知れん」

ジューダスはそう言っていると、森の中を先頭をきつて歩き始めた。リッド、ファラ、ロイド、コレット、セルシアはそれに続くように歩き始めた。

うつそうと生い茂る森は、似たような景色が続いており、まるで天然の『迷宮』のようであった……。

「さて、着いたな……クオイの森」

「ええ……ここに。あのザギの亡霊が」

ユーリとエステルは並んで森の入り口を眺めていた。

「エステル……一応言っておくけど、俺は亡霊のほうは信じちゃいねえぞ？」

「え、そうなんです？」

「ああ……むしろ、生身のザギが生きてるって可能性のほうが高いんじゃないかって思ってるくらいだ」

「……それは、流石に」

「無いって言い切れるか？」

「……」

エステルは黙って、ザギの最期を思い返した。確かにザギは、あの塔の奈落の底に落ちていくことでその生涯を閉じたと思われていたが……確かに、ザギが死んだところを確実に見たわけではない。

「でも……やっぱり、あの高さから落ちて無事なんて、人間業とは思えないです……」

エステルは背中に走る悪寒を感じながら、首を振って否定した。

「だな……けど、迷いの森ってのも気になる。もしかしたら、『異変』と何か関係があるのかもしれないねえ」

「ですね」

「じゃあ行くぞ……迷うなよ、エステル」

「はい！」

ユーリとエステルは共に並んで歩いて森の中へ踏み込んでいった。その瞬間、森の入り口が一瞬だけ歪み、波打ったのを、ユーリ達は気付かなかった……。

歩き始めてすぐに、ユーリは異変に気付いた。

森の構造が違う。慣れ親しんだ道順が無くなっているのだ。

どういう事だ!?

ユーリは焦り始めた。どうやら、クオイの森がおかしいというのは本当らしい。となると、ザギの亡霊を見かけたという話も本当の可能性がある……。

完全に迷って疲弊する前に、一度引き換え返すべきかとも考えたが……。

自分達の前方から、何物かが近付いてくる様子に気付き、ユーリは引き返す選択を取りやめた。

「エステル、気をつける……前から何か来る」

「えっ……?」

ユーリはいつでも戦闘態勢に入れるように構える。その後ろでエステルも慌てながら準備をする。

まさかザギか?

ユーリの頭の中に嫌な想像が浮かぶが、実際現れた人影はザギの物ではなかった。

むしろ、現れた人影たちは、複数……6つあったのだ。

先頭を歩いてい来る仮面の少年がやけに印象深い。不気味だ。ユーリはそう思い、警戒心を高める。

「ん?」

仮面の少年がユーリたちに気付く。

そしてゆっくりと近付いてきた。

「……よお。こんなところで何してるんだい?」

ユーリが声をかける。すると、仮面の少年は無表情のまま口を開く。

「聞きたいことがある」

「何だ?」

「この世界で、異変について、何か噂が立ってないか?」

「……異変だと?」

世界規模で起こった異変。それは、異なる世界と繋がったという噂や、今まで確認できていなかった黒い魔物が確認されるようになったことなどがある。ユーリ達も、そうした異変については聞いている。

たことがある。

「……異変ってあれか？異世界と繋がったとかって……」

「そうか。やはり、この世界もなんだな」

「この世界もってあんたら……」

「ああ。僕達は、別の世界から異変について調査するためにやってきたんだ」

「……マジか？」

「……マジだ」

ジューダスが無表情のまま答える。彼にしては随分と話を弾ませたほうである。すると、それまで話に参加してこなかったロイド達が話しに入った。

「俺達、この異変を止めたいんだ。そのためにも、色々な世界を巡ってる。この世界で、黒い魔物が大量に見つかった場所とか、何か変なことが起こっている場所って何か無いか？」

「……変なことか。まさにここだな」

ユーリがそう呟くと、フララたちは「ええっ!？」と驚きの声を上げた。

「この森の地形が変わってるんだよ。噂では、『迷いの森』になっちゃったってな」

「迷いの森……」

「だから俺達も、それについて調べるためにこうして足を運んだんだよ」

「……なるほどな」

ジューダスが考え込む。横からセルシアが近付く。

「ジューダス……どうやら彼に悪意は無さそうですし、この場は協力したらどうでしょうか？」

「……そうだな」

「この森がおかしいというのなら、この森に何かあると考えるべきです。まとう気迫も実力者のそれですし、あのお二人に協力を仰いで見たらどうでしょう?」

セルシアがそう提案すると、ジューダスはゆっくりとユーリの方を見た。

「どうだ。今から、僕達と協力してこの森を調査しないか？」

「……協力？」

「ああ。僕たちの目的と、お前の目的は恐らく一緒だろう。ならば、共同で行動したほうがいいと思ってる」

一人を好むジューダスにしては珍しく、呆気なくセルシアの提案を受け入れた。そして、ジューダスのその案にユーリは乗っかる。

「いいぜ。あんたらも見た感じ、嘘は言って無さそうだからな」

「そうですね。皆さん、よろしくお願いします。私はエステリーゼと言います。エステルって呼んでください！」

「俺はユーリだ。よろしく頼むぜ」

二人から自己紹介されたジューダス達は、各々の自己紹介を簡単に済ませた。

新しい仲間を得て、ジューダス達の調査が開始された……。

Interlude 『剣の道』

力には様々な種類がある。なんていう言葉は、くだらない偽善でしかない。少なくとも誰かから奪う力と、誰かを守る力は違うなんて言葉は偽者であるという事くらい、俺は知っている。

だが、だからこそ、力は得なくてはならないものだという事も理解できる。それしか理解できなかったのだ。愚かな俺は。

あの日に誓った、己の剣の道。

誰かを守れる人になれと、言った人がいた。強い人に憧れたと、言った人がいた。

その誓いは絶対に、破る事は許されない。俺には、決して曲げることの出来ない誓いだ。

『最強に至る』

その誓いを果たすために、俺は強くならなくてはならない。力の使い道はこの際、問題では無い。俺は、求め続けることしか出来ない。

誰よりも強く。全てを守れる強さは、全てを奪う力と同じだ。

だから強く。もっと強く。より強く。

それが俺の使命であり、それが俺の存在意義なのだから。

「ふん……こんなものか」

倒れている魔物の死骸

黒の狼のもの

から視線を外して

歩き続ける。求めている黒の石は、まだ見つからない。

あるいは、俺の方からでは見つからないのかもしれない。この森はおかしいと思いつつ歩き続けているが、そろそろカラクリが見えてきた。この森は、次元がこじれているのだ。

本来行ける場所に行くことが出きず、繋がらない場所が繋がっている。だから、黒の石がこじれている側に転がっているのだとしたら、俺から近づく事は難しいのかもしれない。

「……」

歩き続ける。いずれ、黒の石を見つけられるだろう。

俺が出来なくとも、他の連中が見つけられるかもしれない。

俺はただ、黒の石を探す過程で見つけた『敵』を

排除するだ

けだ。

いずれ最強に至るその時まで。

俺は、勝ち続けなくてはならないのだから。

I n t e r l u d e o u t

森の中を歩き続けて数刻。ジューダス達はともかく、この森には何
度か足を運んだ事のあるユーリとエステル戸惑いは、いよいよ本
格的なものになってきていた。

何せ、目指した場所に辿り着けない。記憶どおりの道順を通りたい
のに、そもそも最初の道順からしておかしくなる。

迷宮以上に、見知った地形が変わってしまうという異変にユーリは
驚いていた。

「おいおい……ここまでこの森が入り組んでるはずねえーんだけど
な……」

「ですね……私達の知ってるクオイの森とはかけ離れてしまってい
るみたいです……」

ため息混じりにユーリとエステルが呟く。

「そっか……やっぱり、こんなに入り組んでるのは不自然だったん
だね」

コレットがあたりをきよろきよろと見回しながら言った。彼女は現
在、些細な変化も見逃さないよう、天使化して周囲に気を配ってい
る。それは同じく天使化出来るロイドも同様だ。

「何か、わかりやすい目印でもありゃいーんだけどな……」

「それです！……」

「おうわー!!」

ロイドの呟きに、エステルが叫んで返す。驚くロイド。

「目印をつけながら歩くんですよ！一度行っただけに出たらわかるように……」

「同じ道順を辿らないようにするってことか？」

ユーリが確認するようにエステルに言う。エステルは、満足げに笑って答えた。

「はい！……例えば、今日の前にある分かれ道は、右に行きましょう。その時に、こうして木に……」

エステルはそう言いながら、木の幹に傷を付けている。

右の方向を指し示した矢印が木の幹に刻まれた。

「これに番号もあわせて、地図を作りながら進んでいくんです！」
一連の動作を見ていたリッドが、肩を落としてながら呟く。

「うへえ……面倒な作業だな」

「でも、このまま迷い続けるほうが大変だよリッド？私はエステルの言うとおりにすべきだと思うな」

ファラが賛成し、リッドも頷いて答えた。全員、地図を作りながらこの森を攻略することにする。

出来ることなら、入り口からはじめておくべきだったと、ユーリは少しばかり後悔した。

「皆さんは、異変を食い止めるために私達の世界に来たんですよね？」

森の中を歩き、地図を作り始めてからさらに数刻。ふいに、エステルがジューダス達に問いかけた。

「ああ……そうだが？」

「すごいです……私なんて、異変が起こっている事は知っておきながら、それに対して出来たことなんてろくに無かったです」

「お前は城での作業があるんだから仕方ねーだろ？ 本当なら、ここでごうしているのだって、フレンにばれたら大目玉なんだからな」
ユーリがそう言うと、エステルに呆れ顔を見せた。エステルはふくれっ面を見せる。

「でもユーリ！ 世界のために何かする事は間違っていないと思います！」

「適材適所って奴だよ。……まあ、お前の治癒術は頼りになるから、これも適材適所なだけだよ」

「治癒術？」

ファラが間に入った。エステルを興味深げに見つめる。

「ええ。私、治癒術は得意なんです！ 怪我をしたらすぐに言ってくださいね！」

エステルが治癒術士として長けていると言うと、セルシアが無表情のまま頷いた。

「これは助かりますね。私達の中で、治癒術の得意な方はいらつしやらなかったみたいですから」

「ファラが気功使えるけどな」

リッドがあさつての方を向きながらそれとなく呟いた。それはまるで、自慢する箇所を忘れられた子供がそれとなく自慢する風でもあった。

「ふふ……」

「な、なんだよファラ」

「うっん！ でもありがと！ 私の治癒術は一片に皆にかけられないし、私が前に出て戦ってはかりだから、あんまり披露する機会はないかもしれないけど、一応私も治癒術は使えるって事、覚えておいてね」
「そうなんですか。わかりましたファラ。いざという時に頼りにします」

セルシアが小さく微笑みながら言った。

「そういえば城って？ エステルはお城で働いている人なのか？」

ロイドが、先ほどの話題で気になった点を尋ねてきた。その質問に、ユーリはどう答えたものかと一瞬思案する。

「あー……まあ、一応、それなりの地位を持っているんだよ。エステルは」

その言葉にエステルが首を傾げた。

「ユーリ？」

するとユーリは、小声で彼女に語りかけた。

「念のためだ。あんまり言いふらすような立場でもねーだよ」

「そうです？」

「そうだ」

「おーい二人とも。内緒話するくらいなら、無理に話さなくていいぞー」

ロイドがそう言ったので、二人はこの話題はもう終りにしようとした。

その時。

「ガルル……！！」

森の中で、狼のうなり声が聞こえた。全員は、それが異変によって生じたと思われる件の黒い魔物であると悟り、全員が武器をとる。

「よし！ それじゃあ、異世界の連中との初の戦闘、いっちゃやってみるか！」

「はい！」

ユーリとエステルが勢いよく駆け出すと、他のものもそれに続いて駆け出した。

彼らの新しい戦いが今、始まる。

やがてくる、恐ろしい程の強敵と相対するという事実にも、今は気付くことなく……。

二章一話 黒の断罪者（後書き）

読了ありがとうございます。アラヤシキです。

今回は、新しい世界に來たという事で新章となります。ユーリたちの世界、テルカ・リユミレースですね。この世界では武具魔導器が無いと戦いにくいという厄介な設定がありますが、ユーリたちを弱体化するわけにもいかず、仕方が無いので、マナに生まれ変わった世界でも武具魔導器と同じように自身を強化できる代替品が出來ているのだという強引設定で進んでいます。

うふふ……我ながら無理ありまくりんですねえ。

さて、ユーリとエステルを仲間に迎えて、ジューダス達は新しく動き出します。そして次に遭遇するのは何なのか！段々と私の趣味が色濃くなってきましたが、忍耐力がある方、お付き合いいただけたらと思います。

それでは、失礼します。

二章二話 グラニデのディセクター（前書き）

この話は、複数のシリーズタイトルを合わせて作った二次創作です。

シリーズを超えた話の展開が苦手な方や、シリーズ本編のネタバレを好まない方は閲覧されないことを推奨します。

数人、オリジナルな設定のキャラクターも登場します。

二章二話 グラニデのディセンドー

黒衣の守護者 二章二話 〔グラニデのディセンドー〕

ディセンドーは、世界樹が生み出す、世界を救済に導く存在である。諸説あるディセンドー伝説の中でも、ほぼ共通する事柄として世界の救済が挙げられる。

生み出されたディセンドーは、世界によって変わるが、ほぼ人型である。男女の性別や年齢はその時々によって変わるらしい。

巷に溢れるおとぎ話の一つとして、ディセンドー伝説は現在まで語り継がれてきた。

そんなおとぎ話の一つのディセNDER伝説だったが、これは空想の話ではなかった。

グラニデと呼ばれる世界には、少なくとも一人のディセNDERが存在する。

腰まで伸びている銀髪の後ろ髪を束ねている。青を基調とした半そでのシャツに、茶色の革の長ズボンを穿いたこの少年こそ、グラニデのディセNDERである。

「……いる」

うつそうと生い茂る森の中で少年がぼそりと呟く。

周囲には桃色の髪の少女しかない。しかし、少年は警戒心を周囲に剥き出しにしている。

その尋常ならざる様子に、桃色の髪の少女も身構える。

「カウス……近くにいたい？」

少女の問いかけの、カウスと呼ばれた少年は首肯した。

やがて周囲の木々のざわめきが収まると、カウスは突然叫んだ。

「上だ、カノンツ!!」

黒い影が高速で頭上より飛来する。

カノンノと呼ばれた少女はとっさにその場から飛びのき、黒い影の着地点から逃れた。

「……!!」

「……出た!」

黒い狼。現在、あらゆる世界に同時に出現したという魔物。

カウスとカノンノは同時に逆方向から切りかかる。

黒い狼はそれを横っ飛びに移動することで回避した。素早い身のこなしにカウスとカノンノはさらに警戒心を高める。

「僕が前に出る！カノンノは術で援護を！」

「わかった！いくよ！！」

詠唱を開始するカノンノ。狙いは上級術『エンシエント・ノヴァ』だ。

天上より飛来する業火は、例え強力な生命力を持つ魔物でもただではすまないほどの熱で敵を焼き尽くすだろう。

カノンノの長い詠唱時間を稼ぐために、カウスが魔物に向かって飛びかかる。

「虎牙破斬！」

飛び上がりの連撃。魔物は強靱な爪でそれをガードする。もう片方の爪がカウスの頭を狩りに来る。

後ろに仰け反ることとそれをやり過ぐすカウス。

反撃に転じるが、魔物の動きが早い。返しの爪がカウスの胸を裂きに来る。

「くっ」

とつさに剣でガードする。

だが、敵は両手の爪が武器の魔物だ。片腕の攻撃を受け止めたところで、どうにもならない。

バックステップでやり過ぐすカウス。

魔物は構わず、両腕を振り回すしながら攻撃してくる。

(……大振りだ。これなら見切れる)

敵の全てを切り裂く大鎌のような爪は、しかし予備動作の大きさからカウスには軌道が見えていた。

見切れる攻撃に恐れを抱く必要は無い。

カウスはやがてくるであろう攻撃の機会を待ち、今は守りに徹した。

そして、魔物がカウスを縦に切り裂こうとした一撃が何も無い地面に突き刺さった瞬間。

カウスは魔物の頭に己の武器を突き刺した。

「シギヤアアアアッ!!」

絶叫する魔物。攻撃は単調だがしかし、確実に脳を貫いたはずなのに今だ生命活動が続いているという恐るべき魔物であるともいえる。その悪魔のような魔物に、とどめの一撃を浴びせる。

「エンシエント・ノヴァ!!」

天より降り注ぐ業炎は、断末魔の叫びを上げる魔物を完全に焼き払った。

世界は広い。しかし、その世界がさらに別の世界に繋がってしまうとなると、その広大さに辟易するしかない。

異世界への扉をくぐってしまったカウスとカノンノにとって、元の世界に帰る方法を探す以前に、そもそも今日をどうやって乗り切るかさえも危うい状態であった。

何せ、どれだけ歩いてても森から出られる気配が無い。

(……まずい。方向音痴って呆れられてるんじゃないだろうか?)

カウスは、後ろを歩くカノンノに申し訳ない気持ちで一杯になった。何せ、依頼中の出来事であったとはいえ、自分の不注意で世界を移動してしまったようなものだったからだ。

(異変について何か分かるかもしれないなんて、どうしてそう考えたんだ僕は……)

己の浅はかさに後悔するカウス。

しかし、カノンノは特に不満そうな表情を見せることなく、カウスの後ろを付いて歩いた。

「ねえ。カウス……変なこと聞いていい?」

ふいにカノンノに呼びかけられ、カウスはびくつと肩を震わせた。

「な……なに?」

カウスがそう問いかけると、カノンノは曖昧に笑って口を開いた。

「私達がここに来る前に一緒に行動してたのって……誰だっけ?」

「へ?」

突然の質問に、カウスはしばし戸惑う。
もとの依頼の中で、カウスは4人でパーティーを組んで行動していた。

残りの二人のメンバーは誰だったかとカノンノは聞いた。

「…………あれ？」

そこでカウスも気付いた。かつての仲間たちの名前や姿がぼやけたまま思い出せないのだ。
思考に霧がかかったように言う事はあるが、まさにそういった感触を味わうカウスであった。

「あれ？あれ？なんでだろ？アドリビトムの事とか覚えてるのに、メンバーの事が思い出せない！？」

「…………やっぱりそうだね…………どうしたんだろ、私達」

カノンノが心配そうに声をかける。しかしカウスはカノンノに気遣うことが出来なかった。

共に戦ってきた仲間のことを思い出せない。この不思議な感じにカウスも愕然としていたからだ。

あまりの衝撃に、しばし呆けたまま動かなくなるカウス。

「…………カウス？」

いつまでも動かないカウスに、カノンノはようやく声をかけた。
その声で我に返るカウス。

「…………ちよつと変な感じがするけど…………カノンノの事は覚えているし、僕自身の記憶もちゃんと残ってる。

…………今はとにかく、元の世界に帰ることを目標にして行動しよう」

カウスの苦し紛れの行動指針の決定に、カノンノは小さく首肯した。元の世界に無事に帰ることが出来るよう。そして、グラニデを襲った異変が解決するように。

そんなことを願いながら、延々と森の中を歩いた。

その途中、生い茂る木々の間に人影が動いたのをカウスは見た。

「あ！」

驚きの声を挙げると、人影がカウスに気付いたらしく、歩み寄ってきた。

カウスとカノンノも、特に警戒せずに人影に近付く。現れた人物は、カウスやカノンノとそれほど歳の離れていなさそうな顔つきの少年だった。

紫の髪をおろしている。旅人らしく、簡素なブレストプレートを装備している。腰には剣の鞘が取り付けられていた。

「……こんな森の奥でデートかい？」

初対面の相手に対してニヤニヤとした笑みを見せながら発せられた言葉に、思わずカウスもカノンノも怯んでしまった。

「えっ……いや、違うんですよ」

「私達、ちよつと道に迷ってしまいました」

変な人物に遭遇してしまったのかと慌てながら、カウス達は現状の説明を試みた。

すると少年は肩をすくめて楽しそうに笑う。

「あはは！まあ、確かにこの森は厄介だよなあ……俺も同じところをさつきからぐるぐる回ってる気がするよ」

「……へ？」

「お互い、厄介なところに出ちまったって所だな。何せ即席の『迷

いの森』だ。異世界に飛んですぐにこんなところじゃ、やってられねーって話だよな！」

「！」

思わず驚くカウス。少年もどうやら、カウス達と同様に異世界からやって来たらしい。

さらに少年が言うには、この森は同じところを何度も歩かされてしまったような森だという。

「あの……あなたは？それに、この森は……」

カノンノが不安そうに質問する。

なおも楽しそうに笑いながら、少年はカノンノの質問に答えた。

「……『スフィード』。それが名前だよ。まあ、ここで会ったのも何かの縁って事で、よろしく」

スフィードと名乗った少年に、カウスとカノンノも自己紹介をした。二人の名前を聞いたスフィードは、うんうんと頷いた後に、先ほどのカノンノの残りの質問への答えを言い始める。

「この森はさ、恐らくだけど、一定の範囲から出ようとすると引き戻されるようになってんだ。空間が歪んでるんだよ」

「どうしてわかったの？」

「木に目印をつけて歩いてたんだけど、途中でつけた目印を見つけた」

「……単純に気付かない内に一周しただけって事は……」

「俺もそう疑って、別の道辿ったり、目印の数を増やしてみたけどよ。一番最初につけた目印に辿り着いちまう」

「……………」

にわかには信じがたい話であると思ったが、スフィードの言っていることが本当ならば確かに異常な森である。

一定範囲から抜け出せないという事は、ここから出られないという事では無いのか。

カウスもカノンノも、途端に空恐ろしい気持ちになる。

しかし、スフィードは全く不安感を覚えていない様子であった。

カウスはそこに疑問を持ち、ある一つの質問をした。

「スフィードさんは、もしかしてこの森から……」

「スフィードでいいよ。わざわざさん付けしなくていいって」

「あ……はい。ええと……スフィードは、この森から出る方法に担当がついているの？」

「いや、特には」

あっさりと期待を裏切られ、カウスもカノンノもうな垂れた。

「でもまあ……永遠に出られないなんて事はねーだろ。来る事は出来たんだから、出ることも出来るさ」

あくまでお気楽な考えを、スフィードは解とした。そんな理屈は通らないこともよくある筈なのだが、カウスもカノンノもそこを否定する気にはなれなかった。否定してしまえば、自分達も元の世界に帰ることが敵わないままここで野垂れ死にすることを認めてしまうからだ。

今はとにかく、藁をも掴む思いでこの森を探索するしかない。カウスはそう結論付けた。

「はあ。んじゃ、そういう事で。お互い頑張りましょーや」

「……はっ!？」

手をひらひらと振りながら、スフィードは木々の中に入っていくようにする。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

慌ててカウスとカノンノがそれを止める。スフィードは自分が何故引き止められたのか心底分らないといった表情で振り返った。

「あ、あの。一緒に行動しませんか？ここで会ったのも何かの縁……って、さっき言っていました……」

「そうそう！異世界から来たもの同士ということ……」

「……いいのか？初対面の相手に背中を預ける真似して……」

カウス達の申し出に、スフィードは歪に笑ってなにやら不穏な言葉を返した。

その言葉に、カウス達は再び怯んでしまう。

「……なんてな。そっちが良いんだったら、俺も構わねえよ。即席のパティーを組むとしますか」

ニカッと笑って、スフィードはカウス達の申し出を引き受けた。その変わりように、カウスとカノンノは呆れながらも笑った。

「お二人さんは、異変について調査するためこうして異世界に足を運んだの？」

突然、スフィードから質問された。

「それとも愛の逃避行？」

「ち、違いますよ！異変の調査で合ってます！！」

カノンノが顔を赤らめながら否定した。カウスも、胸の内に少しばかりの悔しさがこみ上げたが、カノンノに同調した。

「僕たちの世界でも、異世界と繋がった、変な魔物が現れ始めた、つていう事象が起こって……」

「それが何かの天変地異の前触れだったりするといけないから、こうして調べに来たんだ」

「まあ、ここに来たのは僕の身勝手がいくらか強いけどね……」

カウスはそういつて、しょんぼりとした顔のまま後ろ髪をかいいた。

「身勝手？」

「うん……異変を調べるためにって考えたら、亀裂に飛び込んだじゃったんだ」

「私もびつくりしてカウスに付いていったんだけど、この世界に辿り着いた途端、亀裂が消えちゃって……」

「あゝなるほど」

スフィードはそう言つと、快活に笑い出した。

「あはは！俺と同じだな！」

「え……つていうと、スフィードも？」

「そう。まあ、俺のは半分家出も兼ねてたけどな」

「い、家出？」

「そ、家出」

スフィードはそういうや否や、カノンノの肩に手を回した。それに驚くカノンノとカウス。

「きゃっ！」

「俺のもといた世界ってさ、『死にかけ』なんだよね……みんな暗い顔してんの。カノンノみたいに可愛い女の子もそんなにいねーしさー」

「ちょ、ちよつとスフィード！カノンノ、驚いているから！」

カウスが慌ててスフィードの手をカノンノの肩から払い落とす。その動作の機敏さがおかしかったのか、笑い出すスフィード。

「あっはは！わかりやすいのな、カウス！」

「だ、誰だって驚くよ……初対面の女の子にそんな……」

「そうかあ？……まあ、そうか。ごめんな、カノンノ」

スフィードはそう言うとし訳無さそうに手を合わせてカノンノに謝罪を示した。カノンノはまだ若干驚いている様子であったが「いいよ、もう」というとそれっきりであった。

「だけど……さつきスフィード、死にかけの世界って言わなかった？」

カノンノが改めての疑問を投げる。

するとスフィードは、目を閉じて過去を懐かしむような表情を浮かべた。

「死にかけ……てのは言い過ぎか。でも、あんまり先が無いってのも事実。そんな世界なんだよ。俺の故郷は」

「……負が満ちてる、とか？」

カウスがそれとなく聞く。するとスフィードはきょとした顔をした。

「負って、何だ？」

「……いいや、わからないなら、いいんだ」

人間の負の感情についての認識が無いのか、そもそもスフィードの世界が危ういのは負の影響では無いのか。カウスは疑問に思ったが、無理に聞かないことにした。

「っーかさ。よくまあ、この異変の調査なんて馬鹿げたことに力

を注ぐ気になれたな？」

突然スフィードがそんなことをいうので、カウスは驚いてしまった。

「え……馬鹿げてる？」

「馬鹿げてるだろ、こんなもん」

「え、ええ！？でも、スフィードも異変の調査をしてるって」

「だからだよ。自分でやってつからわかるんだよ。当ても無くさまようってのはまさにこのことだろ？挙句、それが世界規模で……違うか、異世界も含めたたくさんの世界規模で起こってるんだろ？容赦がないっていうかさ、ノーヒントで続けるには限界あるよなあ」

「それは……まあ」

「だからさ、逆に考えて、動き始めてすぐに何かの結果を得られるってのはもう運命的な力が働いているとしか思えないんだよな、俺は」

そこでカノンノが口を開いた。

「運命的？」

「そう、運命。この森を調査して、何も出てこなかったら、もうその時点で調査を打ち切ったほうがいいんじゃないかねえのかって事よ」

「……でも、それは」

諦めと同じでは無いか。カウスがそう口に出そうとすると、スフィードが更に言葉を続けた。

「まあ、ある意味でもう結果は出てるよな。こんなおかしな森に出会えた。それだけでもうカウスもカノンノも、この運命に巡り会えたってことなんだろうよ。きつとな」

そう言つて、スフィードはしみじみと頷いた。

そんなスフィードを見ながら、カノンノも口を開く。

「それは……私達とスフィードが出会ったという運命でもあるの？」

「それは少し違うかな……俺はさ。そこまで真剣に調査してねーから。俺に出会つても、二人には何も得るものが無いと思うぜ」

「そんな事……」

「自虐とかそんなんじゃないからねーから、心配しないで良いよ。俺はあく

まで我を通すっただけの話さ。二人に協力しようじゃなくて、二人が俺に協力してくれって意味」

「????」

「まあ、真剣に聞かないほうがいいぜって意味だよ。俺の話なんて話半分に聞いてくれ。その方が俺も助かるってこと」

スフィードはそこまで言うと、黙り込んでしまった。カウスとカノンは会話を続けようかと思ったが、その黙り方からこの話はここまでののだと悟り、話題を変えて雑談を続けた。

(……家出。死にかけの世界からの)

カウスは、先ほどのスフィードの言葉を思い返す。その言葉に込められた意味は何だったのか。

(……世界は、僕にはわからない事で満ち溢れているんだろうな) そう考えた。

森の中をさまよい始めて数刻。

異変の解決策も、森からの脱出方法もわからないまま、カウス達は歩き続けた。

その時ふと、カウスの動きが止まる。

「カウス……?」

カノンノが不思議そうにカウスを見る。カウスは、カノンノに静かにと合図を送ると、そのまま周囲を警戒し続けた。ふと見れば、スフィードも腰にぶら下げていた剣を鞘から引き抜いていた。

「気付くの早いな……」

スフィードがカウスに不適な笑みを見せながら呟く。カウスは、こくりと頷くと、そのまま後方に注意を向けた。

「カノンノ、スフィード……例の黒い魔物だ」

やがて。彼らの歩いていった方向とは逆の方向から、黒の狼がゆつくりと近付いてきた。その数、2体。黒い狼達は獲物を見つけると、その歩みを一瞬とめ、一呼吸の間をおいて　　全力で飛びかっ
てきた。

カウスはそれを剣を受け止めにかかり、そして　　。

「こんなん、いちいちまともに相手してらんねーだろ」

スフィードはそう言うと同時に、カウスの横をすべるように移動し、カウスが受け止めていた黒い狼の体を真横から切断した。

早い！！

カウスは驚愕する。スフィードという少年は不気味な殺気を滲ませながら、圧倒的な速度で黒の狼を一体消し去った。

次いで2体目が迫る。2体目も飛びかかってくるが、先ほどのものよりも速い速度で接近してきた。スフィードはそれを横つ飛びでかわす。魔物は、そうしてかわしたスフィードになおも追いつがる。

「やべ、早いぞこいつ……」

スフィードが呟いた。どうやら、予期していなかった敵のスピードに追い詰められているらしい。

スフィードのピンチを悟ったカウスとカノンノは、それぞれ行動に出た。カノンノは初級術『ファイアボール』の準備を、カウスはスフィードを狙っている魔物に向かって走り出す。

「おっと……後は頼むぜ！」

スフィードはそう叫ぶと、魔物にまわし蹴りを一発食らわせ、自身はその反動を利用して後方に飛び去った。魔物は一瞬スフィードを見失うが、その視界にカウスを収めると、今度はカウスに向かって牙を剥き出しにして襲い掛かった。

「うわっ！」

唐突な獲物の変更に驚くカウス。しかし何とかガードする。カノンノの術が発動した。ファイアボールは見事に魔物のわき腹に当たり、魔物を吹き飛ばす。

とどめだ!!

カウスが怯んだ魔物に接近する。
すると。

「いやぁ。とどめは俺が刺すよ」

カウスの後方から、白い光線が一矢とんだ。その光線が魔物の眉間を貫く。魔物はしばらくうなっていたが、やがて絶命した。

何が起ったのかわからないカウスは、自身の後方を振り返る。そこには、いつの間に用意していたのか、弓を持つスフィードの姿があった。

「どうよ……これが俺の戦い方ってやつ」

スフィードは不適に笑う。彼は剣士だと思い込んでいたが、どうやら違うらしいとカウスは思った。

何時の間に剣から弓に持ち替えていたのか分からなかったが、とにかく便利な能力であった。

「今の、スフィード？」

呆然としたままカウスが呟く。すると、スフィードの手に握られていた弓が光の輝きと共に霧散した。どうやら、魔力で構成されていたものらしい。

「俺ね。フリースタイルなの。特定の戦い方があるんじゃないって、色々やってるのさ」

「すごい……」

「すごかねーよ。器用貧乏って奴」

スフィードはそう言っていると、倒した黒い狼に近付く。そして、その絶命を確認すると、カウスとカノンノの元に引き返した。

「さて……次、行こうか」

「あ、うん」

スフィードが歩き始める。

カウスとカノンノは、彼の後ろに続くように歩き始めた。

「さて、出口はどこかな」

「スフィード、お気楽だね」

「まあな」

彼らは歩き続ける。迷宮と化した森の中を。

それがやがて、運命に導かれた戦士たちとの邂逅を果たす道となることに、今は気付かずに。

二章二話 グラニデのディセクター（後書き）

まさかのジューダス達が全く出て来ない回でした。いや、ジューダスを主人公に迎えたはずなのに、何故！？

私の趣味です。こういう、いきなり話が飛んでしまうのが。

今回も森の中で迷子になってばかりの話でしたね。一応、レディアントマイソロジー2の主人公として、オリキャラ兼ディセクターのカウスが登場します。そしてヒロインのカノン。スフィードという謎の少年。^{オリキャラ}この三人はこれから何をするのか、乞うご期待です。

カウスは銀髪に青を基調とした半そでのシャツ、ブラウンの革の長ズボンを穿いている魔法剣士です。カノンはいアハートお嬢さんです。スフィードは、紫髪にブレストプレートと後は長袖長ズボンの簡素な格好というキャラクタです。こんな半端な紹介ですか、お付き合いいただけたらと思います。

それでは、失礼します。

二章三話 最強の剣士（前書き）

この話は、複数のシリーズタイトルを合わせて作った二次創作です。

シリーズを超えた話の展開が苦手な方や、シリーズ本編のネタバレを好まない方は閲覧されないことを推奨します。

数人、オリジナルな設定のキャラクターも登場します。

二章三話 最強の剣士

黒衣の守護者 二章三話 最強の剣士

Interlude 『銀の過去』

周囲に多数の亡骸が横たわるその場で、奴と俺は出会った。あたり
にたちこめる血の匂いを全く気にした様子の無いそいつに、俺はた
だならぬ警戒を向けたのだが、そいつは一言「自分のほうが弱い
のは分かりきってる事だから、その警戒を解いて欲しい」と言つと、
俺と距離をある程度とった位置まで近付いてきた。

開口一番、奴は言った。

「あんたさ。そんなに強いのに、まだ強くなりたいの？」

当然だ。それが俺の目的だから。

「じゃあ、いい話を紹介しようか？」

興味が無い。

「聞く耳くらい持ってくれよ。いいかい。色んな連中と戦いたいな
ら、それ相応の規模で動き回ったほうがいい」

どういう意味だ。

「例えば……世界を敵に回すってのはどうだ？ いい加減でも何でも
いい。適当な大義名分を掲げて、今の世界に反旗を翻すんだ」

くだらん。

「そう。くだらない。だけど命を賭ける価値があるとは思ってるよ。
俺は」

俺にはそうは思えんな。

「あんたが自分をどう思ってるか知らないけど、少なくとも俺は、この俺のくだらない命を賭ける価値を見出した戦いを、これから仕掛けようと思ってる。もし、そのくだらない計画にあんたが乗ってきてくれるなら……あんたにも相応の仕事と、相応の報酬を約束できると思うよ。」

俺は別に、この世界を敵に回すつもりは無い。俺は、この世界が消えて無くなればいいなどとも思わないし、この世界を変えてやろうとも思っていない。

「相応の仕事は、俺が後から押し付けるとして、相応の報酬の方から説明するよ。それは……」

？

「……異世界の英雄たちとの、勝負……どうだい？」

俺は、奴の言葉を鵜呑みにしたわけではない。

ただ、特に目的も無かった俺は、奴の言葉に従ってみようという気まぐれを起こした。

あるいは、俺自身、強敵と巡り会えるその可能性にかけなくなったのか。

……まあ、いい。その気になれば、こいつも何時でも倒せるのだから。俺の目的の邪魔になると判断したその時、俺はこいつを斬る。ただそれだけだ。

もしこいつが本当に世界を滅ぼそうとしているのだとしてもそれに興味は無い。いざとなれば止める事だって出来るだろう。俺が求めるものは、唯一つ。

唯一にして絶対の力。それをこの手に。

Interlude out

ユーリとエステルを新たな仲間として迎えたジューダス達は、変わらず森の中を歩き続けていた。

広い異空間と化したこのクオイの森を、簡易な地図を作りながら確実に探索を進める。

「あ……ここは、さっき左に行った地点ですね」

エステルが地図を見ながら指示を出す。ジューダス達は、今度は右の道を歩き始めた。

「これを繰り返して、いつかこの森の異変の解決策が見つかるのか？」

リッドがぼやいた。それにユーリも同調する。

「なあ、一旦引き返したほうがいいかもしれないぞ？もう2時間以上こうしてうるうるしっ放しなんだからよ」

ユーリは、エステルを城に戻す時間を気にしていた。エステルが城に戻る時間が遅くなれば、フレンに何をしていたのかとどやされてしまうからだ。

「もうちょっとだけ……もう少しだけ、調べてみましょう、ユーリ」
エステルが地図とにらめっこしながら言った。

彼女は、次の進行方向を右にするか左にするかで悩んでいた。

「うーん……左に行って見ましょう」

「……まあ。仕方ねえか」

自らが蒔いた種であると苦笑しながら、ユーリもそれに従って歩く。

「しかし、ここまで歩いてても何も見つけれないとは……」

ジューダスが呟く。セルシアはジューダスの横を歩きながら、周囲を見渡した。

「ええ……この森のおかしさもそうですが、ここまで複雑だとは……」

その時、コレットが「あ！」と叫んだ。

「どうしたコレット？」

「あそこに誰がいるよ！」

コレットが指差す方向に、確かに一人分の人影が見える。ジューダス達は、何か得られるかもしれないと考え、その人影と接触することにした。

ゆっくりと近付いていく。すると、人影もまだかなり距離がある状態からジューダス達に気付いたらしく、ゆっくりと近付いてきた。

何だ？

ジューダスはその瞬間、奇妙な圧迫感に押しつぶされそうになった。目の前にいる人影から発せられる圧迫感だろうか。

やがて見えた人影は、銀髪が印象的な男性であった。端正な顔立ちが美しく、肩まで伸びた長い銀髪が印象的である。前髪も長く右目が隠れている。着ている黒のロングコートは、薄暗いの森の中においてなお暗い印象を放っていた。

そして……その右手には、黄金の刀身を持つ、奇妙な長剣が握られていた。

こいつ、何かまずい。

ジューダスはほとんど直感でそう感じた。他のメンバーたちも同様の威圧感を感じ取ったらしい。皆、厳しい顔つきをしている。

銀髪の剣士は、無表情のままジューダス達に近付くと、口を開いた。

「ここで何をしている」

流れるような声は美しく響いたが、多分に威圧的な印象を放っていた。

「ここは魔境だ。我々人間が立ち入ってただで済む場所じゃない。悪い事は言わない。特に目的も無いなら、早くこの地から離れたほうが良い」

銀髪の剣士はそう言うと、ジューダス達の動向をじっと見つめる。その様子に、ジューダス達は目の前の銀髪の剣士が異変と何らかの関わりを持った存在であると睨み、彼に質問することにした。

「僕達は、この森に起きた異変を解決しに来たんだ」

「……何？」

「ひいては、異世界を巻き込んでいるこの異変そのものの解決も含めてな……」

「……ほう。ということは、お前達は俺の敵らしい」

銀髪の剣士はそう言うと、その右手に握っていた剣をジューダス達に向けた。

それを無言で見つめるジューダス。

「……」

「異世界を巻き込むこの異変を止める……それは確かに、俺の敵だ。だが、この異変は直に収束するとしたら、どうする？」

「……何？」

銀髪の剣士はそこで、目を瞑って言葉を紡いだ。

「この異変は、後数週間のうちに収まるとしたらどうすると聞いた。お前達はそれでも、この異変を食い止めようというのか？」

「……確証が得られないからな。僕達は、あくまでこの異変を解決することを使命として動いている。ただそれだけだ」

「……では、俺と敵対することになったとしても、いいのだな？」

そこで銀髪の剣士の体を、圧倒的とも言える闘気が包み込み始めた。尋常ではないその威圧感に、戦闘に慣れたジューダス以下残りのメンバーたちも皆、息を飲む。

目の前にいる男は、かつて戦ってきたどの敵よりも強い強敵である。皆がそれを察知した。理解せざるを得なかった。それほどまでに男の纏う闘気は圧倒的であった。

「覚悟が出来たなら、来い」

銀髪の剣士はそれだけを言うと、ジューダス達が動くのを待った。ジューダス達に向けられた黄金の刀身を持つ剣が、不気味に輝く。

「ジューダス……彼は強敵です」

ジューダスの横にいたセルシアが、彼にだけ聞こえるような声でさやいた。分かっているとジューダスは頷く。

「だが、退くわけには行くまい。こいつは恐らく、何かを知っている。そして……僕たちがこの異変に関わる以上は、避けては通れない敵だろう」

ジューダスが剣を鞘から抜いた。それを合図に、その場にいた全員がそれぞれの武器をとる。

8対1。多勢に無勢である事は銀髪の剣士は十分に理解しているはずだ。だというのに銀髪の剣士の表情は崩れることなく、むしろ増した闘気がジューダス達に焦りを僅かに与えた。

まるで、これだけの人数で攻めるジューダス達のほうが、まだ劣っている。互角には程遠いと感じられた。

「ジューダス、仕掛けねーんなら、俺から行くぜ」

ユーリが前に出た。それは、異変を良しとする銀髪の剣士への不満があつたが故の行動でもあつた。

「よう。あんた、言つたな。異変は収束するから手を引けてよ」

ユーリは刀を肩に当てながら話しかける。

「でもよ……その間に黒い狼に殺されちまう奴がいるかもしれねーし、亀裂に飲まれて異世界に迷い込みまう奴もいるかもしれねー。そういう連中がいるって事は考えてないのかよ」

「……」

「話にならねーな。俺はな、そういう連中が出ないように、この異変はさつさと収まるべきだと思うし、そのために行動してんだよ」

「……」

「てめえが何を目的に動いてんのか知らねーけどよ……そういう連中のことを何も考えてねえって言ふんなら……お前は悪党だぜ……」

「？」

「……ふ」

ユーリの言葉を、銀髪の剣士は鼻で笑つた。その様子に苛立つユーリ。

「……てめえ」

「悪党か……そうだな。その通りだ。ではどうする？『正義の味方』？」

「……何？」

「教えてやろう。口先だけでは何も変わらぬことが事実ならば、力こそが己の言葉を越える唯一の方法だということを。……貴様らの言ふ正義とやらは、所詮血塗られた力でしかないという事を」

「……」

「来い。貴様の力を、見せてみる」

銀髪の剣士はユーリを挑発する。その挑発にすぐには乗らないユーリであったが、攻撃の機会はうかがっている。

やがてシビレをきらしたユーリが、その刀を大きく振った。

「蒼破刃!!」

風の刃が銀髪の剣士目掛けて飛翔する。銀髪の剣士は、それを目の前まで迫った段階で切り落とした。

「ふっ」

ユーリが風をまいて敵に突撃する。銀髪の剣士は、ユーリの接近に臆することなく、無表情のまま敵の攻撃を待ち受けた。

ユーリの剣と、銀髪の剣士の剣が激突する。

「くっ……こいつ」

「……」

銀髪の剣士は、鏖競り合いで圧倒的な力を見せ付ける。このままではすぐに押し負けてしまうと察したユーリは、あえて後ろに下がることで銀髪の剣士の押し込みを避けた。

銀髪の剣士は、バックステップを踏んだユーリを追う。相変わらずの無表情はしかし、敵を攻撃する際に生じる気迫すら感じさせないもので、ユーリはゾツとした。

「うお!」

ガキーンとユーリの剣と銀髪の剣士の剣が激突する。ユーリはその一撃で腕が痺れたが、まだ負けてはいない。

「くっそ……まだまだあ!」

そして、銀髪の剣士の連続攻撃をユーリが精一杯の手段で防ぐという図式が出来上がる。銀髪の剣士の猛攻は、ユーリにとって動くに動けないほどのものであった。

連続で鳴り響く金属の激突する音は、ユーリの劣勢を意味していた。音が鳴るたびに、ユーリの体勢は崩されていく。

「こ……いつ……！」

次の瞬間、銀髪の剣士は剣をしたから上に向かって振り切った。その攻撃をユーリは防ぐ。が、防ぎきれず、剣は弾かれ上空に舞った。

「な……やべえ……！！！」

銀髪の剣士が猛然と迫る。ユーリを守るものは何も無い。このままユーリの体が引き裂かれるかと思った瞬間。

「させるかよ……！」

「させねえ……！」

横からリッドとロイドが銀髪の剣士を攻撃し、彼がユーリを攻撃するのを食い止めた。

「あつぶねえ！サンキュー！お二人さん！」

間一髪のところであつたユーリは、そのまま上空から落ちて地面に突き刺さった自分の剣を拾いに行く。ユーリは武器を取り戻すと、悠然と構えた。

銀髪の剣士は、距離を取り、ロイドとリッドを交互に睨む。

「来い」

一言、銀髪の剣士が呟いた。その言葉を合図としたかのように、ロイドとリッドが同時に銀髪の剣士に飛びかかる。左右から攻撃される銀髪の剣士だが、恐るべきことに両者の攻撃を見事に防ぎきっていた。

ロイドの剣を黄金の刀身の剣で防ぐ。その隙にリッドが攻撃するが、それは体ごと反らしてかわす。

かわされたリッドは、攻撃後の隙を見せる。その隙を突くように銀髪の剣士が剣を振るう。それを食い止めるためにロイドが剣を振る。銀髪の剣士は、視界の外から放たれたその一撃を、低姿勢をとることで見事に回避する。

銀髪の剣士がリッド目掛けて蹴りを入れる。それを喰らい、体勢を崩されるリッド。銀髪の剣士は、今度はロイド目掛けて剣を振るう。その剣撃はロイドの首から上を吹き飛ばすほどの威力を秘めたものであった。ロイドはそれを両手に握った剣を交差させて防ぐ。防ぐが、体ごと吹き飛ばされる。

距離をとったロイドを無視し、銀髪の剣士は再び標的をリッドに絞る。リッドは体勢を立て直すが、銀髪の剣士の一撃をガードすると、そのあまりの攻撃の重さに体ごと流されそうになる。何とか歯を食いしばって押しとめたものの、そう何度も受けきれぬ威力ではない。真つ向からの剣を交えた勝負では、圧倒的なまでに銀髪の剣士の力量が上を行っていたのだ。

「くそっ!!」

リッドが無理は出来ないと、飛びのく。

「逃がさん!!」

銀髪の剣士が剣を突いた。飛びのいたリッドには当然当たらないその一撃は、何のために振るわれたのか。瞬きすら許さぬ瞬間、銀髪の剣士の突き出した剣先から烈風が雄たけびを上げ、気流の刃となった竜巻がリッド目掛けて飛び出した。

「な……!!」

リッドは噴出した竜巻を何とかガードしようとする。だが、彼の体はその竜巻によって、彼の体ごと高速で押し出した。その過程で、リッドのものと思われる鮮血があたりに飛び散る。

「あ……が……!!」

リッドの胸は抉られ、そこから大量の血が滲んでいた。急いで治療しなければ生死に関わる傷だ。

「リッド!! リッドオー!!」

ファラが急いでリッドに駆け寄る。だが、それよりも速い速度で銀髪の剣士がリッドに止めを刺そうと襲い掛かった。

「ファラ!! 危ない!!」

コレットが叫ぶ。ファラはそれが耳に入っていないのか、銀髪の剣士の襲来を気にも留めず幼馴染の救出に全速力で駆けつける。

「殺る」

銀髪の冷たい眼光に光が灯る。青白い眼光はまるで死神の絶対零度の眼差しのものであった。

その冷たい眼光が、同じく冷静そのものを宿した眼光によって防がれる。仮面の剣士が、銀髪の剣士の前に躍り出た。

「今度は僕が相手だ」

「……来い」

ジューダスは銀髪の剣士に向かって突進し、その剣を受け止めた。予想していたことだが、銀髪の剣士の一撃はとにかく重かった。これでは確かに防ぎきれない。防御に回っても、すぐにギリ貧に追い込まれるのが目に見えている。

ならば、こちらから攻めきるのみだ。

ジューダスはそう判断し、畳み掛けるように攻撃を開始した。

「ふっ! はっ! せいっ!!」

開始の通常攻撃三段。苦も無く防がれる。銀髪の剣士にこの程度の攻撃は届かない。

「飛連斬!!」

ジューダスは飛び上がると共に斬りつける特技・飛連斬を発動させる。飛び上がりの威力を加えた分、相手に与える衝撃も重たいはずだ。だが、銀髪の剣士はそれを体ごと仰け反ることかわしきった。見切られている！？

ジューダスは嫌な予感がしたが、その予感を頭から振り払うと、そのまま奥義へと連携させた。着地したジューダスは即座に飛び上がると、目にもとまらぬ高速移動で連続で敵に向かって刃を繰り出し始めたのだ。

奥義・崩龍斬光剣。しかし、その高速移動と伴わせた連続攻撃を、銀髪の剣士は3つ目の攻撃が繰り出されたと同時に中断させた。

「が……き、さま……」

ジューダスの腹に銀髪の剣士の回し蹴りが叩き込まれたのだ。崩龍斬光剣の発動中に自身の移動を止められたという事実には衝撃を受けるジューダス。

「遅い！」

銀髪の剣士はそのまま体制を崩しているジューダスを切り捨てようと、剣を振り上げる。

その攻撃を、ロイドが再び防いだ。

「だから……させるかよ！！」

「……」

ギリギリと鏖張り合いながら睨みあう両者。ロイドは歯を食いしばり、全力で銀髪の剣士の押し込みに対抗している。

「てめえも、そろそろくらえ！」

「……！」

銀髪の剣士の目が細まる。ロイドの背後から、3つの光りの輪が迫っていたのだ。コレットの天使術、エンジェルフェザーだ。高速で移動するそれらの光輪は、敵を焼ききらんと銀髪の剣士に迫る。

「はあ！！！」

銀髪の剣士が裂ぱくの気合と共に、ロイドを鏢競り合いから強引に押し返した。

「うわ!!」

たまらず後ろに仰け反るロイド。

次の瞬間、驚愕の光景を目の当たりにする。なんと、銀髪の剣士は迫りくるエンジェルフェザーを、その黄金の剣で斬って捨てたのだ。

(……術を切り捨てた!?マジかよ!!)

流石にロイドもこれには驚かざるを得なかった。まさか物理的な手段では防御できないと思われていた術攻撃を、剣で切り伏せる敵がいよつとは。

「ふん!」

銀髪の剣士の周囲に、ふたたび強力な闘気が纏い始める。

「……行くぞ」

銀髪の剣士がそう呟くと、彼は先ほどまでは比べ物にならない速度でロイドに接近した。

「な……!!」

「はあ!!」

気合と共に繰り出された袈裟斬りを、ロイドはガードしようと左手の剣を構える。その剣が叩き落された。

「が!!」

ロイドは肩を斬られた。しかし、痛みで気を失う前にやるべき事がある。後ろに飛んで逃げなければ、次の一撃で今度こそ命を奪われる。

気力を振り絞り、大怪我を追いながらも後ろに飛んでやり過ごすロイド。しかし、それは先ほどのリッドと同じ回避であった。

「飛べ!」

銀髪の剣士の剣先から再び風の刃が繰り出される。その竜巻はロイドの体を切り決らんと迫る。

(……やべえ!!)

迫る風の刃を回避する手段が無い。万事休すかと思われたその刹那、目の前に金髪の少女が躍り出たのをロイドは見た。

「きゃああ!!」

「コレット!!?」

コレットは身を挺してロイドを庇ったのだ。その結果、コレットは背中を風の攻撃で挟まれ、そこから大量の鮮血が噴出した。

コレットはそのまま吹き飛ばされ、ロイドと激突する。コレットの倒された体は、そのままロイドに覆いかぶさるようになった。

「コレット、しっかりしろ!!コレット!!」

ロイドが左肩の痛みを忘れ、コレットに呼びかける。しかしコレットは返事をしない。どうやら気を失っているだけで済んだようだが、このまま放っておいてはまずい。

「エステル!!コレットとロイドの治療を!!」

「ファラさん……!!?わかりました!!任せてください!!」

ファラの叫びを聞き、エステルが急ぎ足でコレットに近づく。ファラは、銀髪の剣士目掛けて走り出していた。その隣には彼女の幼馴染の姿が。ファラの気功によって回復したリッドの姿があった。

「うおおおおお!!」

リッドが叫ぶ。銀髪の剣士の背中目掛けて果敢に切りかかった。

視界の外から放たれたリッドの一撃を、銀髪の剣士はまるで見ているかのように回避する。そして隙だらけになったリッドの体を目掛けて、黄金の剣を振りかぶる。

「させない!!」

ファラが銀髪の剣士の懐に入った。超接近戦はファラの距離だ。彼女はそこから、爆発的な闘気で相手を吹き飛ばす獅子戦吼をはなつ構えを取った。

「獅子戦吼!!」

銀髪の剣士の懷で獅子の鬨気が爆発する。しかし、銀髪の剣士は微動だにしない。彼の足元には、獅子戦吼を放ったファラの手と、それを防いだ彼の膝蹴りがあった。

「うそ……」

ファラが絶句して立ち止まる。その隙を、銀髪の剣士は見逃すほど甘くは無い。

「ファラ!!」

今まさに切り裂かれんとする幼馴染の体を、リッドが押しのける。変わりにリッドのわき腹が切り裂かれた。傷は深く、彼は立っていないほどの重傷を負った。

「がはっ!!」

「リッド!!」

ファラが叫ぶ。しかし、銀髪の剣士は追撃を緩めない。

「滅!!」

銀髪の剣士がそのまま剣を地面に突き立てると、そこから鬨気が爆発し、周囲の地面ごと辺りを吹き飛ばす爆発を引き起こした。その爆発に巻き込まれるリッドとファラ。

彼らの体は地面を転がると、そのまま動かずに倒れ付した。

「せい!!」

銀髪の剣士は今度はエステルに狙いを定める。ロイドとコレットの回復をしようと詠唱を開始していたエステルを守護する壁はどこにもない。

そのままエステルが銀髪の剣士に倒されると思った刹那、ユーリが彼女の守護を買って出た。

「さっきの続きだ!!」

「……来い!!」

銀髪の剣士とユーリの剣が再度ぶつかる。先ほどよりも重い一撃に、

ユーリは舌打ちをした。しかし、ここで退くわけには行かないとユーリも力を込める。

「うおおお！！爪竜連牙斬！！」

剣と蹴りを組み合わせた独特の連続攻撃を放つ。それを、苦も無くかわし続ける銀髪の剣士。ユーリはそこで攻撃を緩めず、己の闘気を全開にして攻勢に転じた。

オーバーリミッツだ。

「一気にケリをつけてやるよ！！」

怒涛の連続攻撃を開始する。その全てを、銀髪の剣士は受け流す。受け流し続ける。自分の全てをぶつけた攻撃が次々とかわされるという現実に、ユーリは驚愕する。

しかし、手を緩めるわけにはいかない。後ろには、ユーリにとって大切な仲間がいるのだ。彼女を傷付けるわけには行かない。

「だったら……こいつはどうだー！！！！」

最早後先も考えず、現時点での自身が繰り出せる最高の技で敵を圧倒する。秘奥義・漸毅狼影陣。

素早い移動は相手の視覚からユーリの存在そのものを消し、目にも止まらぬ速さで繰り出される攻撃は標的自身が傷付けられている実感を得る前に倒される。

その秘奥義。出始めの一撃。それを防御された。次いで二撃目。これはかわされた。そして三撃目。

「な……に……」

「……遅い」

ユーリの体を、黄金の剣が貫いていた。

「ユー……リ……？」

エステルが、呆然と、串刺しにされた仲間の姿を見つめる。

「吹き飛ばし！」

銀髪の剣士が闘気を開放すると、ユーリと、近くにいたエステル、コレット、ロイドの体が吹き飛ばされた。そのあまりの衝撃に気を

失うエステル。

「……最後はお前たちだ」

銀髪の剣士がそう言つて、ジューダスとセルシアを見る。

「……ジューダス。私の攻撃は、おそらく彼には届きません」

セルシアが体勢を立て直していたジューダスに語りかける。

「先ほどから機を狙つて彼目掛けて発砲していたのですが、彼の闘気に銃弾が弾かれるのです」

「……常にシールドを張っているようなものか……やっかいな相手だな」

「チャンスがあるとしたら、これだけです」

セルシアがそう言つて、懷から太い銃身と、それに見合った大きな目の弾丸を取り出した。

「この魔弾なら……彼の闘気に弾かれること無く、撃ちぬけるかもしれない」

「……僕が隙を作る。お前が……仕留める」

「……わかりました」

ジューダスがゆっくりと前に出た。敵は力、速度、防御、全てにおいてジューダスの上を言っていると、この短い戦闘で確信できた。ここまで圧倒的な相手に、真正面から戦つて勝てる見込みは僅かしかないだろう。プライドの高いジューダスでさえ、目の前にいる最強の剣士との実力差は認めざるを得ないものである。

だから、セルシアの持つ魔弾に賭ける。それが上手く行けば銀髪の剣士の闘気を打ち破り、敵に致命傷を与えるかもしれないのだ。

ジューダスの覚悟を感じ取ったのか、銀髪の剣士はゆっくりと近付いてくる仮面の少年を鋭い眼光で射抜く。

「来い……」

その言葉が引き金となり、ジューダスは走り出した。

疾風のごとき速度を持つて、敵を貫きにかかる。特技・幻影刃によ

つて、ジューダスは銀髪の剣士の背後に回りつつ攻撃した。銀髪の剣士はそれを苦も無く防ぎ、すぐに背後に振り返る。

ジューダスはそこから、闇のオーラを纏った一撃を繰り出した。

「魔人滅殺闇！！」

ジューダスが斬りつけると同時に、地の底から闇のオーラが銀髪の剣士に襲い掛かる。

「はぁ！！」

銀髪の剣士は、それを地面に剣を突きたてると発生した闘気によって相殺した。ジューダスの攻撃が全く届かない。

しかし、それは今までの話だ。今でジューダスは、銀髪の剣士を一瞬だが地面に縫い付けた。

ドゴオン！

セルシアの手元から、強力な魔弾が飛翔する。銀髪の剣士の背中目掛けて飛んでいく弾丸は、そのまま銀髪の剣士の背中を抉り、心の臓を貫いて勝利を確約するものかと思われた。

「見えているぞ……！！」

銀髪の剣士はセルシアの方を向くと同時に、その剣を振り下ろす。振り下ろされた剣はセルシアの放った弾丸に接触し、激しい火花を散らした。そして次の瞬間、セルシアの弾丸はその軌道を反らされ、何も無い虚空を切り裂くのみとなったのだ。

「あ……」

絶望をセルシアが襲う。これほどの人間離れした芸当、一体どのような修練の果てに得られる極地なのか。想像を絶する意志と鍛錬がなくては人間をここまでの凶器に練磨することなど出来ないのでは無いか。

「……終わりにさせてもらう」

銀髪の剣士の周囲を、かつてない闘気が包み込む。そして剣士が一回転するように剣を振るうと、そこから溢れんばかりの闘気が射出され、ジューダス達の体を強烈な圧力で押しのけた。あまりの威力に吹き飛ばされ、気を失うジューダス達。

今ここに、ジューダス達の全滅が、敗北が決定した。

二章三話 最強の剣士（後書き）

なんという無茶な展開……いきなりの全滅です。いきなりエンカウントした敵がレベルMAXのチートキャラだったみたいな展開が今回でした。

銀髪の剣士には、一応のキャラクタモデルがあります。英雄伝説「空の軌跡」というRPGに登場する、アッシュブロンドの髪が美しい『剣帝』という二つ名を持つお兄さんです。元々はPCで遊ぶRPGの敵キャラクターだったんですが、この人物、強化されるパッチが公式より配布されるなどいろいろ曰くつきの面白キャラです。で、興味がありな方は調べてみるとおもしろいかもしれませんよ。少なくとも私は、この剣帝のお兄さんの厨二性能っぷりに完全にノックアウトされました。

圧倒的です。ラスボスより強い、規格外の強さに惚れました。分け身だつつのに、本体が倒れた後も分身が攻撃してくるという理不尽さともうね……。それ分け身じゃねー。直前のボスに普通にダメージ通ってたのに、この剣帝にはいきなりダメージ0という超防御力。そんなステータスでもその後のラスボス戦は普通に勝てるあたり、剣帝の強化の度合いが半端じゃないです。

その剣帝からはだいぶアレンジの入った登場人物、名前はまだ出ていない『銀髪の剣士』ですが、そのまま圧倒的な壁ボスのような役割を果たしてくれました。

いわばチートです。ファラの獅子戦吼を膝蹴りだけで相殺したり、ユーリの漸毅狼影陣の最中に攻撃を当てるなど、とにかくやることなすこと滅茶苦茶な敵です。

はたして、ジューダスたちはこの壁ボスを撃破することが出来るのか！？

……相変わらず、あおりが超絶的にへたくそですが、お許しください。

それでは、次のお話をお待ちいただけたらと思います。失礼します。

二章四話 敵前逃亡（前書き）

この話は、複数のシリーズタイトルを合わせて作った二次創作です。

シリーズを超えた話の展開が苦手な方や、シリーズ本編のネタバレを好まない方は閲覧されないことを推奨します。

数人、オリジナルな設定のキャラクターも登場します。

二章四話 敵前逃亡

黒衣の守護者 二章四話 敵前逃亡

「疲れた……」

うつかりと漏れた本音に、カノンノは顔を赤らめながら慌てた。

「あ、ち、違うよ！？まだ大丈夫……！」

「いや……僕も疲れてきたよ、流石にね……」

そんなカノンノにカウスがフォローを入れる。

スフィードはずんずんと先を進んでいたが、カウスとカノンノが立ち止まっていることに気付くと、振り返って戻ってきた。

「お二人さん、そんなんじゃ日が暮れちまうぜ。出口が無いのがほとんど確定的なんだから、しらみつぶしにこの森の中を探し回るしかないんだぜ？」

「う……うん。ごめんねスフィード」

「謝る必要は無いさ。俺だっていい加減うんざりしてきたところだつたんだし」

スフィードはそう言うと、地面に座り込んだ。

カウスとカノンノも、休憩を兼ねて地面に座る。

「私たち、この森から出られるのかな……」

カノンノがそんな弱音を口にした。

「大丈夫だよ。どこかに空間の亀裂が出来てるかもしれないし……」

「この森の空間の擦れごと、ぶっ壊してやれたらな！。そうすりゃ普通の森に戻るとは思っただけだよー」

「空間の擦れごと？」

「ああ？わからなねーか？同じところをぐるぐる回らされんのは、空間が擦れてるからだろ？その擦れを吹き飛ばせば、出口は見つかるかもしれねーってわけさ」

「……無茶じゃない？空間ごと吹き飛ばすってことでしょ、それ」

「無茶だよ。だから希望的観測なんじゃないか」

スフィードは呆気なく本当のことを言う。一瞬でも希望を持ってしまったカウスは、そんな彼の様子にうな垂れた。

（……これからどうしよう）

カウスは思うが、それは口には出さなかった。どうするも何も、この森から出る方法を当ても無く探し続けるだけであることに変わりは無いからだ。

そんな時、スフィードが口を開いた。

「ただ休憩するってのも味気ないしな。二人にちょっとした質問してもいい？」

「ん？質問？」

「ああ……二人はさ、人生に意味とかってあると思うか？」

唐突に繰り出された質問に、カウスもカノンノも首を捻るのみであった。

「どうしたの、突然……」

「まあ、いきなりな質問なのはわかるけどよ。暇つぶしさ、こんなものな」

「暇つぶしねえ……僕は、人生に意味はあると思うな」

カウスは天を見上げながら呟いた。

「どうして、そう思うんだい」

「うーん……僕がそういう立場だったから、かなあ……」

「……へえ」

「宿命とかそういうのじゃないんだけど、ただ一生懸命に頑張って生きていたら、その先には僕なりの幸せが待っていたんだ。仲間たちと一緒に、世の中で困っている人たちを助けるって言う仕事と、それを支えあう仲間たちがね」

カウスの言葉に、カノンノは嬉しそうに頷いた。そしてカノンノも口を開く。

「そうだね……意味の無い人生なんて無いんじゃないかな……私も、絵本を書くっていう夢を持ってるけど、その夢が叶いそうになったとき、みんなと一緒に頑張って来れて良かったなって、それまでの苦労が全部報われた気がしたもの」

「つまり……お二人さんは、自分自身にとっての幸福を追求すること、人生の意味があるって言いたいわけか？」

「……うん、まあ」

スフィードの表情がどことなく硬い。その様に、カウスとカノンノは一瞬だが不安な気持ちになる。

「幸福の追求は、権利で合って意味じゃないと思うのは、俺だけかな？」

スフィードは挑戦的に笑いながら、そんなことを言い出した。

「意味じゃない？」

「二人のは結果論でしかないって意味さ。幸福に至るから意味がある？それは論理が飛躍しすぎだよ。いずれ幸福に至れるという意味がある？じゃあそもそも幸福を望んでいないものには意味が無いってことになっちゃう。そして……その幸福を掴むという過程において、他者の幸福を握りつぶすことも含めて、それが意味のある行いだと思うのかい？」

スフィードは意地汚く笑う。

「話を続けるぜ。俺は人生に意味なんて無いと思ってる。それは、意味が無くても人は生きるなんて偽善の言葉じゃない。本当に、全ての生命、生きとし生ける全ての命に意味なんて無いと思ってる。もちろん、その命が消えてなくなることと変わる何かもあるし、偉大な発明家が残した発明品が後世の世の中を良くする事だってあるだろうさ。だが、それらも含めて全て意味が無いと思っている」

「……どうしてそう思うのさ」

「人生に意味なんて無くて、人間にあるのは己の願いを叶えたいっていう欲望だけなんじゃないかって思うからさ」

スフィードはそこで、自身の手を胸にあてて、まるで演説するように語り始めた。

「人生は、願いを叶えるための徒労の積み重ねさ。生まれてから今日に至るまでの過程で本人が蓄積してきた願いを、まるで帳消しにしていくかのごとく叶えようと努力する様が人生って事であって、それには決して意味は付随しないんじゃない？俺は少なくとも、そういう人生を歩んできたし、それが間違っていたなんて微塵も思わない。俺にあるのはあくまで、俺の願いを叶えたいっていう意志だけだよ。我儕に聞こえるかもしれないけどな」

「願いを叶えるっていうけど、そのために他の何かを犠牲にする可能性とか、そういうのは考慮しないの？」

「するさ。した上で叶えたい願いの方を優先させるなら、もうそれは当人の人生なのさ。だから人生。人が生きると書いて人生。な？」

「……よくわからない、かな」

「まあ、くだらない話の一つだと思ってくれればいいよ。だけど俺が言いたいのは一つ、これだけは覚悟して聞いていて欲しいな。生き物は……意味なんて理屈で縛れるほど複雑じゃない……人間にあるのは、願いを叶えるという、単純な志のみで、そのためならどんな不条理な行動にでも出られる……その位、腹のうちで何を飼っているもおかしくねー存在こそ、生きている、人……人生なんだって

な」

「う……うん？」

スフィードはそこまで言うと、急に頭を下げて地面を見据えた。カウスとカノンノは、スフィードの独特な話を首を傾げながら聞いていたが、いまいち要領を得ない様子であった。

「よし、行こう」

立ち上がるカウス。もう休憩は終わりにし、出口を探さなくてはと思ったのだらう。それに同意し、カノンノとスフィードも立ち上がる。

「……あ？」

その時、スフィードが声を上げた。木々の茂みに隠れた部分に目を凝らしている。

カノンノがスフィードに声をかけた。

「ん？どうしたのスフィード？」

「いや……立ち上がる時、何かそこで光って見えた」

「光？」

カノンノが確認しようと茂みに近付く。

そこにあつたのは、片手で持てる程度の『黒い石』であった。怪し

く黒く輝いている。

「ん？変な石……どうしたのカウス」

カノンノが石の感想を述べている間、カウスは厳しい顔つきでカノンノを見ていたことに驚くカノンノ。

「カノンノ……その石……あの黒い狼達と同じ感じがする」

「え……」

「危ないから、一回手を離れたほうがいいよ」

「う……うん」

カノンノは言われた通り黒の石を地面に置いた。

すると、今度はスフィードが黒の石に近付く。

「スフィード！？」

「いや……こんな怪しい石、放っておけねーって。案外、こいつがこの迷いの森の原因かも知れねーぜ」

「え？」

そういうとスフィードは、腰からぶら下げていた剣を取り出し、黒の石目掛けて振り下ろした。

黒の石はそのまま真つ二つに切られ、砕けた……ように思われた。

「え、ええ！？」

「な、何だ！？」

黒い石は先ほどよりもまばゆい光を放ったかと思うと、スフィードが振り下ろした剣を受け止めたのだ。

「こいつ……」

スフィードがぼそりと呟く。

すると黒い石が突然空中に浮かび上がると、巨大な黒い靄を発生させた。靄は黒い石を完全に包み込み、そして……。

「ま、魔物？」

「お、大きい……」

巨大なカマキリ型の魔物が姿を現した。

「おいおい。すげえなこの展開。何か、この魔物を殺せば、この森から出られるっつーベタな展開か!？」

興奮交じりにスフィードが叫ぶ。カウスとカノンノは、目の前の巨大カマキリから発せられる殺気に対応するために武器をとった。

カマキリは大きく、3メートルはあるであろう巨体と、何でも切り裂いてしまいそうな巨大な鎌を武器にしている。

「はっは。いいねえ、こういうの。やってやるよ、デカブツ……」

スフィードが突如としてジャンプした。そして、そのまま落下の勢いを利用してカマキリに向かって切りかかる。

カマキリは、左の鎌を使ってスフィードを防いだ。そのままスフィードは上空に向かって弾き飛ばされる。

「スフィード!」

カノンノが叫ぶが、スフィードは別段気にした様子も無く、そのまま上空に飛びあがり体を一回転させると、こんどはその手に以前見せた弓を持っていた。

「はあ! 貫け!」

スフィードはそのまま上空から矢を勢いよく射出する。その光の矢を、鎌で次々と防ぐ魔物。

しかし、それが隙になった。魔物が上空からのスフィードの攻撃を防いでいる間、下からの攻撃には無防備にならざるを得ない。

「はあ!」

「やあ!」

カウスとカノンノが魔物に向かって走り出す。そしてそのまま魔物の足元に到達すると、思い思いの攻撃を放った。

魔物は腹部を切り裂かれ、痛みにもだえると共にすぐに真下のカウス達に注意を向ける。そして、素早い身のこなしでカウス達から距離をとると、今度はその鎌でカウス達を切り裂かんとした。

「カノンノ、来るよ！」

「うん、大丈夫！」

カウスとカノンノは、迫り来る左右の鎌をそれぞれの武器で受け止めた。ギリギリと剣と鎌がぶつかり合う。

「よし、お二人さん！そのまま止めていてくれ！」

スフィードが後方から矢を撃ちだす。魔物の眼の部分にそれらがあり、魔物は視界を奪われた。

目を潰された魔物はそのまま後方に飛びのく。

「シギヤアアア！」

次の瞬間、潰された目が再生した。

「うげ！？回復しやがった！？」

そして、怒りに身を任せたように魔物が突進してくる。カウスとカノンノを切り刻もうと迫る。

「カノンノ、避けて！」

「う、うん！」

横っ飛びでその突進をかわすカウスとカノンノ。それぞれ魔物を中心に反対方向に避けた形になる。魔物は轉身すると、カウスに狙いを定めた。

「シギヤア！」

鎌が振り下ろされる。カウスはそれをバック宙しながら交代するこ
とで回避する。

敵の鎌が連続で振り下ろされるが、それらを次々とかわしながらカウスは立ち振る舞った。

ふいに、スフィードが叫んだ。

「カノンノ！術を使ってみてくれ！」

「うん！ファイアボール、いくよ！」

カノンノは魔物から距離を取り、初級術『ファイアボール』の詠唱を開始する。即座に完成したその詠唱により、3つの火球が魔物に

向かって飛んでいった。

魔物の背中に3つの火球が激突し、魔物にやけどを負わせる。

しかし、魔物はその傷をカウスに向かって鎌を振り下ろしながら即座に回復させた。

「うそ！回復した！？」

「こいつは厄介だねえ……傷付けても即座に回復なんて、どんな自己再生能力だよ」

カノンノが驚きの声を上げる中、スフィードが誰に聞こえるでもない声で呟く。

「仕方ないか……いっちょ、本気を出しますかね」

スフィードはそう呟くと、右手に持った魔力の弓を構える。矢を番え、狙いを魔物の左眼に定める。

そして、なにやら呟くと、その番えた魔力の矢が突然赤く輝き始めた。

「……爆散しろ」

射出された矢はそのまま魔物の左眼に当たったかと思うと、着弾点が突然爆発し、魔物の頭ごと吹き飛ばした。

「！？」

思わず驚くカウスとカノンノ。しかし、頭を吹き飛ばされたというのに、魔物は倒れていない。

やがて、その吹き飛んだ頭そのものまで再生された。

「頭はダミーか……なら、体の中心だな」

スフィードはそう言う、今度は矢の狙いを魔物の腹部に定める。しかし、そこで舌打ちをした。

「あ、ダメだ。腹の強度に矢の威力が負けてるわ」

そう言うと、スフィードは魔力で攻勢された矢を霧散させた。そして、弓を出したときのように手をかざすと、今度は光り輝く槍を出現させた。弓と同じく魔力で編まれた槍のようであった。

「貫くぜー!!」

スフィードはそのまま走り出す。槍を構えたまま、カウスを襲い続ける魔物の横っ腹に接近する。

「!!」

急に魔物がその向きを変え、スフィードを攻撃目標と定めた。

そして、今度はスフィードに向かって襲い掛かる。スフィードはそれらの連続攻撃を、華麗な槍捌きと共にかわしていた。時には、槍を棒高跳びの要領で利用し、敵の鎌を回避する場面すらあった。

「何が器用貧乏なのさ……」

カウスは、そのスフィードの華麗な戦い方を見ながら呆然と呟いた。彼の戦いは、カウスのような魔法剣士それでもなければ、ディセンドー共通の職を変えることで戦闘スタイルを変えするという変幻自在とも違う。真に様々な武器に精通しており、それらを巧みに操ることで敵を倒す武芸者のそれであった。

「何でもこなせるの間違いなんじゃないか……!」

空中に飛び上がったスフィードは、そのまま魔物の腹部目掛けて槍を構えたまま高速で接近した。

そして、その長柄の槍を魔物の腹部に貫いた。

「シギヤアアア!!」

絶叫にのたうつ魔物。今度はその傷が再生しない。

「やっぱりな!カウス、カノン!この魔物の核は腹だ!!腹の内側まで貫く攻撃を仕掛ける!!」

スフィードがそう叫ぶと、カウスとカノンと同時に頷いた。

そして、スフィードは防御に転じ、魔物から距離をとると、今度はカウスが魔物に接近する。

「カノン!エンシエント・ノヴァを!!」

カウスは魔物に近付きながらそう叫んだ。その指示を受け止めたカノンノは、魔物目掛けて最大級の火力を誇る上級術の詠唱を開始する。

魔物はカウスの接近にばかり気を取られ、カノンノの詠唱は全く気にしていない様子であった。カウスはそれをチャンスとし、魔物の攻撃を一手に引き受ける。

「古より伝わりし浄化の炎……いつけえええ！！エンシェント・ノヴァー！！」

カノンノが術を発動させ、業火の炎は上空から魔物の体目掛けて飛来する。魔物は見事に焼き払われたが、その大部分を再生能力によって回復させ始めていた。

しかし、腹部へのダメージはそうもいかないらしい。焼け焦げた腹部目掛けてカウスが接近する。

「これで終わりだ！！」

思い切り接近し、カウスは剣を縦に構え、己の魔力を最大になるまで動員した。そして、カウスを中心として魔方阵が描かれる。

「シャイニング・バインド！！」

カウスが叫ぶのと同時に、魔方阵から光が溢れた。その光が弱っていた魔物を飲み込み、その腹部の中心の黒の石が露出するまで魔物にダメージを与え続けた。

魔物はそのままボロボロになった体を横向きに倒すと、動かなくなる。

そして、そのまましばらく待つと、黒い靄が再び発生し、魔物の体を包み込み始めた。やがてそれが収まると、後に残ったのは怪しい輝きを失った黒い石だけであった。

「ふう……勝ったの？」

カノンノが確認するようにカウスに近付く。カウスもそれに「たぶん」と答えると、今度はスフィードの方を見た。

スフィードはやれやれと首を回しながらカウスに近付く。

「これで、この森から脱出できるな」

「え？」

突然そんなことをスフィードから言われ、何が何だか分からないとカウスは首を傾げた。

次の瞬間。

カウス達の周囲に突然亀裂が走ったかと思うと、バリンと巨大なガラスがひび割れ砕けたような音共に周囲の景色が霧散した。

「な、なんだ!!」

「次元の拘れが終ったのさ」

「そ、そうなの？」

「そ。そうなの」

霧散した周囲の景色は完全な黒一色に染まっていたが、やがてその黒一色の世界にもひび割れが入ると、再び先ほどと同じように景色が割れた。そして、いきなり空中に投げ出された。

「え、キャア!!」

「カノンノ!!」

「おっと、こいつは」

地面から3メートル離れた地点から、カウス達は地面に向かって投げ出された。突然の事態に驚くカウス。

だが次の瞬間、カウスとカノンノは更に驚くことになる。

ぼてっと地面に転がるカウスとカノンノ。

「いてて……だいじょうぶ？カノンノ？」

「うん、私は……だいじょうぶ……！」

ゆっくりと体を起こしながらカウスがカノンノの方を見ると、カノンノは何かを釘付けになるように見つめていた。

それを不審に思い、カウスもカノンノの見ているほうを見る。するとそこには銀髪の剣士と、倒れ付した人々の姿があった。

「こ、これは……」

カウスは状況把握に時間がかかったが、すぐに倒れ付している人たちが命の危機に瀕していることだけはわかった。銀髪の剣士の持つ黄金の刀身をもつ剣が血に塗れていたのだ。

「ど、どうしようカウス」

「わけが分からないけど……」

カノンノとカウスは共にどうしたものかと慌てるが、銀髪の剣士は突然、天から降ってきたカウス達に一瞬だけ驚きの表情を見せたきりで、後は無表情のままカウス達を見ているのみであった。

「お前たち……そこをどけ。巻き添えを食うぞ」

静かに、そして冷徹に。銀髪の剣士はカウス達に告げる。

カウスは、突然の事態に混乱の極みに陥りかけたが、その時であった。

突如、周囲にガラスにひび割れが入る音が大きく聞こえ始めたのだ。それも何度も、連続に。

カウスが気になって見渡すと、そこかしこに空間の亀裂が入り始めていた。そして、それらの亀裂はまるで一つの巨大な亀裂となるよ

うに繋がりは始めている。

「な、何！？」

カノンノが叫ぶ。しかし、間に合わない。

「空間の亀裂が……」

カウスが呟く。

その時、遠くからスフィードの声が聞こえた。

「おい。お二人さん。そこから離れねーと、巻き込まれちゃうぞ」
何時の間にそんな遠くまで移動したのかとカウスは疑問に思ったが、
そうしている場合ではなかった。このままでは、倒れている人たち
と共に空間の移動に巻き込まれてしまう。

でも、この倒れている人たちを放って置く事も出来ない！！

その躊躇が明暗を分けた。カウスとカノンノは、倒れている仮面の
剣士達と共に、現れた巨大な亀裂に飲み込まれてしまった。

「うわあああ！！」

「きゃあああ！！」

カウスとカノンノの悲鳴があたりに響き渡り、やがてその悲鳴すら
収束すると、後に残ったのは銀髪の剣士と遠くに避難していたスフ
ィードだけであった。

「あーあ。巻き込まれちゃった。……あいつら、大丈夫かな」
スフィードが、別段本気で気にした風でもなく呟く。

激闘の跡地には勝者以外何も残らず、敗者は予期せぬ巨大な亀裂の
出現によって、グラニデという異世界のディセンダーもろとも、新

たな世界へと移動してしまった……。

二章四話 敵前逃亡（後書き）

三十六計逃げるに如かず。強敵に殺されちゃいそうなら、運を味方につけてその場から脱出するに限るよねという強引展開でした。さらに、マイソロ2の二人組みがジューダス達と共に空間転移に巻き込まれてしまいました。はてさて、どうなることやら。

スフィードとは別れ、銀髪の剣士との決着も後に持ち越します。今のジューダス達では、よほど運に恵まれた奇跡的な奇襲が成功しない限り銀髪の剣士は倒せない……それくらいのレベル差があるのだと思っていただけたら、銀髪の剣士の無茶な強さのイメージしやすいかと思います。じゃあレベルアップするのかというと、小説という概念世界において経験値とかレベルって無視されやすいじゃないですか？いつの間にか強くなっていたり……というわけで、先の事はわからないという……何、このテキスト加減は……自分で自分に呆れますね。これも眠い中テンションだけであとがきを書いているからでしょうか（汗）

次回からはまた新しい世界に行くことになり、新章となります。ジューダス達の戦いは、まだ始まったばかりだ！！なんていう打ち切りエンドがぴったりの展開がこれからもありそうですか、お付き合いいただけたらと思います。

感想や、小説のここがおかしい、読みにくいなどの指摘がありましたらお願いします！

それでは、失礼します〜！

三章一話 戦闘狂宴（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ

テルカ・リュミレースにて謎の銀髪の剣士に敗北したジューダス達は、気絶していた所をグラニデのディセンドー・カウスとカノンノの二人と共に新たに現れた空間の亀裂に飲み込まれ、予期しない次元移動を行ってしまった。

三章一話 戦闘狂宴

黒衣の守護者 三章一話 戦闘狂宴

よく似ていると、思った。
顔だけはよく似ている。だけど、それ以外のところはそんなでも無

い。銃器を扱う様や、よく食べるところなんて、彼女には全く無かった要素だ。

だから、それほど思い入れが強くなる相手では無いと思っていた。だが、いざ共に戦ってみると、やはり人一倍に彼女の安全が気になるのは、セルシアとマリアンを、知らずの内に重ねて見てしまっていたからなのだろうか。

僕には、分らない。ただ、セルシアを……守ることが出来なかった。その事実だけで、こんなにも腹立たしい気持ちになるのは、何故なのだろう。

考えるまでも無い。敗北したからだ。それだけに決まっている。

僕は、負けるのは嫌いだ。だから負けたら腹立たしい。それだけだ。決して、セルシアのことが心配だから、などでは無い。

そう……僕は、負けるのが嫌いだ。それだけだ……。

「う……あ……」

まとまらない思考が夢の中の己の思考であるということを、覚醒しつつある意識の中でうつすらと思いながら、ジューダスはゆっくりと目を覚ました。

最初に目に付いたのは、暗い洞窟の天井であった。

次に思い至ったのが、どうして自分はここにいいのかという疑問であった。

確か自分は、銀髪の剣士を相手に敗北したはずだ。だというのに、

こうして無事に目を覚ませるのだろうか。そう思った。

そして次に思ったのが、仲間たちの安否であった。

銀髪の剣士に重傷を負わされた仲間達は多い。比較的軽傷で済んだ

ものも含め、彼らが無事であるのか気になった。
急いで周囲を見渡す。するとそこには、倒れた自分の仲間たちと、
暗がりでは動き続ける二人の人影であった。

「……」

ジューダスは、その人影にゆっくりと近付いた。音を立てないように。

二人の人影は、男女のようであった。男の方は銀髪で、後ろ髪を結っている。女の方は桃色の髪をしていた。

よく見ると、女の方はユーリの体に治療術をかけているらしい。男の方は道具袋からなにやら薬品めいたものを取り出していた。

「何を……している？」

まだ本調子では無い体を押して、ジューダスはその二人に問いかけた。

二人はびくつと肩を震わせると、すぐさまジューダスの方を振り向いた。どちらも、澄んだ瞳をしている男女であった。

「目を……覚ましたんですね」

桃色の髪をした少女が、不安そうな表情をしたまま呟いた。

すると、銀髪の男のほうに、立ち上がってジューダスを見た。ジューダスよりやや身長が高い程度の男であった。

「僕はカウスって言います。彼女はカノン。僕達、偶然出会った貴方たちを治療していたんです」

「怪我のひどい人から優先的に、でしたけど……私の治療術と、グミやエリクサーを使って、何とか皆さんの傷を癒そうとしてたんです」

カノンと呼ばれた少女が、相変わらずの不安そうな表情をしたままジューダスを見た。ジューダスは、その不安そうな表情に、彼女

たちが素性の分からない相手をあえて治療しているのだという事実を察した。とりあえず、お礼を言っておくことにしようと考えた。

「……助かった」

その言葉を聞いて、カノンノの表情がぱつと明るくなった。

「あの……貴方に……皆さんに何があつたんですか？僕たちが貴方を見つけたとき、誰か金色の剣を持った人がいましたけど……」

カウスと呼ばれた少年がジューダスに問いかける。ジューダスは、目を瞑ってどこから説明したものかと考えた後。

「あいつは……僕たちの敵だ。異世界同士が繋がったという異変に関係している人間だ」

そう説明した。

Interlude 『追う闇』

逃げられた。最初に思ったのはその事実だけだ。より正確に言えば、追うのを諦めたという感じだが。

敵は、突然現れた来訪者と共に、新たな次元の亀裂に飲まれていなくなってしまった。

恐らく、この森を支配していた空間の擦れが、いきなり修正されたために、別時空との亀裂が連鎖反応的に巻き起こった結果だろう。

俺はその亀裂の出現から逃れ、倒れ気絶していた敵たちは新たな来

訪者と共に亀裂の先の新たな世界に飛ばされてしまった。

追いかけてようかとも思ったが、そのために今の役割を放棄するのはまずい。

そんなとき、黒い霧が二つ、俺の傍まで寄ってきた。

二つの黒い霧は密度を増すと、そのまま人の形になって俺の横に立った。

「奴らを追うのは、俺が引き受けさせてもらうぜ」

片側に立った男が言った言葉に、俺は答えを返す。

「だが、始末は難しいかもしれないぞ。奴らのうち何人かは気絶していただけだ。回復されれば、奴らの戦力は戻るかも知れん」

「それこそ望むところだ……俺は、もっといい戦いがしたい……ユ

ーリ・ローウェルなら、いい戦いができるからなあ……」

片側の人物はそういつて、二刀の武器を振り回した。

反対側に立った人物が、凶悪そうな笑みを見せながら呟く。

「異世界の英雄どもか……いいぞ。我が戦斧を塗らす血に、これほどふさわしい者達はいない……」

二人の人影は、そのまま亀裂に自らの体を投じた。

俺はそれを黙ったまま見つめる。

暴走している石の反応は、まだいくつか残っている。それを鎮めに行かなくてはならない。

「……ザギ、それにバルバトス……だったか。どちらも、戦闘狂という意味では、頼りになるが……果たして」

呟きは誰に聞かせるためのものでもない。
しかし、その呟きに反応するものがいた。

「俺も行かせて貰いますよ、レーヴァンさん……敵の数は多いんだ。こっちも数は多いほうがいいでしょ？」

新たに現れた人影は、そういうとすぐに亀裂に飛び込んだ。

ここに出現した空間の亀裂は、他のものと比べるとにかく不安定だ。奴らが飛び込んだ先ですぐに敵を捕捉できるとは限らない。だが、3体の刺客はどれも強者ばかりだ。弱っているやつらなら、十分かもしれない。

ふと、頭の中にテレパシーが届く。

『……レーヴァン。今から指示する場に向かって欲しい。石が役割を放棄した。そこに向かってくれ』

「ああ……わかった」

頭に響いたテレパシーにそう返事をし、俺は歩き出す。さっきの奴らとは、縁があればいずれ再戦するかもしれない。その時こそ、一切の容赦なく、奴らを倒す。それだけだ。

I n t e r l u d e o u t

ジューダス達がカウスとカノンノの治療を受けてから、皆が目覚

ましつつあった。

ジューダスの次に目を覚ましたのは、セルシアとロイドだった。

「ここは……！ジューダス！無事ですか！？」

「それはこちらの台詞だセルシア。お前こそ、その……大丈夫か？」

「……え、ええ。大丈夫です。よかった……本当に」

セルシアとジューダスがそんなやり取りをしているとき、ロイドは倒れたままのコレットを厳しい顔つきで見つめた。

カノンノがコレットに近寄り、その治療術をコレットにかける。

カウスがロイドに近寄ってきた。

「あの、大丈夫ですか？」

「……ああ」

「肩の傷が酷いですね……これ、レモングミです。これで少しは良くなると思いますよ」

「……ああ、ありがとう。えっと、カウスだっけ？そんな丁寧な言葉遣いじゃなくていいぜ」

「そ、そう？それじゃあ……ロイド……変なこと聞いて良いかな？」

「ん？何だ？」

「ロイドって……異世界の人なんだよね」

「ああ、そうだけど……」

「じゃあ、やっぱり僕の勘違いかな……」

カウスはそこで考え込むように首を傾げた。ロイドが質問を返す。

「どういう意味だ？」

「いや……何だか僕、ロイドや、ここにいる皆と、どこかであったことがあるような気がするんだけど……頭の中がもやもやしていてよく分からないんだ」

「？でも、俺はカウスと会うのは初めてだぞ？そもそも、俺たち違う世界の住人なんだから」

「そうだよねえ……何か変な感じ」

カウスはそう言うと、カノンノにオレンジグミを渡すために彼女の傍に近付く。カノンノがコレットに治療術をかければ、とりあえず

全員に応急処置程度の治療を施したことになる。
後は、残りのメンバーが目を覚ますのを待つのみとなるのだが。

「う、うう」

リッドが目を覚ました。ゆっくりと体を起こす。

「……こ、ここは……」

「あ、皆！目を覚ましたよ！」

カノンノがリッドに近付く。

「気分はどうですか？」

「あ……ああ、平気だけど……あんたは？」

「私はカノンノ。彼はカウス。私たち、森で倒れている貴方たちと一緒に、空間の亀裂に巻き込まれたの」

「そうなのか……って、ここは？」

リッドはガバツと起き上がると、周囲をきょろきょろと見渡した。
ジューダス達は特に気にしなかったが、この洞窟の隅には何らかの紋章が描かれた入り口のようなものに取り付けられていた。リッドはその門を見て、驚きの声をあげた。

「ここ……レグルスの丘の地下洞窟だ……俺とファラの世界だ」

呆然と呟かれたその言葉に、ジューダスは「そうか」と返した。

「つまり、リッドにはここがどこだか分かるんだな？」

「ああ……一応、一度来たことのある場所だから……」

「それは助かる。まともに休める場所まで、案内してもらうからな」

「ああ……わかった」

その時、もう一つの呻き声がリッドたちに聞こえた。

「ううーん……」

「ファラ！目が覚めたのか！」

リッドが倒れ付した幼馴染に近寄る。ファラがゆっくりと体を起こ

すと、幼馴染の無事を確認し、そして少しの涙を流した。

「良かった……リッド、無事で……」

「な、なんだよアラ！俺の方が先に目覚めてたんだぞ!？」

「でも、斬られたのはリッドじゃない！本当に、びっくりしたんだからぁ……!」

ジューダスから見ると、リッドの顔が少し赤くなっているようであった。

次に目が覚めたのは、エステルとコレットであった

「う、うう……ここは？」

エステルがうめき声を上げながら、周囲を見渡す。

「みなさん……？あつ！ユーリ！ユーリはどこです!？」

起き上がるなり周囲を見渡すエステル。その視線の先にまだ気絶したままのユーリの姿を捉えると、エステルはすぐにユーリの傍に駆け寄った。

「ユーリ！ユーリ!……よかったぁ……息はありますね」

安堵と共に漏れたため息に、エステルがユーリをどれだけ心配していたかが込められていた。

そんなとき突然、ロイドの声が当たりに響いた。

「コレット、なんで、何であんな無茶をしたんだ……」

ロイドが悲痛な顔をしながらコレットに対して怒っていたのだ。

「ロ、ロイド……ごめん」

「いや……俺こそ、ごめん。コレットのこと、傷付けちゃったな……」

「ち、違つよ！私、ロイドがやられちゃうつて思つて……それで咄嗟に飛び出しちゃつたの……ロイドは悪くないよ」

「……いや、俺が不甲斐無かつたから、コレットに怪我させちまつた……でも無事でよかったよ、コレット」

ロイドはそこでコレットを抱きしめた。

その場にいた誰もが思わず瞠目し、コレットも顔を赤らめながら慌てる。

「ロイド！！？恥ずかしいよ！」

「……え？」

そこでロイドは、周囲に仲間たちがいることを思い出したのか、コレットからぱつと手を離れた。

「あ、いや……これは……」

「青春、だな」

「青春、だね」

からかうようにリッドとファラが呟くと、ロイドとコレットはいよいよ顔を紅潮させ慌てふためいた。

そんな緊張感の欠片もない様子に、ジューダスは呆れたが、セルシアは微笑んでいた。

最後に目覚めたのは、ユーリだった。

「あ……ここは……」

「ユーリ！ユーリ！！」

起きあがろうとするユーリにエステルが勢いよく抱きついた。

「な、ばっ！？」

「無事でよかったです！ユーリ！！」

「わ、わかつ、わかつたから離れろってエステル！！」

慌てるユーリ。しかし、エステルはそれでも離れなかった。

「……ったく」

ユーリはそう呟くと、エステルに抱きつかれたままジューダス達を見渡した。

「俺たち、あの後どうなったんだ」

「新しく出現した空間の亀裂に飲まれたんだ。そして、そこにいる

二人に助けられた」

ジューダスはそういつて、カウスとカノンノを示した。

カウスとカノンノは最後に目覚めたユーリに頭を下げる。

「僕達、あの森で迷っていたんです……そこで黒い石を見つけて、それで」

「黒い石だつて!？」

ロイドが叫ぶ。

「……え、えつと」

「詳しく聞かせてもらえないか……カウスとカノンノ……二人が、あの森で何をしていたのかを」

ロイドの叫びに驚いていたカノンノに、ジューダスが落ち着きを払いながら質問した。カノンノとカウスは互いに見合うつと、こくりと頷いてジューダスの方を見た。

「僕達、もともとはグラニデという世界の住人なんです。グラニデでは、異世界同士が繋がった、今まで見たことの無い魔物が出現し始めたという異変が起っています。僕達はその異変についての調査をしようと、僕たちの世界に現れた空間の亀裂に飛び込んだんです」

「その出口が、あの迷いの森だったんです……私達はそこで、スフイーダっていう男の子と知り合っただんです」

「スフイーダも異変について調査しているらしかったんだけど……途中で黒い石を見つけて、それが魔物の姿をしたんです。その魔物をスフイーダがやっつけると、周囲の空間が急に壊れて、そしたら貴方たちを見つけたんです」

「そうしたら今度は、皆さんを飲み込むように大きな空間の亀裂が発生して……私たちもそれに巻き込まれてしまったんです」

カウスとカノンノが語り終えると、ジューダスは考え込むように黙った。

リッドが口を開く。

「じゃあ、二人も異変の解決を目的に動いているんだ……俺たちと同じだな」

「皆も、なの？」

「ああ」

そこでカウスとカノンはお互いを見合うつと、意を決したように一つの提案をした。

「あの……もし迷惑じゃなかったら、なんですけど……僕とカノンも、皆さんの旅に同行させてもらえませんか？」

その提案に、ジューダスは鋭い目つきで返した。

「お前たちが居なければ、確かに僕達はあのまま死んでいたかもしれないが……一つ確認するぞ。僕達全員が、あの場で倒れていたという事情を、お前達はわかっているのか？」

それは、銀髪の剣士という強敵と相対したという事実を、カウス達が理解しているのかという確認であった。

カウスは頷く。

「推測に過ぎないけれど、あそこにいた、金色の剣を持っている人と、皆さんは戦ったんですね？そして……あれだけの傷を負った」

「……僕達は、それだけの実力者と敵対しているんだ。その旅に、お前達は同行を願い出るといふのか？」

一瞬の沈黙。

やがてカノンが口を開いた。

「それでも……異変によって失われた命があることは、私たちも聞いてます。このままこの異変をほうっておく事は、できません！」
それに同意するように、カウスも頷いて答えた。

「僕たちの世界では、例の黒い魔物の出現で失われた命が多数報告されてます。このままそれを放置する事は、世界の危機に繋がるって考えてます。だから、それを解決する手段があるなら……僕達はその協力したいんです！」

カウスがそう言い終えると、ジューダス達は互いに見合った。

「いいんじゃないかな。二人とも、強そうだし」

最初にそういったのは、ファラだった。

次いでリッドが口を開く。

「まあなあ……戦力が増える事は歓迎すべきことだろ」

ロイドも頷きながら口を開いた。

「そうだな。俺も仲間が増えるのはいいことだと思っぜ」

「そうだね！私もそう思うよ」

コレットもほんわかとした雰囲気撒き散らしながら、答えた。

「ユーリ、ユーリは二人の参戦をどう思います？」

「……俺も構わねえと思っぜ。俺たちだって、まだ完全に同行した
いって言った訳じゃねえけど、こうして異世界にまで渡っちまっ
てるんだし。巻き込まれたのは二人も同じだろ？」

ユーリとエステルが口々にそう答えた。

「ジューダス。貴方が判断してください」

セルシアがジューダスに語りかける。

ジューダスは目を閉じ、しばらく考えた後、口を開いた。

「敵は強いぞ。それでもいいんだな？」

「！はい！！」

「頑張ります！！」

こうして、カウスとカノンノが新たな仲間として加わった。

まずはこの暗い洞窟から抜けることを最優先に考え、リッドとファ

ラの案内の元、ジューダス達はこのレグルスの丘の地下洞窟を歩いた。

途中で何度か魔物と出くわしたが、ジューダス達の敵ではなかった。あっさりと魔物達を倒して行きながら、ジューダス達は出口を目指して歩き続ける。

「もう少しで、出口だ」

リッドがそう言う。

すると、最後尾を歩いていたユーリが足を止めた。ユーリは、後方に広がる闇を見つめたまま動かない。

「どうかしたのか、ユーリ？」

隣を歩いていたロイドが呼びかける。

「いや……何かいたような気がしたんだけどよ……気のせいかな」

ユーリにそう言われ、ロイドも確認のためにエクスファイア強化による聴力の増幅を行った。

すると。

「いや……気のせいじゃない。足音が二つ。こっちに向かってきている」

「……！」

全員が後方を振り返り、戦闘態勢をとる。

彼らが歩いてきた道、洞窟の奥から、ゆっくりとその足音は大きくなっていく。やがて、二人の凶戦士が洞窟の奥から姿を現した。

「はっははは！見つけたぜ、ユーリ・ローウェルウウ！」

「てめえは……ザギ……！」

「生きていたんです!？」

現れた二刀の男に、ユーリとエステルが驚きの声を上げる。どうやら、知り合いであるらしい。両腕は健在だ。魔導器を腕に移植していたころの姿ではなかった。

そしてもう一人、こちらはジューダスにとってよく知った存在であった。

「追いついたぞ……」

「貴様は……バルバトス!!」

ジューダスが叫ぶと、バルバトスはにやりと笑ってジューダスを見た。

「ほう、貴様はカイル・デユナミスと行動を共にしていた男だな……確か名は、ジューダスだったか……くくく、いいぞ!我が斧を、まずは貴様の血で塗らすことから始めよう!!」

「……ジューダス。貴方の知り合いですか?」

セルシアがジューダスに語りかける。

ジューダスは、心底嫌そうな顔をしながら頷いた。

「ああ……奴はバルバトス。僕がお前と会う前にしていた旅で何度も戦った……強敵だ」

「……貴方が認めるという事は、かなりの実力者ですね」

「ああ。十分に距離をとれ。前衛が何とか奴を食い止める」

「……お願いします」

セルシアがジューダスから距離をとるように後退する。

ジューダス達全員が武器をとると、現れたザギとバルバトスという二人の男にその武器を向けた。

「くく、いいぞ!滾ってきたぞ!!……さあ、戦いを始めるとしよう!!」

バルバトスがそう叫ぶと、それだけで洞窟が地響きを起こしているかのような迫力が伝わってきた。

「ははは!ユーリ!もう一度だ!もう一度、俺と戦ええええあああ!!!!」

ザギも狂ったように叫ぶと、ユーリ目掛けて突進してきた。

開幕は突然に。狂える二人の狂戦士との戦いが、ここに幕を切って落とした。

「ザギ、正直、てめえはもう死んだと思ってたぜ!!」

ユーリがザギの剣を受ける。ザギは、体を捻るとユーリの後方にジャンプして回り込み、こんどはユーリを背後から襲う。

「遅え!!」

ユーリはそれを見切っており、そのままガードする。ザギは左右の剣をがむしゃらに振るい、ユーリに襲い掛かる。

「こいつ!!」

「それ以上やらせねえ!!」

ロイドがザギに向かって切りかかる。するとザギは、襲い掛かってきたロイドをやり過ぎように横っ飛びで距離をとった。そのまま洞窟の壁面に足をつけると、今度はロイド目掛けて壁面を蹴った勢いをつけて突進する。

「死になあ!!」

「うわ!!」

ロイドはその勢いに負け、ガードごと後方に弾かれる。

ザギはしかしロイドを追う事はせず、再びユーリに向き直る。

「あくまで狙いは俺だってか……?」

「はは、まさか! てめえ含め、てめえの仲間たち全員、皆殺しだあ!!」

ザギはユーリからバックステップで距離をとると、素早くトリッキ―な動きで周囲に向かって切り込んだ。その最初の標的にされたのは、ファラであった。

「くっ! 早い!!」

ファラはそれをガードするが、ガードを解いた時には既にザギの姿は無い。一撃離脱を心得た素早い動きに、ファラはついていけずに愕然とする。

「くらあええい!!」

バルバトスは突進しながら斧を振りかぶると、ジューダス目掛けてその斧を振り下ろした。

それを難なく避けるジューダス。ジューダスのいた地点にバルバトスの斧が激突すると、そのままその地面が陥没し、周囲に土塊を撒き散らした。

撒き散らされた土塊がカノンノの頭に直撃しそうになったとき、カウスがそれを剣で防いだ。

「カノンノ！大丈夫!?」

「う、うん！平気だよ!」

「あのバルバトスとかいう奴、すごいパワーだ……気をつけて!!」
「うん!!」

カウスはバルバトスの背中から接近する。するとバルバトスはカウスの接近などお見通しだといわんばかりに後ろを振り返り、その斧を下から振り上げた。

「俺の背後に立つんじゃねえ!!」

カウスは攻撃の勢いを殺し、その振り上げを剣でガードする。

「うわ!!」

しかし、想像以上に力のこもった一撃に、カウスの体はガードごと浮かされる。そしてその一撃が振り切られると、カウスの体はそのまま宙を飛翔し、洞窟の天井に背中から叩きつけられた。

「がつ!!」

「カウス!!」

カノンノが叫ぶ。バルバトスは今度は、カノンノに向かって突進していた。

「くらえい!!」

その斧にありつただけの力を込めて、横に薙ぐ。カノンノはそれをバックステップでかわすが、風圧も凄まじく、体が流されそうになる。

「くっ、すごい……!!」

「ぶるあああああ!!」

バルバトスはそのままカノンノ目掛けてまわし蹴りを叩き込もうとする。それを後ろに倒れることでカノンノはかわした。しかし、倒された姿勢では次の攻撃が避けられない。

「させんっ!!」

ジューダスがバルバトスに向かって切り込む。バルバトスはカノンノへの追撃を諦めると、轉身し、ジューダスに向かって突撃した。

「せいっ!!」

「ふんっ!!」

ジューダスの剣とバルバトスの斧が激突する。

「はあ!!」

今度はリッドがバルバトス目掛けて切り込んだ。が、バルバトスはすかさずリッドの方を睨むと、気合の叫びと共に斧を振り回す。

「くらああええい!!」

ブオンと空気を裂く音と共に、バルバトスの斧が旋回する。その勢いに、リッドがガードした剣ごと弾き飛ばされ、ジューダスも後方に回避せざるを得なかった。

「ひゃっははは!! あははははは!!」

狂気に満ちた笑いを迸らせながら、ザギは素早い動きでユーリ、ロイド、ファラの体力を確実に削っていく。

「この野郎、いい加減に止まりやがれ!」

ユーリが剣を振りかぶる。しかし、ザギはそれを難なくかわすと、ユーリに向かって剣を突き出した。

「がつ!」

間一髪のところではそれを回避するユーリであったが、右腕を切られた。厄介な相手に舌打ちをする。

今度はロイド目掛けてザギが突進した。そのスピードは段々上がってきている。

「終りだあ!!」

ザギがそう叫んで、ロイドに切りかかろうとした、その刹那。

「あ?」

ザギの動きがふいに止まった。ロイドも不思議に思い、ザギの足元を見る。そこには、光り輝く魔方陣が現れていた。

「グランドクロス!!」

コレットの天使術、グランドクロスがザギを捕らえていたのだ。ザギは聖なる光の十字による光属性の攻撃を受けると、体に刻まれたやけどの跡に苦しむ様子を見せた。

「がっ……詠唱してる奴を、見逃すなんて……」

ザギが悔しさのあまり声を漏らす。

「ちょーつと楽しみすぎたんじゃねーのか、ザギ?」

ユーリはにやにや笑いながら、倒れ付いたザギに近付く。

「く……そが……」

「終わりだ」

ユーリがそう呟いて、ザギに剣を振り下ろす。

「は……なんてなあ……!!!!」

「な……がっ!!!?」

その瞬間、ザギは振り下ろされたユーリの剣を受け止めると、奥義・空破特攻弾でユーリを吹き飛ばしたのだ。

「うそっ!効いてなかったの!?!」

コレットが驚きの声を上げる。無理も無い。彼女の中では、グランドクロスの手ごたえは確実にあったのだから。

「ユーリ……!!」

エステルが悲鳴に近い叫び声を上げる。ユーリは、鮮血を胸から噴

出しながら後方に吹き飛ばされていた。

「てめえ、よくも！」

ロイドがザギ目掛けて迫る。

だが、ザギは迫り来るロイドを高速移動ですり抜けた。

「な……！？」

ザギはロイドを無視し、そのまま後方で新たな天使術の詠唱を開始していたコレット目掛けて突進していた。

「コレット！！」

「え……きゃあ！」

コレットが慌ててガードする。

「さつきはよくもやってくれたなあ！！」

ザギはコレットを連続で攻撃した。繰り返される連撃は嵐のようで、コレットの両手のチャクラムにガンガンと激突する。

コレットは、腕の痺れと戦いながら、ロイドの救助を待つ。

「てめえ、それ以上、コレットに手を出すなーーー！！」

ロイドはそう叫ぶと、二刀の魔剣『ガグンラーズ』を重ねて、ザギのはるか上空に飛んだ。

膨大な闘気が集まるのを、ザギは察知する。

「な、何い！？」

「翔破……蒼天斬……！」

ロイドはそのまま落下すると、ザギごと地面を吹き飛ばしかねない勢いで秘奥義・翔破蒼天斬を放った。

ありったけの闘気が、魔力が、ザギを押しつぶさんと襲い掛かる。やがてその闘気が鎮まった頃、倒れていたのはザギのみであった。

「ぐっ……はあ……」

「はあ……はあ……」

ありったけの闘気の開放によって、ロイドの疲労の色が増している。立ち上がられたらピンチだと思いながら、ロイドがザギの様子を見ている。

すると、ザギの周囲に黒い靄が集まり始めた。ミトスやヴァンのと
きと同じだ。

「くそが……覚えて置けよ……また、戦ってもらうからなあー！」
断末魔の叫びの代わりに、怨嗟をこめた叫びを残し、ザギと呼ばれ
た男はその場から消滅した。逃げたのだ。

「せえい！！ふうん！！はああ！！」

バルバトスが斧を振るうたび、暴風がバルバトスの周囲を包み込む。
台風のような攻撃を前に、リッド達は機会をうかがうほか出来るこ
とが無かった。
なぜならば。

「カウス！だめ！」

カノンノが叫ぶ。カウスは、術の詠唱を開始しようとしていた。そ
の瞬間。

「術に頼るか雑魚共が！！」

バルバトスは即座に高速詠唱を開始し、とてつもない速度で初級術・
シャドウエッジを放ってきた。

「うわ！」

たまらず詠唱を破棄し、その場を飛びのくカウス。

バルバトスは、先ほどから自分をターゲットにした術の詠唱を感じ
取ると、尋常ではない速度で詠唱を放ってきていた。その高速詠唱
があまりにも厄介すぎるので、ジューダス達は術を使うことが出来
ないでいた。

バルバトスは、その高速詠唱を自分から使ったつもりは無いらしい。
あくまで術の詠唱に対するカウンターとしてのみ使用してくる。

「くく……どうした。せめて来い！さあ！！」

バルバトスが挑発する。その挑発に、誰も乗らない。いや、乗れない。力のあるバルバトスと、真っ向から打ち合うことが誰にも出来ないためだ。

しかし、そんな中。

「ジューダス！こっちは片付いた！加勢するぜ！！」

ロイドがコレット、エステル、ユーリ、ファラを引き連れてやってきたのだ。

その様子に、バルバトスが舌打ちする。

「ちい！！ザギめ……やられたのか。まあいい、貴様ら程度、俺一人で十分だ」

バルバトスはそう言うと、より一層にその闘気を高めて、周囲にぶちまける。そのあまりの闘気にロイド達も怯むが、負けじと立ち塞がる。

「さあ、俺の渴きをいやせええい！！」

バルバトスはそう叫ぶと、一気にジューダス目掛けて飛びかかった。ジューダスはその攻撃をサイドステップで回避すると、そのままバルバトスの懷に飛び込む。

「なにい！！？」

「お前のスピードについていけないわけじゃない！！」

ジューダスはそこで初めて、バルバトス目掛けて連続攻撃を浴びせる。しかし、その連撃はバルバトスの斧でガードされる。

「はっはあ！！その程度か！！？」

「ああ、僕はこれでいい……」

「……！！？」

ジューダスがそう呟くと、突然バルバトスの後方から乾いた銃声が聞こえ、洞窟内に反響した。

「一瞬でも貴様の動きを止められたなら、な」

バルバトスの背中から、血が噴出す。そしてその直線状に、セルシアがいた。セルシアは、妙に銃身の太い銃を構えていた。

「あなたの闘気は凄まじかった。普通の銃弾では届かなかったですが、これだけ近付いて、この銃弾ならば、問題なく貫ける」

「ぬう……おのれ……そのような武器を持つ奴がいたか……」

バルバトスの周囲に黒い靄が現れる。

どうやら、ヴァンと同じように逃げ出すらしい。

「逃げるのか？」

「……ふん。いずれ相対するまで、この勝負、預けておくぞ」

バルバトスはそう呟くと、そのまま黒い靄ごと消えてなくなった。

ロイドが秘奥義後の疲労で座り込みながら呟いた。

「勝った……」

その呟きが周囲に響くと同時に、その場にいたものたち全員が安堵する。

二人の襲撃者を何とか退け、ジューダス達は洞窟の出口を目指して再び歩き始めた。

三章一話 戦闘狂宴（後書き）

vs ザギ&バルバトス。いかがだったでしょうか。二人の戦闘狂を相手にジューダス達は大立回りをやってのけましたが、まだインタリユード内で確認が取れた第3の追撃者は姿を現していません。その追撃者のことも含めて、今後に期待していただけだと思います。

ザギは両腕が健在モードでの登場ですが、今後の展開では今のところ決めていません。場合によってはターミネータモードなんてのもアリかなあ〜と……全身機械って、ちょっと……ロマンですよー！！？

すいません、暴走しました。このあとがき書いてるのが深夜の2時ごろだったりするので、軽く暴走気味です。

それでは、今回はこの辺で。

これからはあらすじを付けた方が読みやすくっていいのかなと思い、今回は実験的に付けてみました。これから修正して行きたいと思えます。

小説の感想、読みづらいや、おかしいなどの意見も待っております！それでは、失礼します。

三章二話 ネレイドの魔剣（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：

エターニア世界に来たジューダス達。リッドの案内の元、休める場所を求めてレグルスの丘地下洞窟から出ようとしますが、出口の直前でザギとバルバトスの二人の襲撃にあう。二人の襲撃者を何とか退けたジューダス達は、そのまま出口を目指すのであった。

三章二話　ネレイドの魔剣

Interlude 『精神への回帰』

ミツケダセ、セイシンヘノカイキヲコバムモノ。

サガシダセ、アカゲノキヨツコウジュツノツカイテヲ。

ソシテコンドコソホロボスノダ。

ブツシツニシバラレタオロカナセカイヲ、セイシンセカイヘトカイ
ホウスルノダ。

頭に響く。奴の声が。俺の才能が。

俺はごく平凡な奴だった。だというのに、ある日俺はいきなり一人にされた。それ以来理解したんだ。物質に頼ったままでは人間はいざという時に立ち直れなくなる。真に強い人間とは、その精神がびくともしない頑丈な精神力を有するものの事だろう。だから俺は手始めに、自分のやりたいことを定めた。次にやりたい事をやり通せるだけの力を欲した。

そのためにあいつ等と組んだんだ。何もかもをなくした俺にとっては、あいつ等は居心地の良い存在であった。何せ、俺のこの屈折した思考回路でさえまともと思えるくらい、連中の方がどうかしているのだから。俺は、俺がまともでいられる場所を求めている。

後は力だ。ちょうど良い力が異世界に渡ること非得られた。黒の石を設置しに行った場所で、この俺の持つ大剣に、まさか神が宿るな

んてな。その神様は、俺の理想を理解してくれた。
なら恐れる必要は無い。神様がどれだけ強いのかは知らないが、神様なんだから飛びつきりだろう。

精神世界の神『ネレイド』。

ネレイドは俺に力を貸してくれている。俺はそれに答えようと思う。
俺たちの計画を邪魔するあいつらを、俺ひとりの力で倒すんだ。

さあ、ネレイド……俺にもっともっと力をくれ。

この人間の魂が宿る魔剣に、人間とは別の形で宿ったネレイドの力を活かせば、例え相手が異世界の英雄であろうとも負ける気はまったくしない。

「ち、バルバトスとザギがやられちゃった」

頭の中にそういった情報が流れ込んできた。あの二人は退けるなんて、大した連中だ。

……少しぶるってきた。大丈夫、コレは武者震いだ。決してびびってるわけじゃない。

レーヴァンさんのように、自分ひとりの力で強ければ、あんなに自然体でいられるんだろうか。俺にとって力の象徴とも言えるレーヴァンさんは、何を目的に戦っているのかいまいちわからないが、そのためにあれだけの力を鍛えて得るなんて、筋金入りだと思う。

ただ、俺にはそこまでの努力は出来なかったけど、力は手に入れた。この力があれば、俺も戦える。

さあ、行くぜネレイド。奴らを倒して、精神の世界を作り出すんだ。

Interlude out

ジューダス達はバルバトスとザギを退け、ようやく洞窟の外に出られると思った、まさにその瞬間であった。

「ん？気をつける！新しい追っ手が来たみたいだ！」

天使化による聴力増幅をしている状態のロイドが、新たな来訪者を皆に報せた。

ジューダス達は振り向き、新たな追っ手の到来を待った。

やがて洞窟の暗闇から、一人の痩せた青年が現れた。赤黒いボサボサの髪はどこも長く、前髪で鼻より上が隠れてしまっている。

細身の体躯には不釣り合いな、紫の巨大な剣を背中に背負っていた。簡素な鎧を着込んでいる。

「は、ははは。見つけたぞ」

乾いた笑いをしながら、新しい追っ手がその武器を取り出す。遠くから見ても迫力のある大きな剣であった。

「異変の調査なんてくだらない事してるなよ。大人しくしてれば、危害は加えないぜ」

現れた男性はそう言うと、大剣をジューダス達に向ける。

ジューダスは、やれやれと言った具合に首を振った。

「しつこい連中だ」

「ああ。本格的に俺たちの邪魔をしようとしている奴がいるって、仲間と亡霊どもから聞いたからな」

「……亡霊？」

「一度死んだ連中と殺しあっただろ。そいつらの事だよ」

「……………」

「亡霊にまで攻撃されるなんて、あんたも不運だな。こんな事やめて、大人しく自分たちの世界に引っ込んでりゃいいのによ！」

「ふん。それはこちらの台詞だな。こんなくだらない事をやめて、故郷の世界で暮らしていればいいものを……貴様もさっきの銀髪の仲間か？」

「銀髪？……レーヴァンさんの事か？」

「レーヴァン？」

ジューダスが確認するように呟いた。どうやら、この世界に来る前に戦った銀髪の剣士の名前は『レーヴァン』というらしい。

「レーヴァンさんと戦って生き延びることが出来たからって、自分たちが運に守られてるなんて思うなよ？今の俺の実力なら、お前たちに勝つことが出来るんだからなあ」

大剣士は凶暴な目をする、その大剣を上に向かって掲げた。すると、大剣から何か巨大なモンスターが半透明な姿で現れた。リッドはそれを見て驚愕する。

「それは……ネレイド！？」

「知っているのか？」

ジューダスがリッドに問いかける。

「ああ。この世界の……神様みたいなもんだ」

「……神、だと？」

「勘違いしてもらっちゃ困る。ネレイドは精神世界を構築する神だ。お前たち物質に縛られた連中に、真に人としての正しいあり方を示してくださる存在だ。この腐った物理世界の神なんて、ネレイドにはふさわしくない！」

敵はそう言つて、再び大剣を構えなおす。

そして、その切っ先をジューダス達に向けた。

「全てが滅んで、新しい世の中が出来上がる！なんて素晴らしいこ

となんだ！人々は物質という低次元の存在から精神という高次元の存在になれるんだ！素晴らしい、ネレイドの思想は素晴らしい！」
高らかに語り続ける敵に対し、リッドは厳しい顔つきで睨んだ。

「……他人との関わりを失ってまで、精神世界に逃避したいのか？」
リッドは厳しい口調で現れた敵に向かって言葉を投げる。

敵は、伸びた前髪を左手で上げて、その暗く淀んだ目でリッドを睨みつける。

「逃避の何がいけない？物質に苦しみを見出して何が悪い？俺は、精神世界こそこの世の楽園。ユートピアだって信じてる」

「お前！」

「俺は人間が嫌いだ。そんな自分も人間だから、たまらなく嫌なんだよ。だから精神世界という存在を始めて知ったとき、俺は確信した。その世界こそ、俺が求めていた理想郷なんだと！！」

ジューダスが口を開いた。

「話にならんな」

「結構だ。話し合いをするために俺はお前たちを追ったわけじゃない……ここで殺すためだ」

大剣をぐるぐると振り回す。そして、ネレイドも彼の背中に映りこんでいる。彼の精神がネレイドと同調している証なのだろうか。

「俺の名はデルネイド！精神世界への回帰を望む、忠実なるネレイドの下僕だ！」

名乗り上げると同時に、その剣を上に向かって掲げる。すると、周囲から黒い狼達が現れた。その数は5体。

「なるほど……魔物をつれてきたのか」

「相手の戦力を考慮したうえで連れて来た猟犬たちだ。そう簡単に撃破出来ると思うな？」

デルネイドは得意げな表情をしている。

「さあ、狩りの時間だ！奴らを食いちぎれ！！そして俺を守護しろ！神の力を、見せてやる！！」

デルネイドの号令と共に、黒の狼達が一斉に襲い掛かってきた。

そして、デルネイドが詠唱に入った。その詠唱によって集まる魔力が、リッドの体を刺激する。

（闇の極光術！？）

そう気付くと同時に、リッドは走り出した。

「皆、俺の後ろに下がれ！！」

突然のリッドの号令に驚くが、皆は言われたとおりリッドの背後に回る。

「闇の洗礼を受ける！！エターナル・ファイナリティ！！」

デルネイドがそう叫ぶと、デルネイドの頭の上から巨大な禍々しいオーラを纏った剣が現れた。そして、それがリッド目掛けて飛んでいく。

「させるかよ！エターナル・インフィニティ！！」

リッドがそう叫び、両の手を敵にむかってかざすと、そこから巨大な光のオーラが現れ、ジューダス達を守護した。そして、闇の極光の力を消し去った。

その光景に、ジューダス達は息を飲んだ。

「あれだけの力で放たれた魔術を、防いだ、だと？」

ジューダスも予想だになかったリッドの術行使に啞然としていたが、すぐに状況判断に頭を切り替えた。この場では、リッドをデルネイドにぶつけ、残りのメンバーは黒い狼達を相手にしたほうがいいと判断する。

「リッド、お前がそいつを倒せ！僕達は周りの雑魚を片付ける！」

「ああ、任せたぜ」

リッドはジューダスの方を見ると軽く頷いた。

改めてデルネイドの方に意識を向けると、デルネイドは心底驚いたといった表情をしていた。

「……何だそれ？極光……！？」

「お前が闇の極光術の使い手なら、俺の真の極光で防いでやるよ」

リッドは真剣な目でデルネイドを睨んだ。デルネイドは予期しない反撃に思わず瞠目したが、すぐに頭を振る。

「はは……なら極光に頼らないまでだ！貴様からしとめてやる！！
真の極光使い！！」

デルネイドは大剣を振りかぶると、リッド目掛けて飛び込んだ。振り下ろされる大剣を横っ飛びでかわすと、今度はリッドが敵目掛けて攻撃をしかける。

デルネイドは大剣を全力で振り下ろした直後だ。防御の体勢をとるのに時間がかかるだろう。その隙を狙ったの行動であった。

しかし、リッド目掛けて攻撃するものがいた。デルネイドの背後にいる、ネレイドだ。

「くそっ」

リッドは近づけないと飛びのく。すると今度はデルネイドの方から接近してきた。

「おうりゃあ！！」

下から思い切りよく大剣が振られる。リッドはそれを横っ飛びでかわすと、着地と同時にデルネイドに向かって斬りかかった。

「はああ……くそ！！」

しかし、その接近は叶わなかった。デルネイドの背後にいるネレイドが、魔術弾を放つことで何度もリッドを攻撃してくるのだ。

「はっ！ははは！」

デルネイドは笑いながらリッドに斬りかかる。それを横っ飛びでかわす。また攻めてくる。今度はジャンプでやり過ぐす。

（くそ……こいつの動き自体は遅いのに、ネレイドの加護が邪魔すぎる――！）

「ちょこまかと逃げ回りやがって！」

デルネイドが叫び、リッド目掛けて突進する。しかし、大剣の重量に負けているのか、リッドの素早い動きについてこれないでいた。リッドも、攻撃の機会をうかがっているが、近付こうとするとネレイドの魔術弾がリッドに襲い掛かるため、上手く攻められないでいた。

「これは、他の奴らが雑魚を片付けるまで逃げに徹したほうがいいのか？」

リッドは、より素早い動きでデルネイドをかく乱する。

デルネイドは、リッド目掛けて剣を振るうが、当たらない。

「あー、くそ！うつとおしい野郎だ――！これでもくらえ――！」

デルネイドが詠唱を開始したかと思うと、即座にアイスニードルを発動させた高速詠唱だ。ネレイドの加護を受けているから出来る特殊攻撃であった。アイスニードルの突然の襲来だったが、それすらもリッドは避けきった。

「へへ！当たらねーよ――！」

「お前、俺をなめるなよ――！」

デルネイドはリッドを追うのを止め、大剣に闘気を纏わせ始めた。大技が来ると感じたリッドは、一度動きを止め、敵の様子を観察する。

「はあああああ！地龍撃――！」

デルネイドが大剣を地面に叩きつけると、洞窟の地面が隆起を起した。リッド目掛けてその隆起は連鎖的に起こる。

「おっと――！」

リッドがそれを横っ飛びで避けた。

「まだまだあー！」

デルネイドは何度も地面を大剣で叩き、地面の隆起を起こしていた。ただでさえ狭い洞窟の中での戦闘だというのに、地面がでこぼこに破壊され、動きにくくなっていく。

「こいつ……俺の逃げ道を塞ぐつもりか？」

「そうだ、極光術士！貴様の動きを止めて、俺の大剣から逃げられないようにするためだ！」

デルネイドは笑いながら、リッド目掛けて地龍撃を放ち続ける。地面の隆起がその度に起きる。

リッドは足場が不安定になっていく状況に舌打ちをした。直接デルネイドと戦ってもいいが、ネレイドが控えているため不用意に近づけない。かといってこのまま戦っていてはいずれギリ貧になって負ける。

悩みぬいた末、リッドはある賭けに出ることにした。

「仕方ねー！いつちやるか！」

リッドが突然サイドステップをやめ、デルネイド目掛けて突進した。デルネイドはようやくリッドが痺れを切らしたものと思い、リッド目掛けて大剣を構える。

「死ねえー！」

近付いてきたリッドを頭から真つ二つにせんと、大剣が振り下ろされる。それをリッドは体を捻ってすれすれでかわした。そして同時にありつたけの闘気を開放する。

「うおおお！！極光壁！！」

そして、デルネイドの傍まで近付いたリッドは、そのまま極光術の一つ、極光壁を発動させた。極光壁はネレイドの攻撃も防ぎ、デル

ネイドとネレイドを宿した魔剣を吹き飛ばした。

「まだまだあー！」

リッドはそこから更に、右手に極光の光を集め、剣の形を作る。極光剣だ。

「くうえっ！！極光剣！！」

極光剣がデルネイドに向かって振り下ろされる。しかし、デルネイドは素早く起き上がると、大剣を真っ向からリッドの極光剣にぶつけた。

「くっ！？」

「はーはっはっは！俺にも出せるんだよ、極光剣はなあー！」

見れば、デルネイドの持つ魔剣が紫色の禍々しいオーラを放っている。どうやらこれが、デルネイドとネレイドにとっての闇の極光剣らしい。

二つの極光剣は激突すると、周囲に暴風とも言える圧倒的な圧力を生み出した。技を出しているリッドは、何とか踏ん張ろうと歯を食いしばり、極光剣をデルネイド目掛けて力を入れる。

対するデルネイドも、歯を食いしばっている。
やがて、極光の光が収まると、リッドとデルネイドは無傷のままだった。

「極光壁を受けたときはまずいと思ったが……さすがはネレイド。
真の極光にもある程度の耐性があるらしい」

デルネイドはにたりとした笑みを見せながら、じりじりとリッドに近づく。一方のリッドは、極光壁から極光剣という連続に大技を使用したことにより、疲労の色がありありと浮かがえた。

「燃費の悪いやつだな。もうバテたのか？」

「うるせーよ。……こっからに決まってるだろ！」

先に動いたのはリッドだった。剣を構え、デルネイドに向かって斬りかかる。対するデルネイドも、大剣を構えてリッドを迎え撃つ姿勢をとる。

リッドが高く飛んだ。

「鳳凰天駆！！」

そのまま火炎を纏って敵に向かって斬りかかる。リッドの闘気がまだまだ健在である証だ。

対するデルネイドも上から降りてくるリッド目掛けて大剣を振るう。

「絶翔斬！！」

デルネイドの攻撃がリッドを捉えた。リッドは鳳凰天駆を身にまとったまま、デルネイドに飛び込む。

しかし、その時デルネイドの背後にいるネレイドがリッド目掛けて魔術弾を打ち込んだ。

「やべ……！！」

空中にいるところを狙われた。回避できない。

そう思った矢先、飛んでくるはずの魔術弾が消えていくのが見えた。

「！！」

チャンスと見たリッドは、そのまま鳳凰天駆でデルネイドの絶翔斬を迎え撃った。

そして、リッドは肩を傷付けられたが、リッド自身の攻撃にも手ごたえがあったのを感じた。

リッドが地面に着地する。間を置いてデルネイドも着地する。
リッドは切られた右肩を押さえた。そして、デルネイドは……。

「うぐ……この、野郎……」

デルネイドは胸を切り裂かれていた。浅かったせいで致命傷には至っていないが。

「リッドー!!」

突然、ファラの呼ぶ声が聞こえた。その方向を見ると、5体いた黒い魔物のうち残り2体と交戦しているパーティーがあるだけだ。残りのメンバーがリッドの援護にやってきたのだ。

「……あー、くそ！むかつく！ここまでかよ!!」

デルネイドがそう叫ぶと、黒い靄がデルネイドを包み込み始めた。

「覚えて置け極光術士！俺は諦めない！お前の極光を潰して、俺は俺の理想郷を作り出す!!」

「やれるもんならやってみろ。俺はお前みたいな極光術士には負けねーよ」

黒い靄が霧散する。デルネイドはどうやら逃げ切ったらしかった。残りの黒い魔物達を退け、ジューダス達がリッドの元に集まる。

「倒したのか!？」

「いや……逃げられた」

リッドは首を振りながら答えた。

フアラが口を開く。

「でもすごいよリッド！ネレイドの極光にまた勝ったね！！」

「あ、ああ……でも、あのデルネイドって奴の極光が甘かったのもあったかも……」

「極光が、甘かった？」

「ああ……シゼルと戦ったときと比べて、極光の質が低いみたいだった」

リッドはそう呟くと、デルネイドが消えた空間を睨んだ。その目には、極光術を使うもの同士に対する、明確な敵意が込められていた。そういえばとリッドは呟いた。

「ネレイドの魔術弾が一回消えたんだけどよ、あれ、誰のおかげなんだ？」

リッドは先ほどの戦闘の中で疑問に思った点を上げた。鳳凰天駆でデルネイドに近付いたとき、ネレイドの援護攻撃が一瞬途絶えたのだ。それのおかげリッドはデルネイドの胸を切りつけることが出来た。

「それは私の援護射撃です」
セルシアが名乗り出た。

「リッドが苦戦しているようでしたので、手の空いた私がリッドの援護をしたんです」

「そっか、ありがとうな」

「いえ、お礼はジューダスに言ってください。ジューダスが黒の狼をいち早く倒してくれたからこそ、私はリッドの援護に徹することが出来たんですから」

そう言われて、リッドはジューダスの方に向き直った。

「ありがとう、ジューダス」

「……礼はセルシアに言え。彼女の援護射撃の技術があればこそなんだからな」

どこことなく不機嫌そうに、ジューダスはそう言った。

リッドたちには分からなかったが、それはジューダスなりの照れ隠

しであつた。

全員が無事に集まつたあと、コレットが言った。

「それで、これからどうするの？」

その言葉にジューダスは答える。

「休息を取るべきだろう。今後の方針も定めなくてはいけないしな。リッド、ファラ、案内を頼めるか？」

ジューダスの意見に、リッドは頷きながら答えた。

「ああ、いいぜ……けど、ラシユアンの村にこれだけの人数泊まれるか？」

「村じゃなくて、私が普通つてた道場を目指さない？事情を話せば、師範代も許可してくれると思うし」

「道場つて、レグルス道場のことか？……あそこの師範、俺苦手なんだよ……いつも俺に入門をすすめてくるしよ」

「わがまま言わないの！みんな、行こう！」

ファラが先頭を歩き出す。洞窟の出口に向かって。

ジューダス達は、連戦で疲れきつた体を引きずりながら、ファラの案内の元、レグルス道場を目指した。

三章二話 ネレイドの魔剣（後書き）

オリキャラ再び登場、な回でした。正直、前回の話と今回の話を区切る意味があんまりなかったかもしれないなど、書いてる途中で思ってしまった。何せ、話的にはほとんど進んでいないのですから……ですが、区切りを入れて書いてしまった手前、いまさら修正するのも難しそうだと考え、このように投稿しました。

デルネイドという今回の登場人物は、まさかの自分からネレイドの力を使う事を望んでいる半狂人です。ですが、彼自身の放つ極光はリッドに言わせれば『弱い』ということです。この辺については、後々に解説したいと思います。

それでは、今回はこの辺で失礼します。
感想や意見、待っています！失礼します。

三章三話 英雄遊戯（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：

デルネイドと名乗る、ネレイドの力を利用する青年が襲撃してきた。リッドの極光の力によって何とか退けるが、デルネイドには逃げられてしまう。その後、ジューダス達はようやく休息が取れると、歩を進めるのであった。

三章三話 英雄遊戯

黒衣の守護者 三章三話 へ英雄遊戯へ

疲れきった体を癒すため、そして今後の方針を定めるためにジューダス達はファラの案内の元、レグルス道場を目指して歩いていった。道中に出くわす魔物は、もはやジューダス達の敵ではなく、特にこれといった弊害も無く旅は続いている。

「きゃっ！」

突然、誰かが悲鳴を上げた。ジューダスが振り返ると、そこにはうつ伏せに倒れいてるコレットの姿があった。

「……何故、こんな何も無いところで転んだ……」

「しかもそんな盛大に……」

ジューダスとリッドが呆れる。コレットは「えへへ、転んじやった……」と舌を出しながら笑っていた。

「おいおい……大丈夫かコレット」

ロイドがそう言ってコレットに手を差し出す。コレットはその手を掴み立ち上がった。

「えへへ、ありがと！ロイド」

「みんなは知らないかもしれないけど、コレットってよく転ぶんだよ。注意してくれ」

「注意？何に対してだ？」

ローリがロイドの後ろから疑問を投げた。

「コレットのドジに巻き込まれないように、だよ」

ロイドが苦笑しながら答えた。コレットの頬が少し赤くなっている。

「よく転ぶのは、病気の可能性があります。大丈夫ですかコレット？」

セルシアの問いに、コレットは驚き混じりに返した。

「え……私、病気なのかな？」

セルシアは、あつとした顔をしながら気まずそうに返した。

「その可能性があると言っただけです」

「な、なんだか心配になつてきちゃった……」

ロイドが口を挟んだ。

「大丈夫だつて。コレットのドジは神様の祝福なんだろう？」

「????なんだそりゃ？」

ユーリが改めてロイドに聞いた。

「コレットが転ぶといい事が起きるんだよ」

「じゃあ、今この瞬間にもいい事が起こっているかもしれないんだね！」

「いや、ファラ……特に何も起こつてねーぞ」

「あ、四葉のクローバー」

セルシアが自分の足元を見つめながら呟いた。

「いいことつて、これ？」

カウスが些細な疑問を口にする。

「四葉のクローバーを見つけると、幸せが訪れると聞いたことがあります」

セルシアの言葉にエステルが首を傾げながら聞いた。

「えっと。じゃあコレットが転んだことで、四葉のクローバーが見つかったことで、別の良いことが訪れるんです？」

「永遠にいい事に巡り会え無さそうな展開だな、それ……」

ユーリが苦笑交じりにエステル疑問に答えた。

「ふっ……騒がしくなってきたな」

ジューダスが小さく笑いながら呟いた。その呟きは小さかったが、すぐ傍にいたセルシアには聞こえていた。

「そうですね。緊張感が無くて不安ですか？ジューダス」

「まさか。こいつらの戦闘能力は買っているんだ。いざという時にちゃんと戦ってくればそれでいい」

「そうですね。こういう事は、きっと大切なことなんでしょう」

「……そうだな。こういう事は、な」

「……」

ジューダスは、セルシアが驚きの表情を浮かべていることに気がついていた。

「どうした？」

「いえ、少し意外でした、ジューダスはもっと厳しい方かと思っていました」

「……もちろん、緊張感が無いのは僕としては大目に見てやってるだけだ。役に立つ連中だからな」

「……ええ、そうですね」

セルシアがどことなく嬉しそうな表情を浮かべた。その表情に、ジューダスはかつての思い人の笑顔をフラッシュバックさせる。

彼女は、18年後の未来でも会わなかった。そして、今回の旅で自分が故郷に戻ることになったとしても、会う事は無いだろう。会う事は許されないだろう。

そんなことを思っているうちに、表情に出てしまっていたらしい。

セルシアが「ジューダス、大丈夫ですか」と聞いてきた。

「ああ……少し、昔を思い出していた」

「そういえば、初めて貴方と会ったとき、言っていましたね。昔の知り合いに私が似ていると。そんなに似ているんですか？」

「……ああ、まあな」

瓜二つであると、ジューダスは思っていた。ところどころ違うが、笑っているときの顔が特に、セルシアとマリアンは似ていた。その表情を見るたびに、ジューダスの中には暗い影がさすと同時に救われる気持ちにもなった。

「お会いしてみたいですね、いずれ。そこまで似ているという、ジューダスの知り合いの方に」

「そうか？……僕はあまり気が乗らないな」

「何故です？」

「……色々と、込み入っていてな。簡単には説明できん」

「……そうですか」

「……ああ」

そこで会話が途絶えた。ジューダスは過去を思い返す。その過去を。その罪を。

セルシアは、ジューダスの思い悩む姿を見て、黙っていた。

ぐうう。

唐突に、誰かの腹の虫が鳴いた。

ジューダスは突然のその音に呆れつつ、苦笑した。

「なんだ、道場まで我慢できないのか、セルシア」

「……はつきりとバラしましたね、ジューダス」

「どの道全員に聞こえていただろう」

「……貴方が黙っていれば、多少はごまかせた筈です」

セルシアが珍しく不機嫌という感情を表情に出している。ジューダスは、マリアンのそんな表情を見たこと無いなと思いながら、小さく笑い続けた。

「みんな、見えたよ！あそこがレグルス道場！」

ファラが指差す方向に、巨大な建物が見えた。今晚、ジューダス達が休息する場だ。

「うわあ、大きいー！！」

カノンノが驚きの声を上げる。それに皆も同意するように頷く。そして、全員で歩き出した。

Interlude 『彼の過去』

ねえ、あの伝説は信じる？

私は信じてるな、ディセNDER伝説。

きっと、私たちの世界にもいるよ、ディセNDER。

私はそれまで、諦めないよ。絶対に、諦めない。

信じていない。

俺はそんなご都合主義の詰め合わせみたいな伝説、信じない。
いるならとくにこんな世界じゃなくなってるって。

諦めないのは同意だけど。もっと自分たちがしっかりしないと。

悪いのは、誰だ。

求めていたのは、どっちだ。

俺は……俺は何なんだ。

Interlude out

道場までの石段を上がり終え、ジューダス達は入り口の前に立つ。
ファラは道場の主から休息の場の提供を願うために、先に道場の中
に入っていた。
そして待つこと数分。

「師範が、大部屋を使って良いって！」

戻ってきたファラがそう言っていると、皆やっとうっくり休めると安堵し、
そのまま中に入っていく。

案内された部屋はとても大きく、10人でも十分広さがあまる程あ
った。

今日は全員、ここで眠るのだ。

「師範がご飯を用意してくれるってさ！私、手伝ってくるね！」

ファラはそう言っていると、ささっと道場の調理場に向かってしまった。

「元気だな」ファラの奴……俺、もうくたくた」

リッドはそう呟くと、用意されていたベッドに倒れこんだ。

皆、割り当てられたベッドの上に思い思いの姿勢で乗っかる。

「いつの間にか、また新しい世界に来ていたんだな。僕達は」

最初に呟いたのはジューダスだった。皆が小さく頷く。

「そうですね……ユーリたちの世界では森の中をさ迷い歩くことし
かしませんでしたから、イマイチ世界を渡ったという実感がありませんが……」

セルシアが言った。

ユーリが口を開く。

「俺たちなんて全くの予定外だったからな……やべーぞエステル。今頃、フレンの奴大慌てでお前のことを探しているかもしれない」

「！！そうですね……心配させてしまいますね」

「今ごろ思い出したのかよ……」

ユーリが呆れたように首を振る。

「でも、それは僕達も同じかな……僕たちなんて、依頼の遂行中にいなくなっちゃったんだからね……」

カウスがカノンノの方を見ながら話す。カノンノも心配を表情に浮かべる。

「そうだね、パニール、心配してるかなあ」

「きつとね……」

そこでカウスは急に何かを思い出したように膝を叩いた。

「そうだ！皆に聞きたいことがあったんだ！」

「お、おう。なんだ？」

「皆は、異世界に渡ったときに、何かを忘れちゃったりしなかった？」

カウスのこの疑問に、一同は首を傾げるばかりだった。

「忘れるって……具体的には、何を？」

「ええっと、その……仲間の顔とか、名前とか……」

そこでユーリが考え込む。

「いや、俺は特には。一緒に旅した仲間のことなら、全員覚えてるぜ」

「私もユーリと同じです」

エステルも同意する。他のメンバーも皆一様に頷いた。

「そっか……この出来事は僕とカノンノだけなのか……」

「何でなんだろうね……」

カウスとカノンノは、同じようにうな垂れた。

「いえ、案外わかりませんよ」

そこでセルシアが口を挟んだ。

「わからないって、何が？」

「忘れていたという事実を忘れている可能性があります。そういった場合、何か忘れていないかと問われても、忘れていた事そのものを忘れてしまっているもので、聞かれた人は何も忘れていないと答えてしまうかもしれません」

一瞬の沈黙。

ユーリが口を開く。

「ややこしいけど……要はボケてる可能性があるって事か？」

「……少々表現がきつすぎる気もしますが、概ねそういった意味で合ってます」

「あ、合ってるんだ」

カウスが苦笑いをしながら答えた。

結局、カウスとカノンノが遭遇した仲間の顔や名前を思い出せないという現象は、原因も解決策も見つからないままとなってしまうた。しかし、今は仕方が無いと考え、カウス達も当面はジューダス達に付き合う形で行動することに決めた。

「今後の方針をアルテに示してもらうためにも、現状をアルテに報告します」

セルシアが懷から円盤型の機械を取り出す。

「ああ、頼む」

ジューダスはそう呟くと、ベッドの上に寝転がった。

「あれ、もう寝るのか？ジューダス」

リッドが尋ねる。

ジューダスは仲間達に背を向けたまま「夕飯時になったら起きる。それまで少し眠っておく」とだけ言った。

……。
……。
……。

夢を、見た。

小高い丘を歩く夢だった。

丘の頂上には、女性が一人。日傘を差してたたずんでいる。

僕は、その人の素顔を確認するために、その丘を登る。

やっと上りきった頃、夕陽が傾き、女性の顔は逆光でよく見えなくなっていた。

「エミリオ」

だが、ああ。その声は覚えている。忘れるはずも無い。

愛しい人。生涯で唯一、その人のためなら何もかも、自分さえも捨て去って構わないと思えた人。

その人を守るためなら、僕は、僕は　　。

「おかえりなさい　　エミリオ」

僕は……きっと、世界さえも……。

……。
……。
……。

「起きてください、ジューダス」

そう言われ、ジューダスは目蓋を上げた。
目の前には、夢の中であった女性がいた。

「マ……リアン……」

そう呟くと、女性は不思議そうな表情を見せた。そこでようやくジューダスの意識がはつきりと覚醒した。

「……ああ……すまんセルシア。起こしてくれたのか」

「ええ。夕飯の用意が出来たようでしたから」

「ああ。わかった。行こう」

驚きを悟られないように、ジューダスは努めて冷静に振舞った。
先ほどもマリアンに似ていると思った。セルシアをやはりマリアンと重ねて見てしまう自分が居る事に驚いたのだ。

「似ていますか？そんなに……」

さつさと歩いていくジューダスの背中を眺めながら、セルシアは少しだけ首を傾げた。

夕飯を食べ終わり、風呂にも入ったメンバーたち。

彼らは用意してもらった大部屋に集まると、そのままアルテからの連絡を待つ状態になった。

「なあ、ジューダス達はどこの世界からやってきたんだ？何かいろいろすげえもの持っているみたいけど」

ロイドが単純な好奇心で尋ねた。

するとジューダスは、「どう説明したものか」と呟いたきり、黙り込んでしまった。

「私とジューダスは、皆さんのように世界の住人として暮らしていたわけではありません」

「へ？」

セルシアの言葉に一同が頭に疑問符を浮かべる。

セルシアは続けた。

「私もジューダスも、次元の狭間……のようなところから、今回の異変について調査と解決を依頼されたんです。なので、皆さんの知らないテクノロジーを用いた道具を持っていますが、これが正確にどこの世界で作られたものなのかは、使っている私たちにもわからないんです」

「次元の狭間、ねえ」

ユーリが呟いた。

カノンノが興味深そうにしている。

「すごい！違う次元から世界を救うために現れるなんて、ディセンドーみたい！」

「ん？ディセンドー？」

ジューダス達が聞きなれない単語に首を傾げる。

するとカノンノは、カウスの方を見て「話していい？」と聞いてきた。

「僕は構わないよ……本当、そんな大した存在だとは僕自身、思えないんだけどね……」

「それじゃ説明するね。えっと、ディセンドーって言うのは、世界樹が生み出す世界の救世主のことなの」

それからカノンノは話す。ディセンドー・カウスと巡り会ったこと。そして、その出会いが世界をやがて負から救い出すという、カウスとカノンノが辿ってきた戦いの遍歴を。

「こうしてグラニデは、カウスと、ギルド・アドリビトムの活躍によつて救われたんだよ」

カノンノが話し終わると、リッドが感心したように呟く。

「へえ……実力者だとは思っていたけど、世界を救った英雄か……」
「世間には大々的に発表してはいないんだけどね」

「そりゃなんで？」

リッドの疑問に、カウスが答える。

「世界を救つたつて宣伝しちゃうと、うちのギルドの扱いが今までとは変わっちゃうかもしれないって思つてね。今までどおりやっていきたかつたんだ」

カウスはしみじみと頷く。

「カウスはその……ディセクターっていう存在なのに、ギルドのことを大切に思つてるんだな」

ロイドが笑顔で言う。

カウスもそれに照れ笑いを見せながら答えた。

「世界を救つたつていつでも、仲間と一緒にだからね。大切な仲間達がいるあのギルドが、僕にとって世界と同じくらい大切なものなんだよ」

（世界と同じくらい……か）
ジューダスは考えた。

（マリアン……僕にとつての、世界と同じか、それ以上に大切な人）

会話が途切れ、皆が静まり返る。

「はいはい！私から提案があるんだけど！」

そんな中で突然、ファラが勢いよく喋りだした。

「ここに集まった皆がこれからもつと協力して戦えるように、親睦会を開かない？」

「……親睦会？」

リッドが驚きと呆れを半々に混ぜた口調で言葉を返した。

「そ！色んなゲームとかして、みんなの団結力を高めるの！」

「……随分と気楽な考えだな」

ジューダスが皮肉をたっぷりと込めて呟いた。

「なによー！私なりにみんなのこと考えてるんだから！」

「そうだね！私も皆ともつと仲良くなりたい！」

カノンノが元気いっぱいに頷く。その様子を見ていたカウスは、ジューダスに向かって「いいんじゃない、こういうのも？」と言った。
「……ふん。遊びたい連中が遊べばいい。僕は見ているだけで十分だ」

「おいおいジューダス……」

ユーリが呆れながらジューダスを見る。しかしジューダスは頑なにその場から動こうとしなかった。

「ダメだよ。どうせやるなら皆で楽しまないと！」

ファラはそういつて、予め用意していたのであろうくじを懷から取り出した。

「ふっふーん！それじゃ、第一回、異世界交流会！王様ゲームを始めたと思いますーすー！」

ジャジャンという擬音が聞こえてきそうなくらいにわざとらしく、ファラは大仰に言った。

「王様ゲーム……マジかよ」

リッドが口をあんぐりと開けながら呟く。

「ファラ……お前……またあの悪夢を蘇らせる気かあああ……」

「あらリッド？何のことかな」

「……忘れたとはいわせねーぞ。お前の命令で、俺とキールが一つ

のグラスから飲み物を同時に飲まされたことを……！」

リッドがわなわなと震えている。よほど思い出したくない過去だったのだろうか。

「ふふ！リッド、嫌なら頑張って自分が王様になるんだね」

「……そのくじ運がねーから嫌なんじゃねーか……」

「王様ゲームのルールがわからない人、いる？」

ファラが皆に尋ねると、皆は一度見合った。どうやら、この世界にも共通の遊びの一つとして親しまれているらしい。

「すごい！皆知ってるんだ！」

「細かいルールの違いはあるかもしれないけどな」

ユーリが呟いた。ロイドも頷きながら返す。

「どこの世界でも、考える事は一緒ってことなのか？」

「かもしれないね」

コレットがロイドの言葉に、にこやかに笑いながら返した。

「全員くじは引いた？それじゃ、いつくよ……王様、だ〜れだ！」
ファラが元気よく言う。すると、部屋の隅にいた仮面の少年の手が拳がった。

「……ジューダス。お前参加してたのか」

ユーリが素直な気持ちで呟いた。

「う、うるさい！ファラにどうしてもせがまれて、断りきれなくてだな……少しくらい付き合ってやろうと思ったただけだ」

ジューダスはどことなく慌てた風に弁明している。その様子を見た残りのメンバーは苦笑いを浮かべた。

「ふ、ふん。ではいくぞ……3番は……そうだな。喉が渴いた。水を僕に持って来い」

瞬間、静まり返る部屋。ジューダスは、不満げな顔をしながらメンバーの顔を見た。

「何だ。王様ゲームというのは、こういうゲームじゃないのか」

「いや、まあ、間違っではないんだけど……何か命令がマジだったもんで……」

リッドが頭をかきながらジューダスに部屋が静まり返った原因を伝える。納得し切れていないジューダスは、「と、とにかく。水を貰ってきてくれないか、3番」とだけ言った。

「3番、あ、あたしだ」

コレットが立ち上がる。

「じゃあ、水を貰ってくるから。皆は先に進めてていいよ」

コレットがトテトテと道場の台所を目指して歩き始めた。転ぶなよーというロイドの言葉に頷きで返ししながら。

「じゃあ、次ね。コレットはいないから、このくじを外して……それじゃ、どうぞ！」

皆が一斉にくじを引く。そして、自分が選び取ったくじの文字をじっと眺める。

「王様だ〜れだ！」

その掛け声に手を上げたのは、他ならぬファラ自身であった。

「実は私でした〜！さ〜て、どうしよっかな〜！」

底抜けに楽しそうに笑うファラであったが、隣にいたリッドはそのファラの笑みが底抜けに邪悪なものにしか感じられなかった。それほどまでにファラの命令の遂行難度は高いという事を、リッドは知っていたからだ。

「よーし、決めた！」

リッドの肩がびくりと震えた。

「6番の人が、9番の人のほっぺにキスをする……！」

「ええっ……！」「なあっ……！」

ほとんど同時に、ロイドとカノンノが叫んだ。それが、この命令を遂行しなくてはならない人物が誰なのかを明確に伝えていた。

「え、まさかカノンノ……」

カウスが心配そうにしながら、カノンノのくじを横から盗み見た。

そこには『6』の文字がしっかりと書き込まれていた。

「わ、私が6」

そして今度はロイドが手を上げる。

「俺が9だ」

「あはは！それじゃ、カノンノがロイドのほっぺにキスだね！」
あくまでも楽しそうに、ファラは笑いながら命令を告げた。

「え、ええええ……」

カノンノは顔を赤らめながら、ロイドの方を見た。ロイドもドギマギしながら、カノンノの方を見る。

「あゝ、いや。ほら、カノンノ、ゲームだからさ、振りだけでいいって」

「そ、そうだよね！」

「ダメだよ！ちゃんと命令には従うこと！」

ファラの正義感がなにやら間違った方向で発揮されていると、リッドは思った。

「なあ、ファラ……いいのか？」

「うゝん……リッドは面白くないの？」

「……いや、他人事だと面白い」

ありのままの本音をファラに伝えると、ファラはニコツと笑った。
ロイドが「リッドの裏切り者！」と言っていたのが聞こえたが、あえてそれは無視するリッドであった。

「そ、それじゃ、ロイド……」

カノンノが顔を赤らめながらロイドの頬に唇を近づける。ロイドも顔を真っ赤にしながら、極力カノンノの方は見ないようにしようと努めた。

カノンノの右隣に座っていたカウスも、最初こそゲームだからと思っていたが、いざ実行が近付くとそわそわし始め、カノンノのことを見ていられなくなった。

「んっ！」

「うわ……」

軽く触れた程度であつたが、ロイドは確かな唇の感触を右の頬に感じ、更に顔を赤くした。カノンノはというと両手で顔を隠している。カウスは妙な気持ちが高潮になり、ああ、これが嫉妬つてやつかと今更ながらに確認していた。

そんなときだった。マグカップが床に落ちる音が聞こえたのは。

「あ……」

全員が音のした方を振り返る。そこには、台所で水を汲んで戻ってきたコレットがいた。彼女の足元にはマグカップが転がっており、床がぬれていた。

「あ、ああ……ごめんね！コップを落としちゃった！」

幸いコップに破損は無いようだったが、コレットが件のキスシーンを目撃したために冷静さを失ってマグカップを落としたのは誰の目にも明らかであつた。

「あは、あはは！す、すごいねカノンノ！こっちがときどきしちゃつたよー！」

精一杯に笑っているが、笑顔がこの上なくぎこちない。声もうつわづつていた。

どうやら、ロイドの女性事情にはコレットもいつものほんわかな雰囲気を持ち込めない様子であつた。

カノンノは更に顔を赤らめてパニックになっていた。

「僕の水が……」

「ジューダス……自分で汲みにいったらどうですか？」

「……そうする」

ジューダスはひっそりと立ち上がると、ファラに「水を汲んでくると伝え、そのまま部屋から出て行った。

「じゃあ、次の回、行ってみよー！！」

先ほどの一騒動も何のそのといった具合で、ファラは次のくじを皆にひかせた。ジューダスはいないのでその分を抜いたくじ引きだ。

「あ、今度は俺が王様か」

ユーリが手を挙げる。

「お手柔らかに頼むぜ、ユーリ」

リッドがどきどきしながら、ユーリが何を命令するのかを待った。

やがてユーリは思いついた顔を見ると「それじゃあ、2番は俺の肩を揉め!」といった。

「あ、2番! 私です!」

エステルが手を挙げる。

「よっし、エステル。頼むわ」

「はい。それでは……」

エステルがいそいそとユーリの後ろに座る。そして彼の方に両の手を当て、適度な力で肩揉みを始めた。

「ふいふ。極楽極楽……」

「ユーリ、おじさんみたいです……」

その光景を見ていたリッドが「夫婦だな」と呟いた。

「夫婦だねえ」

ファラも同意した。

ジューダスも戻ってきたところで、次のくじが回った。

「それじゃ、次行こう! 王様だ! れだ!」

そこで、再びファラの手が拳がった。

「じゃーん! またまた私でした!」

「マジかあ……!」

リッドが啞然としながら、ファラのくじ運の強さ、あるいは己のくじ運の弱さを恨んだ。

ファラは獲物を狩る狩人の目をしている。

「うつふっふ、どうしようかな」

ファラは周囲にいるメンバーを見て回る。まるで透視でもしているかのように。

「それじゃあ、3番と、7番の人！次の王様の命令が終わるまで、ずっと手を繋いでいること！」

またその手合いの命令かと、周囲のメンバー達は呆れた。そんな中で。

「……僕が7番だ」

「……私が3番です」

ジューダスとセルシアが、互いに名乗り出た。

「手を繋ぐ……だと？」

「……仕方ありませんね」

セルシアはあくまで無表情のまま「ゲームですから」とだけ呟いて、ジューダスに手を差し伸べた。

差し伸べられた手に、ジューダスは戸惑いながら手を出す。そして握ると、思いつき呆れの意志を込めたため息をついた。

そんな様子に、周囲にいる者達はからかいながら笑った。皆、楽しそうに笑っていた。

ジューダスは、握ったセルシアの手のぬくもりを感じていた。どことなく懐かしい気持ちにさせてくれる温もりだった。

そして、宴は続く。英雄達の遊戯はその後もしばらく続けられた。

誰かが始めにもう眠くなってきたといった頃、皆が明日に備えて眠ることに決めた。

夜。皆が寝静まった頃、ジューダスはひとり起き上がった。そして、誰に告げるでもなく、道場の外を目指して歩いた。

（確かこつちだったな）

そうして道場の入り口すぐの外に出る。夜風が心地よく吹いている。空を見上げれば、満天の星空が広がっていた。ジューダスはその夜空を見上げ、悲しげに微笑んだ。

自分の置かれた現状を顧みる。カイルと共に戦い、世界を神の作り出した歴史から取り戻したこと。そして、スタンを裏切り、世界の敵として立ち塞がったこと。それから、消えるのだと思っていたこの命は何か繋ぎとめられ、何の因果か思い人と同じ顔をした女性と共に、今度は複数の世界をまたにかけて異変を解決するという奇妙な仕事を引き受けている。

（随分と……奇妙奇天烈な人生だな）

自分自身の遍歴に苦笑する。ここまで戦いに縁があり、かつ世界を救う滅ぼすというレベルで動いているのは、自分くらいのもものでは無いか。そう思った。

「ジューダス……」

ふと後ろから声をかけられ、ジューダスは振り向いた。そこには、
つい先ほどまで頭の中で想像していた女性が セルシアがいた。

「起きていたのか」

「それはこちらの台詞です。ジューダス、突然起き上がったかと思
うと、そそくさと出て行くものですから、驚きました」

「……寝つけなくなてな。少し一人で時間を潰したくなっただけだ」

「そうですか。では、私は戻りましょうか？」

「……いや。好きにするといい」

「……では、好きにします」

セルシアがジューダスの横に並んだ。

二人は互いの顔を見ることなく、満天の星空を見上げている。

「ジューダスは、彼らのこと、どう思っていますか？」

「彼ら……ロイドやリッドたちの事か？」

「はい」

「……別に、どうとも思っていないが」

「そうですか」

「お前はどう思っているんだ」

「……そうですね。愉快な方々だと、そう思います」

「そうだな。騒がしい連中だ」

「そうじゃないです……」

ジューダスがセルシアを盗み見た。セルシアは、微笑みながら夜空
を見上げている。

月明かりが降り注ぎ、セルシアの顔が美しく照らされる。ジューダ
スはそれを綺麗だと思った。

「彼らと一緒に行動していて、私はもしかしたら、久しぶりに楽しいと感じることが出来たかもしれません」

「……そうか」

「私は過去、そういった当たり前の幸せとは無縁でしたから……」

そこでセルシアは目をつむった。過ぎ去ってしまった、もう戻ることの出来ない過去に思いを馳せるように。

「私は自分自身を、ひとつの兵器だと考えて生きてきました……そういう環境であつたことも関係ありますし、そう考えることで色々なことが楽に思えました」

「……」

「でも、結局は違つたんですね。私は人の心を捨てる事はできませんでした。当時の仲間たちがどうなったのか今でも気になる事がありますし、私の元々住んでいた世界は今どうなっているのか、心配でもあります」

「……」

「そういう感情が、誰かが誰かを心配したり、一緒に喜んだりする感情を、当たり前のように披露してくれる彼らは、やはり一緒にいて楽しいです」

「……そうか、良かったな」

「ジューダスはそうは思いませんか」

そこでセルシアは天を見上げるのを止め、微笑んだままジューダスの方を見た。ジューダスはその視線を真っ直ぐに見つめ返す。

「ああ……うつとおしいと思うこともあるが……そういう連中は嫌いじゃない」

「素直じゃないですね、ジューダス」

「……僕は別に、騒がしいのは好きじゃないぞ」

「……それは私も同意です。ですが、たまには、こついつのもいいなあと、今日は思えました」

「……ああ、そうだな」

二人はそこで会話を切り、しばしの間見つめあった。やがてジューダスが先に視線を外すと、再び夜空を見上げ始めた。セルシアはジューダスが空を見上げるのと同時に、道場の方を向いて歩き出す。

「今日はもう寝ますね。ジューダスも、疲れを残さないようにしてください」

「ああ。わかってる」

「それでは、お休みなさい……ジューダス」
「セルシア」

ジューダスがセルシアを呼び止めた。セルシアは振り返るが、相変わらずジューダスは夜空を見上げたままだった。

「自分が兵器だと思っていた、と言っていたな。……僕も同じだ。僕も、自分がある人物の駒だと思って生きてきたことがある」

「……」

「だからこそ、言える。セルシアが今日感じたモノは、たぶん……大切なものなんだと」

「……らしくないですよ、ジューダス」

「……そうだな」

セルシアは最後に「ありがとう。おやすみなさい」と言って、ジューダスより先に道場の中へ戻っていった。

ジューダスは夜空を見上げ続ける。その満天の星空が、まるで世界に溢れる命の輝きであるかのように思えたからだ。その中で特に光

り輝く星がある。

あの星こそ、ジューダスにとって誰よりも守りたい存在だとしたら……自分に、その人を守る資格はあるのだろうか。

関係ない。自分自身が守りたいと願ったのだ。だからそう行動するまでだ。

改めて異変を解決する覚悟を決めて、ジューダスは道場の中へと戻っていった。セルシアが戻ってから、半時後のことであった。

三章三話 英雄遊戲（後書き）

ふと気がつけば11月。寒かったり温かったり、ご飯もおいしい季節になっていましたね。

出来れば一週間のうちに一話投稿できるようになりたいと思っていましたが、ポケモンで忙しくなってきたため難しいかもしれません……忙しい？

違いますね。私の書き手の責任放棄です。すいません。年齢をいくつ重ねても、ポケモンが楽しいと思ってしまう私の童心が爆発してしまいました……カイリユー可愛いよカイリユー……

話の書き溜めも在庫切れが近くなり、いよいよ私の更新頻度は落ちるかもしれませんが、それでも読んでくださる方、どうかご容赦願います。

さて、今回の話は、個人的には無駄な回にしようと思っていましたが、無駄な回なんて勿体無い。彼らの安息が後の展開に繋がっていけば良いと思っています。

いや、王様ゲームのくだりは若干無駄がありました……ファラに頑張ってもらいました。あとコレットとカノンノごめん。カウス？うちのデイセnderは打たれ弱いので、私は存分に打ちます。攻略王ロイドは異世界のヒロインのキスさえ奪う男だろうと思いい、このような展開にしました。

趣味を爆発させたところで、お開きにします。

それでは、感想や指摘など、お待ちしております。
ここまで読んでいただき、ありがとうございました！。

三章四話 Crossing Rage！（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：

エターニア世界のレグルス道場で、ジューダス達は思い思いに休息を取った。ジューダスはセルシアの過去の一部を聞き、自身の過去と重ねる。

そして、夜が明けた。

三章四話 C r o s s i n g R a g e !

黒衣の守護者 三章四話 } C r o s s i n g R a g e ! }

窓から差し込む朝日を目蓋の裏側に感じ、ジューダスはゆっくりと体を起こした。

周囲を見渡すと、自分以外のほとんどの人間がまだ寝ていた。ただ一人。セルシアをのぞいて。

「相変わらず早いな」

「ジューダス……おはようございます」

セルシアは以前と同様、ジューダスより先に目覚めていたらしい。

セルシアは武器のメンテナンスを行っていたところのようであった。ジューダスはベッドから降りると、セルシアの傍に近づく。

「お前の武器……詳しく見たことは無かったが、こうして見ると随分と複雑そうだな」

「いえ、そんな事はありませんよ？ 様々な場面を想定して、場面展開にあつた武器を運用できるように色々なパーツを持ち合わせているだけで、基本的に必要になるのはここに並べているパーツだけですから」

セルシアはそう言うて必要になるパーツ群を指した。ジューダスはそれを見ても、剣士の自分にはよくわからないなと思っていた。

「というより、これだけのパーツ、よく持ち歩いていられるな」

「私の着ているローブには、収納箇所がたくさんあるんです。いつでもパーツを取り替えられるようにするために」

「なるほどな……弾丸はどうやって用意しているんだ？」

「あれは私の魔力で構成されているんです。一日たつと消えてしまうため、私は可能な時に常に魔力を消費して弾丸を生成しているんです」

「……気付かなかったな。そんな手間をかけていたなんて」

ジューダスは感心したように呟く。すると。セルシアの無表情が少しだけ緩んだ。

「そんなに大した手間では無いんです」

「お前は他のものと戦い方が違うとは思っていたが、戦いに必要な準備まで違っていたんだな。苦労をかけるな、セルシア」

「……このくらい、朝飯前です」

まさに今の時間帯のことを言うセルシアに、ジューダスは思わず小さく笑ってしまった。いつものシニカルな笑いであった。

Interlude 『妖艶なる呪術使い』

黒の石が役割を放棄するとどうなるか。

まず、本来の機能を失う。これが我々にとっては捨て置けない問題だ。我々の目的は、石がこの役割を果たしていなくては達成できない。だが、石の数は多い。少々の数の石が機能不全に陥っても、全体見ればそれほど大きな影響は無い。

次に、暴走して我々にも予期できない事態を引き起こす可能性がある。こちらは、その暴走の仕方によっては我々の害になるため、注意する必要がある。とりあえず、今回の黒の石は暴走の程度が低いため、見つけて確保すれば済む話なのだが。

「どこに行ったのかしらね。黒の石」

私の呟きに、後ろを歩く二人は答えない。

ただ黙って私の後をついてくるだけだ。

「ねえミトス。あなたって、天使の力で遠くの音が聞こえるように

なったりするんでしょう？黒の石が移動する音が聞こえたりしないの？」

私がそう尋ねると、ミトス是不機嫌をあらさまに表出させた表情でこつちを見た。

「とつくの昔にやっている。黒の石が移動する音なんてこれっぽちも聞こえない。それどころか、この洞窟内の魔物の音がうるさいくらいだ」

「あら……じゃあ、魔物を片っ端から片付けたほうがミトスにとってはいいのね？」

「出来もしないことを言うな。この洞窟にどれだけの魔物がいると思っっているんだ……」

ミトスはそう言うとき立ちの表情のままそっぽを向いた。
今度は、ミトスの隣を歩いているデルネイドに話しかける。

「デルネイド。昨日の今日でこんな仕事を押し付けられるなんて大変ね」

「いや、別に大丈夫ですよ、リンフェイさん。昨日の傷はもう治ってますから」

「……リッドって言ってたかしら。貴方のその魔剣に宿った『ネレイド』の力を、無効化できる人……」
「ぐ、そうです……」

私がリッドという名前を出すと、デルネイドははつきりと不機嫌になった。どうやら、リッドという敵に対抗心を持っているのかもしれない。

「すごいわね、そいつ……貴方の闇の極光は、私達も買っているの

よ」

「……嬉しいですけど、防ぐ手段がある以上、この力にも限界があるってことなんですよ……それに昨日、野郎と戦っていてはつきり分かったことがあるんです」

「分かったこと？」

「リッドの極光は、俺の魔剣から繰り出す極光より強い……直接極光を浴びせあっても、今の俺じゃ負けてしまうんですよ……」

「……」

「くっそ……なんで、俺の体には取り付かないんだよ、ネレイド……そうすれば、もっと巨大な力を行使できるかもしれねーのに」

「貴方の体には、闇の極光の適性が備わっていないんでしょ」

「……リンフェイさん、きついんです……その通りなんですけど」

リッドという敵の実力がどれほどなのかは私はこの目で見ていないからわからない。けれど、デルネイドが強敵と言ってもイマイチぴんと来ないのは、デルネイドは私達の中ではそれほど実力の高いほうではないからだ。

けれど、彼の……正確に言えば、彼の魔剣に宿ったネレイドの力『闇の極光』はとても利用価値がある力なのは間違いない。その極光を真正面から打ち消す力を持った存在、リッド……。

「もし、私と貴方が共同戦線を張るときは、私がそのリッドっていう敵を無効化してあげる。そしたら貴方は闇の極光を使えるでしょう?」

私がそう言うと、デルネイドは驚きの表情を見せた。

「リッドを、無効化……?」

「忘れたの? 私は呪術師よ……一人の動きを縛るくらい、朝飯前よ」

私得意げに笑うと、デルネイドは少ばかり照れたように見えた。薄暗い洞窟のなかだから、はっきりとは見えなかったが。

……訂正。私の呪術にも限界がある。対象となる者が持つ闘気が私のそれをはるかに凌駕していればいる程、私の呪術の中でも下位のものしか通用しなくなる。上位の呪術をかけるには、私より弱い闘気の持ち主でなくてはならない。恐らくだが……あの銀髪の男……レーヴァンには、私の呪術は全くといっていいほど通用しないだろう。だけど、それはあえて暴露するようなことでもない。

「お前たち……魔物が近くにいますぞ」

何時の間に私の傍に近寄っていたのか、ミトスがそう呟く。

「近くと言っても、この先の曲がり角を二つ曲がったところだけど」「すごいわミトス……貴方のその索敵能力、是非私も会得したいものね」

「……天使化には色々と準備がいるんだ。そう簡単に授けられる能力じゃない」

ミトスはそう言うと、私とデルネイドを置いて先に歩き始めてしまった。

私はデルネイドに目配せし、ミトスの後ろをついて歩く。

まだ見ぬ強敵たちとの邂逅に、十分注意を払いながら。自分の呪術がどこまで通用するのか、僅かな期待を持ちながら。

「んで、アルテって奴からの連絡は来たのか？」

朝食を食べ終え、皆が道場の大部屋に集まり終えてから、リッドがジューダスにたずねた。

ジューダスはそれには答えず、セルシアに確認するように視線を向けた。

「……来ていますね。新しい情報です」

セルシアが円盤型の機械を確認すると、そこには新しいメッセージが書かれていた。

全員がセルシアの傍に集まり、その円盤の様子を見る。

『黒の石の用途、未だ不明。新しい黒の石の回収を求める。現在の世界の地図上、Aと示されたポイントに黒の石の反応アリ。至急回収せよ』

それが、円盤に浮かび上がった文字であった。

「これ……望郷の洞窟のことか？」

リッドが円盤を睨みながら呟く。どうやら、黒の石があると示されたポイントは、望郷の洞窟という場所らしい。

「案内してください、リッド。そこに黒の石がある可能性があります」

セルシアが円盤をしまい込みながら、リッドの方を見た。リッドは「任せろって」といいながら自分の胸を叩いた。

「じゃあ、新しい目的地、『望郷の洞窟』に向けて出発だね!!」
ファラが笑顔でそう言うと、ジューダスは呆れたといった表情を見せた。

「おい……遊びに行くんじゃないんだぞ……例の黒い狼達がいる可能性があるんだぞ?」

「大丈夫! イケる! イケる!」

ファラのお決まりの文句を聞いて、ある者は頷き、ある者は不安を表情に浮かべた。

望郷の洞窟を目指して、彼らの新たな旅路が始まる……。

道場の外に出ると、朝陽が眩しかった。

眩しい光にジューダスは目を細める。

「黒の石についての詳しい情報は、未だに分からないか……」

呟かれた独り言に、ユーリが応答した。

「その黒の石って奴が、異変と関係しているのか?」

「いいや、まだ分からん……僕たちがそう睨んで、雇い主の指示の元集めているというのが現状だ」

「そうか……まだ何がどうなってるのかはわからねーって事か……」

「カウス達の話では、お前たちの世界……あの迷いの森の中にも、黒い石があったらしいな」

「クオイの森の事だな……となると、黒の石が異変と関係あるっつーのは、あながち間違いでも無いんだな」

ユーリも考え込むようにして呟く。

すると、エステルが彼の傍に近寄ってきた。

「ユーリ、ジューダスも。皆の準備が終わりましたよ」

「ん？ああ、すまねえ」

「さあ、出発しましょう！」

エステルが元気よく言う。ジューダスはリッドの方を見て、先導を促した。リッドもそれに頷きで答えると「じゃあ、望郷の洞窟まで案内するから、ついてきてくれ」と言った。

「昨日は楽しかったねー」

道中でファラが呟いた。その言葉にほとんどの者が笑顔と頷きで返した。

「時々、恥ずかしいこともあったけど……」

カノンノが誰にも聞こえないような小さな声で愚痴った。

「また、皆でやるーね！」

「おいおいファラ……」

ファラの提案にリッドが片手で頭を抑えながら呆れた。

「遊ぶのはいいけど……さすがにああいう恥ずかしいのはこりこりだな」

ロイドが顔を赤らめ、右手で自分の頬をかきながら言った。その動作がカノンノに昨日の頬に口付けのシーンを思い出させたのか。

「わー！ロイド、それはもう忘れてー！！」

カノンノは恥ずかしさに頬を紅潮させながら叫んだ。

それに続いてコレットも力を込めて発言する。

「そ、そだよ！カノンノが忘れてって言うてるんだから、忘れてあげなきゃダメだよロイド！！」

「お、おう……」

ロイドが怯みながらコレットの言葉に頷く。周りにいた者達は、そんなロイドの様子がおかしかったのか皆笑った。

ただ一人、苦笑いを前面に押し出しているカウスをのぞいて。

「緊張感が今まで以上に欠けているな……」

ジューダスが後ろから呟いた。それに答えるのは相変わらずジューダスの隣を歩くセルシアだ。

「でも、これが彼らのスタイルなんでしょうね……」

戸惑いと微笑みを両立させた、何とも言いがたい表情をしながら答えるセルシアに、ジューダスは苦笑で返す。

「どこの世界でも、ある程度の高みに上り詰めるところなるものなのかもしれない……」

「さらにその上に行くと、あの銀髪の剣士のように……」ということですか？

セルシアのその答えに、ジューダスは一気に顔を引き締めた。

「あいつか……あの實力は確かにずば抜けていた。あれほどの力を個人が手に入れることが出来るという事に驚かされたな」

「彼ならば、一騎当千という言葉をもそのまま体言できそうでしたね……」

「事実、出来るだろう。僕たちだって、雑魚の盗賊団が相手なら10人程度、一人でのせるだろう」

「相手の力量次第ですけどね……」

「……ああ」

ジューダスとセルシアはそこで会話を切った。先の戦いを思い出したのだ。圧倒的な實力を誇る、銀髪の剣士。デルネイドの言葉から推測するに、恐らく『レーヴァン』という名前の剣士だ。再び遭遇した場合、勝てる確率はどの程度あるのだろうか。ジューダスが考えるに、恐らく1割もあればいいほうだろう。

「見えてきたぜ。望郷の洞窟の入り口だ」

先頭を歩くリッドが、平原の奥に見えてきた岩山を指差す。そこには、暗い洞窟への入り口がぽっかりと開いていた。既に太陽は頂上を越え、傾き始めている。

洞窟の中は思った以上には暗くは無かった。松明などを用意しなくても問題ない明るさであった。

潮の満ち干きが関係し、洞窟内の歩ける範囲が変わるらしい。

「さて、ここからは手当たり次第に探すことになるな……」

ジューダスがそう呟いた、その瞬間、洞窟の奥から魔物の鳴き声が聞こえた。

「例の魔物達か……」

「黒い狼だな」

ユーリが剣を取り、やがて訪れる戦闘に心躍らせる。

現れた黒い狼は4体。まるでジューダス達の来訪を拒むように吼えた。

「一気にケリをつける！」

「おう!!」

ジューダスとユーリ、ロイド、リッド、ファラが駆ける。魔物の足止めを買って出た5人を壁役に、残りの者達が詠唱に入る。

魔物達がジューダス達を相手に踊らされている間に、全員の術の詠唱が完成したらしい。

「行くよ!!」

カノンノが攻撃の合図を取ると同時に、5人の術が一斉に解放され

た。

「エンシェント・ノヴァ！」

「サンダーブレード！」

「ホーリーランス！」

「エンジェルフェザー！」

「フレイムバレット！」

それぞれの術が、魔物達に激突する。

セルシアは、術の発動と同時に発砲していた。おそらく、セルシアの術は直接発動するのではなく、あの銃を媒介にして機能するものなのだろうとジューダスは予想する。

魔物達はそれぞれ苦しみ、断末魔の叫びを上げる中、ユーリたちによって止めを刺された。

ジューダスが口を開く。

「……これだけ一度に黒い狼に出くわすという事は……」

その呟きに、ロイドが答えた。

「ああ……黒い石が置いてある可能性は十分にあるな」

残りの者達も、黙ったまま頷く。皆が気を引き締めたことを確認すると、ジューダスは先頭を歩き始めた。

洞窟の奥へと、ゆっくりと歩みを進める……。

「なあ、なんとなく疑問に思ってたんだけどよ……」

洞窟の中を探検し始めてからしばらく経った頃、ユーリが言った。

「ジューダス……お前、仮面は外さないのか？」

「……この仮面か。ああ、あまり仮面を外す気は無い」

「それにしても限度つてものがあるんじゃないかねえの？お前、飯食うと

きも、寝るときも仮面を外さないじゃねえか」

ユーリがそう言うと、ジューダスは一瞬だけむっとした表情を浮かべた。

しかしそれをすぐに消し、またいつもの無表情に戻ると言った。

「これは僕にとって必要なものなんだ。だから外さない」

「必要なもの？」

「ああ……これは、僕がジューダスであるという証明でもあるし、僕自身の消せない罪の具現でもある」

「……」

ユーリは黙ってジューダスを見つめた。

（消せない罪……か）

ユーリは考え、そこで会話を止めた。

今度は後方から声が聞こえた。

「ねえ……この先に、誰かいるみたい……」

コレットが真剣な眼差しをしたまま呟いた。その言葉を聞き、静かに全員の顔をうかがうジューダス。全員がその言葉の意味するところに気付いている様子であることを確認したジューダスは、静かに頷くと、ゆっくりとそのまま先に足を進めた。

……。

……。

……。

広い空間に出る。

そこには、やはりジューダス達が予想したとおり、彼らの敵と思われる存在がいた。

「……ミトス！」

ロイドが剣を構えながら発した言葉に、金髪の少年はゆっくりと振り向く。その眼差しに冷たい殺気を滾らせながら。

「……やあロイド。お前もここに来ていたんだね」

次いで、ミトスの後ろに控えていた青年も口を開いた。

「ああ？てめえ、あの時の極光術使いじゃねーか！？」

「お前、デルネイド……」

リッドも改めて攻撃態勢を整えて、デルネイドの方を見た。

そしてもう一人。先ほどまでは暗くて見えなかった場所から、一人の女性が姿を現した。

「あら……偶然にしては出来すぎね。もう黒の石の在り処を訪れるなんて……まるで場所が分かるみたいね」

現れた女性は、黒い髪をしていた。後ろ髪は腰の位置にまで伸びている。そして身にまとう燃えるような赤い色の服装は、女性のボディラインを強調するようにピッタリと着こなされており、その女性の妖艶さを一層際立たせていた。

まるで中華風の風貌……赤いチャイナドレスを着たその女性の登場に、ジューダス達は改めて警戒心を向ける。

「始めまして、異界の英雄の皆様……私はリンフェイ……以後お見知りおきを」

「敵と挨拶しあうのは趣味じゃない」

リンフェイと名乗った女性にジューダスはあくまで排他的な態度をとる。リンフェイはそんなジューダスの様子がおかしかったのか、小さく笑った。

「あら、私は好きよ。挨拶。これから殺しあうもの同士、互いの名前を知っておいた方が何かと不便が無くていいじゃない？ねえジューダス？」

ジューダスは驚きの表情を浮かべる。リンフェイと名乗った女は、自分の名前を知っていた。しかし、ここまでの戦闘の中で、仲間同士で名前を呼び合う機会はあった。

そこから名前を知られたとしてもおかしくない。ジューダスはそう考え、納得した。

「それで、どうするの？一応確認させてもらっけど、私達の邪魔をしないのであれば、この場は見逃してあげるわよ？」

「それは無理な相談だな。僕たちの目的は、恐らくお前たちの邪魔になるだろう？」

「そうでしょうね。黒の石を探しているのは私達も同じ……貴方達は搜索を諦める気は？」

「ない」

はつきりと言い放ったジューダスに、リンフェイは微笑むだけだ。しかしその微笑が消えると、氷のように冷たく美しい眼差しから敵意が滲み始めた。

「そうよね……あまり気が進まないのは事実だけれど、一度殺しあっておきましょうか」

リンフェイはそう言っていると、右腕を素早い動きで振りかぶり、何かを投げた。

飛来してくる物は……御札だ。

やがてその御札が火に包まれると、火炎弾となってジューダスに襲い掛かった。

ジューダスはそれをサイドステップでかわすと同時に、火炎弾に向かって右手の長剣で切りかかる。御札はジューダスのその一閃で切られ、効力を失ってはらりと地面に落ちた。

「挨拶代わりの攻撃」

リンフェイはあくまで微笑を絶やさない。対するジューダスも、無表情のまま剣を構える。

「特殊な術使いか」

「そうでもないんじゃない？護符を使った戦いをするなんて……まあ、私の世界での話しだけれど」

リンフェイはそのままジューダスから距離をとるように移動する。

ジューダスは不要に近づくような事はせず、相手の出方をうかがう。そんなときだった。

「闇の洗礼を受ける！！」

ジューダス達の左側からそう声が聞こえたかと思うと、凄まじい力がデルネイドの上空に渦巻いていた。闇の極光だ。

リッドがそれに反応し、デルネイドの前に躍り出る。

「させるかよ！」

そして、その体に真の極光の力を宿らせた。

訪れた闇の極光、エターナル・ファイナリティは巨大な剣をかたちどり、リッド目掛けて襲い掛かる。リッドはそれを自身の前にかざした手から迸る光の壁、エターナル・インフィニティで防いだ。

「それが、真の極光の力ね」

リンフェイの弦きが聞こえたかと思うと、彼女はリッド目掛けて札を投げた。そのあまりに早い動作速度にジューダスは瞠目する。

「リッド、後ろだ！！」

「つつ……！！」

ジューダスは叫ぶが、リッドはデルネイドの放った闇の極光術を相手にしているため振り向けない。

リンフェイの放った謎の札がリッドに激突するかわかれたその刹那、リッドの前に一人の少女が躍り出た。

「……」

カノンノは大剣を構えると、リッド目掛けて飛来してきた札の前に

立つ。

そして、その大剣を札目掛けて振り下ろした。

「やあー!!」

札はカノンノの大剣によって切り裂かれた。

カノンノも渾身の一撃で仲間の身の安全を守れたと安堵の笑みを見せる。

まさにその瞬間であつた。

「えっ!?!」

切り裂かれた札から光が漏れ出すと、その光はすぐ目の前にいたカノンノを包み込むように襲い掛かった。

剣を振り切った直後であつたカノンノにそれをかわす余裕は無く、カノンノはその光に飲み込まれる。

「きゃあー!!」

「カノンノ!!」

光に押されたかのように尻餅をつくカノンノに、カウスが駆け寄る。

「カノンノ!? 大丈夫!?!」

「カウス……なんとも、ないけど」

カノンノも呆然としたまま、自分を包み込んだ光が消えていくよう様子を見つめる。

カウスとカノンノが啞然とする中、リンフェイが苦い顔をした。

「デルネイドー! ごめーん! リッドを縛れなくて、全然関係ない子を縛っちゃったー!」

「うえ!? リンフェイさん! 俺の極光じゃリッドの極光に勝てないんすよー!!」

「まあ、貴方はリッドをそのまま抑えてなさい! こっちは私達が何とかするから、ね」

リンフェイは謝罪をデルネイドに伝えると、再びジューダスに向き直る。

そして、彼女は突然指を鳴らした。

その刹那。

「え」

カノンノが驚きの声を上げ、ゆっくりと立ち上がる。

「カノンノ？どうしたの？」

仲間のただならぬ様子にカウスは疑問を持つ。

「カウス……何か、変だよ……」

カノンノも驚きの表情を浮かべながら、両手に大剣を構える。

「カウス……私から離れてっ！！」

「！！」

悲痛な叫びと共に繰り出された一撃を、カウスはバックステップをかわした。そして、驚きの表情と共に今の一撃を繰り出した少女を見つめる。

「カ……カノンノ？」

「な……私、なんで……」

カノンノは恐怖に怯える表情のまま、自身の持つ大剣を見つめながら呟いた。

「まさか……傀儡術？」

かいらいじゅつと、聞きなれない単語を発したセルシアを、ジューダスは睨んだ。

「なんだ……その『かいらいじゅつ』というのは？」

「聞き及んだ程度のことですが、人間を縛り動きを自身の意のままにする術があると……」

「なるほど……先ほどの札はそのための一撃か」

ジューダスは目の前の敵を睨む。

リンフェイは、そんなジューダスの視線に怯えることなく、ただあつけらかんとしていた。

「本当はその、真の極光術士にかけるつもりだったんだけどね……まさかあのお嬢さんが飛び出てくるとは、ちよつと急いで仕掛け

すぎたわ」

「カノンノを解放しろ」

「無理な相談ね。仕掛けた以上、その貴重な戦力を失いたくないもの」

「……ならば貴様を倒すまでだ」

「ええ。それが手っ取り早くて、お互い分かり安いわね。もっとも

……」

リンフェイの手が動く。

目の前に飛んできた札をジューダスは回避し、同時に切り裂く。

「私はそう簡単に破れるつもりはないけど！」

「上等だ！いくぞ！」

ジューダスがリンフェイに向かって突撃する。

先んじて、セルシアがリンフェイ目掛けて発砲した。銃弾はリンフェイの体目掛けて素早い速度で飛来する。リンフェイの体に銃弾が炸裂すると思ったその瞬間、セルシアの放った弾丸はリンフェイの背中から現れた御札によって防がれた。

「自動防御……ですか」

セルシアは新たに銃弾を銃倉に詰めなおすと、改めてリンフェイ目掛けて照準を合わせた。

しかし、今度はすぐに発砲しなかった。

リンフェイは迫り来るジューダスと、先の銃撃を浴びせたセルシアを交互に見ながら、妖しく笑った。

「うう……」

カノンノが半分涙目になりながら、その大剣を振るうという異様な光景が展開されてから、カウスはずっと防御に徹していた。

カウスにはカノンノを攻撃することが出来ないからだ。彼は、仲間を傷付けるという選択が出来ないでいる。

「うわっと！」

しゃがんだ頭のすれすれを、カノンノの大剣が走る。

次は振り下ろされる大剣を横っ飛びでかわす。

次に、振り上げられる大剣をバックステップで回避する。

先ほどからこんな調子であった。

「くそ……どうすれば……」

カウスが呟く。

「え、あれ!？」

カノンノはその目に涙を溜めながら、自分の体が突然向きを変えたことに驚く。

視線の先には、詠唱を始めていたエステルがいた。

そして、カノンノの意志を無視する体は、そのままエステル目掛けて突撃した。

「エステル、気をつけて！」

「エステル、避ける!!」

カノンノの声とユーリの声が重なる。エステルは詠唱を破棄し、カノンノの大剣による一撃を回避した。

「くっ……」

「エステル……ごめん……」

剣を構えながら謝られるという、何とも奇妙な体験にも関わらず、エステルの目は真剣そのものにカノンノを見つめた。

「何とかして、カノンノを解放しないといけませんね……」

「手っ取り早いのは、あの女を倒しちまうことだよな」

ユーリはそう言って女　リンフェイを睨んだ。

すると視界の隅に、詠唱中のカウスが目に入った。

（あの女を攻撃するつもりか？）

ユーリが睨んだとおり、カウスはリンフェイを攻撃するために、炎属性の術バーンストライクを発動させようとしていた。

しかし、その行動は虚しく終らされた。先ほどエステルに向かつて攻撃していったカノンノが、今度は再びカウス目掛けて突撃してきたからだ。

「カウス避けてー！！」

「うわっ！」

間一髪のところでもカノンノの攻撃を回避する。

カウスは何故、エステルに攻撃を向けたカノンノが再び自分を狙ってきたのか、疑問に思っていた。

その疑問を、ユーリはすぐに察知した。

「エステル！コレットも！詠唱するな、狙われるぞ！！」

「ええ！？」

ユーリの叫びに、エステルもコレットも驚きの表情を向けた。

「今のカノンノは、詠唱する奴を攻撃するように指示されてるんだ！俺たちにはカノンノは攻撃できないって向こうは考えているから、カノンノを術の妨害要因にしてんだよ！！」

「！！！」

ユーリの考えに、カウスも驚きと共に納得の表情を見せた。

ユーリは、エステル目掛けて攻撃していったカノンノが、術の詠唱を開始したカウス目掛けてすぐに攻撃対象を変えたということからすぐに推測していた。

そして、その疑問はどうやら正解だったらしい。

「あの男、なかなか鋭いじゃない」

リンフェイはジューダスの攻撃を上手く回避しながら、余裕の弦きをもらした。

「ほう、随分とあっさり認めるな」

ジューダスも手を休めることなく、難度も攻撃する。しかし、リンフェイの周囲に漂うように浮いている札が、リンフェイに当たるはずの攻撃を防ぐため、上手く攻めきれないでいた。

「ええ、ばれても問題ない事柄だもの。あのお嬢さんがそっちの術の使用を妨害するために動いていると分かったからって、貴方達にそれを止められるの？」

「……」

「ささつと、あのお嬢さんを倒しちゃえばいいのに。倒すって、殺すって意味だけど、ね」

「……」

ジューダスは表情をわずかにも動かさない。

そのままリンフェイ目掛けて攻撃を繰り返した。

その刹那、ジューダスの前方から発砲音が鳴り響いた。

見れば、何時の間に回りこんだのか、セルシアがリンフェイの背中目掛けて銃撃を放っていた。

しかし、リンフェイに効いた様子は無い。

「大した自動防御ですね。貴方のその札は」

セルシアの呟きに、リンフェイは言葉だけで返した。

「私はそう戦闘能力は高くないのよ。こういう風にして少しでも自分の身を守るようにしないと」

セルシアの攻撃でさえ届かない強敵を相手に、ジューダスもセルシアも根が尽きるまで攻撃を浴びせ続けると改めて決意した。

激突する青の剣と、光の剣。

ロイドの攻撃を、ミトスは確実に防ぐ。そして瞬間移動でロイドの背後に回るが、そこから繰り出した攻撃をロイドも即座に振り返り防ぐ。

「……しつこい！」

ミトスはその攻防がずっと続くのを嫌ったのか、即座に瞬間移動で距離を離れた。

そして、得意の高速詠唱を始める。

「避けられるものなら避けてみる！レイー！」

光がロイドの上空に現れる。そして、そこからレーザーが四方に撃ち出され始めた。

ロイドはその攻撃を何とか回避するが、放たれた光の一つがセルシアに向かって飛行した。

「セルシア、避けるー！」

ロイドが叫ぶが、間に合わない。

視界の外からの攻撃にセルシアは対応できず、その光の攻撃を受け吹き飛ばされる。

「セルシアッ！！」

ジューダスが叫ぶ。同時に、それを隙と見たリンフェイがジューダス目掛けて札を飛ばす。

しかしジューダスはそれをかわすと、リンフェイに向かって再び攻撃を開始した。

「立てるか、セルシアー？」

倒れたセルシアの傍に、ユーリが駆け寄る。

「ええ……この程度、まだいけます」

「ようし、よく言った。いいかセルシア。お前はロイドに協力してあの金髪のカキを倒せ」

「……え？」

「さつきから見ると、お前の攻撃であの女を倒すのは難しいみてーだしよ。敵の数を減らすのを目的に、先にあっちから片付けたほうがいいだろ」

「しかし、それではカノンノが」

「カノンノの事は、こっちに任せる。リンフェイって女を倒すまで、カノンノが誰も攻撃できねよーにしてやるよ」

ユーリはそう言うと、セルシアを起こし、その場から離れた。

セルシアはユーリの指示に素直に従おうと、そのままミトス目掛けて駆ける。

ユーリは、カウスとカノンノの戦闘の場に立つと、カノンノが振った剣を防いだ。

「カウス！お前もリツドの援護に向かえ！」

「えー？」

「ここは俺に任せる。カノンノの攻撃を捌くくらい、わけねーよ」

「……わかった」

カウスは頷くと、ユーリの指示に従いその場を離れた。

ユーリは一人でカノンノの猛攻を引き受けるつもりだ。

「カノンノのこと、お願い！！」

「おう、任せる！！」

ユーリがカノンノを見ると、ほとんど泣きそうな顔をしたカノンノがそこにいた。

「……あー、大丈夫だ。安心しろカノンノ」

「……ユーリ？」

「……お前の攻撃なら、俺が全部避けてやる」

ユーリはそのままカノンノの大剣を自身の剣で防ぐと、そこからサイドステップを踏んで距離をとる。

カノンノはそのままユーリに突撃すると、ユーリは再び防御の構えを取った。

「リツド、加勢するよー！！」

カウスが到着すると、既にそこは戦場としてはいまひとつの形にな

っていた。

リッドとファラに加え、エステルが、デルネイドを相手に戦っていたのである。

「ぐっ……てめえら……俺を優先的に攻撃しやがって!!」

デルネイドが叫ぶ。リッドはそれに不敵な笑みで返した。

「そりゃー、お前が一番弱そうに見えるからな!!」

「な……んだとぉー!!リッドオー!!まずはてめーからぶち殺す!!」

リッドの挑発にまんまと乗るデルネイド。

そのままリッド目掛けて攻めようとした刹那、左右からファラとエステルの挟み撃ちにあつた。

「獅子戦吼!!」

「ピアズクラスター!!」

それぞれの攻撃がデルネイドを襲う。済んでのところで防御結界を発動させるデルネイドであつたが、防御結界の発動という隙を敵の目の前で展開してしまったことに舌打ちする。

防御結界が解けるその瞬間を、リッドは見逃さなかつた。

「秋沙雨!!」

繰り出される鋭い突きを、デルネイドは何とか大剣で防御するが、いくつかの攻撃を受けてしまった。

体中から血を滲ませながら、デルネイドは後退する。

「くそ……また、負けたのかよ」

デルネイドがそう呟くと、再び彼の体の周囲を黒い靄が包み込み始めた。

「諦めるのが随分早いんじゃないのか？」

リッドが言つと、デルネイドは舌打ちで返した。

「俺はまだやれんだよ。体が限界を肯定した途端、これだよ……あー、くそ。てめーはいずれ、ぶち殺す!!」

デルネイドはそう捨て台詞を残して、黒い靄ごと消えていった。

カウス達は振り返り、エステルとカウスはミトスを倒しに、リッドとフアラはリンフェイを倒しにそれぞれ向かった。

カウスとエステルがミトスとロイドが戦ってる地点に辿り着く。ここではロイドが防御を続ける展開がずっと続いていた。

カウスとエステルは、自分達はその拮抗状態を崩すのだと息巻いてミトスに挑む。

「ち、援軍か」

ミトスが舌打ちと共に小声で漏らした。

「やあ！」

カウスがミトスに切りかかる。ミトスはそれを高速移動でかわすと離れたところから高速詠唱を始めた。

「受けきれるかな？プリズムソード!!」

放たれたのは七色に輝く七つの剣。カウスを狙って発動されたその術を、防御シールドを展開してカウスは何とか凌いだ。

「今度はこっちの番です！」

エステルがミトスに近付く。剣を使ってミトスに切りかかる。しかし、その剣は空を裂くのみであった。

瞬間移動で姿を消したミトスは、今度はエステルの真後ろに回りこむように出現する。

「遅い！」

ミトスが剣を振りかぶる。エステルが背中から切り裂かれそうになったその瞬間、ロイドがエステルのカバーに入った。

「させるかよ！」

ロイドとミトスの剣が鏖めり合う。ミトスが苛立ちの表情を浮かべたその時、ロイドは渾身の力でミトスを剣ごと押し戻す。

ミトスは体勢を崩すが、すぐさま瞬間移動で消えて遠くに逃れる。

「……相変わらず、しつこいな。お前は」

ミトスが苛立ちを浮かべたまま呟いた。その呟きに対し、ロイドは不適に微笑む。

「……しつこいのはお互い様だろ」

「……はは、確かにそうだな。僕も、死んでるのにこうしてお前と戦っているんだから、存外にしぶとい部類だろうね」

「ミトス……お前は、何で奴らに協力してるんだ？」

ロイドのその疑問に、ミトスは黙ったまま首を振った。
そして、ゆつくりとミトスの口が開く。

「……奴らが、姉さまを復活させる。そんな出来もしない望みを口にしたものだから、姉さまを救い出すというその一念だけで動いていた僕は、奴らの指示に従うしかないのさ」

「どういう意味だ」

「言葉どおりだよ、ロイド。僕は自分の意志であいつらに協力している。だけど、それは僕の意志であって生前の僕の意志では無い」

「……」

「分かりやすく言えば、前向きに従う奴隷みたいなものさ。もつとも、僕は今の自分の立場でさえ、厄介なものだと認識しているけれどね」

「……ミトス、お前はまだ姉さんを……マールを救おうとしてるのか？」

「……当然だ。僕の理想と、僕の存在意義。その全てが姉さまを救うというその一つだけの誓いのためにあると言ってもいいくらいだ。……だからこそ、奴らに従って動くのは不本意だし、僕自身、この体がどうにかならない限りは全力で姉さまを救い出すためだけに動きたいと思っている」

「お前、操られているのか？」

「半分正解だけど、半分間違いだ。僕は奴らに不本意ながらも全力で協力している」

「……」

ミトスがゆつくりと剣を構える。

それにあわせてロイドも剣を構えた。

「話ともういいだろう？……さあ、殺し合いの再開だ」

瞬間移動で姿を消すミトス。次に現れたのは、ロイドの真後ろであ

った。

そこからロイドに向かって切りかかる。その攻撃を素早く察知したロイドが防いだ。

その次の瞬間。

「う、ぐ……」

ミトスの体を一本の剣が貫いていた。

急所は外していたが、戦闘不能に陥るような重傷であった。

「き、さま……」

ミトスの体を貫いた一本の剣を握っていたのは、グラニデのディセNDERであった。

カウスは、これまでの戦いを観察し、ミトスが瞬間移動したその次に出現する場所は、大抵がミトスから見て攻撃対象となった者の背後であることを見抜き、そこを攻撃するためにロイドの背後に回りこんでいたのだ。

「どうだ……」

「……ふん。今回は諦めるさ」

ミトスの体の周囲に黒い靄が現れ始めた。それと同時に、カウスの剣がミトスの体から弾かれる。

ミトスはそのまま、ロイドを睨み続けたまま姿を消した。

その様子を戦いながら盗み見ていたリンフェイが、唐突にジューダスから距離をとるように連続でバックステップを踏んだ。そのあまりの速度に距離を離されるジューダス。

「やれやれ……今回は、私達の負けみたいね」

リンフェイがそう呟くと、ジューダスは訝しげな表情で問うた。

「何だ……貴様は最後まで戦わないのか」

「当たり前じゃない。あのお嬢さんだけじゃ防げる相手の数に限度があるし、私一人じゃ貴方達を同時に相手に出来るわけ無いもの。私、そこまでうぬばれていないわ」

リンフェイの体に黒い靄が現れる。

ジューダスはそれを黙ったまま見つめた。

「それじゃあね、異世界の英雄さんたち……またどこかで会えたら、よろしくね」

「……願い下げだな。お前はとにかく厄介すぎる」

「光栄ね。私の戦い方は悪辣なもの。……今度はより、札の準備を万端にしておくわ」

そして、リンフェイを包み込んでいた黒い靄が消えると、リンフェイもその場から姿を消した。

リンフェイが消えたその瞬間、カノンノの体は解放されたのか、彼女は唐突に前のめりにこけた。

「おっと」

それを抱きとめるユーリ。

カノンノは、彼の開いた胸元に顔が近付いたことで、恥ずかしさのあまり顔を紅潮させた。

「あ、ありがとユーリ」

「ああ……カノンノ、もう大丈夫なのか」

「そ、そうみたい……ありがとう」

カノンノはユーリに抱きとめられたままそう返事をする。

「いや、カノンノの剣術も大したもんだったぜ。俺も何度か危なかったからな」

ユーリがカノンノを褒めると、カノンノは照れ笑いをユーリに見せ

た。まだ幼さの残る可愛らしい笑い方であると、ユーリは思った。そして、そんな仲むつまじくしている二人の姿を、何だか釈然としない気持ちを抱えたままカウスは遠くから眺めていた。

「あ、ははは……ぶ、無事で良かったよ、カノンノ……」

「？カウス？何だか笑いが乾いているようですよ？」

エステルに突っ込まれたカウスは、何気ない苦笑いを何とか普通の笑いに変えようと懸命に努力した。その努力が無駄であると悟った彼は、そのままユーリとカノンノの二人に近付いていった。

「逃げられたか」

ジューダスが呟く。リンフェイは最後まで防御に徹していたが、ジューダスの素早い連撃をいとも簡単に防いでいるようだった。厄介な敵であると、ジューダスは痛感した。

「でも、こちらも目的を果たせます。ジューダス。黒の石を回収しましょう」

「ああ」

ジューダスは頷くと、すぐに辺りの搜索を開始するように仲間達に指示した。

周囲を見渡す仲間達。各々が散開して調べていると、ユーリが何かを見つけたようだった。

「黒い石って、これのことか？」

ユーリが十分に注意しながらジューダス達を呼んだ。

ジューダス達も、黒い石から魔物が現れないか用心しながらユーリの指し示す方向に近付くが、そこには黒の石が転がっているだけで何も起こらない。

ジューダスがおかしいと思いながら、セルシアに話しかけた。

「……魔物にならないな」

「そのようですね」

「このまま回収してもいいのか？」

だがその時、一つの異変が起こった。ジューダス達の荷物の中にしまい込まれた、バラクラフ王廟で見つけた黒い石が輝きだしたのだ。それと同時に、目の前の黒の石も輝きだす。

「な、なんだあ!？」

リッドが驚きの声をあげ、身構える。

黒の石は互いに呼応しているかのごとく光り輝くと、やがて周囲の空間をゆがめ、ジューダス達の傍に空間の亀裂を生み出した。

突如現れたその空間の亀裂が何を意味するのか。疑問に思ったユーリが口を開く。

「これ、新しい世界への入り口か？」

それに返事を返したのはジューダスであった。

「……入れ、ということか？」

恐らく黒の石が関係するのであろう新たな世界への入り口に、ジューダス達は飛び込む踏ん切りをつけられないでいた。そんな時、セルシアがローブの中から手の平に納まる程度の大きさの機械を取り出す。

「アルテですね……どうやらアルテも、この空間の亀裂の出現をキヤッチしたらしいです」

そのままその機械を見つめながら、セルシアは言葉を紡ぐ。

「空間の亀裂の出口が、次元の狭間にあたるらしいです。そこに何か情報があるかもしれないから、是非入ってみて欲しい……そう伝えてきました」

「僕達は実験台か……」

ジューダスが嫌な顔をこれでもかといわんばかりに浮かべる。

しかし、首を振って仕切りなおすと、ジューダスが先頭になって空間の亀裂に足を進めた。

「行くぞ……」

ジューダスの呟きに、一同は頷きで返すと、彼の後ろに続いて出現した亀裂に歩を進める。

彼らはそのまま亀裂の中に踏み込んだ。

三章四話 Crossing Rage！（後書き）

新たな敵、リンフェイの登場によって、今回の戦闘は長引きました。そして知りました。同時展開の戦闘ムズイ！

自分の実力の程度を知りました。いやー。もっとカッコイイ文章を書けるようになりたいものです。

今回は新しい敵と、前にも会った敵、操られた味方、そして本編の敵と、色とりどりの敵でした。カノンノは犠牲になったのだといわんばかりに操られてもらいました。ヒロインが操られちゃうって、何かロマン感じませんか？

……私だけです。すみません。

さて、このお話を掲載することで書き溜めていた話はなくなりました。また地道に話を進めて行きたいと思います。

それでは、今回も読んでくださり、ありがとうございました！

感想や小説に関する指摘などお待ちしております！

それでは、失礼します！。

幕間劇 狭間の街と、リンフェイと（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：

レグルス道場で休息をとったジューダス達は、アルテの指示の元、望郷の洞窟まで足を運ぶ。そこで黒の石を搜索するのだが、同じく黒の石を探していたらしいリンフェイ、デルネイド、ミトスと鉢合わせ、そのまま戦闘を開始する。何とか退けたジューダス達は、黒の石を回収した。そして黒の石によって生み出されたのであろう空間の亀裂に飛び込んだ……。

幕間劇 狭間の街と、リンフェイと

幕間劇 〱狭間の街と、リンフェイと〱

そこは、何とも奇妙な空間であつた。
まず、風景が無い。先に見える背景となるべき空間には、紫色の波

模様が横向きに走っていたかと思うと、途端に宇宙空間のような雰囲気へと変わり、今度は白い色に染まるなど、とにかく安定していない。

そして、そんな不安定な場に浮いているかのように、タイルが敷き詰められている。どこまでも続いているかのように広がるタイル。それが、この空間における足場なのであった。

そして、そのタイルの上には……いたって普通の『街』が展開されていた。

「何だ、ここは……」

ジューダスが驚きと共に眩きをもらす。

この奇妙な空間は、普段から冷静な彼でさえ驚かざるを得ないものだった。

レンガで出来た家が建っている。柵で区切られた中には、見たことの無い花が咲いていた。

そして、アルテによれば次元の狭間と呼ばれるこの空間には、大勢の人がいた。

「うわぁ……すごいね!」

コレットが周囲の光景に目を輝かせながら言った。

すごいというよりも不気味な光景であるのだが、感性豊かなコレットにとっては御伽噺に登場する街であるように思えたのかもしれない。

「あら、もしかして新しいお客さんかしら?」

ジューダス達の雰囲気を知った女性が一人、近付いてきた。

ジューダス達は戸惑いながらも一応の警戒をする。

「ようこそ、神隠しの出口へ」

「神隠しの……出口？」

ジューダスが眉を寄せる。

「あら……神隠しという言葉はご存知？」

「ああ、一応な」

「ここは、神隠しに遭った人たちが集まる場所。この世界で生まれ育ったものと、外の世界からやってきた人とが共に暮らしている街なんですよ」

女性はそう言つと、ジューダス達に改めて街の外観を見せるように体をずらした。

この街が、異世界の住人達が寄り集まって出来た空間であるという事に、ジューダス達は半信半疑な気持ちで街を見つめた。

「街なんて、こんな所で出来上がるものなのか？」

ジューダスが疑問に思ったことをそのまま言う。その疑問に、女性は笑顔を浮かべながら答えた。

「人つてすごい生き物なんですよ。皆が一緒なら、街くらい作れるんです」

女性によると、この異質な空間に街が作られた歴史は随分と古い。
しい。

そんな古くから、人間が途絶えることなく歴史を紡いでいる
次元の狭間という不安定な場所で という事が、やはりジュー
ダスには信じられなかった。

それはどうやら、他の仲間達にも共通だったらしい。

しかし、女性の言っている事はどうやら本当らしい。比較的最近建
てられたのであろう建物から、年季の入った建物まで色々あったか
らだ。

女性の案内に従ってジューダス達が歩き始めてすぐに女性は自己紹
介を始めた。

「私の名前はエステア。この街で生まれ住んでいる者よ」

エステアと名乗った女性に対し、ジューダスは軽く頷いた。
傍を歩いていたコレットが、なにやら楽しそうに女性に質問する。

「エステアさんは、この街で生まれたんですか。この街の生まれ
じゃない人もいるんですか？」

「ええ、そうよ。ここは迷い人が訪れる神秘の場。貴方達のように
違う次元から来る人が稀にいるわ」

エステアも笑顔でコレットの質問に答えを返す。

「神隠しに遭って驚きと悲嘆に暮れる人もいれば、喜びながらこの
場に居つく人もいる。本当に、人間には様々な人がいるわ」

エステアとコレットの会話に割って入るように、ジューダスが口を
開いた。

「さつきから言っている神隠しというものは、空間の亀裂に入ってしまう現象のことか？」

その質問に、女性は首を傾げた。

まるで、質問の意図がわからないというふうに。

「ん？どうした？」

「ごめんなさい。ここに来る方法なんて、それこそ人それぞれだから……」

エステアは顎に人差し指を当てて考え始めた。

「例えば、そうね……山奥で遭難した人が、気がついたらここに来ていたってこともあったわ。それ以外には、身投げした人がそのままここに来たなんてこともあったわね」

「み……身投げ……」

カノンノが深刻そうに呟く。無理も無い。自殺をしようとした人がこの世界にやってきたということは、そういう経緯を持った人がもしかしたら近くにいてもいいからだよ。

「ええ、でもつまりは、それだけ色々な人が集まっているということだよ」

エステアはそう言っ言葉を切る。

ロイドは次の疑問を尋ねることにした。段々とこの街に興味を持ち始めたらしい。

「だけど、人が訪れるだけじゃ街なんて作れないんじゃないか？」

「まあ、この街の歴史は古くから知らないけれど……一度大きな次元の亀裂が起こったときに、街ごと神隠しに遭ったことがあるらしくてね……その頃から本格的に街が興ったみたい」

「そんなことが……」

ロイドが驚きと共に感心する。エステアは笑顔で言葉を紡いだ。

「起こるのよ。世界は広いつて言わない？その広い世界がたくさんあるんだもの。なら、確率の低いこともここなら頻繁に起こりそうじゃない？」

「……そうかあ。まあ、確かに」

「だから、この街はそれなりに大きいのよ。あらゆる世界から色々な資材が現れたりするからね」

「すげえな……」

その話を聞いたユーリが、一つ提案をした。

「もしかして、ここで何かすげえものを発見できるかもな」

ユーリがこの街で戦力を強化できる何かを発見するべきではないかと提案する。

その案にエステルも乗った。

「いいですね！もしかしたら、今後の戦いを楽に出来るかもしれませんね！」

「でも、お金は？」

フアラがその疑問を口にしたとき、その場にいた全ての人間が黙り込んだ。

ロイドがぼそつと呟く。

「そういえば、俺たちの所持金っていくらだ？」

ロイドは勘違いをしている。大事なのは所持金の量ではないのだ。その事をユーリが指摘する。

「いや、それ以前によ……俺たちの金って、使えるのか？」

そうなのだ。例えば所持金を大量に持っていたとしても、そのお金が異世界という場において使えるはずも無い。

はずも無いのだが。

「貴方達の所持しているお金って、もしかして『ガルド』？」

エステルがそう言うと、珍しくジューダスも含めた全員が驚きの表情を浮かべる。

そして今度は、全員が驚いたという事実に対して全員が互いに見合った。

「も、もしかして、全員……」

「ガルド通貨だってか!？」

「うそー!？」

各々の驚きの声が発せられ、街中のジューダス達は奇異の目で見られた。

そんなことは気にしないといった風に、ロイドがまず自分の財布からガルド通貨を見せた。

「こ、これが俺たちの世界のガルドだ」

そういつて差し出されたガルドを、ユーリとエステル、リッドとフアラがまじまじと見つめる。

そして、驚きの声を上げた。

「同じだ……」

「同じだ……」

ユーリの弦きとリッドの弦きが重なる。

それが何を意味しているのか、もはや確認する必要がなかった。

エステアと別れた後に、ジューダスとセルシアはとある武器屋の前にいた。

「都合がいいというか、何と言うか……」

「今まで確認していなかった私たちもどうかしていましたが、この偶然もどうかしていますね」

ジューダスとセルシアは、武器屋に入っていたユーリたちを武器屋が狭いからという理由で外にて待ちながらそんな会話をしていた。ガルド通貨が共通であることも驚きであったが、その通貨がこの異世界でも使えるという事実にも驚かされた。

何ともジューダス達にとつて都合が良い方向に転がった話であった。「こんなことつてあるのか……」

「さあ。私も異世界に渡るのは今回のような事件が始めてですから……頻繁に起こる事象なのかはわかりません」

「お前の世界も、通貨はガルドなのか？」

「いえ……ガルドという名称である事は知っていますが、そのガルドが皆さんのと同じかどうかは、わかりません」

「ん？通貨を見たことが無いのか？」

「……ええ」

ジューダスは、一度も通貨を見たことが無いというセルシアの言葉に疑問を抱いた。この年齢……恐らく、ジューダスと同年くらいであろう年齢になるまで、通貨を見たことが無い人生とはどういったものなのか。セルシアはもしかしたら有名な貴族の娘なのかもしれない。そうジューダスは考えた。

「あら。早速再会できたわね、ジューダス……」

その声にジューダスは驚く。そしてすかさずに剣を抜く体勢を整える。

セルシアも、声がしてすぐに声のした方向に向かって銃を向けられるようにローブに手を引っ込めた。

彼らを警戒させた声の持ち主は、つい先ほど戦った女性であった。

「そんなに警戒しなくてもいいわよ。街中で戦うなんて私も嫌だから」

「なぜ貴様がここに……リンフェイ！」

現れた女性……リンフェイは相変わらず色気を前面に押し出した服装と雰囲気、ジューダスとセルシアに近付いてきた。

「なぜいるって聞かれても、用があつたから来たとしか言えないけれど」

「黒の石が目当てですか……？」

「貴方達が集めたのを奪いに来たわけじゃないわよ。ただ、迷子の子が一人、この世界に迷い込んだみたいだね」

「迷子の子……？」

「そう。黒の石が魔物の形を取ったんだけど、臆病な子でね。戦うんじゃなくてすぐ逃げちゃうのよ。それを捕まえに来たのよ」

リンフェイの説明に、ジューダスは警戒を向けたまま質問で返した。

「……随分と色々なことを教えてくれるな……」

「虚言だと思うのならそれでもいいわ。どうせこんな街中で戦うことなんて、お互いできないでしょう？」

「貴様はできるんじゃないのか？」

「人を見境無しに攻撃する奴みたいに言わないことね。私だって、余計な被害は望む所じゃないのよ」

リンフェイはそこで言葉を切つて、来た道を引き返そうとする。そのときだった。

「ああー！さっきのー！」

ファラの驚きの声が聞こえたかと思うと、武器屋からぞろぞろと仲間達が出てきた。どうやら買い物を終えたところ、運良く、あるいは運悪くリンフェイの姿を見つけてしまったらしい。

「リンフェイ!!」

ユーリが剣を引き抜く。その剣は、今まで彼が使っていた剣とは違うものになっている。

青みがかった刀身を持つ刀になっていた。

「もう……やめてよね。私は今回は争うつもりは無いって言うてるのに」

リンフェイが睨みながら札を一枚取り出した。

それが投げられたら、戦闘開始の合図になる。ジューダス達は緊迫感に包まれた。

しかし、リンフェイは札を投げる事はせず、そのまま札を地面に置いた。

「……」

何を狙っているのかをうかがうジューダス達。

置かれた札が光り輝くと同時に、ジューダス達は一斉に身構える。そして……。

「さあ、現れなさい……私の使い魔!!」

札の光が収まると同時に現れたのは……。

「チヨロネコ!」

「にゃあ」

何とも可愛らしい、一匹の小さな黒味がかった毛並みを持つ猫であった。

「……猫？」

ロイドが何が起こったのかわからないといった風に呟く。

他の者達も同様に戸惑っている中、コレットだけは目を輝かせた。

「わあ、猫さん。可愛い!」

「お、おいおいコレット……」

ロイドが呆れながらコレットの言動に突っ込む。

しかしコレットの言葉に気をよくしたリンフェイは、チヨロネコを抱き上げ、自然な笑顔で近付いてきた。

「可愛いでしょ。私の使い魔。使い魔と言っても、戦闘能力はそんなに高くないから、諜報とか探索に使っただけだよ」

「にゃあ」

「この子を貴方達の遊び相手にしてあげるから、私の行動を制限しないでね」

「ごろごろ」

「それとも、この子を使って私は黒の石を探すから、それまで私と遊ぶ？」

非常に色っぽい最後の言葉に、男性陣はぐくりとつばを飲んだ。その様子に気付いたファラが、露骨に不機嫌な表情になってリッドを

睨む。

「な、なんだよ!？」

「リッドのスケベ!」

「ち、ちげーよ!」

リンフェイはそんな様子がおかしかったのか、嫌味のない自然な笑みを漏らした。

ジューダス自身、敵でなければ素直に美しい笑みだと思えただろうと感ずるほどに綺麗な笑いだった。

「ふふ……可愛いわね、貴方達……安心なさい。チヨロネコを貴方達に預けてあげるから、それで私の邪魔をしないということでもいいわね」

「いいわけないだろう」

ジューダスが割り込んだ。

「この世界に黒の石があるというのなら、僕たちもそれを探す。必然的にお前と僕たちは相對することになるだろう」

「……そうさせないためのチヨロネコなんだけどね。手荒なまねに訴えるって言うなら、この街に住んでいる人にも被害が及ぶことを受け入れなさいね」

「……」

「まあ、好きになさい」

リンフェイはそう言つて、ジューダス達から離れていった。自身の使い魔であるチヨロネコなる魔物を残して。

「可愛いー! チヨロネコちゃん!」

「にゃあにゃあ!」

見ると、コレットとエステルがチヨロネコをなでていた。リンフェイを追いかけようという気持ちさが微塵も感じられない。

「おい、そこまでしておけ。リンフェイに先を越されるぞ」

ユーリがエステルの肩を掴んだ。エステルは体をぐいぐいと捻ることと拒否の意志を示したものだからユーリは驚いた。

「お、おいエステル」

「あーん！もうりよつとだけ待ってくださいユーリ！この子、すごく可愛いんです！」

「……」

エステルはチョロネコの首をなで続ける。

その光景をユーリはおかしいと感じた。いつものエステルならば、名残惜しそうにしながらも自分たちがすべき優先事項を先に片付けるべきだと考えられるだろう。

……果たして本当にそうだったか。ユーリも少ばかり自信が無かった。そういえば、旅をしていた頃もエステルのおかげで寄り道が増えた事はあったかもしれない。

しかし、今の状況はどう考えても……。

「畏、だよな……？」

賛同を得るためにユーリがリッドを見る。しかし、リッドはそこにはいなかった。

ふと見ると、リッドが遠くから買い物袋を持ってこちらに戻ってくる姿が見えた。

「おいリッド、なにして……」

「おーい！猫缶買って来たぞー！」

「ありがとうリッド！」

華やかに彩られたように展開されるその光景に啞然とするユーリ。なんとリッドがチョロネコのために餌を買いに行き、それをフアラに手渡しているのだ。

ジューダスがそつと後ろからユーリに近付き、呟いた。

「猫にかまけている連中は、恐らく魅了されたんだろう」

「……っつーことは、あの猫を出された瞬間、俺達はいいつの策に

嵌められていたってことかよ」

「……ああ。面倒だが、正気を保っている連中だけでリンフェイを追うぞ」

「……じゃあねえな」

ジューダスが辺りを見回す。正気を保っているのは、ユーリと……

「セルシア、お前も無事か」

「ええ、問題ありません」

セルシアもどうやら問題ないらしい。そしてカウスとカノンノもジューダスに近付いてきた。

「僕たちも大丈夫」

「私は危なかったけど……前回あの人に痛い目に遭わされたんだもの！今回は負けない！」

「……まあ、これだけか」

後のメンバーは皆、リンフェイの放った魔性の猫のとりこになってしまったらしい。仕方なくそのメンバーは放っておくことにし、ジューダス以下、セルシアとユーリ、カウス、カノンノの5人はリンフェイの去って行く姿を追いかけた。

「リンフェイ！」

ジューダスが追いつくと同時にリンフェイの名を叫んで、彼女を呼び止めようとする。

リンフェイはその声に気がついたようで、ゆっくりと振り返った。

「あら……残りの子達はどうしたの？」

「貴様……知ってて言っているだろう」

「ふふ……その様子だと、すっかり魅了されたみたいね」

「それも無駄だな。お前一人を相手にするには十分な戦力が残っ

ている」

「それはどうかしら」

リンフェイは余裕の笑みを崩さない。ジューダスは警戒したまま、リンフェイの続きの言葉を待った。

「だって……」

「……なんだ？」

「貴方達と話している私は、あと5秒で消えちゃうもの」

「……は？」

ジューダス達があっけにと取られていると、リンフェイの宣言どおり、彼女の発言後から5秒後に、目の前に確かにいたはずのリンフェイの姿が薄くなっていくと、そのまま消え去ってしまった。後に残ったのは、一枚の御札だけであった。

「あ、あの女！」

ユーリがしてやられたと舌打ちする。

ジューダスも苛立ちの表情をするが、すぐにその表情を引っ込めると仲間たちの表情を見渡した。

「……行くぞ。奴よりも先に、この世界にあるという黒の石を回収する」

「ええ……！」

セルシアがジューダスの号令に返答すると、彼等はすぐさま走り出した。

Interlude 『黒の石を探して』

街外れには、異世界から飛来したと思われる小さな遺跡があった。リンフェイはその遺跡の内部に黒の石があると読んで、その遺跡の入り口へと歩を進める。

ゆつくりと、辺りを警戒しながら。

黒の石には様々な力が備わっている。そういう意味では、異世界から飛来した何かを媒介にして魔物化するという事態も考えられる。

遺跡の中に入ったリンフェイは、まさにその予測が当たったことに複雑な気持ちになった。

「これは、面倒な相手になりそうね……」

暗い遺跡に浮かび上がる、一本の剣。その剣と寄り添うように、黒の石が転がっている。

やがて黒の石が遺跡への侵入者を発見したかのように輝くと、辺りに黒い霧を発生させ、剣ごと霧の中に包み込む。

黒い霧が静まったと同時に現れた魔物は、右手が剣になっている巨大な黒いゴーレムであった……

ジューダス達が黒の石を探し始めてから30分ほど経過した頃。突然、街外れから轟音が聞こえた。

「今のは!？」

カウスが轟音のした方向を睨みながら叫ぶ。ジューダスはすぐに黒の石だとあたりをつけると、轟音のした方角を目指して走り始めた。残りの者達も、ジューダスに続いて走り始める。

やがて辿り着いた遺跡の中は、松明をつけたかのように明かりが中から漏れていた。

ジューダス達はそのまま遺跡内部に突入すると、そこには……。

「……リンフェイ！」

リンフェイが巨大なゴーレムを相手に華麗に戦っている光景が広がっていた。

遺跡を照らしている光は、彼女の御札から発せられているものらしい。

「あら、貴方達……」

リンフェイもこちらに気付いたようで、ゴーレムから一気に距離をとるようにバックステップを踏むと、そのままジューダスの傍に寄ってきた。

「どう、協力しない？」

「協力だと？」

リンフェイの突然の申し出に、ジューダスは眉を寄せる。

「あのゴーレム……何か変なものを取り込んだみたい。強いわよ」

「……お前一人では敵わないから、僕達に協力しろと？」

「強制じゃないけどね。貴方達に黒の石を渡す気は無いけれど、あのゴーレムを倒した後で、黒の石の回収を貴方達と争うほうが得策かしらって思ってたね」

「断る……と言いたいところだが」

ゴーレムが振り上げた右腕　巨大な剣の形をした異形のがジューダス達を纏めて吹き飛ばそうとしているのを確認すると、彼等は一斉にバラバラの方向に飛んで避けた。

振り下ろされる大剣。風圧が周囲を押しつける。

「きゃあ！」

風圧から逃れることの出来なかったカノンノの悲鳴が聞こえる。

カノンノはそのまま吹き飛ばされそうになるが、そうはならなかった。

「カノンノが、浮いてる！？」

カウスが驚く。見ればカノンノは、背中から壁に激突する直前で止まったまま浮遊していた。

「あ、あれ？」

「大丈夫かしら？お嬢さん」

リンフェイがカノンノの傍に寄ると、そのまま彼女の背中に手を回して、一枚の御札を取り外した。どうやらその札がカノンノを壁との激突から守ってくれていたらしい。

「え、あ……」

「次が来るわよ」

「……」

ゴーレムが素早い動きでリンフェイとカノンノに向かって剣を振る。横薙ぎに振るわれた剣を二人はジャンプして飛び越えると、そのままジューダス達の傍に着地した。

「どうやら、この場合は協力したほうが良いみたいだな」

「ありがとね」

ジューダスは今回のゴーレムの相手が骨が折れると確信し、リンフェイを相手に戦力を割くよりもゴーレムを退治することを優先することに決めたのだった。

「それじゃ、よろしくね。皆さん」

リンフェイはそのままゴーレムの左手目掛けて素早い身のこなしで飛ぶと、ゴーレムの左腕に札を貼り付けていく。

ゴーレムは自身の左腕周囲に飛んできた異物を排除しようと、その

体を捻ってリンフェイを切り裂こうと剣を振るう。

「破っ！」

リンフェイの掛け声と共に、ゴーレムの左腕に張られた札が爆発する。炎属性の札だったらしい。小規模ではあるが複数の連続した爆発により、ゴーレムは体勢を崩した。

「行くぞ！」

ジューダスがふらついているゴーレムの足元目掛けて切りかかる。

しかし、手ごたえはイマイチであった。ゴーレムは見た目以上の防御力を持っているらしく、ジューダスの剣戟を何事も無かったように受け止める。

「ちっ……下は固いな」

「なら、柔らかい部分を探すまでだろ」

ユーリがそう言いながら、鞘から剣を引き抜く。

「……新しい武器の力、確かめるとするか！」

ユーリはそのまま遺跡の壁目掛けて飛ぶと、壁蹴りをして更に高く飛翔し、ゴーレムの頭目掛けて剣を振りかぶった。体勢を立て直し、周囲を見回すゴーレム。

そのゴーレムの後ろからユーリが高速で襲い掛かる。

「はあっ……！」

そのままゴーレムの頭をかち割る勢いで剣を振ったユーリ。しかしゴーレムはびくともしない。

ユーリはゴーレムの体を蹴飛ばすと、反動で勢い良く地面に着地した。

「頭も弱点じゃねーみたいだな」

ユーリは小さく笑いながら呟いた。余裕の笑みである。

「驚いたな。随分と素早く動けるじゃないか」

ジューダスは先ほどのユーリの一連の動作を見て、その速度が今までの戦いよりも速くなっていることを見抜いた。

「ああ、さっきの武器屋で買ったこの刀が、俺の能力を上げてくれてんだよ」

「……身のこなしを上げているのか」

「ああ。これであの銀髪にも負けねえ速さを手に入れてやるぜ！」

ユーリが駆け出す。足も頭も弱点では無かった。次に彼は体を切り裂こうと走り出す。

「ゴオオオ！！！」

その前にゴーレムが動いた。右手の大剣を物凄い勢いで振りぬく。

「はあ！！！」

ユーリはその大剣を軽々と飛び越した。そのまま相手の体に飛び込み、剣による攻撃を与える。

ガキンという音があたりに響いた。

「ここも弱点じゃねえ！」

ユーリが叫ぶ。一旦距離をとるためにユーリはゴーレムの足元に着地した。

同時にゴーレムが動いた。

「ゴオオオ！」

「なっ！？」

なんとゴーレムは、ユーリを潰そうとその有り余る巨体ごと倒れてきた。

ボディプレスで広範囲を攻撃するつもりらしい。

「やべっ！！！」

ユーリは素早い動きでバックステップを踏む。ゴーレムの体が地面に倒れこむその刹那。

「風陣！昇！」

リンフェイが倒れるゴーレムと地面の間に札を滑り込ませると、その札から勢い良く突風が発生し、倒れこんできたゴーレムを上空に打ち上げた。巨体と重量を誇るゴーレムをまさか上空に跳ね飛ばすとは、これには流石にジューダスも驚いた。

「早く逃げなさい」

「お、おお！サンキューな……」

ユーリはリンフェイに感謝しながら、ゴーレムの攻撃範囲から逃れる。空中に打ち上げられたゴーレムは一瞬の後に地面に激突した。ゆっくりと立ち上がるゴーレム。

「こいつ、堅いな……」

ユーリが立ち上がるゴーレムを睨みながら呟く。苦戦している現状も面白くない。

「今度は術で攻めるよ！」

ユーリの戦いを見ていたカノンノが、下級術の準備をしながら叫んだ。

皆もそれに賛同し頷くと、術を唱えるものとゴーレムの足止めを買って出るものとに即座に別れた。

「アクアスパイク！」

カノンノが放った術は、水属性の初級術であるアクアスパイクだった。激しい水圧がゴーレム目掛けて飛んでいく。

ゴーレムはその術を足で受けると、即座によるめいた。

「……効いてる！」

カウスが無意識のうちに叫んだ。ようやくゴーレムの突破口が見えた。

カウスもこのまま術の詠唱を続け、カノンノに続いて術攻撃をぶつけようと考えた。

その刹那。

「ゴオオオ！！ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

ゴーレムが地響きが起こるほどの声量で叫んだかと思うと、その巨体からは考えられない速度でカノンノに向かって走りよってきた。どうやら、術を使うものを優先的に処分しようと考えたらしい。

「……」

カノンノは何とかその突進を避けようとする。

ゴーレムの右足がカノンノを蹴飛ばすように振り上げられた。それを何とか回避するカノンノ。

しかしゴーレムはすぐに軌道を修正し、カノンノ目掛けて足を踏みおろした。

（……避けられない!!）

万事休すとなったカノンノは、せめてダメージを軽減しようと防御シールドを発生させる。しかし、どこまで通用するか分からない。

心が恐怖に支配されていくのを感じながら、カノンノはゴーレムの攻撃を受け止めようとした、その刹那。

「やらせるかぁー!!!」

カウスが飛び出し、カノンノを遠くに突き飛ばした。

「カウス!!!」

突然突き飛ばされたカノンノは、まるでスローモーションがかかったように動く視界の中で、防御結界を発動させながらもゴーレムに踏み潰されるカウスの姿を見た。

バゴンと、遺跡の床が破壊される音が聞こえた。

「カウス……!!カウス……!!!」

カノンノが悲痛な叫び声をあげる。

「あの馬鹿……!!!」

「く……!!!」

ジューダスとユーリが急いで駆け寄り、ゴーレム目掛けて剣を振るう。早くゴーレムの足をどけて、カウスの無事を確認しなくてはならない。

「アクアバレット!!」

セルシアが術を発動させ、水属性の力を帯びた弾丸がゴーレムの足元に炸裂した。

「ガガアアアア!!」

ゴーレムが振り返り、今度はセルシアをターゲットにして動き始めた。

「セルシア!!」

ジューダスは急いで反転して、セルシアの元へ駆け寄った。

「……!!」

セルシアは突進してくるゴーレムの姿を息を飲みながら見つめた。自分の機動力ではゴーレムの攻撃を避けられる回数はせいぜい2回。突進を避けた後の踏みつけを、側転で避ける。そこまでが限界だ。つぎにゴーレムがどんな攻撃を仕掛けるのか分からないが、元々遠距離で戦う自分の身のこなしではまず回避できないだろう。

敵の戦力と己の戦力から導き出される結末に苛立ちながらも、セルシアは仲間の救出を優先した。

（ゴーレムを倒すには、術使いが必要です……！魔法剣士のカウスは、このゴーレムを倒すのに必要な戦力です……！）

ゴーレムが迫り来る。まず、敵の足の動きに合わせてサイドステップで回避する。

次に、ゴーレムは立ち止まって、すぐに踏み潰し攻撃を仕掛けてきた。それを側転で回避する。

そして……。

「くっ!!」

次なる攻撃は、ゴーレムの右腕の大剣であった。

その攻撃を受ければひとたまりもないだろう。防御結界を発動させて、どこまで凌げるか……。

そんなことを考えていたセルシアだったが、突然自分の体が浮かび上がったことに驚いた。

バガンと、遺跡の床がゴーレムの大剣によって吹き飛ばされる音

が聞こえた。

セルシアのいる空間の、下のほうから。

「ふん……無茶する奴だ」

ジューダスの声が傍から聞こえる。

セルシアは、ジューダスが自分を抱きかかえながら上空に飛んで敵の攻撃をやり過ごしたのだということを理解した。

「カウスとカノンノの術攻撃ならば、このゴーレムを倒せます。だから……」

「あのデカブツを引き付けるのは僕とユーリに任せろ。お前も術を使えるのだろう？」

「それを言ったら、ジューダスだってそうじゃないですか……」

「僕は前衛の方が得意なんだ」

そんな会話をしながら、彼等はゴーレムのすぐ右手付近に着地する。

ジューダスから見ると、気のせいかセルシアの頬が少しばかり赤くなっているようであった。

ゴーレムの右腕は、大剣と化している。よく見ると、その大剣の部分はうつすらと透けていた。頑強さを誇るゴーレムだが、まるでその部分だけはきちんと体が組みあがっていない様子であった。

カウスとカノンノの方を見る。カウスはボロボロになりながらも、カノンノに肩を貸してもらっている状態で何とか起き上がっていた。

「カウス！カノンノ！動けるなら、奴の右手の剣を狙って術を撃て！」

「……」

ジューダスの指示が聞こえると、カウスは口から血を流しながら術の詠唱を開始した。

「カウス、大丈夫！？」

カノンノが心配しながらカウスを見る。カウスはゴーレムを睨みながらカノンノの問いに答えた。

「僕は大丈夫……早くあれを倒そう。」

やせ我慢の台詞でしかなかったが、カウスは何とか踏みとどまりながら「ジャッジメント」の詠唱を続ける。カノンノもそんなカウスの姿を見て、自分出来る精一杯を果たすと誓い、「エンシェント・ノヴァ」の詠唱を始めた。

「時間稼ぎなら私に任せなさい」

ゴーレムの背後に回っていたリンフェイが、跳躍すると同時にゴーレムの体に複数の御札を貼り付ける。

やがてその御札が光り輝くと、ゴーレムの周囲を囲うように『結界』が張り巡らされた。

「10秒よ!!」

「なに……!!」

「この結界で奴の動きを封じ込められるのは10秒が限界!後は何とか凌ぎなさい!!」

リンフェイの宣言どおり、ゴーレムは結界を内側から破壊し始めていた。

ジューダスとユーリが横に並ぶ。カウスとカノンノの前に陣取る。彼らを守護し、その上級術でゴーレムを粉碎する。

やがて結界が破壊され、ゴーレムの動きが自由になった途端、ゴーレムはカウスとカノンノ目掛けて走り始めた。

「させん!!」

「させるかよ!!」

ユーリとジューダスが同時に叫ぶと、二人は溜め込んでいたあらゆる限りの闘気を放出した。オーバーリミッツだ。

「おらあ、絶風刃!!」

ユーリは迫り来るゴーレムの足目掛けて絶風刃を連続で放った。風

の刃で次々と切り刻まれ、ゴーレムはよろける。

「双連撃！粉塵裂破衝！！」

よろけたゴーレムの足元にジューダスも連激を叩き込む。その素早い動きと破壊力の備わった攻撃にゴーレムは後ろに倒れそうになる。それを何とか踏みとどまった。

ジューダスはそれを予測していた。

「秘奥義……闇の炎に抱かれて消えろ！！浄破滅焼闇！！！」

ジューダスの持つ二刀の刃から青い炎が滾り、それが剣戟となってゴーレムの体を包み込んだ。たまらずゴーレムは後ろに、仰向けに倒れる。

「いくぜ！！漸毅狼影陣・改！！！」

ユーリも手にした刀の恩恵を利用し、強化した自身の秘奥義でゴーレムに襲い掛かる。

素早さ、身のこなしが上がったユーリの漸毅狼影陣は更に威力を増し、ギアを上げ、連続で、目にも止まらぬ速さで、ズバズバと切り裂いていく。

体を堅い外壁で守っているゴーレムだが、威力の高い連続攻撃を受け続けることで立ち上がることが出来ないでいる。

「やれ！！カウス！カノンノ！」

ユーリが最後の一振りを終わると同時に叫んだ。時間は十分稼いだ。ゴーレムの動きも止めた。最早間違はなく止めが刺せるシチュエーションは出来上がったのだ。

「エンシエント・ノヴァ！！」

「ジャッジメント！！」

カウスとカノンノの声が同時に重なる。そして、それぞれの術が発言し、天から倒れているゴーレム目掛けて振り注いだ！

次々と振りそそぐ光属性の光線。そして、業火の猛り。

それらの魔力はゴーレムの大剣を砕き折る。

「ゴアアアアアア！！ガアアアアアア！！」

それがとどめとなったのか。ゴーレムは右肩から倒れこむと、その

まま動くことも無くじわじわとその姿を消して行った。

ゴーレムは完全に消え去った。後に残ったのは、崩れたゴーレムを形どっていた黒い岩石の欠片と、ゴーレムの右腕に納まっていたのであるう、一本の長剣のみであった。

「勝った……」

呟いて、カウスがふらりと倒れた。

「カ、カウス！！しっかり！！」

カノンノが急いで倒れたカウスの傍による。しかしカウスは苦しうに呼吸を続けるだけだった。急いで治療しなくてはならない。

「やるじゃない。貴方達」

ふと、遠くから澄んだ声が聞こえた。見れば、リンフェイが黒の石をその手に持った状態でこちらを見下ろすように高台に乗っていた。

「……いつの間に」

セルシアが驚きの声を上げる。

「協力してくれた貴方達を無碍に扱う事はしないわ。その剣、貴方達にあげる。結構な代物よ、それ」

「……」

「黒の石は、元々集めるようなものじゃないし、いいじゃない。貴方達が集めるのは勝手だけど、それでこちらが大打撃を受けるわけじゃないし……だから、今回は諦めてちょうだい。この石は私が回収するわ」

「……ふん」

ジューダスは今から追っても間に合わないだろうと考え、興味無さそうにそっぽを向いた。

「あの……」

カノンノがカウスに治癒術をかけながら呟いた。

「さつきは助けてくれて……ありがとうございました」

「……よしなさい。敵にお礼を言うなんて。そんな感傷を持っていると、いざという時に足をすくわれるわよ」

「……それは」

「貴方みたいな子を、私も知っているわ。その子は戦地で名誉の戦死を遂げたけど、最後まで敵を敵と見なすことができない愚かな子だったわ」

「……え？」

リンフェイの言葉にカノンノは違和感を覚えた。今のリンフェイは、どこと無く寂しそうな感じがしている。

「……それ以来ね。私が迷い始めたのは。……果たして、どちらが『人間らしい』のかしらね」

そう言って、リンフェイは黒い霧に包まれて消えた。

「お前たち……今の今までずっと猫と遊んでいたのか……」

「……おう」

しょんぼりとした調子で、ロイドはジューダスの問いかけに返答し

た。

「はあ……」

あからさまに呆れたといわんばかりのため息をつくジューダス。

ユーリがエステルに近付き、軽く頭を小突きながら言った。

「随分と楽しい時間を過ごした見てーだな……」

「はう……ユーリ、怖いです」

「怖がることねーよ？俺は別に怒ってねーから」

「嘘です……」

エステルもがつくりとうな垂れたまま呟いた。

「ま、まあまあ！それだけリンフェイの魅了の術が強かったってことだよ！」

カノンノの治療術によって元気になったカウスがフロアに入る。

しかしジューダスの冷たい視線はやむ様子が無い。

「ところでジューダス。あの遺跡で手に入れた剣は、今後使用するのですか？」

セルシアが話題を切り替えるためにジューダスに質問した。

ジューダスは鞘から例の長剣を抜きながら答えた。

「この剣……『イノセントキラー』というらしいが、内部に闇の力が備わっている。僕の属性と相性が良い。これがあれば、闇の晶術の中でも強力な術を行使できるようになる」

「……リンフェイの言った通り、中々のシロモノだった……ということですね」

「ああ……気に入らないが……まあ、この剣は気に入った」

ジューダスは軽く長剣『イノセントキラー』を振るう。

刃の軌跡が黒く見える。それほどまでに濃密な闇の力を宿しているらしい。

「お前たちも戦力を整えたか？」

ジューダスが仲間達を見渡す。

仲間達は同時に頷きで返した。

「……黒の石が反応する出口を探す。その空間の亀裂を通り抜けた先に、新しい世界が待っているはずだ」

彼等はジューダスの言葉に従って歩き始めた。
次なる世界を目指して……。

幕間劇 狭間の街と、リンフエイと（後書き）

プロットには無い、突発的思い付きの話を展開し、満足のあまり肌もツヤツヤなアラヤシキでございます。

嘘です。肌はつるつるじゃないです。乾燥する季節のおかげで、肌はかさかさです。白い粉見たいのが浮き出てます。

さて、そんな現状報告はどうでもいいですよ。今回の話は先ほども述べたとおり、考えていたストーリー展開から一步横道にそれた上で書いたものです。

目的は、ジューダス達に新しい武器を与えたいと思ったからです。また、敵との協力戦を早く書いてみたいと思ったからです。

……この台詞から、この次も協力戦が発生するのかと思った鋭いアナタ。ご注意ください。アラヤシキは基本うそつきでございますゆえ……フフフ。

さて、あとかきの最後に、今回の買い物でジューダス達が手に入れた新たな武器について簡単な説明をして終らせたいと思います。

片手剣：イノセントキラー

装備者：ジューダス

閻属性の力を秘めた魔剣。ジューダスの閻の力を増幅させることにより、ジューダスは「デモンズランス・ゼロ」と「ブラックホール」を発動させられるようになる。

片手権：刀・青雲

装備者：ユーリ

装備者の素早さと身のこなしをあげる。ユーリの身軽さをさらに上げ、秘奥義の「漸毅狼影陣」を「漸毅狼影陣・改」へとグレードアップさせる。

二刀流剣：炎龍と氷虎

装備者：ロイド

ガグンラーズの代わりにロイドが購入した剣。装備者の闘気を上げ、全体的なステータスを底上げする。二つの剣を交差させて地面に叩きつけることで、秘奥義「反衝天破斬」を発動させられるようになる。

以上です。

ロイドはまだ新武器を使ってませんが、登場させられるよう頑張りたいと思います。

それでは、今回もありがとうございます！
感想やご指摘など、お待ちしております！

四章一話 〈廃工場の死闘〉（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOD2・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：

世界を隔てる次元の狭間に展開された街に辿り着いたジューダス達。その世界は様々な世界から物資が届く不思議な世界であった。その世界で装備を整えるジューダス達。その後、呪術師リンフェイと出会い、黒の石がこの世界に在ることを知ったジューダス達は、リンフェイよりも先に黒の石を手に入れようとする。しかし、黒の石は強力なゴーレムとなってリンフェイ、ジューダスらに襲い掛かる。リンフェイと協力し、ジューダス達は何とかゴーレムを倒すが、リンフェイは黒の石を奪って消えてしまった。

四章一話　＼ 廃工場の死闘 ＼

黒衣の守護者　四章一話　＼ 廃工場の死闘 ＼

「みなさーん！朝ですよー！」

太陽光が昇ってすらいない、異様な景色が広がる窓を眺めていたジューダスは、エステアからの呼び声で振り返った。

見れば、他のメンバー達も今の声で目覚めたらしい。ゆっくりと体をベッドから起こし始める。

「う、うーん……もう朝かあ？」

ロイドが寝坊けた口調で呟くと、ジューダスは「さつさとしろ」といわんばかりの表情で下の階へと降りていった。

ジューダスが階段を下りると、そこには良いにおいのするパンと、温かなスープがたくさん置かれたテーブルがあった。

「おはようございます」

「ああ……悪いな。朝食まで用意してもらって……」

「いいんですよ。旅人には良くしなさいって、先祖代々言い伝えられていますから」

エステアはにつこりと笑った。その笑顔にジューダスは頷きだけで返す。

「おはようございます」

セルシアも階段を下りてきた。

「今日こそ、黒の石が反応する出口に飛び込むですね」

「ああ。昨日の疲れも取れただろう。今日は先に進む」

ジューダスとセルシアのそんなやり取りを、階段を下りながら聞いていたリッドが口を挟んだ。

「でもよー、出口にあてはあるのか？」

「ある。タベ僕が見つけた」

「はや……流石だな、ジューダス」

「……ふん」

そんなお世辞はいらないとばかりにジューダスはリッドから視線をそらすと、さつさと食卓の席についた。

私の望みは、ただ一つ。この身の全てを捧げた祖国が勝利することのみ。

そのためならば私はいかなる試練も乗り越えよう。そう誓って生きてきたが……。

「まさか、このような試練を課せられるとはな……」

私の目の前には、白色の鎧を纏った戦士が20人ほど。どの戦士も良く訓練された屈強の戦士達であるようだ。

「どうした。まさか怯えられたのか、ダルムハクト卿」

「その呼び方は止めて頂きたい。彼等はからかっているようだが、私はその名前で呼ばれるにふさわしくない者になっているのだと、既に貴方にも伝えただろう、ヴァン殿」

「ふ……そうだったな。失礼した。貴方の仲間たちの呼び方に、いつの間にか慣れてしまっていたようだ」

隣に立つ剣士との他愛も無い会話。しかし、私達は今、歴戦を潜り抜けた戦士として戦場に立っている。仲間との会話にのみ集中するなど有り得ない。

私に向かって飛び込んできた戦士が3名。私の隣に立つ、ヴァン・グランツに向かって飛びかかったのが4名。

なるほど、懸命な判断だ。残りのモノは、さらなる増援を呼びにいったらしい。この状況において敵の戦力を見誤らないとは、なかなかの……

「勘違いするな、ダルムハクト殿」

「？」

「彼らは応援を呼びに行ったのでは無い。指示を仰ぎに行っただけ

だ。彼らの将である、ファブレ家の者にな」

「ほう？それは何故？」

「簡単な話だ。彼等は混乱しているのだよ。『私がここにいるという事実』に対してな……」

ヴァンは不適に微笑むと、飛びかかってきた剣士4名に向かって切り込んだ。

流れるような攻撃。一瞬の隙も見せずに、見事に4つの死体を作り出すヴァン。

彼の剣は力強い。いかな強固な鎧を纏っても、その圧倒的な剣圧の前には意味をなさないかもしれない。

対する私は、鎧を身に纏った、老練なる騎士だ。ヴァン殿とは……まあ互角の腕は持っているという自信がある。すなわち。

「彼に出来て、私には出来ないことは無い」

襲い掛かってきた剣士たちを、身をかがめて迎え入れる。最初に飛び込んできた剣士は、その両脇から血を噴出させて倒れた。

残りの二人が怯む。私の『二刀流』に恐れをなしたか。

「敵に武器を向けたならば、最後まで恐れずして攻めよっ！！貴様ら、それでも戦士かつ！！」

私の雄たけびによつて、敵はギラリとその目を光らせ、再び襲い掛かってきた。

良いぞ。それで良い。若いモノはやはり無茶をやらかす程度でなくては話にならん。

さあ、行くぞ！

若き勇者達に、歳を重ねながらなおも戦い続ける者がいかに恐ろしいかを、教えてくれる！！

「ここが出口だ」

ジューダスがそう言いながらその場に立つと、ジューダスの持っていた黒の石が輝きだした。そして、ジューダスの目の前に、空間の亀裂が現れた。

「皆さんは、こうやって異世界を渡っているのですか？」

後ろにいたエステアが興味深そうにたずねた。

ユーリがその質問に振り返って答えた。

「ああ。俺達はここからまた異世界に飛んで、色んな世界を巻き込んでる異変を解決するんだよ」

「かつこいいですねー。御伽噺のヒーローみたい」

エステアがにこりと笑うと、ユーリはにやりと笑みをうかべた。

「じゃあな。色々世話になったな」

「またお会いできたら、是非お会いしましょう！」

ユーリとエステルが別れの言葉を言った。

「ええ。皆さんも、道中お気をつけて！」

エステアと別れ、ジューダス達は新たな世界へと飛び込んだ。

出口の先が既に戦場と化しているなんて、これにはジューダス達も驚くほか無かった。

そこは、捨てられた廃工場のような場であった。所々のパイプから油が滴り落ちている。

積み上げられた複数の死体。

そこに立っているのは二人の剣士。

一人は、以前であったことのある男だ。ロイド達の世界でバラクラフ王廟跡地で戦った男……『ヴァン・グランツ』。

そしてもう一人、こちらは始めてみる男であった。

全身を黒い甲冑で覆っている。両方の腰に剣が取り付けられており、ロイドのような二刀流の使い手をイメージさせた。

「ぬ？ 新手か？」

甲冑の男が振り返りながら言う。

するとヴァンも振り返り、不適に笑いながらこちらを見た。

「ああ、彼らこそ、警戒すべき敵だよ。ダルムハクト殿」

「そうか。いや、これはまた、威勢のよさそうな若者達だのう！」

快活に笑いながら甲冑の剣士は兜をスライドさせて顔を露出した。

その顔には年老いて刻まれたであろう皺がたくさんあった。

「どうやら、老兵らしい。」

「貴様ら……一体ここで何をしている」

ジューダスがそう聞くと、ヴァンは自分のあごひげを触りながら答えた。

「我らの長の命令で、ここに黒の石を配置する予定だったのだが……」

「お前たちが来たのでは、それは出来ないな」

「よいよい、ヴァン殿。ただの配置任務に、思わぬ特典がついたのじゃ。これはこれで楽しもうではないか！」

「ふ……ダルムハクト殿。私は貴方のように戦場を愉快痛快に楽しむ度量は持ち合わせておりませぬゆえ、さつさと彼らを倒すことにしか集中できません」

「それもまた良し、じゃ」

ヴァンがその体から闘気を立ち上らせる。

隣にいた黒い鎧の男も、ゆっくりと二刀の剣を交差させるように構えた。

「俺と同じ二刀流かよ……」

ロイドが不適に笑いながら、剣を構えた。その姿を、黒い鎧の男も見ただろう。同じスタイルの剣士としてロイドを敵視する。

「ゆくぞ！我が名はダルムハクト・オリエンデ！いざ参る！」

「二度も失態を晒すつもりは無い。このヴァン、今度こそお前達に勝利しよう！」

ヴァンが懷から黒の石を取り出す。そしてその石を天に向かって投げると黒の石から複数の黒い狼が現れた。

黒い狼達は散開すると、そのままジューダス達を取り囲むようにした。

「全員、散開しろ！近くの敵を狙え！」

ジューダスがそう号令を発する。仲間たちもそれに従うように動き始めた。

「あの時の借りを返す！」

「来いっ！」

ジューダスがヴァン目掛けて突進する。それに追従するようにセルシアも走り出した。

「ふん！」

ヴァンとジューダスの剣が激突しあう。

ジューダスの華麗な連続攻撃を、ヴァンは意図も簡単に受け流し続ける。

「そこだ！」

ジューダスの連続攻撃の中で一瞬の隙を見つけたヴァンは、体を一回転させながら剣を横薙ぎに振るった。

それを飛んで回避するジューダス。

「セルシア！」

「狙い撃ちます！」

ジューダスの足元をセルシアの弾丸が滑り込む。

弾丸はそのままヴァンの体に激突するかわれた。

「無駄だあ！」

ヴァンは気合いと共に叫ぶと、溜めていた闘気を一気に放出した。

ヴァンの暴圧的な闘気によってセルシアの弾丸は弾かれて落ちた。

舌打ちしながらセルシアは呟いた。

「相変わらず、手ごわい相手ですね……」

「光栄だな。君の射撃技術も大したものだ。かつての同胞を思い出す」

「え……」

一瞬の会話の後に、ジューダスが再びヴァンに切りかかる。

ヴァンは相変わらず後ろに下がりながらジューダスの連続攻撃を受けとめ続ける。

まるで隙を待っているかのように。

「やはり私の相手は貴公か！」

ダルムハクトは笑いながら、しかし凶暴な目つきで目前に迫るロイドを見つめる。

「魔神剣！」

ロイドが先制を奪うために繰り出した魔神剣。

「閻魔剣！」

ダルムハクトは剣を振り下ろすと、そこから闇のオーラが現れて飛翔し、ロイドの魔神剣を打ち消した。

ロイドは構わずにそのまま飛び込む。ダルムハクトの距離に入り、二人の剣の激突が始まる。

（く……重い！）

ロイドはダルムハクトの剣の重さに驚いた。

一撃ごとに体力を奪われていくかのように錯覚するほど、ダルムハクトの剣は重いのだ。

「どうした、若造！耐えられぬか！」

ダルムハクトはにやりと笑うと、右手の剣を横薙ぎに振り、ロイドを後方へ押し戻した。

「くそ！」

ロイドは逆らわず、そのまま後方で体勢を立て直す。

「はああ！！烈火十文字！！」

ダルムハクトが叫ぶと、彼は目の前で剣を交差させるように打ち付けた。

互いに打ち付けられた二刀の剣の間から火花が散ったかと思うと、次の瞬間、そこ十文字に交差した剣を起点に炎の波が発生したではないか！

「なっ！」

すぐに気付くが、もう遅い。ロイドはそのまま迫り来る炎の波に飲まれてしまった。

「うああああああああ！！！！」

「ロイド……！」

コレットが急いでロイドの傍に駆け寄る。

コレットが羽織っている上着を脱ぐと、すぐにロイドの傍により、燃えているロイドの体をその上着で叩いた。

「く……くそ……」

「ロイド、しっかりして!!」

コレットが泣きそうな顔をしながら応急処置をする。

そんな二人の様子に、慌てて近付いてきたのはカノンノだった。

「ロイドに治癒術をかけるから、コレットは何とか時間を稼いで!」

「う……うん! 頑張る!!」

そういつて立ち上がったコレットの前に立ち塞がったのは、ダルムハクトだった。

「少女よ。覚悟はいいか?」

「う……」

ダルムハクトの屈強な体軀から発せられるプレッシャーに、コレットは思わず動じてしまう。

しかし、一度決心して強い目で相手を睨むと、恐れることなく言った。

「私は、仲間を守るためなら、どんな敵とも戦います!」

コレットのその答えに気をよくしたのか、ダルムハクトはうむと笑うと、再びその二刀流を構えた。

「行くぞ!!」

迫り来るダルムハクト。しかしコレットのチャクラムでは彼の素早い剣をとめることは出来ない。ならばどうする。

コレットはまず、片側のチャクラムを投げた。

そのチャクラムを意図も簡単にかわすダルムハクト。しかしコレットはその間に飛行する。

「ほおー! 天使の能力! あのミトスとか言う小僧と同じ能力か!」

コレットはそこからチャクラムをもう一つ投げた。

しかしそれもダルムハクトには届かない。

「どうした、その程度か！」

「ううん！まだまだだよ！！」

二つのチャクラムがコレットの元に戻る。

再度、コレットはチャクラムを投げた。しかし今度は二つ同時に、交差させるように。

「グランシャリオー！」

電気の力を纏ったチャクラムがダルムハクトに襲い掛かる！

「紫電突！！」

それから逃げることなく、ダルムハクトが剣を突き出す。

すると、グランシャリオが生み出した電気をダルムハクトの剣が吸収し、そのままコレット目掛けて放出したでは無いか！

「え……」

突然の事態に反応が遅れたコレットは、飛んでくる雷撃をかわす事が出来なかった。

バリバリイ！！と大きな感電の音が聞こえ、コレットはそのまま地面に落ちてきた。

「コレット！！」

カノンノが悲鳴を上げる。

同時に、ロイドが立ち上がった。カノンノの治癒術が効いたのだ。

「……カノンノ、コレットの治療を」

ロイドは、彼にしては珍しく静かな口調で言った。

怒りで我を忘れているわけでは無いらしかった。

「うん……」

カノンノは急いで倒れたコレットの傍により、治癒術の詠唱を始めた。

「その様子だと、まだ完全に回復しきったわけでは無いのではないな、若造」

「問題ねえよ。それよりあんだだ。よくもコレットをやってくれたな……」

「冷静な振りをしていても、芯は怒りに飲まれておるのか。若いのお」

「なんだと!」

「それじゃ。そんなことで怒るな。戦場においては、誰が傷ついてもおかしくないのじゃから」

「……」

「本当に守りたいものならば、戦いの場に連れ込むな。それでも大切な人を失う可能性はあるが、戦地に連れ込むよりは生きている可能性のほうが高いじゃろ」

「……ダメだ」

「なに?」

ロイドは冷たい目でダルムハクトを睨む。

ダルムハクトは、そんなロイドの目を睨む返した。

「コレットは、みんなのために戦いたいって言ってるんだ。だってら、そのコレットの思いをやめさせることは出来ない」

「そうか、ならばおぬしがもっとしつかりする他ないな」

「ああ……行くぞお!!」

ロイドが突進する。

ダルムハクトの二刀流は凄まじい威力を誇っていることを、段々とロイドも理解し始めている。しかし、それでもこれ以外に自分の戦い方は無いのだといわんばかりに真正面から突撃する。

「おらあ!!」

「ふん!!」

二人の右手の剣が激突する。

返しの左手の剣が激突する。

ガキイン、ガキインとお互いの剣がぶつかり合う音が何度も響く。

両者の拮抗状態は、やがてロイドの不利へと進んでいくが、ロイドもコレットを傷付けた相手に負けたくは無いといわんばかりに意地

になって戦う。

「瞬迅剣！」

「瞬迅剣！」

二人の突きが激突する。しかし、後方に吹き飛ばされたのはロイドのほうだ。

二刀流の使い手として、ダルムハクトの方が一枚上手という事らしい。

「くそ！まだまだあ！」

ロイドが再度接近する。

ダルムハクトの剣をかくぐり、一気に懷に飛び込む。

「吼える炎龍！炎龍戦吼！！」

強化された獅子戦吼がダルムハクトに襲い掛かった！

ダルムハクトは粹護陣を敷くが、それでも抑えきれぬ威力ではない。

「ぬ、お！」

たまらず後方に飛びのくダルムハクト。ロイドは技の反動のため追撃できないが、一枚上手の相手に及んだことに不敵な笑みを見せていた。

「どうだ……じいさん。俺はまだまだ、こんなもんじゃねーぞ！」

「ククク……面白い若造じゃな」

ダルムハクトがゆっくりと二刀の剣を交差させるように構えた。

そして、その二本の剣に雷のオーラが纏い始める。

「我が奥義、喰らってなお立っていられるのならば、お主のことを強敵と認めよう」

「！！！」

「奥義……雷旋豪転斬！！」

ダルムハクトは体を捻ると、二刀の剣を広げ旋回しながら接近してきた。

その接近の速度は今までの比ではない！

まるで雷の渦となって襲い掛かるダルムハクトの猛攻を、ロイドは全力で迎え撃とうとする。

その時だった。

「オレがいるのを忘れるなよ！」

「リッド！」

魔物を相手にしていたはずのリッドがロイドの傍に来ていた。そして、共にダルムハクトの猛攻を迎え入れる。

「行くぜロイドオ！！！」

「ああ！！！」

リッドとロイドの二人は息を合わせながら左右に飛ぶと、それぞれ剣を前に突き出しながらダルムハクト目掛けて前進した。

「衝破十文字！！！」

ガキインと、一際高い金属音が鳴り響く。

ロイドとリッドは、それぞれダルムハクトの剣を受け止める形で静止していた。

「我が技を押しとめるとは……見事也！」

ダルムハクトは何か満足するように頷く。それはまだ戦えるという余裕を見せる笑みであったし、強敵に巡り会えたという事への喜びの笑みでもあった。

更なる激突が始まる。誰もがそう思ったまさにその時。

「動くなっつ！！！！！」

突然の叫び声。

声のした方を見ると、そこには赤い長髪の青年と、長髪で片方の目を隠している女性、そしてその二人に引き連れられた白い鎧を纏った騎士たちがいた。

「来たか……」

そつと小さくヴァンが呟いた。見れば、彼は微笑んでいる。

「……!!」

赤い長髪の青年の顔が驚きと共に青ざめる。
ヴァンの姿を見た途端だった。

「な、んで……なんで、あなたが……」

「に、兄さん!!?」

先んじて亜麻色の髪の女性が驚きの声を上げた。

「兄、だと?」

ジューダスが不審そうな顔つきでヴァンを見る。

ヴァンはジューダス達のことなど忘れた風に、現れた青年と女性を交互に見た。

「久しいな。ルーク。そしてメシュティアリカ」

ヴァンはまるで旧友との再会を楽しむように、剣を彼らに向けた。
ルークと呼ばれた青年は、反射的にティアと呼ばれた女性をかばうように立った。

二人の沈黙とにらみ合いが続く。

「……」

「……」

「……師匠、俺は」

「今だに、私をそう呼ぶのか」

「……」

「ルーク。私と決着をつけたくば、アブソープゲートに來い」

ヴァンの身の回りに黒い靄がかかり始める。

ここから撤退するつもりなのだろう。

「ヴァン師匠！」

「私との因果を断ち、この異変の諸悪の根源を穿つつもりならば……ここに残る者達と共に、私たちと戦え。それを、お前が望むのならば……」

そうして、ヴァンは姿を消した。

後を追うように、ダルムハクトも姿を消す。

残された者達は、自分たちの戦いの因果をただ確かめるのみであった。

四章一話　く廃工場の死闘く（後書き）

文字カウントの結果、7472文字に落ち着いた今回のお話でした。あんまり一話を伸ばしすぎると、前回読んだ人にとっては記憶から離れていってしまうかなと考え始めております。どうでしょう？定期的に読めるほうが読みやすいでしょうか？それとも一話辺りの分量を伸ばしちゃったほうが良いでしょうか？

ちなみに今回も新キャラ、ダルムハクトというおじいさんが現れました。

彼は二刀流の使い手であり、その技術はロイドを上回っております。しかし、ロイドには若さゆえに熱血漢があるので、勝敗の分からない相手ではあります。

そして、お待たせしましたルークとティアの登場です！

アラヤシキのわがままなのですが、このルークは事件解決後すぐに帰ってきた存在であり、ルークとアッシュの二つの記憶を受け継いでいる存在となっております。20歳にはなってないです。ルークは17歳、ティアは16歳です。

さて、ヴァン師匠はアブソーブゲートに来いといいました。一体そこでどんな罠が仕掛けられているのか！？楽しみにしててください。

それでは、感想やご指摘などお待ちしております！

四章二話　く十字架を立てた者く（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOD2・TOS・TOA・TOV・TWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：

新しい世界に訪れたジューダス達。そこはアビスの世界、オールドラントであった。

廃工場に降り立ったジューダス達だが、すぐに敵と遭遇してしまう。ヴァン・グランツとダルムハクトと名乗る老兵であった。彼らと戦うジューダス達。その途中、ルークとティアが現れる。

ヴァンは突然ルークに向かって、アブソーブゲートにて待つと伝え、ダルムハクトと共にその場から消えてしまった。

四章二話 十字架を立てた者

黒衣の守護者 四章二話 十字架を立てた者

「ふん……」

ジューダスは今、豪華な椅子に座っている。対面しているのは先ほど現れた赤い髪の青年。

「悪いな、待たせた」

青年……ルークは、ジューダスにそういつて謝る。

「早速だけど、あんた達……じゃねえや、貴公らの目的について聞きたい。そなたは、あの廃工場で何をしていた？」

「使い慣れない丁寧語だな」

ジューダスがニヒルに笑いながら皮肉っぽく返す。それに思わず瞳目するルーク。

「な……べ、別にいいだろ！」

「ルーク……地が出ているわよ」

ルークの横にいる女性……ティアが、小さく呟いた。

「う……」

「……さつさと話を進めるべきか？」

ジューダスが確認するようにルークに聞く。

「ああ、頼む。場合によっては、俺たちも協力できるかもしれないからさ」

「……」

ジューダスはこのとき、何となく嫌な予感がした。

彼もまた、同じ目をしているのだ。異変の解決を心から望み、そのためならば自身が戦いに出向いても構わないという目だ。

（戦力が増えるのは歓迎すべきことだが、足を引っ張られることだけは避けたいものだ……）

「ほら、早く教えてくれよ」

「……いいだろう。簡単に纏めるが、僕達は何をしてきたのか、教

えよう」

そしてジューダスは語り始めた。アルテという男に頼まれて異変を解決することになったという事を、その道中で増えていった仲間たちと、現れた死者、そして新たな敵……

複数世界を巻き込んで起こっているこの異変は、その者たちによって意図的に引き起こされているものである可能性があるという事を。

その話を聞いたルークは、暫く黙っていたが、やがて思いついたように口を開いた。

「復活した死者がいるって、さっき話したよな？」

「ああ」

「ヴァン師匠も、その中の一人ってことか……」

ルークが独り言のように呟く。

「あのヴァンという男……お前は知っているのか？……師匠と呼んでいたが？」

ジューダスがそう尋ねると、ルークはゆっくりと頭を下げ、目を瞑った。

しばらくして顔を上げると、決心したように口を開いた。

「あの人は、確かに俺たちの知り合いだ。俺にとっての剣の師匠で、ティアにとっての实のお兄さんで……この世界を、滅ぼそうとした人だ」

「……」
「……」
「……」

三人の沈黙が続く。

ジューダスはルークとティアを交互に睨む。あの男の関係がハツキリした今、その二人に対する不信感がますます募ったからだ。

それを見抜いたティアが、残念そうに目を瞑りながら口を開いた。

「理解して欲しいのは、私たちと兄さんは既に敵対関係にあるということ。この世界を変えるなんて理由で、多くのものを犠牲にした兄さんのことを私は許さないし、人生を滅茶苦茶にされたルークだつて、許してはいないはずだもの」

「だがその割には、律儀に兄と呼んでいるではないか。お前も、師匠と呼んでいたな？」

ジューダスが睨みながらそう問いかけると、二人はどことなく寂しそうな表情を浮かべた。

それでジューダスは理解した。この二人は、ヴァンという男のことを心のどこかでまだ尊敬しており、故に敵対関係にあってもそれは憎しみによる敵対ではなく悲しみによる敵対なのだという事を。

（足を引っ張られなければ良いがな……）

「ジューダス、大丈夫かな」

牢屋の中で、最初に彼のことを心配したのはカノンノであった。

「大丈夫だろ。俺たち何も悪いことしてねーんだし」

ユーリがそっけない口調で言った。

しかし、カノンノとカウスは牢屋の外を心配そうに眺めたままだ。

「ほんとに大丈夫かな……」

「しかし、異世界に渡ってきてまで牢屋の中に入れられるとはなあ

……」

そう呟いたのはロイドであった。

「お、なんだ？ロイド？お前も牢屋にはいったことあるのか？」

「ん？なんだユーリ？お前もか？」

「俺はしょっちゅう入ってたぜ」

「……しょっちゅうって……俺は一回だけだぜ」

リッドの言葉に、その場にいた誰もが呆れた。

「一回だけでも十分なんだって、牢屋に入るなんて経験は……」

ユーリがやれやれと首を振る。

「それにしてもジューダス……遅いですね」

ふうとため息をつきながらセルシアが呟いた。
彼女は今、牢屋の隅に一人で座っている。

「セルシアも、ジューダスのこと心配？」

カノンノが尋ねると、セルシアは小さく首を振った。

「彼の实力は相当なものです。もし何かあったら、真っ先に私たちを助けに来るでしょう」

「おやおや、随分とジューダスのことを信じてるな？」

にやけ顔でユーリが言った。

「そういう貴方は、ジューダスのことを評価していないのですか？」

セルシアが真面目な顔で返答すると、ユーリは困ったような顔で返した。

「い、いや。そういう真剣な話じゃなくてだな、セルシアとジューダスの関係をつつただけなんだが」

「？私とジューダスの関係、ですか？」

「そう。お前ら恋人かってな？」

「な……！？」

その瞬間、セルシアの顔が真っ赤に染まった。怒りとも恥じらいともとれる何とも微妙な表情をユーリに見せた後、ぷいと壁の方を向いてしまった。

「わ、私とジューダスはいくまで依頼をこなす上での、ば、パート

ナーです！それ以上の事はありません！」

「……そ、そうか？」

「そうです！」

普段は冷静なセルシアらしからぬ取り乱しっぷりに、ユーリを含めその場にいた全員が凍りついた。

やがてファラがくすりと笑うと、全員が笑い出した。

「な、なんですか？そんなに、おかしかったですか？」

「ああ……セルシアがそんなに取り乱すなんて意外だった」

「可愛かったよー」

リッドとファラに口々にそういわれてしまうと、セルシアはもう何もいえないとばかりに顔を赤くして俯いた。

「お前たち、何をしている？」

ちょうどそこへ、ルーク達との会話を終えたジューダスがやって来た。

「牢屋を出るぞ。そして街の宿に泊まる。今日のところはお開きにして、また明日、話をするらしい」

そういうとジューダスは勝手に牢屋の鍵を開けた。

廃工場で騒ぎを起こしたという罪で投獄されていた仲間達は、皆その場から抜け出した。

（私が、ジューダスと……？……！！）

みんなの後ろを歩きながら、セルシアは先ほどのユーリのからかい

をひどく意識していた。

「どうしたセルシア？」

先頭を歩いていたジューダスが、様子のおかしいセルシアを振り返る。

「な、なんでもないですっ！」

らしくない、そんな返事をするセルシアであった。

「俺とティアを、仲間にしてくれ！！」

「私からもお願いするわ。兄さんと……決着をつけたいの」

夜が明けた頃、宿屋の前に呼び出されたジューダス達が聞いたのは、ルークとティアの頼みごとだった。ジューダスは黙って二人の言葉を待つ。

「俺は貴族の息子で、子爵の地位も持っている。だけど、いやだからこそ、今回の異変解決の責任は俺にもあると思うんだ」

「そして兄さんも、この異変に関係している……」

「俺とティアも話し合ったし、父上たちとも話し合ったんだ。異変

の調査をするべきだって」

「私も教団から許可を得ているわ。どうか、お願い」

「……」

ジューダスは頼み込む二人に背を向けると、わかりやすいため息をもらした。

「……足手まといにだけはなるなよ」

「……それじゃあ!!」

「……好きにしろ」

こうして、ジューダス達の旅に新たな仲間としてルークとティアが加わった。

皆が口々によろしくと言う中で、ジューダスだけは最後まで無表情のままだった。

やがてひとしきりの挨拶を終えると、ルークが口を開いた。

「そうだ、ティア……髪、切ってくんねーか？」

「え、ルーク？」

ルークは後ろ手で後ろ髪を束ねると、ティアに背中を向けた。

「旅に出る前に、改めて決意をしておきたいんだ」

「……まったく。いいわよ」

「へへ、サンキューな」

ルークの燃えるように赤い長髪を、ティアが優しく持ち上げる。そして適度な長さになるように、その後ろ髪をばつさりとナイフで切り払った。

あとの細かいところもティアは丁寧に切っていく。出来上がった髪

は、ルークの印象を変えるものだった。

「よし……覚悟は決めた。ヴァン師匠と、もう一度戦う！」

「ええ！」

「あのー。盛り上がってるところ悪いんだけど……」

ルークとティアが改めて決意を固めている中で、ファラがゆっくりと手を挙げて質問した。

「アブソーブゲートってどこにあるの？ここから遠いの？」

「……ああ。アブソーブゲートへは、船に乗っても何日かかるところにある」

「でも今朝、アルビオールを手配したわ。昼ごろには届くそうだから、それに乗っていけばあつという間よ」

「アルビオール？」

コレットが首を傾げた。

「ああ、アルビオールって言うのは、空飛ぶ乗り物なんだ」

「レアバードみたいなもの？」

「……そっちの世界の乗り物がなんて言うのかわからねーけど、同じようなものなんじゃね？」

「そっかー。到着するの、楽しみだね！」

「えー？そっかあ？これから行く先にはヴァン師匠がいるんだぜ？」

ルークはそこで、遠くの空を睨んだ。

「一秒でも集中して、ヴァン師匠を倒す心構えをつくらねーと」

「ルーク。到着は今日の夜ごろよ。そんな今から緊張してたら持たないわよ」

ティアの言葉に、ルークはまるで一気に気が抜けたように肩を落とす。

「べ、別に緊張なんかしてねーって」

「そうかしら。貴方、兄さんの事となるとすぐに力が入りがちだもの」

「……そ、そうか？」

「そうよ。まあ、もつとも……」

そこでティアは俯くと、ルークにしか聞こえないような小声で言った。

「兄さんのことに敏感なのは、私も同じだけれど……」

「ティア……」

ルークがティアの肩を掴む。ティアはゆっくりと顔を起こすとルークの顔を見た。

「頑張ろう、ティア」

ルークがその目に真剣の意志をたたえ、ティアを見た。

「……ええ！」

ティアもそれに頷きで返す。

昇る朝陽が、彼らの意志を輝かせた。

昼ごろ。ジューダス達のところに兵からの連絡が来た。アルビオールという乗り物が港に到着したのだそうだ。

早速ジューダス達は、その港に向かう。

そして、目にしたのは大きな飛行艇だった。ジューダス自信がよく知る飛行艇よりは小さいがロイドとコレットが想像していたレアバードよりもはるかに大きい。

ジューダス達が飛行艇の入り口付近まで近寄ると、一人の女性が近付いてきた。

「はじめまして。アルビオールのパイロットのノエルと申します」

ノエルと名乗った女性は、赤いパイロット服を着用している。

「悪いなノエル。また付き合ってもらうことになって」

「いいえ、ルークさんたちのお役に立つことが出来るならば、この子も喜びます」

ノエルはそういつて、アルビオールを指差した。

「さあ、乗り込もうぜ。これから半日をかけてアブソーブゲートに出発だ」

ルークが先導してアルビオールに乗り込む。他の者達も続いて乗り込んだ。

「うう……つぶ」

誰かが吐き気を催しているのだろう。その人物が意外すぎて、全員が見てみぬ振りをしている。

「ジューダス、大丈夫？」

コレットがジューダスの傍による。

「も、問題ない……はなし、かけるな……」
「問題あるよー。背中さすってあげるー」

ジューダスが一人でいたいといつてもなお食い下がるコレットは、そのままジューダスの背中をさすりだした。その様子を、ロイドとセルシアが眺める。

「どう？気分は楽になってる？」
「……」

ジューダスは無言のまま、何かに集中するように目を瞑っている。セルシアがはあとため息をついてコレットの傍に近寄った。

「コレット。疲れたら代わりますから」

「あ、うん！ありがとセルシア」

「いいえ、このくらい……それとジューダス。あまり無理しないで、

吐きたい時は吐いたほうが楽ですよ」

セルシアの言葉に、ジューダスはきつとした表情で答えた。

「吐くとか……そういうキーワードを……言っんじゃない！」

「……そうですか。失礼しました」

何となく不機嫌そうな表情を見せたセルシアは、そのまま自分の座席へと戻っていく。

「あと、どのくらいで着くんだ……」

ジューダスが幽鬼のような表情をしながら、横に座るルークに尋ねた。

「どのくらいって、ジューダス。まだ飛び始めて1時間も経っていないぜ？」

「ぐ……そうか」

「しっかりしろよ、異世界からの救世主さん」

「僕達は、別に、そんなんじゃない」

「そっか？」

「ルーク」

ティアがルークに話しかけた。

「ジューダスも辛そうだから、あんまり話しかけないであげなさい」

「……それもそうだな。これから戦いが待ってるのに、ダウンされちゃ困るもんな」

その言葉にジューダスはプライドを傷付けられたのか、ギラリとした目でルークを睨んだ。

「甘く見るな……お前よりは、僕のほうが、強い……」

「な……」

「……うつぶ。わかったら、これ以上、話しかけるな……本気で、お前と戦うぞ……」

「……悪かったよ」

ルークはそう言って、窓の外を眺め始めた。

（ヴァン師匠……）

先ほどまでとはうってかわって、真剣な表情で外を眺めるルーク。その瞳には、かつての師に対する様々な情念が込められていた。

「ヴァンって奴はよ、強いのか？」

ふいにユーリが聞いた。

「そっか。ユーリはヴァンと戦ってねえもんな」

リッドが返答する。

「おう。さっきも戦ったけど、あの時はほとんどジューダスとセルシアが相手してる状態だったからな。ヴァンの実力までは見切れなかったよ」

「強いといえば、強いぜ。俺の秘奥義で攻撃しても、ギリギリ相打ちになっちまったし」

「ヴァン師匠は、本当に強いんだ」

ルークが窓から視線を外し、ユーリとリッドの会話に割って入った。

「俺はあの人から剣術を学んだけど、あの人以上に剣術に長けている人を俺は知らない。」

それに剣術だけでなく譜術も得意なんだ！そして何より怖いのは、あの人はちょっとやそつとの傷じゃ絶対に倒れない……鋼の精神を持っている」

「……ルーク」

「自慢みたいに聞こえるかもしれないけど、本当なんだ。ヴァン師匠は強い。戦う以上は、みんな覚悟して欲しい」

ルークがそう言って黙ると、ティアが近寄ってきた。

「大丈夫よルーク。あなたは二度も兄さんに勝っている。今度だって負けないわ」

「……ああ」

ルークはそれきり黙ると、まるで精神統一をするかの如く俯いて下を見た。

ティアはそんなルークの姿を心配そうに眺めると、今のルークはてこでも動かないと諦めて自分の席へと戻った。

「みなさん。アブソーブゲートが見えてきました」

出発から数時間。ついにアブソーブゲートがその姿を現した。それ

は特別変わったところの無い洞窟のような入り口であった。

アルビールを着陸させ、昇降ハッチからジューダス達はアブソープゲート入り口へと降り立つ。

「ノエル」

「はい」

ルークがノエルを呼んだ。

「俺たちがこの遺跡に入ってから一日経っても戻ってこなかったら、先に戻って父上たちに連絡して欲しいんだ」

「ルークさん……」

そこでルークは黙ると、顔を上げて言った。

「ルーク・フォン・ファブレは、この異変の元凶を断つために、異世界の住人たちと共に異世界へと旅立ったってな！」

「……え？」

ノエルが不思議そうな表情をするが、やがてルークが何を言ったのかを理解すると、その言葉の意味を噛み締め、しっかりと返事をした。

「はい！任せてください！」

「ああ、頼んだぜ！」

「私からも、よろしくお願いね、ノエル」

ノエルの返事に、ルークとティアは笑顔でかえすと、振り返ってアブソープゲートの入り口を睨んだ。

「さあ、いきましょう。この遺跡の地下に、兄さんがいる……」

「今更気負う相手でもないけどな。油断しないでいこうぜ」

リッドの言葉に、全員が頷きで返すと、ゆっくりと洞窟へ足をすすめた。

アブソープゲートに突入したジューダス達。中は異様な空間が広がる迷宮のようであった。

「俺とティアが最下層までの道を案内するから」

そういつてルークが先頭を歩き始める。

「待ちな」

突然、ルーク達から見て右側から声が聞こえた。敵襲かと身構えるジューダス達。そこに現れたのは、紫の髪をし、体には簡素なブレストプレートをつけた青年であった。

「ああ！！君は……！！」

「スフィード！！？」

カウスとカノンノが驚きの声を上げる。二人にとって、クオイの森で一瞬だけ行動を共にしたあの青年が、今日の前にいるのだ。

「よお、お二人さん、お久しぶりい」

スフィードは軽い感じで近寄ってきた。事情を飲み込めないジューダス達は、未だに身構えたままである。

ジューダスは、カウスを横目で睨んだままたずねた。

「おいカウス。あいつは何者だ？」

「ああ、えーと……彼はスフィード。僕達がクオイの森で迷っていたときに一緒に行動していたんだ」

「個人的にこの異変について調査している人なんだって」

ジューダスの質問に、カウスとカノンノは答える。

（個人的に調査……だと？）

ジューダスが一瞬だけ目を細めた。

「疑わしいかい？」

それを見逃さなかったスフィードが、ジューダスに問いかけた。

「ふん、疑わしいに決まっているだろう。奴らの仲間か？」

「……奴らつてのが誰のことかは知らないけど、俺は誰の味方もしないぜ？少なくとも、この段階では」

スフィードのその言葉に、コレットが首を傾げた。

「この段階って？」

「まだ何が原因で異世界同士が繋がったのかわからねーし、誰かがその異変を広げようと考えているともかぎらねー。つまり、何もかもが怪しいこの段階で、誰かの味方をするっていうのはまずい考えだと俺は思っただがね」

スフィードの言葉に、一瞬だがロイド達の心が揺らいだ。そういえば、自分達は突然現れたジューダスとセルシアに導かれるままに行動してきたが、本当にそれは良いことだったのだろうか。

しかし、すぐにその考えを否定する。黒の石を操る敵もいるし、ジューダスはそれを相手によく頑張って戦っているからだ。そして、彼が仲間を良く見て、的確な指示を出していることも皆が良くわかつている。

ロイドはそう考え、口を開いた。

「で、でも俺達はちゃんと異変の解決のために動いてるんだぜ?」

「それもだよ。あんたらの行動が本当に異変の解決になってるのか? わかつてるのか?」

「そ、それは……」

ロイドが怯んだところで、セルシアが前に出た。

「今、私達は私達に出来る事をしています。貴方だって、そうなのでしょう。ならば、貴方に私たちの行動を否定する権利はありません」

「……」

セルシアの挑発的な言葉に、スフィードはやりとした笑みで返した。

「あんたら、俺が探している黒の石を探してここまで来たのか?」

スフィードが言った言葉に、ジューダス達は驚いた。

「貴様、黒の石の在り処がわかるのか」

「ちよつと生まれつきそういう能力に長けててね。この遺跡の地下にも黒の石がある……まあ、別世界からいきなり飛ばされた場所がここで、偶然発見できたただけなんだけども……」

スフィードはそこで何を思ったのか、突然剣を抜いた。

「あんたらのうちの誰か一人と俺とで決闘して、俺が勝ったらこの黒の石を諦める……っていうのはどうだい？」

「……何を考えている」

「言っただろ？俺は特定の誰かの味方はしねーって。だから、ここであんたらに優先的に黒の石を渡すよりも、自分を信じて自分のために黒の石を回収してやろうと思っただけ」

「ふざけたことを言うな。大体、僕達がお前の提案したルールに則る必要が無い」

「まあなあ。全員で攻撃されたら、流石に俺も勝てないから、俺のルールに則って欲しいんだけどよ」

「ちよつと待って！スフィードも僕たちと一緒に行動すればいいじゃないか！」

「カウス。それは違う。俺は最初に誰も信用しないって言っただろ？」

スフィードはそこで剣をジューダスに向けた。

「……どんな手を使って色んな世界から戦力を集めているのかは知らねーけどよ、ほどほどにしておけよ？余計な集団は統率力を失うからな」

対するジューダスは、ニヒルに笑って答えた。

「こいつらは少なくともそんなへましない。そのくらいの実力は持っている。僕はそういう奴の事はよくわかるんだ。僕と一緒に行動している奴に、足手まといなんていない」

「随分信用していることで」

「……ふん。利用してやっているだけだ」

スフィードはそこで剣を収めた。どうやら戦う気持ちがなくなっただけらしい。

ジューダス達も戦いの構えを解いた。

「……知ってるか？異世界中に現れた魔物の奴ら。新しい種類のが目撃されはじめている」

「……」

「異変は確実に進行しているぜ。解決するなら、早くないとな」

「貴様に言われなくともわかってる」

「まあ、お互いががんばりましょーや」

スフィードはそういつて、ジューダス達の横を通り過ぎようとした。

「待て。どこに行くつもりだ」

「どこって。地下だよ」

「……」

「置いてくぜ？」

スフィードはさっさと地下に降りていってしまった。

「……先導役は俺だっつーのに」

ため息をつくルーク。スフィードの事はこの際無視して、彼らもアブソープゲート最奥を目指して歩き始めた。

四章二話　く十字架を立てた者く（後書き）

まさかの二章二話で登場した謎の青年「スフィード」の再演でした。彼は誰の味方にもならないと言いながら、ジューダス達とともにアブソーブゲートを降りて行くつもりです。その真意は一体！？

さて、そんなこんなで四章二話は敵ダンジョンに突入するまでとなりました。ルークは髪を切ったのは、短髪の方が戦う決心をしているという私のイメージから来ています。

セルシアは、だんだんとジューダスに対する見かたが変わってきていますね。それが今後どうなるのか、物語と平行して楽しんでいただけたらと思います。

それでは、感想等お待ちしております。失礼しますく。

四章三話 愚かな師弟（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOD2・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：

新たにルークとティアを仲間として加えたジューダス達。アブソーブゲートを目指して飛行艇アルビオールに乗り込む。到着した先のアブソーブゲート入り口で、ジューダス達はスフィードと出会う。スフィードは、クオイの森でカウスとカノンが出会った青年であった。スフィードはジューダス達に協力はしないと断りながら、ジューダス達と同じようにアブソーブゲートの奥を目指す。ジューダス達も、スフィードに置いて行かれないように、先へと進むのであった。

四章三話 愚かな師弟

黒衣の守護者 四章三話 〽愚かな師弟〽

遭遇した魔物は4体。メデューサーパーなど、ジューダス達の敵ではない。しかし、それをたったひとりで片付けるとなると、事情は変わってくる。

「そらそらそらー!」

ジューダス達と、一時的に行動を共にしているスフィードが、光の双剣を両手に持ってメデューサーパーの群れに斬りかかっている。

ローパーの触手が伸びてくるが、スフィードはそれを見切っているらしく、首に迫る触手は首を捻って同時に片手の剣で斬り落とし、周囲から同時に迫る触手は、螺旋のステップを踏みながら斬り落とす。

「おらあ！」

同時に双剣を振りかざし、一体のメデューサローパーを絶命させる。振り返りざまに切り抜いて二体目のローパーを倒す。残りは二体。

「はい、終了つとお！」

スフィードは大きく体を反らして双剣を上にも構えると、体がかめると同時にナイフを高速で投げはなった！

ナイフはメデューサローパーの体に突き刺さる。そして突然光の塊が膨れ上がり、爆散した。

爆発の後にはメデューサローパーの欠片しか残っていなかった。

「……………すつごおい」

ファラが感嘆の声をあげる。他の者たちも、みな同じように驚いた顔をしながらスフィードの演武を眺めていた。

「やっぱり強いね。スフィード……………」

カノンノがカウスに言う。

「うん……………すごい実力者だと思う」

カウスもそれに同意する。

スフィードの動きは多勢に無勢でも問題なく立ち回っていた。それも一心不乱に。敵の攻撃を見切りながら攻撃を積み重ねるその強さに、仲間たちはジューダスのような強さをスフィードに重ねて見た。

「さて。次はどっちいけばいいの？」

スフィードが振り返ってルークに聞いていく。

「あ、ああ。このまままっすぐの道でいい」

「そうかい。ありがとな」

スフィードは簡単にお礼を言うと、さつさと先へ進んでしまう。

本当にジューダス達とは行動をともしないでおきながら、彼らとともに進むという奇妙な状態になっていた。

「ジューダス……彼の事はこのまま放っておいてよいのですか？」

セルシアがジューダスに尋ねる。ジューダスは顎に手をやって考えながら答えた。

「敵の可能性もあるが……今のところは様子を見ておいたほうがいいだろう。奴から奇妙な動きを仕掛けてきたら、その時は警戒しろ」
「ええ」

「いざとなれば総力戦であたればいい。いかに実力者とはいえ、これだけの人数を相手にできるほどの力があるとは思えん」

「そうですね……彼がもし敵ならば、不利な状況で行動しているということになりますものね」

「そういうことだ」

二人はそこで会話を中断すると周囲の者たちと同じように歩きだした。

スフィードのことは今は置いておいて、奥を目指すことにする。

「時に、お前らはみんな別の世界から集まってるのか？」

先を行くスフィードが振り返りながら言った。

その問いかけに、エステルが答えた。

「ええ、そうなんです。私たち、ジューダスに協力しようって考えて一緒に行動しているメンバーなんです」

「ふーん。それじゃあ、リーダーはその仮面の……ジューダス？」

「そんな風に名乗った覚えはないがな」

「またまた」。すげえじゃん。異世界の戦士たちを束ねる剣士ってことで」

「確かに……物語の主人公みたいだね」

カノンノがそうにつこりと笑いながら言うと、ジューダスはふいつとカノンノとは違う方向を見た。

「物語……ね」
スフィードも、何か思うところがあるのか、一言つぶやいたきり黙ってしまった。

「そういえば」

最奥を目指して歩き続けている中で、ロイドが呟いた。

「ルークとティアってどういう戦い方をするんだ？」

その質問に、ルークが答える。

「俺は剣士だからそのまま前衛で戦うぜ？ティアは……」

「私は譜術士だから、中衛から後衛で戦うわ」

「ティアは治癒術も使えるんだぜ。すげーだろ」

「へえ、そいつはありがたいな」

リッドが言う。

「俺たちの中で治癒術が使える奴って、今までエステルとカノンノくらいだったもんな」

「そうだねえ」

フアラもうなずく。

「私も気功は使えるけど、回復量は多くないし」

「私も、回復術はそれほど得意ではないのでありがたい戦力の加入ですね」

セルシアもティアの加入を素直に喜ぶ。

「おいおい……俺は？」

「ルークは剣士なんだろう？」

「多すぎるくらいだって……」

ロイドとリッドが苦笑いをしながらそう答えた。

「一応言っておくけどよ、俺だって譜術を使うことくらいできるん

だぜ？」

ルークのその言葉に、周囲のものは驚く。

「うそ、ルーク！？貴方、術を使えるようになったの？」

「ティア……そこまで驚く必要ないだろ。アッシュだって術を使ってただろ？」

「あ……」

「その名残かワカンネ　けど、俺も術を使えるようになったよ」
その時、突然魔物が現れた。

黒い狼……異変とともに姿を現し始めた魔物たちだった。数は5体

「じゃあいつちよ、俺の術を見せてやるぜ！みんな、援護を頼む！」

「おう！」

「任せろ！」

ジューダス達前衛組が我先にと魔物に向かって突進する。そんな中で、ルークは静かに詠唱を始めた。

魔物との乱戦は、今となつてはジューダス達にとってそれほど苦にはならない。ジューダスを含め、その場で戦っているロイド、リッド、ファラ、ユーリ、カウスは、それぞれの立ち回りから無傷で黒い魔物を追い詰めている。

そして、ルークの術が解放される！

「エクスブロージョン！！」

天空より飛来する火炎弾。それは着弾と同時に強力な爆発となって周囲を焼きつくす。ジューダス達の活躍によって一定範囲に集められていた魔物たちは、その魔術によってあつという間に黒こげになり、消滅してしまった。

「……すごいわ、ルーク」

ティアが感嘆の声を上げる。

そして、戦いには参加せず、遠くから見守っていたスフィードも、その光景を不敵に笑いながら見つめていた。

「へえ……やるじゃん」

ついにたどり着いたアブソーブゲート最奥地。この階層の真ん中にある魔方阵に乗れば、そのままヴァンがいるのである。部屋にたどり着くことが出来る。

「……あの時を思い出すな」

ルークが真剣な眼差しをしたまま、その部屋の魔方阵を眺める。

「この魔方阵の下が最下層なわけ？」

スフィードがルークに尋ねる。

ルークはそれに頷きで返すと、スフィードは両腕を組んでなにやら考え始めた。

「……パスだな」

「ええ！？」

突然スフィードが呟いた一言に、カウスが驚く。

「いや、この下に何が潜んでいるのか知らねーけど、悪い予感しかしねー。むしろお前ら本気で降りるのか？」

「な、当然だろ！この先にいるはずのヴァン師匠に会いに来たんだから！」

「黒の石を回収に来たんだろ？」

「あ……」

スフィードがルークに本来の目的を思い出させる。ルークは頭をかいてごまかした。

「とにかく俺はパスだ。様子見させてもらうよ。確かにこの下に黒の石はあるけど、その前にいる奴らの闘気が半端じゃねーもの」

「……一応聞くが、本当にこの下に黒の石があると、お前にはわかるんだな？」

ジューダスにとって、先ほどからそれが疑問であった。

それに対して、スフィードは返答する。

「俺は黒の石の存在する位置は……大体ならわかるぜ。たぶん、カウスと似たような感覚でな」

「なに？」

突然出てきたカウスの名に、ジューダスは眉根を寄せた。

「どういうことだ、カウス」

「……確実じゃないから皆には言ってなかったけど、僕は、黒い狼達が近くにいると、違和感が襲ってくる 때가 あるんだ。警戒しろって、頭の中で声が響く感じで……」

「そうそう、そんな感じ。俺も黒の石を近くに感じると似たような感覚を覚えるんだよ」

スフィードはそう言いながら、ジューダス達から離れていく。

どうやら、本当に下に降りるつもりはないらしい。

「とにかく、俺はパス。この下の黒の石はあんたらにあげるよ」

「……そうか」

「もちろん、無事に手に入れられたらの話だけだな。この下の黒の石はいつもと違う。妙な感覚がする。ヴァンって奴が何かやらかしたのかも知れねーけど、ただで済む事態じゃなさそーだし」

そして離れた場所に座り込んだスフィードは、ジューダス達に先へと進むように顎で促した。

そのスフィードの様子に、不機嫌な顔をみせるリッドとユーリ。
ジューダスは無表情のまま、魔方阵を見つめた。

「やっぱり行くのは止めるか？」

スフィードが嫌な笑みを見せながらジューダスに尋ねる。

「ふん。臆病風に吹かれたわけではない。ただ、お前の言っていたことが本当ならば、容易に飛び込めないだけだ」

「へえ」

「黒い石が暴走している……何度か聞いた事のある言葉だが、今回もそうなら、前回戦った黒いゴーレムのような強敵が潜んでいるかも知れん。その場合、ヴァンや、あのダルムハクトという男を同時に相手するには、あらかじめ戦力を決めておく必要があると思っ
な」

ジューダスはそう言って振り返ると、仲間達の顔を見渡した。

「戦力を今の内に分散する。ダルムハクトの相手は……」

「俺がやるぜ！」

ロイドがすかさず手を挙げる。

ジューダスがはあとため息をついた。

「お前一人で戦うのは危険だろう」

「あ、じゃあ私がロイドを手伝うよ！」

コレットが手を挙げた。

「……そうだな。最低限二人で組むか。相手の手数が分からん以上、こつちも最低限の戦力で分けておくべきだ」

ジューダスはそう言うと、もう一度仲間達を見渡す。

そこで、ルークが手を挙げた。

「すまないジューダス。わがままかもしれないけど、ヴァン師匠の相手は俺一人に任せてくれないか？」

「ルーク!？」

その発言になによりも驚いたのはティアだった。

「何を言っているのルーク！兄さんを相手に一人だなんて……」

「ごめん、ティア……だけど、俺はやりたいんだ……ヴァン師匠と、一対一で」

ルークのその宣言を、周りにいたものは驚きながら聞いていた。

しかし、ジューダスは首を振ってルークに近付きながら、言った。

「ダメだ。危険であるとわかっておきながら、あえて行動するなど許さん」

「……ジューダス」

「……どうしても最低限の戦力で動かなければならなかったときは、お前にヴァンの足止め役を頼むでしょう。それでいいか？」

「あ、ああ……！」

ジューダスが妥協案を提示すると、ルークはそれを素直に受け入れた。

その様子を、セルシアは微笑みながら見ていた。

細かな戦力の割り振りも終わり、ジューダス達はいよいよ魔方陣へと突入する。

「頑張つて来いよー」

離れたところからスフィードがあまり関心の無さそうな声で呼びかける。

「……ふんっ」

ジューダスはそれを無視すると、そのまま魔方陣のなかに立った。

降り立った部屋の奥には、三人の人影があった。

「来たな……」

真ん中の人影がこちらを振り返りながら呟く。その姿は、ヴァンであつた。

「あの工場での戦いの続きと参ろうではないか！」

威勢よく出迎えたのは、ダルムハクトだ。そしてもう一つの影は。

「ようこそ」

無言のまま振り返ったその姿は、ジューダス達にとって始めてみる顔であつた。

顔にはピエロのような化粧が施されており、その不気味さが際立っている。髪は清潔に整えられている分、顔が際立つ。

服装は黒と白を基調としたチェック模様が固められていた。

「ようこそ、この素晴らしき劇場の舞台へ」

化粧顔の男がジューダス達に歩み寄る。

「これから見せるのは、混乱の極み。貴方達が自分たちを信じられなくなる戦でありましょう。どうぞ、ご堪能ください」

「くだらない前置きなどどうでもいい。貴様は何者だ」

「申し遅れました。私はシャムレイド・ギューティン。以後お見知りおきを、ジューダス様」

「……」

シャムレイドと名乗った男は、再びヴァンの横に着くように舞い戻つていった。

「……ヴァン師匠」

ルークが、ヴァンを見つめながら呟く。

「ここは、始めてお前が私を倒した場所だ」

「はい」

「いわばここは、私にとっての鬼門でもある。なのに何故、この場所を採用したかわかるか？」

「……」

「ここでお前たちを潰し、私の汚名を注ぐつもりだからだ。このヴァン、今度こそ貴様達に勝つ――！」

ヴァンはそう高らかに宣言すると、右手に黒の石を持ってそれを高く掲げた。すると、黒の石が靄を発生させる。

靄を発生させたまま黒の石は空中に浮かび上がると、その姿を黒いドラゴンにして地上に降り立った。

「グルルル……」

「ドラゴン？」

エステルの緊迫した声が漏れる。

「そうだ！魔物の中でも高位の存在！それを解き放ったうえで私は戦う！」

「師匠も余裕が無いってわけか……」

ヴァンの言葉にルークは敵の徹底した意思を感じた。ヴァンは自分たちを相手に余力を残すつもりは無いらしい。

そして、新たな敵、シャムレイドも気になる存在だ。ジューダスにとって、不可解な相手だろう。

「いくぞ！僕とセルシアがシャムレイドの相手をする――！」

ジューダスがセルシアを連れて駆け出す。

「だったら、俺とコレットがダルムハクトの相手だ――！」

ロイドがコレットを守るように剣を抜きながら、ダルムハクトと対峙する。

「私とリッドはドラゴンの相手ね！」

ファラが拳を打ちつけながら、リッドと共に黒いドラゴンの前に立った。

「おいファラ。俺とエステルも入れてくれ」

ユーリとエステルも黒いドラゴンの前に立つ。

「あ、えーと、僕とカノンノは……」

「お前達は遊撃部隊だ。とりあえず、ユーリ達の援護にまわれ」

ジューダスがカウスに指示を与える。

そして。

「……兄さん」

「ヴァン師匠！」

「来い……ルーク！！メシユティアリカ！！」

今ここに、愚かな師弟の対決が始まろうとしていた。

ダルムハクトの二刀流は、はつきりと自分のものよりも強い。ロイドはあの廃工場の戦いでそれを認識していた。

まず、技の圧力が強い。クラトスと戦ったときにも感じたことだが、強力な剣士とは例え防御してもその威力を殺しきれないほど、剣に込められた力が桁違いであることが多い。思えば、クオイの森で戦ったあの銀髪の剣士もそうであった。

「くっ！！」

一撃一撃が自分の腕を痺れさせる。ロイドにとって、ダルムハクトの猛攻は凌ぎきれぬものではなかった。

（弱気になるな……負けるもんか！！）

地面を踏ん張り、次の一撃を耐える。ダルムハクトが右手の剣を振り下ろした直後、体を全力で捻って防御の流れを攻撃へと転じた。

「たああ！！！」

右腕の剣、「氷虎」を目いっぱい振りかぶり、ダルムハクト目掛けて振るう。

その一撃は、彼の左腕の剣で防がれた。しかし止まっていけない。

ここから連続で攻めきるのだ。

ロイドはすぐに体を反転させ、氷虎を横に薙いだ。

「おっと！」

その横薙ぎに振るった剣を、ダルムハクトはバックに飛んでかわす。そこを息もつかせぬように追いかける。

「虎牙破斬――！」

「ぬっ！？」

ダルムハクトの目の前をロイドの剣がすり抜ける。虎牙破斬返しの切り下ろしは防御された。

「秋沙雨――！」

「ぐっ、ぬうう！」

「ぶつとべ、獅吼旋破――！！！」

「甘いぞ小僧――！戦吼爆ツ破――！」

二人の闘気が激突し、互いの体をそれぞれの後方へと飛ばさんとする力が生まれる。しかし、ロイドもダルムハクトも退かない。ここで後ろに下がれば、主導権をとられると思ったからだ。

しかし、ダルムハクトには誤算があった。

「リュミエレイヤー――！！！」

3つのチャクラムがダルムハクトの体目掛けて飛んできたのだ。

これは流石に避けることが出来ず、ダルムハクトは後方に弾けとんだ！

「ぐあっ――！」

「ナイスだ！コレット――！」

ロイドが一気にダルムハクトに接近する。

「ロイド――！頑張っ――て――！！！」

「うおおおお――！！！」

ロイドの猛攻が始まる――！

凄まじい連撃を、しかしダルムハクトは何とか凌いでいる。

（このままでは小僧の独壇場か……ならば――！）

ダルムハクトは急に剣を交差させてロイドの攻撃を待った。

（何か仕掛けてくるのか！？）

ロイドも直感するが、攻撃の手を止めるわけにはいかなかった。そして、ロイドの剣がその交差された剣を弾き飛ばそうとしたとき。

「奥義・十字返燕^{じゅうじがえしつばめ}！！」

ダルムハクトの剣がなにやら奇妙な形に動いたかと思うとロイドの剣をそのまま流し、なんとダルムハクトの左肩にロイドの剣が刺さるのを許した。

しかし同時にダルムハクトも動く。そのまま交差させた剣を横に薙ぐと、ロイドの胸に真一文字の傷がつけられ、そこから鮮血が噴出した！

「ぐあ……しまっ！！」

「くく……肉を切らせて骨を断つ、じゃよ小僧おー！！」

そのままダルムハクトの追撃が迫る！

「ロイド！！頑張つて！！『跳んで』！！」

その叫びはコレットのものだった。コレットはいつの間にか何らかの術の詠唱をしていたらしい。コレットの言葉と共に、ロイドは力ツと目を見開き、ダルムハクトの追撃から逃れるように天使化して上空に逃げた。

「逃がさんぞ！小僧！」

ダルムハクトが剣を突く構えを取る。

しかし、ロイドはすぐに振り返って剣を構えた！

「誰が逃げるかよ！！爺さん！！」

「ロイド……行くよ！！」

コレットが術を解放させると、ジャッジメンとの光の束が降り注ぐ。その中の一つが、ロイドの剣に宿った！

「紫電突!!」

「奥義・天光爪魔斬!!」
てんこうそうまざん

コレットの光の魔力を宿したロイドの二刀が、天空よりダルムハクト目掛けて振り下ろされた。対するダルムハクトも、ロイドを打ち落とさんと雷を纏った剣を突くが……。

「な!? 打ち消された、だと……!!」

降り注ぐ光の刃。それを防ぐために防御結界を発動するも、そのあまりの威力に自身のダメージが限界を超えたことを認めざるを得ないダルムハクトであった。

シャムレイドは、思った以上の強敵ではない。

ジューダスは、そうなんとなくだが実感していた。

「双連撃!」

「くっ!」

先ほどからジューダスの攻撃とセルシアの攻撃を、ただひたすら防御するだけのシャムレイド。その防御の仕方、常にギリギリで回避するという余裕の無いものであった。

（ただの雑魚か?）

そう思うジューダスだが、しかし違和感はぬぐえなかった。この道化師をかたどった男には、何かある……そう悪い予感がしていた。「そろそろこちらからも、手を出しましょう!!」

シャムレイドはそういつて、両手を合わせた。同時に出現する魔法陣。

ジューダスとセルシアは警戒し、その魔法陣に近寄らないようにし

た。

「はっ!!」

軽い掛け声と共に、魔法陣から大量の白い煙が現れた！

「ジューダス、これは！」

「な、煙幕だと！」

白い煙は密度が濃く、少し先の視界さえ奪っていく。そんな中で、ジューダスは素早くセルシアの背後に回った。

「ジューダス!？」

「セルシアはそっちを警戒しろ」

「はい……ですが、こう視界が悪くては、私はまともに戦えません……」

「大丈夫だ。お前の背後はもちろん守るし、近くに敵がいるとわかったらすぐに僕が行ってやる」

ジューダスがそう言うのと、周囲への警戒心を高めた。

セルシアが少しばかり頬を赤らめていることには気付きもせず……。

開幕の一撃は、ルークのものだった。

突進から繰り出された一撃を、ヴァンは難なく防御する。

「はあ!!」

ヴァンがルークの剣を振り払い、その首を断とうする。

「ふっ!!」

ぶつかり合う両者の剣。

攻撃と防御を互いに繰り返しながら、ルークとヴァンの戦いは続く。

「ルーク！そのまま耐えていて！」

ティアが詠唱に入っていた。そのまま術を開放し、ヴァンを倒す目算である。

「いくわよ……エクレールラルム！！」

ヴァンの足元に十字型の光が刻まれ始める！
しかし。

「甘いぞ、メシユティアリカツ！」

ヴァンは防御結界を発動させながら大きくサイドステップを踏んだ。ティアの術はヴァンには届かない。

「逃がすかー！！」

しかしそれを追撃するルーク。横なぎに思い切りよく剣を振るう。

「はあ！！」

ヴァンも負けじと剣を振るう。再び二人の剣が激突する。

ルークの剣、ローレライの鍵はヴァンの重たい剣を確実に受け止めた。

しかし、ルークの腕力までもがヴァンの一撃に耐えられるわけではない。叩きつけられる一撃に腕を痺れさせながらルークはヴァンを追う！

「エクレールラルム！！」

再び、ティアの術が発動する。それを横っ跳びでかわすヴァン。それを追いかけるルーク。

「たあ！！」

ルークの剣がヴァンを捉える。

「ええい！しつこい！」

ヴァンが飛びのきながら大きく剣を振るった。その一撃をかがんでかわすルーク。

「近づいた！！」

「ここからだ！！」

ヴァンの懷に接近したルークは、そのまま攻撃態勢に入る。しかし、ヴァンはすぐさま左手に闘気を込めると、飛び込んできたルークの

頭めがけて構えた。

「！！！」

ヴァンの特技が炸裂する！ルークはかるうじて頭をそらし、その威力をまともに受けることは免れたが、体を後方に吹き飛ばす力には逆らえなかった。

「ぐあー！！」

「ルーク！！」

「くらえ！！」

後ろに飛ばされるルークめがけて、ヴァンは剣を突き出すように構える。光龍槍の構えだ。その切っ先は、ルークの心臓を狙っている！

「光龍槍！！」

解き放たれた光の龍は、しかしルークの心臓を貫く事はできなかった。

途中でルークが体勢を立て直し、ローレライの鍵で受け止めきつたからだ。

（あの状態から我が光龍槍を防ぐとは……）

ヴァンも驚く。ルークの身軽さを侮っていたらしい。

「今度は、こっちの番だ！！」

ルークが飛び込む。ティアが詠唱を開始していないことに気付いたヴァンは、そのままルークを迎え撃つ。

激突する師弟の剣。

「……腕を……上げたな」

「……まだまだ、これからです！」

気合と共にルークがヴァンの剣を弾く。ヴァンが驚きと共に一瞬の隙を見せると、ルークはすぐさま剣を横に薙いだ！

「ぬっ！ぐおっ！！！！」

「入った！！？」

互いに驚く師弟。ヴァンにとっては鏢競り合いを弾かれるなど予想外であり、ルークにとってもそれは同じだった。

「クッ！！」

「とどめだ!!」

再度ルークが攻撃に入る。ヴァンがそれを受け止めようと防御結界を張り巡らせる。

（これではその場しのぎにしかならん!!）

自分のうかつな行動に舌打ちするヴァン。しかしどうやら、攻撃力は今の弟子のほうを上向いているらしい。

（違うな……気合で押されているのか）

「ルーク……」

「!？」

防御結界が解き放たれるその瞬間、ヴァンはゆっくりと顔を上げた。
「私も本気を出すでしょう……」

防御結界が解かれた。ルークがすぐさま剣を振るう。その剣を、ヴァンはなんと自身の右腕で受け止めた！

「な……!？」

「……いずれ、な。今の私では、お前と対等には戦えんらしい」
ヴァンはそう呟くと、黒の靄に包まれ始めた。

「ま、待つてくださいい師匠！逃げるんですか!？」

「そうだ。これは撤退だ。そして、敗北だ……どうやら私は、いつの間にか精神がなまくらになってしまっていたらしい……」

ヴァンはそのまま黒い靄に完全に包まれ、その姿が見えなくなっていた。

「その精神を鍛えなおし、再びお前と合間見えよう……さらばルーク……我が、弟子よ」

「あ……」

逃げられた。そのことよりも先に思ったのは、ヴァン師匠が自分を弟子だと認めてくれたという事だった。しかし、今のヴァンはかつて戦ったヴァンよりもはるかに弱かった気がした。一体何故なのか

……。

ドラゴンも、6人がかりで挑めば恐れるに足りなかった。

「これだとめだ！龍虎滅牙斬！！」

「おらあ！！漸毅狼影陣！！」

リッドとユーリの秘奥義が決まり、ドラゴンはあっけなく倒れていく。

そんな中、後方で支援していたカウスとカノンノの傍に、一人の黒い影が近付いていた。

「よくやったな、お前たち」

「あ、ジューダス！」

「そっちも片付いたの？」

ジューダスがカウス達に近付くと、カウス達は振り返ってジューダスの安全を確認した。

「ああ、残りの奴らの様子を確認しに行くぞ」

ジューダスはそう言って、カノンノの手をとった。

「え？」

「え、ええ？ジューダス？」

カノンノの手を突然握ったジューダスに、思わず二人は瞠目する。

しかし、ジューダスは一瞬だけニッと笑うと、カノンノを思い切り引っ張り、後ろ手で彼女を拘束した！

「え、な、なに！？」

「動くな」

「ジューダス！一体何の真似だ！」

「さて、一体何の真似でしょうねえ……ククク」

カノンノを捕らえたジューダスは、そのまま腰から細剣を引き抜き、カノンノの首筋に当てる。

「お、おい！なにやってるんだ！！」

「これは……！！」

戦い終わった者達が次々に集まる。ジューダスがカノンノを殺そうとしている光景に、皆が驚く。

何よりこの光景に驚いていたのは、セルシアだった。

「ジューダス……これはどういうことですか？」

「……」

「貴方が、あそこでカノンノを襲っていますよ……」

『隣にいる』ジューダスに、セルシアは語りかける。

「嵌められたな。これがシャムレイドの奥の手だったんだ」

「……変身能力！」

「ああ。さっきの煙幕の中で僕に化けて、カノンノに接近したんだろっ」

ジューダスは苦虫を噛み潰したような表情をしながら、目の前で起こっている出来事を睨んだ。

「さあ、異世界の英雄たちよ。彼女を傷付けられなくては、武器を置いてもらいましょうか」

「み、みんなダメ！」

カノンノが叫ぶが、仲間達はゆっくりと武器を下ろし始めた。

「意外ですねえ。たった一人の仲間のために、私の言う事を聞き入れるなんて」

「……卑怯者め」

「いえ、ここは戦場です。戦場においては、仲間が一人人質にされたくらいで怯んでは話にならないのですが……どうやら貴方達は私が想像していたよりも甘かったらしい」

「それは、どうかな」

突如、カウスがシャムレイドの前に出た。その手に武器を持ったまま。

「カウス……」

カノンノが緊迫した声で彼の名を呼ぶ。

「……武器を下ろさないのでですか？」

「……」

「それでは、彼女には消えてもらいましょう」

「やめろ……」

ユーリが叫ぶが、シャムレイドの手は止まらない。そのままカノンノの頸動脈をかき切るように剣を引いた！

しかし、鮮血は噴出しなかった。

「なに！？」

「カノンノを離せええ……！」

カウスがシャムレイドに突撃する。シャムレイドは一瞬何が起ったのかわからなかったせいで、その突撃を回避することが出来なかった。

ザクリと、カウスの剣がシャムレイドの脇に刺さる。

「ぐむ……な、なぜ……？」

「カウス……ありがとう」

「良かったよ、カノンノ」

見れば、カノンノの足元に何かが砕けたのであろう欠片が転がっていた。それを見てシャムレイドは驚愕する。

「……リパースドール……！」

「そうだ。カノンノには予め、リパースドールを装備させてたんだ」
リパースドール。持ち主に命の危機が迫った際、一時的に強力な防御結界を発動させ、持ち主の身の安全を守る装備品である。

カウスはかつて次元の狭間の街で、このリパースドールをカノンノにプレゼントしていたのであった。

「ちい……だが、まあいいでしょう……貴方達の甘さを知ることが出来た。それだけで今回は良しとします」
言いながら、シャムレイドの周りに黒い靄が漂い始める。彼もまた、この場から立ち去った。

無事に戦闘が終わり、ジューダス達はヴァンが手にしていた黒の石を回収した。

そして、黒の石同士が反応し、再び次元の亀裂が現れた。

「また、新しい世界に行くのか」

ジューダスが呟いた。

「俺とティアも行くぜ」

「兄さんとの決着はまだついてないもの」

そっとう二人の目には、既に引かない覚悟の瞳があった。

「よし、行くぞ……」

ジューダスが戦闘を歩き、その新たな次元の亀裂に入っていく。

その先が、かつての自身の故郷であるという事は、今は知らずに……。

四章三話 愚かな師弟（後書き）

書き続けて思う事は、長編ってプロットの管理が大変だと思うことと、新しいアイデアをついつい採用して話が膨らんでしまうことが問題であるように感じます……

どうも。読了ありがとうございます。

今回も新キャラが出ちゃいましたね。シャムレイド。彼は変身能力の使い手であるという、実はその場で思いついた登場人物でした。このキャラクタを上手く物語りに絡ませられるかどうか、今から不安ですw

さて、次の世界でジューダス達の仲間集めは終わります。いわば物語の第一部が終るという感じですね。これだけグダグダやっておきながらまだ第一部なんて、自分でもちゃんとかき終えられるか不安ですが、頑張っていくしますのでこれからもよろしく願います。

それでは、失礼します。

五章一話　く再会く（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOD2・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：スフィードと共にアブソブゲート内を進むジューダス達。スフィードは黒の石の回収を目的としている以外には何を狙っているのか不明な男であり、最下層を前にジューダス達と別れてしまう。最下層でヴァンとダルムハクト、そしてシャムレイドと名乗る男と対決したジューダス達。見事勝利し、新たな黒の石を入手したジューダスたちは、その黒の石が反応して生み出された新たな次元の亀裂に飛び込むのであった。

五章一話 〱 再会

黒衣の守護者 五章一話 〱 再会

次元の亀裂を抜け、ジューダスが着地した場所は、何か機械的な構造をした建物の中であつた。

そこら中に植物の根が張つてある。

「ここは……まさか」

ジューダスはその光景に見覚えがあつた。カイルと共に訪れたことのある場所だつたからだ。

「ラゲナ……遺跡……」

呆然としたままジューダスは呟く。

「知ってるのか、この場所を」

ロイドが横から聞いてくるが、ジューダスはそれには答えずゆっくりとあたりを見渡す。

その様子に、セルシアはここがジューダスの生まれ故郷の世界なのだと気が付いた。

「ジューダス……ここが、貴方の世界ですか？」

その質問に、ジューダスはゆっくりと頷きで返した。

「ああ……恐らく、な」

「恐らく？」

「ここに来た事はあるが、様子が少し違う。……僕が来たときよりも、植物の根が伸びきっていないようだ」

「……ということは」

「この場所は、僕が訪れたときよりも時代が前なんだろう」

ジューダスは歩き始めると、目の前にある扉に触れた。

自動で開閉するような形の扉だったが、ジューダスが扉の前に立つても変化が起こらない。

「建物の機能が死んでいるな……」

ジューダスはそう言うと、剣を引き抜き、それを構えた。

「はあっ！！」

気合と共に放たれた剣閃。ジューダスは扉を切り裂くと、そのまま吹き飛ばした。

「……行くぞ。この世界の黒の石について調査しなくてはならんかな」

「……ええ」

セルシアが頷きながらジューダスに近付く。

他の者達も、ジューダスの後に続いた。

その後ろで、誰かが次元の亀裂を通り抜けたのだらう。ジューダス達が去った部屋に、一人の青年が降り立った。

「……他の世界の連中よりも、積極的に動いてる。やっぱり何かある

な、あいつら」

青年　スフィードは、目を細めながらにやりと笑うとそのまま
ジューダス達の後を少し離れた位置から追いかけはじめた。

遺跡内部を探索しながら、ジューダスはあることを考えていた。
それは、この時代がスタンたちが世界を救った直後の時代である可能性についてだった。

このラグナ遺跡は、以前ジューダスがカイルと共に訪れたときよりも植物の発育が遅れている。ということは、少なくともジューダスがカイルと出会うよりも前の時代である可能性が高い。

確定ではないが、恐らくスタンたちが活躍した時代からそう離れてはいないだろう。

「ジューダス……ここが貴方のもといた世界ならば、貴方はこのまま黒の石の調査を続けていていいのですか？」

セルシアが黙考するジューダスに突然問いかけた。

「……どういう意味だ？」

「いえ……」

セルシアは目をつぶって、先の言葉を続けるか少し迷った。

「……貴方には、会いたい家族や友人がいるのではないかと……」

「……いや」

ジューダスは目を細めて首を振った。

「僕には会うべき家族も……友人も、いない」

「……」

「確かに、共に戦った者達はあるが……会う気にはなれないな」

それはジューダスが自らを罰するが故の発言であった。

セルシアはジューダスの過去を知らない。しかし、会う気になれな

いという彼の言葉には何か隠された事情があるのだという事はジューダスの雰囲気から察することが出来た。

「……そうですか」

セルシアはそう返事すると、納得したように頷いた。

「では、早くこの世界でも黒の石を見つけて、また別の世界へと調査に行きましょう」

「……ああ」

二人は黙って先導を始めた、その時だった。

「きゃっ！」

突然、コレットが声を上げた。

「ど、どうしたコレット？」

ロイドが驚きながらコレットに声をかける。

コレットは自分の頭に手をあてている。彼女の頭には、何かドロドロとした液体がついていた。

「う、ううん。急に頭の上に何か落ちてきて……」

コレットがそう言いながら、ゆっくりと上を見上げた。つられてロイドも上を見る。

「なっ!？」

「ええっ!？」

二人は驚きの表情と共に声を上げた。

天井には、薄暗い緑色の体を持った、おぞましい魔物が張り付いていた。

「ギャアアアアアッ!!」

魔物は絶叫とともに、ロイドとコレットを押しつぶさんと天井から飛び降りてきた。

「おらぁ!!」

それに素早く反応したのはユーリだった。遠距離から絶風刃を放つ

て魔物に気流の刃をぶつける。

魔物はそれを体に受けると、そのまま気流の刃に押されてロイド達の傍に墜落した。

「サンキュー、ユーリ！」

「礼はいい！それより来るぞ！」

魔物はそのまま起き上がると、ロイド達に向かってその顔を向けた。目は退化し、なくなっているらしい。ぽっかりと空いた口が、獲物を何でも飲み込む様子を想像させ、不気味であった。体には翼が生えている。どうやら飛行能力も持ち合わせているらしい。

顔の上半分には、紫色のまだら模様が刻まれている。

「うげ、気色悪い……」

構えながらロイドが呟いた。

魔物は、しばらく様子見を続けていたが、やがて体を大きく反らし始めた。

「コレット……！」

「うん！」

その様子を警戒したロイドとコレットは、天使化してその場を離れた。

魔物は体を大きく振ると、つい先ほどまでロイド達が居た場所目掛けて、紫色の液体を口から射出した。

「ゴポツ……！」

紫色の液体は地面にぶつかり、そのままゴポゴポと泡立ち、煙を発生させながら残った。

「おいおい、これって……」

「毒液、だな」

リッドが不気味そうに呟いた言葉に、ジューダスは平然と返した。

「……それもかなりの猛毒だ」

「……逃げたほうがよくね？」

「逃げられるならばな。いきなり気配も無く天井から襲ってくるあ

たり、この魔物から逃げ切るのは難しいだろう」

ジューダスが剣を鞘から抜きながら、ゆっくりと魔物に近付いていく。

そして、彼の持つ剣に闇のオーラが纏わり始めると、そのまま悠然と彼は走った。

「一撃離脱で戦え！決して深追いはするな！！」

ジューダスは仲間達に指示しながら、魔物の翼目掛けて切り込んだ。魔物は素早くその場から天井に向かって飛ぶと、ジューダスの剣をかわした。

「ゴポ！」

魔物の反撃は、先ほどと同じ毒液の射出による攻撃であった。ジューダスは素早くその場から離脱する。

毒液は、またも地面に降りかかるのみとなった。しかし、その毒の強さは明らかであった。地面に生えていたツタが、みるみるとしおれていったからだ。

「厄介だな……」

その様子に、ジューダスは更に警戒心を高める。魔物の毒液による攻撃は、果たしてパナシアボトルやこの場に居るものの治癒術で回復できるものなのか、ジューダスにも判断がつかなかった。

魔物は再び、様子見をいわんばかりに動きを止めている。

「こいつ……俺達が隙を見せるまで動かないつもりだな……」

ユーリが鋭く魔物を睨む。

魔物には両目が無いが、その表情は不気味に微笑んでいるようにみえた。

「そいつの名前はギギネブラ。とある異世界の、ちいっと強力なモンスターさ」

突然、ジューダス達以外の人物からの声がした。声のした方を、ジューダスが睨む。

「……スフィード」

「よお」

「……あの世界からついてきたのか」

「まあな」

短い応答。

ジューダスの事は見ず、魔物にたいして余裕の笑みを見せながらスフィードは剣を構えた。

「まあ、見てな。こいつから逃げる方法を教えてやるよ」

スフィードはそう言うのと、彼の傍に生えていた大木に向かってその剣先を向けた。

「……焼き尽くせ」

振りかぶった剣に宿る炎。

彼は樹に向かって薙ぎ払うと、その樹は瞬く間に強大な炎の塊となった。

「ギイ!？」

ギギネブラと呼ばれた魔物が、突然驚いたようにその燃えさかる炎の方へ顔を向けた。

その様子を見ていたジューダスが、ぼそりと呟く。

「そうか……奴は」

「ああ。『温度』で敵の居場所を探しているのさ。だから、より強力な温度が周囲に現れると、敵の居場所を見失いやすくなる」

「……」

「行こうぜ？今の内に、この遺跡から抜けたほうがいいだろ？」

そう言うて歩き出すスフィード。

燃えさかる大木とモンスターを後にして、ジューダス達もスフィードに続くように走り出した。

「もうすぐ出口だな」

歩きながら呟いたのはスフィードだった。

彼等はあるから10分ほど、瓦礫が積み重なる道なき道を歩いてきた。

やがて、遺跡の出口と思われるぽっかりと空いた穴が見えてきた。

「さて、ジューダス。俺はお前たちとしばらく行動を共にしようと思っんだが、どうだ？」

「何？」

突然のスフィードの提案。

ジューダスは驚きの表情を浮かべた。

「さっきも俺の助けがあったからピンチを切り抜けられたんだろ？」
「……」

「俺を戦力として加えることに、何か問題があるかい？」

このときジューダスは、スフィードという男の瞳に不穏なものを感じた。

この男には、他の者達と違い何かがある。

裏があるというだけで、今回のようなまだ五里霧中の状態で旅を続ける自分たちにとっては危険な要素である。

「……お前は、どこの世界の人間だ」

「……なぜ、それを問う必要がある？」

「先ほどのギギネブラというモンスターについて詳しくかった。あのモンスターとお前は同じ世界の住人か？」

「……ああ、そうだよ」

スフィードは何も隠す必要がないと、その言葉を認めた。

ジューダスは更に質問を続ける。

「ならば何故、その異世界のモンスターがこの世界に現れている。お前は何か知っているのでは無いか？」

「……」

スフィードは黙り込んだ。そして思案するように顔を上に向けた。しばらくして、スフィードは口を開いた。

「原因が、俺のもといた世界にあるかもしれない…… っるところまでなら、俺は予測を付けている」

「お前の世界が…… 原因だと？」

「ああ」

スフィードはゆっくりと歩き始めた。

ジューダスもセルシアと顔を合わせた後、歩き始めた。

「これはあくまで俺の予測なんだがな。今回の異変、特に異常事態が大きいのが俺の住んでいた世界なんだよ」

「なに？」

「他の世界を巡っていて、俺は理解した。この異変の進行状態…… っつてのがあるんだとしたら、俺の世界が一番進行している。それが何を意味するかって考えたら、答えは…… 俺の世界に、この異変を起こしている何かがいる…… っつてことだ」

「……」

「もちろん、俺は自分のもといた世界に戻るべきじゃないかと考えた。けどよ、なかなか自分の住処に戻ることが出来なくてな。こうしてあちこち徘徊しながら、いつか自分の世界に戻れると考えて行動してるってわけさ」

スフィードはそこでカウスを見た。

カウスは、前に交わしたスフィードとの会話を思い出す。

「スフィード。君は言っていたね。『俺の世界は死にかけている』って……」

「死に掛けの世界？」

ロイドがその言葉に反応する。かつて衰退世界と呼ばれていたシル

ヴァラントに住んでいたロイドにとって、死にかけていく世界という言葉には理解があった。

「……そう。俺の世界は死にかけている。もしかしたら、この異変のせいで俺の世界の命は削られて行っているのかも知れない」

「そんな!!」

カノンノが驚きの声を上げた。

スフィードは首を振って、

「まあ、詳しい事はわからねーさ。ただ人間やそれ以外の命も攻撃するあの黒い魔物達が、世界にとっていい存在なのかどうかって言われたら、なあ？」

だから俺はこの異変について調査している。自分のもといいた世界を喰らっているかもしれない、姿の见えない悪魔の影を追っかけているのさ」

そう淡々と答えた。

「……異変が、世界を殺す？」

ぼんやりとした調子で、ルークが呟いた。

「待って、ルーク。それらは全て彼の予測なのでしょう？まだ私達の世界に何が起こっているのかは、わからないわ」

ティアがルークの傍で彼を諭した。

まだ異変が何を目的に起こっているのか、異変によって何が起こるのかはわからない。あくまでスフィードの予測の上での話しなのだ。

「どうする、ジューダス？異変の現況たる世界の住人かもしれない俺を、仲間に加えるかい？」

スフィードは、そのままニヒルに笑いながら問いかけてきた。

「……」

その提案に、ジューダスは答えない。沈黙が二人の間に漂い始める。

「なあ、ジューダス」

そう言つて二人の間に入ったのルークであつた。

「俺たちにはわからない事が多いんだ。スフィードの協力を得た方がいいんじゃないか？」

そういうルークの言葉に、ティアが続く。

「そうね……異変の原因があるかもしれない世界の住人……私達がこれから動いていくには必要な人材じゃないかしら」

「……」

ジューダスは答えず、思案を続けていた。

やがて小さくため息をつく、ジューダスは先頭を歩き始めた。

「お前を信用したわけじゃない。だが、今はお前の提案に乗るとしよう」

「りょーかい。ジューダス」

「ふん……」

先を歩き始めたジューダスに続くように、スフィードも歩き始めた。

「おやあ？」

その一歩を止めて、後ろを振り返るスフィード。

「どうしたの？」

カノンノが足を止めたスフィードに問いかける。

スフィードは凶悪な笑みを貼り付けたまま、自分たちが歩いてきた道を睨み続ける。

「来たぞ来たぞお。どうやら目くらましを誰かが消したみたいだな」

「え？」

カノンノも振り返る。その視線の先には。

「ああ……」

「ギイ、ギイアアアアア……」

さきほどの魔物が、いつの間にかジューダス達の後方に辿り着いた。

全くの気配を感じさせずに。

そのまま突進して、魔物はジューダス達を踏み潰そうとする。

「！！避ける！」

ジューダスの指示があたりに響き、全員が魔物を避けるようにそれぞれの方向に飛びのく。魔物はそのまま、ジューダス達が進んでいた方向……遺跡の出口を塞ぐようにして立ち止まった。

そして振り返り、ルークとティア目掛けて毒液を浴びせかけた！

「ゴポウー！！」

「あぶねえ！」

「くっ！」

ルークとティアはその毒液を避けると、すかさず武器を抜いた。他の者達も武器を抜く。

「結局、倒すしかないようだな」

ジューダスがギギネブラを睨みつける。

ギギネブラは、目が無いわりに的確にジューダスに顔を向け、そのおそろしい口をのぞかせた。

「ギシャアアアー！！」

ギギネブラは体を捻ると、ジューダス目掛けて飛びかかる。

それをかわすジューダス。

ギギネブラはそのまま地面に着地すると、こんどは腹の下から毒の煙を発生させ始めた。

それが何を意味するのか。咄嗟に理解したジューダスは、近くに居たセルシアを体ごとぶつかって吹き飛ばした。

「きゃっ！」

「くっ!」

そして、噴出される毒の煙幕。

ギギネブラの周囲を包み込むように発生したその煙幕は、すぐにジューダスを包み込んだ。

「ぐっ!」

ジューダスは煙から離れるように飛んだが、既にその毒の成分はジューダスの皮膚から体内に侵入していたらしい。

ジューダスとはびのきの着地と同時に、地面に座り込んでしまった。

「ぐ……なんて、回りの速い……毒だ」

「ジューダス!」

セルシアが慌ててジューダスに近付く。

「立てますか、ジューダス!今すぐ治療を……」

しかし、セルシアがジューダスを介抱しようとしたその動作を邪魔するが如く、ギギネブラはジューダスを追撃しようとする。

「やらせねえ!」

「やらせるかよ!」

そこにロイドとユーリが割って入った。二人は剣でギギネブラの突進を抑えにかかる。

「くっ!」

しかし、敵の巨体は到底押さえきれるものではない。ユーリとロイドはギギネブラの突進を止められず、弾かれてしまう。

「しまっ……!」

そのままジューダスとセルシアに覆いかぶさるようにギギネブラは体ごと仰け反る。

そして、彼らを踏み潰さんとしたまさにその時。

「ふつとべえええ!」

ルークが接近し、特技『烈破掌』でギギネブラを止めに入る。

「そうか!」

ユーリもすぐに体勢を立て直すと、ルークの横に着き、同じ構えを取った。

「烈破掌！！」

はじけ飛ぶ、二つの力の圧縮されたオーラ。

ギギネブラはさすがにその威力に怯んだのか、喰らった後に大きく飛びのいた。

「はあ、はあ、間に合った……」

「やるじゃねえか、ルーク」

「お前もな、ユーリ」

互いに力を認め合う両者。

ギギネブラは遠くから様子を伺うようにしている。

「エステル！ジューダスに治療を！」

ユーリがそう言うと、エステルはすぐにジューダスの傍に近付いて、術の詠唱を開始した。

「さて……行くぜえ！」

ユーリが風をまいて駆け出す。

そのスピードは、彼の本来の速度よりも速い。

ユーリの持つ刀・青雲が、彼の身のこなしをあげているのだ。その素早い身のこなしで、ギギネブラの頭にまず切りつける。

「ギイ！」

鮮血がギギネブラの頭から舞い散る。しかし致命傷には至っていないらしい。

ユーリが追撃しようとした刹那。

「あぶねえユーリ！戻れ！」

リッドが叫ぶと同時に、ギギネブラが動いた。

先ほどと同じように、自分の体を包み込むように毒の煙を発生させたのだ。

「やべ！」

ユーリがすぐさまサイドステップを踏んでギギネブラから離れる。なんとか被害を受ける事は免れたが、ギギネブラに近付くことがで

きない。

敵は、その間に天井に向かって飛翔し、そのまま天井に張り付いた。
「ゴポオ！ゴポゴポオ！！」

そこから、ギギネブラは毒液を大量に浴びせかけに来了！

「な！無差別攻撃かよ！」

リッドが驚愕に目を見開きながら叫ぶ。

「っ……間に合わない！」

ティアはフォースフィールドを展開し何とか降り注ぐ毒液を防御できないかと考えたが、まず詠唱が間に合わない。

「俺の近くにいたやつはラッキーだと思えよ！」

突然スフィードが叫んだ。

そして、スフィードは地面に向かって思い切り剣を突き刺した。

「地顎陣・竜！」

突如としてスフィードの周囲を囲むように、ラグナ遺跡の床が盛り上がったかと思うと、そこから天井にまで届きかねない勢いで瓦礫の壁が作られた。

瓦礫の壁は、スフィードとその周囲にいたカウス、カノンノ、ティア、ロイド、コレット、リッド、ファラを毒液から守った。

「っ……スフィード！皆は！？」

「知らねーよ！壁の外の連中は各々で対処してくれって感じだ！」

「そんなっ……！！」

「それより、今から壁を崩すから走れよ。天井にいるあいつに一発お見舞いするから、俺の近くにいと巻き添えを食うぞ」

スフィードは地面に突き刺した剣に再び力を込めると、スフィードたちを囲んでいた壁がガラガラと音を立てて崩れ始めた。

「さあ、ほら！走れ！」

スフィードの忠告を聞いたほかの者達は、急いでスフィードから離

れるように走り出す。

「！！みんな！」

その時、カウスの視界には毒液を喰らい苦しんでいるユーリたちの姿が見えた。

しかし、今は救出できない。ギギネブラを確実にしとめなくては、再び毒液の餌食となってしまうだろう。

「はああああ……」

スフィードが気合を溜める声が聞こえた。

ロイドが走りながら振り返ると、スフィードは剣を横に構えながらぐるぐると回っていた。

ハンマー投げの様に回転するスフィードの周りに、先ほどロイド達を守ってくれた瓦礫の土塊が集まり始めている。

その回転が最高速に達したとき、スフィードは叫んだ。

「喰らえ！どらああああああ！！！」

スフィードの剣先に集まった土塊は、スフィードが回転の力を利用して剣を振りぬくと同時に天井にいるギギネブラに向かって飛んでいった。

「すげ……」

その出鱈目とも言える強引な攻撃方法に、ロイドは息を飲んだ。土塊はギギネブラの体に見事に当たった。

「ギイ！！」

ギギネブラはそのまま天井から落ちて、うずくまった。

「チャンスだ！！」

「カウス！！」

ロイドとリッドが、好機だとカウスに告げる。

一番先頭を走っていたカウスは、自分の体にありったけの魔力を込めると、ギギネブラの傍で剣を上に向けて叫んだ。

「光に飲まれろ！！シャイニング・バインドオオオ！！」

カウスを中心として現れる光の魔法陣。

それはギギネブラの体を持ち上げるほどの威力となって周囲に強大な魔力の渦を巻き上げた。

「ギイ！！ギイシャアアア！！」

吹き飛ばされるギギネブラ。体ごとひっくり返った。しかしまだ生きている。

「しぶとい奴だな」

リッドがとどめの一撃を入れるために走りながら呟いた。

とどめの一撃。ギギネブラの腹に向かって、リッドは高く飛んだ。

「鳳凰天駆！！」

リッドが纏う闘気は鳳凰をかたちどり、ギギネブラの腹を切り裂かんと迫る。

「燃え尽きろお！」

リッドの突撃は決まり、ギギネブラの体を焼き裂く。

ギギネブラは体の半分を切り裂かれ、断末魔の叫びを上げた。

「まだまだ！！緋凰絶炎衝！！」

地面に着地したリッドが、すぐに方向転換をしてギギネブラに再び迫る。

強大な爆炎の力を宿したリッドの剣が、ギギネブラの体の残り半部分を切り裂き、ギギネブラはその肉片を燃やされながら消滅した。

「……こ、怖かった……」

カノンノが涙目になりながら、強敵を倒せたことにようやく安堵した。

「さて、毒を喰らった連中を助けないといけないんじゃないの？」

スフィードが笑いながらカノンノに言った。

「そ、そうだね。私も治癒術をかけて来る！」

「おお、そうしてくれや」

……俺には人を癒す術は無いからな。

そう小さく呟いて、スフィードも倒れているジューダス達の傍に歩いていった。

「ジューダスが目を覚ましません……」

「俺たちよりも濃い毒を受けたのか」

セルシアとユーリが相談している。

ジューダスが目を覚まさないのは、毒液を他のものよりも多く受けてしまい、体の衰弱が激しいせいであるらしい。

「とにかく、近くの町に行ってジューダスを休ませましょう」

「そうだな……解毒してもらったとはいえ、俺たちも……まだ本調子じゃねーしな」

ユーリが自分の腕を見た。そこには、まだ毒が残留しているらしく、少し紫色をした自分の皮膚があった。

「行こうぜ。あそこに街が見える。急いでいけば、日が落ちる前には着くだろ」

ロイドがジューダスを背負い、歩き始めた。

他の者達もロイドに続き、近くの町を目指した。

Interlude 『暗躍』

「どういう事だ？」

目の前で起こった出来事に驚く。

ギギネブラが体温を察知して動く魔物であることを、見抜いた男が居た。

「なぜ……あの男……」

その時、頭の中にテレパシーが届いた。

『驚いたかね』

「……事情を知っているなら、話してもらおうか」

『なに。彼が突然提案したことだ。伝えるのが遅くなってしまったね』

「……」

その後に、詳しい話を聞く。

なるほどと納得した俺は、次に何をすべきかを尋ねた。

『……バルバトスと合流してくれ。彼はどうやらそちらの世界でやりたいことがあるらしい。執着の念が強まっている』

「手綱では言うことを聞かなくなっているということか」

『なに。その気になれば契約に則り支配下に置くこともできる。彼も所詮はマガイモノの幻影だ。本物ではない』

「ふん……では、どうしてバルバトスと合流する必要がある？」

『試すのだよ。彼らが我々を脅かす敵となりえるかどうか。黒の石を容易に集めていることも含めて、彼等は一体どのようなバックアップを受けている状態で我々と敵対しているのか、そしてその実力はいかほどなのか』

「レーヴァンに頼めばいい。彼なら、我々の敵など一掃出来るだろ

う」

『レーヴァンは暴走した黒の石を沈めることに専念してもらっている。事態の解決に乗り出している連中の中で、本当に我々の脅威となりえるものへの切り札として、レーヴァンは残しておく』

「……わからんな。敵はさっさと片付けるものではないのか」

『……そうだな。だが我々の敵は人間だけではない。レーヴァンは最高戦力として、人間以外の強敵を片付けているのだと思え』

……最高戦力。

間違いない。レーヴァンは、ダルムハクトよりも、リンフェイよりも、シャムレイドよりも、デルネイドよりも……そしてこの俺よりも、間違はなく、強い。

「切り札……まあ、いい。最終的に、俺の目的が果たせるならば、な」

薄暗い意識がぼんやりと戻ってくるのを感じながら、ジューダスは目を覚ました。

いつの間にかベッドに寝かされていた自分の体を確認する。力が入らず、まだ満足に動かせる状態ではなかった。

「……」

窓の外を眺める。夜の帳が落ちた外の景色は、街の明かりが穏やかであった。

「……ひょつとして、ここは……クレスタ、か？」

どうやら間違いないらしい。ラグナ遺跡からもっとも近い街であり、毒を受けたジューダスが運び込まれる土地としては確かに確実な街である。

その時、扉を開く音が聞こえた。

「ジューダス……目が覚めましたか？」

「セルシア」

扉に入ってきたセルシアの表情は、いつもの無表情だった。

「勝手だとは思いましたが、貴方の仮面を外させていただきました。毒で苦しんでいる状態で、あの仮面は少々息苦しいと思ひまして……」

「な……！」

はつとしたジューダスは、すぐに辺りを見渡した。仮面はジューダスが寝ていたベッドの横の机に置かれていた。

「……」

「……気に障りましたか？」

「……いや。仮面は別に外さなくて良い」

「……わかりました」

ジューダスは仮面を被ると、ベッドに横になった。

二人が無言で居ると、扉をノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞ」

セルシアが扉を開ける。

「あ、もう目を覚ました？」

「な……」

金髪の長髪をたなびかせながら。

この世界の英雄、スタン・エルロンが、ジューダスと対面した。

五章一話　く再会く（後書き）

お久しぶりです。アラヤシキでございます。

長らく更新停止しておりまして、なんといいいますか。

やはりこうなっただんぜ！

……って感じです。いや、本当、お待たせしました。

色々やることがあつて忙殺されていたのと、モンスターハンターというゲームに嵌っていて（ほぼそれが理由）小説投稿を遅らせていました。

まあ、アホです。小説の書き方忘れましたしね。

まあいい。そんな話はいいのだよワトスン君。

あれだよ。マイソロ3はヴァン師匠がパーティーメンとして参加し、舞台を盛り上げてくれるようではないか。そんな怪人ねこまんじゅうもびつくりの情報に、我輩の肉球は感動に打ち震えております……

ま、買うかはまだ決めてないんですけどね。

なにせモンハンが片付いていませんから。

それから世間はこの一ヶ月の間に大きく変わりました。

Fate/zeroの文庫化。そしてコミカライズとアニメ化。

大変楽しみであります。ティルズに続いて私の心を打ち振るわせたFateシリーズ……

その始まりにして、最凶の物語……小説の力を心底見せ付けられたzeroが、絵や映像となつて展開される事態に興奮です。

そして、魔法少女まどか マギカ。

癒し系に見せかけた……おどろおどろしい展開にワクワクが止まりません。これもFate/zeroの作者である虚淵玄という方が脚本をやっているのです、つい見てしまっています。

つまりですね。

お前はテイルズやらずに何やっているんだと。

でもテイルズ以外にも面白い物はたくさんあるよ。

って事です。

眠気に堪えながら再び小説投稿してみての気持ちでした。
それでは、失礼します。

五章二話 戦友との旅路（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOD2・TOS・TOA・TOV・TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：ジューダスはもといた世界のラグナ遺跡に辿り着いてしまう。ラグナ遺跡内でスフィードを仲間に迎えたジューダス達は、そのままラグナ遺跡内にいた強力な魔物と戦うことになる。なんとか退けるが、ジューダスが毒を受けてしまい倒れてしまった。急いで近くの町に寄ったジューダス達。そこでジューダスは、かつての戦友『スタン・エルロン』と再会してしまうのであった……。

五章二話 戦友との旅路

五章二話 戦友との旅路

金色の長髪をたなびかせながら、スタン・エルロンはジューダスのいる部屋に入室した。

「な……！」

「目を覚ましたんだ。俺はスタン。よろしく！」

「あ……ああ」

（まさか……素顔を見られたか！？）

ジューダスは自分の仮面に無意識のうちに手を触れた。

先ほどまで自分は素顔のまま寝ていたのだ。見られた可能性は十分にある。

「セ、セルシア。僕の仮面を脱いだ姿を、こいつに見せたか？」

「？いいえ？私がつい先ほど脱がしたので、私以外には見ていないです」

「……はあ、そうか……良かった」

安堵する。間違ってもスタンにだけは正体を知られなかった。

「????そんなに見られたくないのですか？そんなに綺麗な顔をし

ているのに……」

セルシアが目を細めながら質問してきた。

その質問に、ジューダスも目を細めながら返した。

「む……どういう意味だ。僕は自分の罪の具現としてこの仮面を……」

「いえ……女として、少しばかりの嫉妬を感じただけです。そんなに綺麗なのに顔を隠すなんて……」

（なんだセルシアの奴……こういう時、どう反応すればいいんだ……）

二人が黙ってにらみ合っていると、スタンが曖昧に笑いながら近付いてきた。

「あ、あのー。二人とも、いいかな？」

「あ、はい。スタンさん、でしたね……」

「そうそう。えーっと、二人の事は何て呼べばいいんだ？」

「私はセルシアです」

「……ジューダスと名乗っている」

「……ジューダス？」

その時スタンは、ジューダスのことを首を傾げながら見つめた。

「……なんだ？」

「いや……知り合いに、似てる声だなあと思って……」

「……他人の空似だろう。僕は……お前の事は知らない」

「そ、そうか……」

「ちよつとちよつと。世界を騒がせた四英雄を知らないなんて、世間知らず過ぎない？」

扉が開いて、黒髪の女性がジューダス達の部屋に入ってきた。

スタンが驚きながらその女性の突然の来訪を見つめる。

「ルーティ!？」

「……!!」

「……なんてね。あたしはルーティ。よろしくって……ん、んん？」

ルーティもまた、ジューダスの顔をよく見るために前かがみになった。

ジューダスはその視線に耐え切れず、そっぱを向いてしまう。

「な、なんだ。人の顔をじろじろと……」

「ん……いや、それは無いか」

ルーティの瞳に少しばかりの悲しみが宿った。

「……悪いわね。知り合いに似ているかな、って思ったのよ」

「……そうか」

(……まさか。この世界に来て早々、こいつらに会おうなんて……) まさに運命の皮肉といわんばかりの展開に、ジューダスは心の中で舌打ちした。

「さて、話を聞きたいんだけど……ラグナ遺跡に現れた手配魔物を倒したのは君たちなんだよな？」

「手配……魔物？」

「ああ。毒を吐いて、天井に張り付く魔物だよ」

「ああ……ギギネブラのことが」

「ギギネブラ？」

「そういう名前の魔物らしい。まあ……異世界の魔物だ。詳しくは知らないがな」

「異世界!？」

そこでスタンとルーティはジューダス達に驚愕に見開かれた眼をむけた。

「……そうだ。あの魔物も。そして僕達も、この世界の者じゃない。異世界から来たんだ」

その言葉に、セルシアだけは納得しなかった。

(……ジューダスはこの世界の住人なのでは……ひょっとして、ジ

ユーダスが会いたくなかった人たちが、この人たち……？)

しかし、思った事は口には出さず、彼女の胸の内に秘しておくことにした。

「……異世界、かぁ。異変について調べている人たちとは何度か出会ったことがあるけど、異世界から来た人たちっていうのは初めてだ」

「そうね。あんた達、度胸があるっていうか……無謀っていうか」
「ふん」

「……私達は、そこまでしてでも異変を解決するよう、ある人物に依頼されていますので」

「依頼、ねえ」

ルーティは再び前かがみになる。今度はセルシアの顔を良く見るためだ。

「……なんでしょう、ルーティさん。私の顔に何か付いていますか？」

「うっん。いやぁ、偶然ってあるものね。スタンから聞いていたけど、あんた……ほんつとうに似てるわ……」

「……はあ。そうですか。マリアンという方に、ですか」

「そうそう。スタンも相当びっくりしたみたいね」

「ああ、驚いたよ！マリアンさんにそっくりだからさ！……リオンの奴にも会わせたかったな……」

遠くを見るように、突然穏やかな目つきになるスタン。

ルーティは下を向き、小さく呟いた。

「よしなさいよ、スタン……」

「リオン？」

「……」

「ああ、リオンってのは、あたし達の仲間だね。まあ、色々あって、そいつ……死んじやったんだけどさ」

「……死んだ、のですか……」

そこでセルシアは、ジューダスの方を見た。

ジューダスは目を細めたまま、セルシアを見つめ返した。

「……ほら、リオンの事より今のことよ！貴方達、よくあの魔物を倒せたわね」

「まあ、あの魔物に詳しい奴がいたからな」

「そうなの？」

「そいつはあの魔物と同じ世界の住人らしい。紫色の髪をした奴だから、詳しい話は奴から聞くといいだろう」

「そっか。その人がジューダス達のリーダーなのか？」

「いや……この旅に、リーダーらしい人物なんて居ない」

「……ジューダスがリーダーです」

「な！」

「ですが、ジューダスは今は毒液で衰弱していましたから、疲れているでしょう。代わりに私が、この旅の経緯を説明します」

「そっか。よろしく頼みます、セルシアさん」

「セルシアで構いませんよ。この世界の英雄、スタンさん」

「はは……その呼ばれ方は慣れないな。スタンでいいよ」

「あたしの事も、ルーティでいいから」

「わかりました。スタン、ルーティ」

三人はそれぞれの呼び方を確認しあうと、ジューダスを残して部屋から出ていった。

「……運命の、皮肉か」

客人が去った部屋の中で、ジューダスはひとり呟いた。

もう出会ってしまった。もっとも出会いたくなかった人達に。

クレスタの宿屋の一階に集まっていたメンバーたちの下へ、スタン

とルーティ、セルシアが降りてくる。

そして、三人は合流すると、すぐに他のメンバー達と簡単な挨拶を済ませた。

「話はわかった……皆、異変に巻き込まれた世界の住人なんだ」

「なんだか気の遠くなるような話ね。異世界、かあ」

「でも、スタンたちだって俺たちからしたら異世界の住人なんだぜ」
ロイドはそう言って、自分たちと他の者達を指差す。

「異世界って一言で言っても、そんなに違いはないもんなのね」
と、ルーティ。

「さてさて、話が盛り上がってるところ悪いが、これからどうすんの？」

スフィードが今後について提案した。

その言葉に、さいしよに発言したのはコレットだった。

「セルシア。アルテさんからの指示は？」

「……いえ。特にはないですね」

「……アルテ？」

スフィードが興味深そうに呟く。

「スフィードは知らないのですね。私達には、異世界の住人……と
いっていいのかわかりませんが、アルテという人物からのバックア
ップがあるんです」

「……へえ」

「アルテは特殊な機械を使って、異世界で起こっている出来事をあ
る程度モニタリングしています。黒の石の大まかな位置も、アルテ
なら時間をかければ見つけることが出来ます」

「なるほど……随分と強力なバックアップだな」

「しかし、指示が無い以上、私達から打って出る事は出来ません。
黒の石を無作為に探すのは、骨が折れるでしょう」

セルシアはそう言つと、ふうとため息をついて椅子に座った。
スタンがセルシアに近付く。

「……もし目的地が定まらないなら、俺たちの世界の手配魔物を倒

しに行かないか？」

「手配魔物、ですか？」

「そう……ファンダリアの地上軍跡地に、最近現れた魔物がいるんだ。異変と何か関係があるかもしれないって考えて、俺とルーティで倒しに行くか相談してたんだ」

「あたしたちだけじゃ若干不安があっただけど、これだけ戦力がいるなら……何とかなるかもね」

「これがその魔物の手配書だ」

スタンが懷から一枚の紙を取り出した。その紙を、周囲に居た物は覗き込む。

「……ティガレックス……」

呟きは、スフィードのものだった。

「スフィード？知ってるの？」

コレットが聞いた。

「ああ。こいつも俺の世界では悪名高いモンスターさ。強靱な肉体と、叫び声だけで人間を吹き飛ばす、まあ強いモンスターだよ」

「……強そう」

スフィードの言う事から魔物の獰猛さを想像し、思わず怯えてしまったカノンノ。

「まあ、そんなびびる事はねえさカノンノ。俺は何度かやりあったことがある」

「一人で？」

「まさか……昔は仲間がいたんだよ」

「???」

「俺のことはいいさ。それで？どうするんだ？ファンダリアって土地まで行くのか？」

スフィードが周りのものに確認すると、周囲の仲間達は黙って互いを見合った。

セルシアが目を閉じながら口を開く。

「……ジューダスとも相談して決めましょう」

「はっ。そうだな。んじゃ、俺はそろそろ一人になるとするか」

スフィードはそういつて、宿屋の出口に向かって歩き始めた。

「スフィード？どこに行くんです？」

「寝る前にもうひと運動さ」

その言葉を聞いたルークが椅子から立ち上がった。

「訓練か？だったら俺も付き合うぜ？」

「おお？俺とやりあう気かルーク。いいぜ、相手になってやるよ」

「あんまり遅くまで頑張るなよー」

「ん、大丈夫だってリッド。ほどほどで寝るさ」

ルークとスフィードは、そのまま宿の外に出て行った。

「隙があるぜルーク！」

「おわつと！」

ルークの剣を弾いたスフィードが懐に入り、訓練用の木刀をルークの首筋にぴたりと当てた。

「ははっ！まあ、今日はこんなところだな」

「はあ……一撃もいいのが入らなかった」

「はっはっは！まあそう簡単には俺に追いつけると思っただけ。これでも、戦いに関しては人よりも熱心に取り組んでいたもんでね」

「……俺だつて、唯一の趣味は剣の鍛錬、って感じなんだけどな」
「じゃあ戦いの経験の差だな。お前は剣の型に守られている。けどな、一つの型を律儀に守るのは、その型の創始者が考え付かなかった戦いには対応できないものさ」

スフィードは木刀を納めた。

ルークも木刀を納め、置いていたローレライの鍵を拾う。

「お前は、誰かから剣を教わったりしなかったのか？」

「いや。我流さ。何せ教わるほど余裕のある経済状況じゃ無かったもんでね」

「……そうか」

「だが、そうやって鍛え上げた俺の剣のほうがお前よりも強いだなんて、皮肉だな！ははは！」

「……お前って嫌な奴だな」

「おや、癪に障ったかあ？」

「いや、いいよ。確かにお前は強いよ……ヴァン師匠とはまた違った強さだけど」

「……そうかい。お前の師匠がどんな強さなのか知らないけど、俺とは違うだろうなあ。何せ俺の強さは俺だけのものだ。他の誰にも分け与えることなんて出来ない」

「？」

「俺の本気は俺にしか通用しねえのさ。他の連中では再現できねえ。何せ俺は『特別』だからな」

「特別う？天狗になつてねーか、スフィード……」

「はっはっは！まあ俺の鼻っ柱を折りたきゃ、俺より強くなるしかねーぞ？」

「いいぜえ！いつかお前に勝つからな！」

「ま、精精頑張れよ」

ルークはふんと鼻を鳴らすと、宿屋に戻っていった。
その後姿を、スフィードは眺め続けた。

「……強さ、ね」

自分の両の手の平を眺めるスフィーダ。

「別に、望んで得た力じゃない」

両手を握りこみ、目を瞑る。

「この力は……求めた結果だ」

翌日、ジューダスが目を覚ますと、既に先に起きていたセルシアが武器の整理をしているところだった。

ゆっくりと体を起こして、体の衰弱から回復したかどうかを確かめる。

どうやら問題ないらしい。ギギネブラの毒からは完全に回復できたようであった。

「おはようございますジューダス。体調はどうですか？」

セルシアがジューダスが目覚めたことに気付き、体調をたずねた。

「ああ、問題ない」

「そうですか。……それでは、昨晚した話をジューダスにもお伝えします」

セルシアはジューダスに、昨晚仲間やスタンたちと話したことをジューダスに伝えた。

最近になって現れるようになったという、手配魔物の存在。スタン達はその手配魔物を倒すことを目的として動こうとしているらしい。

自分たちも、アルテから情報が届かないため身動きが取れない。

「手配魔物、か」

「ええ。スタンさん達の案内で、手配魔物を倒しに行くことになりそうです」

「……奴らも同行するのか」

「……ジューダス。貴方が会いたくなかった人とは、もしかして」

「……」

無言のまま、ジューダスはセルシアから目をそらした。

セルシアもそれからジューダスの真意を悟り、黙る。

「……いえ。余計なことですね。それより、どうしますジューダス」

「……断つてもついてくるだろうしな。仕方が無い」

「わかりました。そのように皆さんに伝えておきますね」

「ああ」

セルシアが部屋から出て行こうとした。その直前、彼女は後姿をジューダスに見せたまま呟いた。

「ジューダス」

「ん……なんだ？」

「……いえ」

セルシアはそのまま部屋を出て行った。

後に残ったジューダスは、これからの旅路に思いを馳せて、焦燥の念を抱いていた。

〈ダリルシェイド〉

「ここがダリルシェイド。外郭大地の崩壊に巻き込まれて崩れてしまっているけど、港の機能はまだ生きているんだ。だから、そこからファンダリアに向かう船に乗る」

スタンが先頭を歩きながら皆に説明する。

「……ここにも魔物の手配書があるね」

コレットが民家の壁に張られた魔物の手配書を眺めた。

すると、そのコレットの見ている手配書に近付くように5人の男女がやってきた。

「はい、ちよつと失礼、お嬢ちゃん」

5人のうち、リーダーのような男がコレットに声をかける。

「あ、すいません」

「こいつが倒して欲しい奴で間違いないね、神父さん」

そういったリーダーの言葉に反応したのは、彼らの中でもっとも最後尾を歩いていた男であった。

「ああ、そうだ」

男は頷きと共に言葉を返す。

リーダー格の男は満足げに頷くいた。

「もしかして、皆さんもこの魔物を倒しに行くんですか？」

コレットが興味深そうに一団に話しかける。

「んん？そっただけ。お嬢ちゃんたちも？」

「はい！」

「ひゃっひゃっひゃ！よしなって！この魔物、結構凶暴だって噂だよ。俺たちみたいなベテランに任せておけて」

男はそう言つと、背中に背負っていた槍をちらつかせた。

自分たちの実力に相当自信があるらしい。

「ほら、行くよ！」

「おう！じゃあ、神父さん。成功分の報酬、用意しといてよ」

「ああ。君たちも十分気をつけて。君達に主の加護があらんことを」

「おう。そんじゃあね」

4人の一団が去った後、残っていた神父と呼ばれた男が近くにいたエステルに話しかけた。

「君達もこの魔物を倒しに行くのか」

「え……？ええ……」

「……」

「……なんでしょう？」

「いや。先ほどの傭兵達よりも、君たちのほうが強そうだと思つてね」

男はそう言つと、懐から大きな目の袋を取りだし、それをジューダス達に見せた。

「どうか。あの魔物を倒したら、報酬を私から支払うが」

「ええ！？報酬……！」

「おいおいルーティ……」

「それって、王国側が用意した報酬とは別でくれるってこと！？」

「ああ、そうだ」

「うんうん！任せて神父さん！あたし達がちょいとやつつけちゃうから……！」

「頼もしいな。君たちのその腕前ならば、あの魔物を倒すことが出来るかも知れん」

神父はそういつてうつすらと笑った。

「神父さんは、どうして魔物退治に報酬を？」

「アラが疑問を口にする。」

「なに。世界を騒がす魔物の存在に、憂いているだけだ」

「……はあ」

「私の名前はバルドック。あの魔物の体の一部を持ち帰ってきてくれたら、報酬を渡そう」

神父が去った後、カノンノが口を開いた。

「なんだか不思議な人だったね」

「あら、とってもいい人じゃない！お金をくれるって言つたのよ！」

「ルーティにとってのいい人っていうのは、お金をくれる人の事なのかよ……」

スタンが突っ込むと、ジューダスが無表情のまま近付き、ルーティに話しかけた。

「船のチケットをとりになくていいのか？」

「あ、そうだった。それじゃ、行ってくるわねー」

ルーティが乗船チケットの売り場へ向かって走り出した。

「……ふう」

ジューダスはため息をつくと、周囲をなんとなく見渡した。

そのときであった。

「！」

ジューダスの視界に、最愛の人の姿が飛び込んできたのは。

「あ……」

行きかう人々の雑踏の中で、確かに見た。

間違いようも無い。

自分の最愛の人。その人のために世界を裏切った。それほどまでに愛していた女性が、今、ジューダス達の傍を通り過ぎていく。

「……」

その姿が後姿に変わり、雑踏の中で見えなくなるのを見送った。ジューダスは呆然と、その姿を見続けた。

「今の人、セルシアにそっくりだったな」

ロイドが呟く。

「ジューダス。もしかして今の方が……」

セルシアも気付いていたようで、ジューダスに問いかけた。しかしジューダスは反応しない。

「……」

「……会わなくて、いいのですか」

「……ああ」

「……わかりました」

「……」

「チケットとってきたわよー。でもあたし達は、この次の船に乗船することになったわ」

「船旅かあ！」

「カノンノ……遊びに行くわけじゃないんだよ」

「でも海の上って気持ちいいよね！私好きなんだあ、船旅！」

「結構結構。何事も、楽しまないとなあ。それじゃ、船の時間まで気ままに散策でもしてきますか」

スフィードがそう提案すると、他の者達もそれに賛同した。皆、思い思いのメンバーと行動を共にし、街の中で出て行く。

「……マリアン」

仲間達が去ったあと。

ジューダスは、セルシアの聞こえないような小さな声で、最愛の人の名前を呼んだ。

く船の中く

「ふう……これから何日かかけてファンダリアって所に行くんだよね」

「そうねくファンダリアは寒いから、覚悟しなさいよ」

それぞれの船室に荷物を置いていく仲間達。

「ジューダス。どこに行くんだ？」

部屋に荷物を置いたら、すぐに出て行こうとしたジューダスに対し、ロイドが問いかける。

「……ちよつと風に当たりに行くだけだ」

「ああ。もしかして酔ったのか？」

ルークがニヤニヤと笑いながらジューダスに問いかける。

以前にアルビオール内でジューダスが酔っていたことを思い出し、からかったのだ。

「……違う」

「船酔い？」

スタンが首を傾げながらジューダスの方を見る。

ジューダスは、そそくさと甲板に出て行ってしまった。

「……やっぱり似てる」

「ん？誰がだスタン」

「ジューダスが……なんか、俺の知り合いに似ているんだ」

「スタンの知り合い？」

「あゝ。そっぴいやジューダスはこの世界に詳しいみたいだったよな」
「え？」

スタンがそこでロイドの顔を見た。

「ジューダスは異世界の人じゃないのか？」

「あれ？でもラグナ遺跡って場所のことを知ってたみたいだぞ、ジューダスは」

「……」

スタンはジューダスが出て行った部屋のあとを見る。

「……ちよつと俺、ジューダスと話をしてこようかな」

スタンはそう言って部屋から出て行った。

「……俺、何かまずいこと話しちゃったかな」

ロイドが心配そうに仲間達を見た。

仲間達は一様にさあ、と首を傾げた。

「ふう……」

一人甲板で風を数えるジューダス。

そこに、スタンが追いかけてきた。

「ジューダス。隣いいか？」

「……何だ」

「いや、ちよつと話をしようと思ってさ」

「……」

スタンがジューダスの隣で、甲板の手すりに体を預けた。

「ロイドが教えてくれたんだけど、ジューダス。ラグナ遺跡のこと

を知ってたんだってな」

「……あいつ」

「何で、異世界の住人だって嘘をついたんだ？」

「……」

ジューダスは心の中で舌打ちをした。

確かにロイド達にはスタンに対して内緒にしているように指示していなかった、自分の不明に呆れた。

「この世界の住人なんだろう？ジューダスは」

「……ああ」

「へえ……どこに住んでいたんだ」

「……」

「それも内緒か？」

「……18年後」

「……え？」

「僕は、今の時代よりも18年後の時代から来たんだ」

「……え、ええ！？」

「だから僕はほとんど異世界の住人だという意味で、お前達に言ったんだ」

「……18年後の、未来？」

「ああ、そうだ。そこではお前は確かに4英雄として知られていた。

……英雄を前に緊張してな。何を話せばいいのか戸惑っていたんだ」
我ながら下手な嘘だと痛感する。

自分の今までの態度のどこに緊張があったというのか。

「……悪かったな」

「い、いや。別にいいけど」

「……」

「……」

二人の間に流れる沈黙。

その沈黙を打ち破ったのは、後から来たロイドたちであった。

「あー、いたいた。おーいジューダス」

「……何だ」

「セルシアがお前を読んでるぜ。何でも、アルテから連絡が来たとか」

「……今更か。わかった、行こう」

ジューダスはそういつて歩き始めた。

スタンは去っていくジューダスの背中を見つめながら、その場にとどまった。

「アルテからの指示は、幸い私達の目的地と同じでした。これから向かう場所に黒の石の反応があるから、それを見つけてくるようにとのことです」

ジューダスがセルシアの居る船室に入ると、以上の説明を受けた。

ふむと頷いた後、ジューダスはルーティの方を見た。

「どうやらお前たちと目的地は一緒らしい」

「当然でしょ！一度引き受けておきながら、やっぱりパスなんて私は認めないわよ！」

「ふ……そうだな」

呟いて、船室から出て行くジューダス。

セルシア達はジューダスが去ったことを確認すると、すぐに小声で何かを話し始めた。

「ねえ。やっぱりあのジューダスって奴。この世界に来てから様子がおかしいとか無いの？」

そう聞いたのはルーティである。

その質問に、コレットは首を傾げながら答えた。

「別にいつも通りだと思うよ？」

「本当に？なんだか、あいつ……どっかで会った気がするのよね」
「え？」

「……これはあたしの女の勘だけだね。絶対あいつは何か秘密を握ってるわ」

その秘密を暴いてやろうと息巻くルーティを見て、セルシアはため息をついた。

「はあ」

「何よセルシア？文句でもあるの？」

「いいえ。ですが、人は誰しも秘密にしたいことを持っているものです。それを安易に暴こうとするのはあまり感心できません」

「……そりゃそうよ。あたしだって分かってるわ。……でもねえ。

このままじゃ収まりがつかないのも事実なのよね」

ルーティはどかっとベッドの上に座った。

セルシアは眼を細めて頷きだけで返した。

そして一向は、雪国ファンダリアに辿り着く。

そこで、新たな激闘が待ち受けていることも、今は知らずに……。

五章二話 戦友との旅路（後書き）

様々な小説のあとがきに書かれています。あとがきから内容を知った上で作品を読むという方もいらっしゃるようです。不必要にあとがきでふざけるのはよろしくないと知ったアラヤシキでございます。

今回は戦闘が無い回でしたが、どうだったでしょうか。

スタンとジューダスの再会……いえ、出会いとも言える今回は、私の中ではもうちょっとギャグっぽくしようかと目論んでいた回でもありました。なにぶんジューダスが慌てたりふざけたりする光景が浮かなくて、結局今回のような形に落ち着きました。

気付いている方は気付いていらっしやると思いますが、第5章に入ってから出てきているモンスター『ギギネブラ』『ティガレックス』は両方ともモンスターハンターというゲームから拝借しているモンスターです。私が最近ハマっていたからというものなのですが、動かしやすいキャラクタとして彼らを採用しました。特にティガレックス……次回に登場予定ですが、彼は私の中では強敵として染み付いていますので、その存在とのバトルは大いに盛り上げようと思います！

はあ、昔はティガはランスで防御しながらでしか倒せなかったのに、いつからどの武器でも余裕で戦えるようになってしまったのか。慣れって怖い。いや、本当に。

今回は、そのティガレックスと、ジューダス達と敵対する組織との戦いになります。

未だに尻尾をつかませないジューダス達の敵ですが、その正体、そして目的は何なのか。

楽しみにしていただけたと思います。

それでは、あとがきから読んでいただけた方も本編を楽しみにして
いただけるように配慮しましたが、どうでしょう。これから黒衣
の守護者、続けていきますので、読んでくださる方がいらっしやる
ととても嬉しく思います。

それでは、失礼します。

五章三話 流血・覚醒（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD / TOE / TOD 2 / TOS / TOA / TOV / TOWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：スタン達とともに行動することになったジューダス達。スフィードの意見もあり、手配魔物を倒すことになる。道中、スタンはジューダスに色々と疑問を持つようになる。ジューダスはあくまで正体にかくしたまま、スタンと行動を共にするのであった。

五章三話 流血・覚醒

五章三話 　　流血・覚醒

「うおお……さぶっ！」

港に降り立って開口一番、ルークが叫んだ。

「確かに……寒いなあ、こりゃ」

「リッドもルークも、コートの下はいつものヘソ出しファッションなんだろう？だから寒いんだって……」

他のものよりも寒がる二人に呆れるロイド。

ジューダスは、港町スノーフリーアに降る雪を眺めた。

（この土地が、スタン達と旅した最後の大地だったな）

「ここから目的地まではどのくらいかかりますか？」

セルシアがスタン達に尋ねた。

「そうだなあ、大体3日くらい？」

スタンがルーティに確認するとように顔を向ける。

しかし、そこにルーティはいなかった。

「……ルーティ？」

「……じ」

ルーティはジューダスの方を訝しげな目で見続けていた。

ジューダスはそれに構わず、雪のほうを見つめたまま「僕に用があるならはつきりと言え」と言った。

「用があるわけじゃないわよ。なーに雪をロマンチストに眺めてるんだかって思っただけよ」

「……別に。ただ寒いと思ったただけだ」

「ふん」

「おいおいルーティ……」

スタンが苦笑しながらルーティに近付く。

ルーティはスタンの耳元に手を当て、ひそひそ声で話しかけた。

「やつぱり似てるわよ、あいつ」

「なんだよルーティ……あいつって」

「わかってるでしょ！あいつよ、あいつ！」

「ルーティ……」

スタンはそこで悲しそうに眼を伏せた。

「俺も似てると思ってる……けど、あいつは……」

「……でも」

「忘れたのかルーティ……俺達は、ゾンビになったあいつと、戦ったじゃないか……」

「……」

「他人の空似、なんだと思う。きっと」

スタン自身、出来すぎているとは思っていた。

ジューダスは18年後の未来から来たという。それが真実か分からないが、同じ世界の住人として彼に良く似た存在がいることが信じられなかった。

しかし、事実としてジューダスは生きているのだし、リオンは死んだ。

どのような奇跡が起ころうとも、死者は蘇らない。スタンはそう考えている。

「この町で準備をしろ。明日の朝にはここを出るぞ」

「あ、ああ……」

ジューダスの指示にスタンが頷くと、一向は街の中へ出かけていった。

ジューダスもセルシアと共に買い物に出かける。

「ふう……」

「だいぶ調子を狂わせているようですね、ジューダス」

「……そう見えるか？」

「ええ」

「……はあ……そうだな」

ジューダスは少しだけ頭を下げた。

「あの方達は、かつての貴方の知り合いですね」

「……」

「私には隠さなくても大丈夫です。この事は公言しませんから」

ジューダスはその時、彼女の言葉に不思議な真摯さを感じた。

いつも人を疑うジューダスにしては珍しく、口を開いた。

「……リオンが死んだ仲間だと、あいつらは言っていたな」

「はい」

「……まだ……『仲間』だと思っていたのだな……」

「……ジューダス」

「ルークウ！こいつなんてどーだあ！？」

店の中で、スフィードが大声を上げた。

彼はルークの肩に手を回して、なにやら液体の入ったビンを見せている。

「な、なんだよスフィード」

「スノーフリーアの名産！『アルド・ウォッカ』だってよ！うまそーじゃね！」

「はあ！？お前、それ酒……」

ルークが驚きと共に抗議の声を上げようとする。

しかしスフィードはルークのことを無視して喋り続ける。

「度数は……あゝ、35？まあ、いいか。酔うために買っわけじゃねーし。酒は嗜む程度に飲んでナンボってな」

「ば、ばか！俺は飲まねーぞ、酒なんて！」

「あ？飲まないの、ルーク？」

「ちよつとスフィードー！」

スフィードに絡まれていたルークを助けようと、ティアが傍に近付いてきた。

「ルークに変なものを勧めないでちょうだい」

「いいじゃねーか。この位の酒、ティアだって飲んだことあるだろ？」

「無いわよ」

「無いの！？」

スフィードは大げさに驚く。

ちなみに彼はまだルークの肩に手を回したままだ。

「おいおいゝ。もしかしてお前ら未成年！？」

「……成人に見えたのかよ」

ルークはじとつとした目つきのまま、スフィードを睨む。

「あちゃあ。確かに若い一団だと思ったけど、まさか未成年だったとは」

「そついう貴方は？いったいいくつなの？」

「俺？俺はゝ……」

そこでスフィードは、「あゝ、えゝつと」と続きを言いにくそうにした。

「なんだあ？歳は内緒ってか？」ルークがスフィードに肩をつかまれたまま言った。

「いや……大体……18歳くらい？」

「ちよつと、大体って何よ……」

「っつーかお前も未成年じゃねーかつつー！！」

ルークの突込みを無視して、スフィードは先を続けた。

「いや、俺……正確な年齢わかんねーんだよ」

「えっ？」

「……色々あってね」

スフィードはそこでルークを放すと、一人酒のビンを抱えて店主の居る場所へと向かった。

「……って、ちよつと待て！だからお前も未成年だろっつーの！！」

「はああ？何言ってるんだ？俺の国じゃ17から酒はオツケーなんだっつーの」

「……そうなのか？」

「そうだよ。ルークも、俺の国に来れば酒を飲めるんじゃないの？」
ひひひつと笑って、スフィードはルーク達に背を向けた。

「……酒かぁ」

「ルークっ！」

「な、なんだよティア！俺は買わないって！」

「……でも興味持ったでしょ」

「……ちよつとな」

「はぁ……」

「……まったく、意外に真面目だね。ルークは」

スフィードはそう言いながら、先ほど買ったビンを自分の荷物に閉まって再び店内を物色していた。

ふと隣の棚を見ると、ユーリとカウスがなにやら話し込んでいた。

「よっユーリ。一緒に飲まねえ？」

スフィードがユーリに挨拶がてら、先ほど買った酒のビンを鞆から

取り出して見せびらかした。

「お前……酒なんて買ったのか？」

ユーリが呆れ顔で返す。

カウスは慌てながら「だ、ダメだよスフィード！旅に必要なものを
買えって、ジューダスが怒るよ！」と言った。

「平気だって。むっつりジューダスが怒ったところで、俺は痛くも
痒くもありませーん」

「……絶対怒るって」

「ていうか、皆で旅してんだ。勝手な真似されるとこっちが困るん
だけだな」

ユーリがジト目のままスフィードに注意する。

「いいじゃねーかよ。ユーリは酒、飲まない？」

「……嗜む程度には飲むぜ」

「だったら、俺の買い物はユーリのためにもなったってことだな！
ははは！」

スフィードはそれで納得したようで、再び鞆にビンをしまう。

カウスは頭に手をあてて「……どうなっても知らないよ」と呟い
た。

「二人は何してたんだ？」

「食料の買い足しだよ」

「僕とユーリで、これからの旅に必要な食料を買ってたんだ」

「他の連中も買ってるけどな。俺達は俺たちで、予備の食料を買っ
て来いって言われてな」

「ふーん」

スフィードはそれを聞くと、棚にある高級そうな肉の入った袋を取
り上げた。

「……おい」

ユーリが何をしているのかと尋ねる。

「いや、酒のつまみが欲しくてな……」

「だから勝手に行動するな……」

「ユーリも飲むだろ？酒」

「……」

そこで黙るユーリ。

「ちょ、ちよつとユーリ……」

「……カウス。他の奴らには黙っててくれ。な？」

「ちよつ！？」

どうやらユーリはスフィードの説得に押し負けたようで、自分の中にある異世界の酒を口にしてみたいという欲求に素直になることにしたらしい。

スフィードは更にエスカレートして、つまみになりそうな物を片っ端からチエックし始める。

「ちよつとちよつと、スフィード！僕達まで怒られるって！！」

「おや？カウスは知らねーの？こういう肉とかチーズって、保存食になるんだぜ」

「……そうなの？」

「そうそう！だから、これは立派な旅への貢献さ」

そういつてスフィードはたくさんの袋を抱えると、そのまま店主のいるカウンターに再び向かった。

「……へえ。あいつ、なかなか面白い奴だな」

ユーリがにやりとした笑みでスフィードを見送る。

「……僕、知らない」

カウスはユーリからそっぽを向いた。

「えへへ！雪だるま！」

「わあ！カノンノ、上手です〜」

スフィードが満足げにお店から出てくると、外ではカノンノとエステル、そしてコレットがはしゃいでいた。

「なんだあ？」

「あ、スフィード」

カノンノがスフィードに気付いたようで、手に持った雪だるまを店に来た。

「見てみて！さっき作ったんだ！」

「カノンノの雪だるま、とっても可愛いですよね！」

エステル言葉を聞きながら、スフィードはぼんやりとカノンノの手に乗っている小さな雪だるまを眺めた。

そこには、なんと愛らしい表情が刻まれた雪だるまが、ちょこんと乗っていた。

それをクビチヨンパする。

「あ……」

「え……」

雪だるまの首は吹っ飛び、カノンノの手に残されたのはただの雪の塊だった。

一瞬、エステルとコレットには何が起こったのかわからなかった。カノンノは呆然とクビチヨンパされた雪だるまを眺める。

「あ……ご、ごめんね！遊んでる、場合じゃない、よね……」

自信作をあとかたもなく打ち崩され、カノンノは内心ショックだった。

スフィードは、しょんぼりと落ち込むカノンノの調子を一通り眺めた後。

「ぶ、くく……あーはっはっは!!」

大声で笑い出した。

「ひーっひっひー!!カノンノ、ショック受けすぎだって!!はっはっは!!」

「え、ええ……」

「あー、いいもん見た!あっはっはっは!!」

スフィードは笑いながら、吹っ飛ばした雪だるまの頭を拾いに行く。

「ほーら、カノンノ。しっかり受け取れよ」

そして、拾った頭をカノンノに向かって放り投げた。

「えっ!わっ!」

しかしカノンノの両手は雪だるまの体部分を抱えていたため、当然拾えるはずも無く、雪だるまの頭はそのままカノンノの胸に当たって砕けちった。

「……」

「あーあ。だからちゃんと受け取れって言ったのに」

「……スフィード……ひどい!」

ぶくつと頬を膨らませるカノンノ。

その表情を見たスフィードは「へっへっへ。油断してるから痛い目見るんだ。男が皆女の子に優しいと思ったら大間違いなのさ!」と楽しそうに言った。

「スフィード、いじわるです……」

エステルが伏目がちに言った。

スフィードはその言葉を満足げな表情のまま受け止めた後「そうそう。俺ほど意地の悪い奴は中々いないぜ」と言った。

「さーて。カノンノで遊んだことだし、俺はそろそろ宿屋に戻るかな」

「ひどい!私はスフィードの玩具じゃないよ!」

「おー怖い怖い!それじゃあなあ」

スフィードはそそくさと足早に宿屋に向かって歩き出した。

カノンノはまだ怒っていたようであるが、手元に残っていた雪の塊を地面に置くと、そのままエステル、コレットともに買い物に出かけていった。

「随分と楽しんでいたようだな、スフィード」

スフィードが宿屋に戻ると、そこには先に全ての用事を終らせていたジューダスとセルシアが待ち構えていた。

二人の後ろにはカウスがいる。カウスは申し訳なさそうな表情をしていた。

「酒買ったの、そんなにいけなかったかい？」

「……」

「むつつりだな、ジューダス。言いたい事ははっきり言ったほうがいいぜ？」

「……別にいい。お前の好きにしろ」

「お？許しがもらえたって事か？」

「だが、飲まない連中を無理に誘うな」

「へいへい。皆、ルールには厳しくて結構結構」

スフィードはにこりと笑うと、そのままジューダスの近くの席に座った。

「んで。お前は飲むかい？ ジューダス」

そういつて、酒のビンを荷物から取り出すスフィード。

「いいや。僕は飲まない」

「そうかい。だが、まあこれからのことについて話すからさ。お前も何か注文しろよ」

「……全員揃ってからでいいだろう」

「いいや。これは俺とお前の話だ。ジューダス」

スフィードはそのまま酒のビンを開けようとした。

しかし、それを途中で思いとどまる。

「宿屋に来てるんだから、宿屋の酒でいいか」

「どちらにせよ、飲むんだな。お前は」

「ああ」

「……」

ジューダスはスフィードの座る向かい側の席に座る。

スフィードは、席から離れて、宿屋の食堂にいる店員に注文しに行った。

「……あいつ。何のつもりだ」

ジューダスが呟く。セルシアがジューダスの隣に座った。

スフィードが帰ってくる。

「さて、待たせたなジューダス」

「……」

「話っているのはさ」

スフィードはそこで、宿屋の店員から貰ってきた酒のビンを開け、グラスになみなみ注いだ。

「この異変の元凶についてだ」

そしてグラスを口に運ぶ。

少しだけ口にし、スフィードは満足げに頷いた。

「……ジューダスは、この異変はなんだと思っている？」

「何、とはどういう意味だ」

「自然災害か、はたまた誰かの仕組んだ侵略戦争か」

「……自然災害にしては、僕たちの相手には人間が多すぎる。僕は侵略ではないかと考えている」

かつてのアルテの言葉を思い出す。アルテは、文明の突出した世界が異世界を侵略することを良しとしないと言っていた。そのアルテがジューダスに指示したのだ。おそらく今回の異変というものも誰か人間が仕組んだものだろう。

「それがジューダスの考え方か。俺は違うね。自然災害だと思っている」

「……」

「なぜか？単純に考えて、侵略するなら一つの世界に的を絞って行動を起こすべきだと思うからさ」

それについてはジューダスも考えていなかったわけではない。

確かに、この異変は誰かが意図的に操作していると考えerには少しばかりいい加減な動きが多い。黒い魔物達も、出会いがしらに襲ってくるだけだ。

それに、かつてのリンフェイとの共闘もある。

敵であるはずの存在、リンフェイ。しかし彼女はジューダス達と協力し、共に黒い魔物を倒したこともあるのだ。

「この異変は、俺たちの世界に元凶がいるかもしれないって言ったよな。その元凶って奴も、俺たちの世界の自然災害的なものなんだと思う」

「……確かにお前の言い分にも一理ある」

「だろ？これは確たる敵のいない戦いの可能性があるのさ」

「確たる敵なら……いる」

「へえ……」

ジューダスはそこで今までの戦いの出来事をスフィードに聞かせた。蘇った死者たち。そして、その死者と協力して動く存在。

「……お前もアブソーブゲートで撤退しただろう。この先にいる連中はただならぬ気配を持っていると」

「ああ……そういう事が何度も起こっているとは思わなかった。お前たちの、敵、ね」

スフィードはグラスの中を空にすると、再びビンをグラスに傾けた。「そいつらはきつと……その自然災害を使って何かやらかすつもりだな」

「……今回の異変は、そいつらが意図的に起こしているわけではないと？」

「そうさ。同時に多くの世界を狙いすぎだ。あまりにも効率が悪い」とぐいとグラスを傾けるスフィード。

ジューダスは何も飲まず、ただスフィードの目を見る。

「この異変に確固たる敵なんて居ない。それでもジューダス達は、戦いを続けるのかい？」

グラスを置いたと同時に、スフィードは挑戦的な目でジューダスを見た。

「……生き残るための戦いを、歴史の中で何度も人は経験してきた。今回の異変が自然現象だったとしても、それが戦いを諦める理由にはならん」

「……結構結構。生き残れば、それでいいんだな……？」

「……なに？」

得心が行ったというように頷くスフィード。

それに対しジューダスは、何か引つかかるものを感じた。

「いいや。それが戦う理由なら、俺も満足だ」

「……どういう意味だ？」

「あー。正義のためとか、弱きを助けるためとか、そういうの嫌いだからさ、俺」

「……ふん」

「良かったよ。ジューダスとは話が合いそうだ」

「……僕は別に合う気はしないがな」
スフィードはニカツと笑うと、席を立った。
「夕飯まで一眠りしてくるわ。……ジューダス」
「何だ？」
「……ティガレックスは強いぜ。仲間の管理はしっかりな」
「……お前に言われなくても、十分注意している」
「そうかい。いいリーダーだ」
階段を昇っていくスフィード。
ジューダスはあとに残されたグラスと酒のビンを眺めながら、ふうとため息をついた。

翌日。

まだ太陽の光が街を射すには早い時間に、ジューダス達は宿屋の外に集合していた。
「……準備はいいか？」
ジューダスのその一言に、眠い目蓋をこすりながら皆が頷く。
「……いや、準備の出来ていないバカがいるな」
ジューダスはそう言うと、スタンの傍に近付いていった。
「おい、起きろ！立ちながら寝るなんて、お前はどこの道化だ！」
「うーん……」
「……仕方ない。街の外に出てからきつい一発をお見舞いしてやる」
「う」

「むにや……それは……勘弁してくれ……リオン……」
はっと息を飲むジューダス。

しかしスタンは相変わらず夢の中にいるようだった。
ジューダスは出来る限り動揺を隠しながら、残りのメンバーたちの
方を振り返り、言った。

「行くぞ。これから数日をかけて、目的地に向かう」

地上軍跡地に辿り着いたジューダス達。

道中でここファンダリアに住まう魔物達と何度か戦闘になったが、
ジューダス達の敵ではなかった。

「ここが、地上軍跡地……」

ロイドが確認するようにルーティに尋ねる。

「異世界から来たあんた達に、私たちの世界の歴史を教える意味が
あるのかわからないけど、簡単に説明するわ。今から1000年前、
天上の世界に住む人間たちが地上の人間を支配下に置こうと侵略戦
争を仕掛けたことがあったのよ。で、この地上軍跡地はその時地上
軍が使った施設の跡ってわけ」

「1000年前の、戦争……」

リッドが驚きと共に周囲を見渡す。

1000年経っている割には、施設の形は保たれている。1000
年の歳月程度では風化しないほどに地上軍の施設は頑丈だというこ

とであろうか。

「ここに、あの手配魔物がいるんだよね」

カノンノが周囲を警戒しながら言った。

「……ああ。けど、おつかしーな。こんな所にティガレックスがいるのかあ？」

スフィードは納得がいかないというふうに、呟いた。

「どういう意味だ？」

「いや。ティガの餌になるような生き物がいない。あいつは餌を求めて狩場を変更する生き物だ。こんな所に長居するような魔物じゃない」

「……」

「まあ、ティガレックスの生態なんて、俺の世界でも完全に解明されたわけじゃねーしな。今は忘れてくれ」

スフィードはそう言いつと、そのまま先頭を歩き出した。

ジューダス達も彼に続く。

「おつと……」

スフィードが建物の残骸を回り込もうとしたとき、止まった。

「どうしたの？」

コレットが彼の後ろから声をかける。

「いや……グロ耐性ない奴は、見ないほうがいいかもしんね」

スフィードは意地の悪い笑顔を見せながら、コレットに注意を促す。コレットはいわれた言葉の意味がわからず、スフィードの視線の先を見てしまった。

「……」

その瞬間、コレットは自分の口元を手で覆った。

「そんな……ひどい……!!」

そしてすぐに顔を背ける。

何事かと思ったロイドがコレットに続いた。

「う……こいつら、あの時の……!!」

ロイドの目が驚愕に見開かれる。

そこには、体が食いちぎられ、四肢が引きちぎられた無残な死体が4つ転がっていた。

周囲の雪がグロテスクな赤色に染まっている。

「……」

ジューダスは特に遠慮した様子も無く、その死体たちに近付いた。

「……死後半日以上は経過しているな。僕達より先にこの地上軍跡地についていたのだな」

その死体は、紛れも無くダリルシェイドで手配魔物を倒すために先に船に乗り込んだ4人の傭兵たちのものだった。

砕かれた鎧や、リーダー格の男が携えていた槍が一致する。

もつとも、その槍でさえ、無残にも叩き折られていた。

「……悲惨だねえ。自分たちの勝利を疑わなかったばかりに、異世界の魔物にここまでにされちまうとは。はは、無様だな」

「おい、スフィードー!」

スフィードの死体をバカにしたような発言に、思わずロイドが怒った。

しかし、スフィードは空虚な目でロイドを見るだけだった。

……本当に、何も映していないのでは無いかと見えるほどに、その目は暗く淀んでいた。

「死体に何を遠慮する必要がある?こいつらは死んだ。それが結果だろう?」

「……死んだ人を愚弄する事は許さない!」

ロイドは冷静な瞳をしたままスフィードを非難する。

その言葉は、かつての自分の父が言っていた言葉でもあった。

「……まあいいさ。俺が言いたいのは、こいつらの姿は俺たちの未来の姿かもしれねえってことだ」

「……よせよ、スフィード」

「ルーク。それ位ティガレックスは凶暴なんだ。死にたくなければ、死を覚悟するくらいには、な」

「生きたいという願望は時に人間を麻痺させる。死ぬつもりで戦ったほうが生き残れる場合もある。……それだけのことさ」

スフィードは話は終わりだといわんばかりに先に向かって歩き始めた。

ロイドとルークは、スフィードの言葉の真意をよく理解できないまま、彼の歩く姿を呆然と見送っていた。

「ゴオオアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ロイド達から見て左上方から、強烈な魔物の咆哮が聞こえた。

先を歩き、ロイド達から離れていたスフィードはすぐに振り返る。

その顔に、凶悪な笑みを貼り付けながら、スフィードは剣を抜いた。

強靱な顎を持ち、発達した四肢を持つ、轟竜ティガレックス。

その前足から繰り出される凶悪な爪による攻撃は、しかし英雄たちの前では空を切るばかりであった。

しかし、ジューダス達にも攻撃の決め手が無い。ティガレックスの弱点は頭であると事前にスフィードから教わっていたが、ティガレ

ツクスの攻撃が早すぎるため、攻撃する機会がないのだ。

「……ち、厄介な魔物だな」

リッドが舌打する。

ティガレックスの攻撃範囲に飛び込めば、あの強靱な爪が自分の体を切り裂きにかかるだろう。

しかし、遠距離攻撃を仕掛けたくとも、それを封じるほどにティガレックスの動きは素早く、そして的確であった。

明らかに視界の外で詠唱を開始しても、まるで後ろに目があるかのようにティガレックスは振り向いて詠唱を開始したものを攻撃する。

「変だよ、リッド……あの魔物、術を使う人を積極的に狙ってる！」
ファラがティガレックスの攻撃を避けながら、叫んだ。

「おいスフィード！！こいつは元からこうなのか！！？」

「さあなりッド！俺の世界ではこんなに術者を攻撃する性質なんて持つては居なかった！多分、黒の石の影響が何かでそうなったんじゃないの！？」

「おいおい！そんな無責任なことあるかよ！！？」

「だから俺は知らないって！！次来るぞ！！」

ティガレックスが前足を使って、雪の塊を繰り出してきた。

ティガレックスの強靱な握力によって固められた雪は既に氷の塊ともいえるものであり、ぶつかればただでは済まない威力となっていた。

「ふ……はあ！！」

それを眼前で叩き割るリッド。

ティガレックスは振り向き、詠唱を開始していたエステルに向かって突撃し始めた。

「エステル、あぶねえ！！」

「……！！」

ユーリの叫びに、詠唱を止めるエステル。

先ほどから戦局を変える事が出来ない展開に、仲間達は焦りの色を浮かべ始めていた。

その時。

「ジューダス！！俺についてきてくれ！！」

スタンが唐突に叫んだ。

「なんだ、スタン！」

「さつき、その建物の上から視線を感じた！！ここには俺たちの他に誰か居る！！」

「！！」

スタンが建物の上を指差す。

確かに、ジューダスにも一瞬人影が見えた。

「……行くぞ！」

ジューダスが先頭を切って駆け出した。

スタンもそれに続く。

二人は建物の上に素早く到着すると、その場にいた人物と相対した。

「先ほどから観覧していたが……まったく手ぬるい。命をかけて奴の首をとろうとするものはいないのか、貴様ら……」

「バルバトス！！」

ジューダスが剣を向ける。

その姿を見たスタンが、同様に剣を抜いた。

「ふん。ジューダス……それに四英雄の一人、スタン・エルロンか

……」

「！？俺のことを知っているのか！？」

「知っているも何も、かつて俺はこの手で貴様を殺めたことがあるからなあ」

「！！？」

「ふん。だがまあいい。今回の貴様は、まだ以前よりも楽しませてくれそうだ……デймロスを失ったところで、貴様の腕はさび付いてはおらんだろう？スタン……」

「デймロスのことも知っているのか！？お前は……」

「さあ、死合うつしどうか！！此度の俺は、全力でいかせてもらう

「！！ぶるああああああああああ！！！！」

ティガレックスに負けず劣らずの咆哮を叫びながら、バルバトスはジューダスとスタン目掛けて突進した。

「ちい！！」

「うわつと！！」

受け止められないと判断した二人は、その突進を左に飛んで回避する。

「くっ！ジューダス、援護してくれ！」

スタンが接近戦を挑もうとする。

「待てスタン！あいつの相手は僕がする！」

「けど……俺には術が……！」

「案ずるな。術を使うための特殊レンズなら、これを使え」

ジューダスはそういつて、自身が身に付けていた大きな目のレンズをスタンに手渡した。

「……！？ジューダス……」

「奴の攻撃は僕がさばく。お前は晶術で援護してくれ」

「……わかった！」

スタンとジューダスはさつと連携をとる。

バルバトスはそんな二人の様子を一通り眺めたあと。

「ふん……術に頼るか！？いいだろう……たった二人が相手なのだ

……思う存分に戦うが良い！！」

そう言つて、再び突進攻撃を繰り出してきた。

「イービルチャージ！！」

「させるか、粉塵裂破衝！！」

バルバトスの突進を食い止めるためにジューダスが奥義を放つ。

「ファイアボール！！」

突進を食い止められたバルバトスに追い討ちをかけるように、スタンの火球晶術が発動した。3つの火炎弾はバルバトスの体に衝突していく。

「く……くっくっく！あーはっはっは！！」

しかし、バルバトスは別段傷ついたふうでもなく、斧をジューダスに向かって叩き付けた！

「こんなものか！！貴様らの力はこんなものかぁー！！！！」

「ふん……」

バルバトスの斧を、短剣を上手く使ってさばくジューダス。

「図に乗るな……双連撃！！」

「なめるな小僧！！三連撃！！」

ジューダスの連撃とバルバトスの連撃が激突する。

しかし、ジューダスが繰り出す一撃とバルバトスの一撃はあまりにも違いすぎた。

バルバトスの斧から火炎が噴出し、ジューダスを包み込む。

「ジューダス……」

スタンが叫ぶ。

「この、程度……問題ない！！」

ジューダスは高く飛び上がると、バルバトスの後ろに回りこんだ。バルバトスは三連撃の二撃目で攻撃を止め、ジューダスに向かって斧を振り下ろした。

それを剣を交差させることで防ぐジューダス。

「くっ……」

「……どうしたあ？この程度かあ？」

「だから……舐めるなど、言っている！！」

「ふん……スタンの晶力が高まったようだ。術を使う気だろう」
「……」

「宣言しよう。次に奴の術が発動したとき、俺はスタンを殺す」

「なに！？」

スタンには聞こえない声でスタンの死を宣言するバルバトス。

「エクスプロード！！」

スタンが術を発動した。

同時に、バルバトスはジューダスを鏑競り合いから開放すると、尋常ではない速度でスタン目掛けて接近した。

「ま、待て!!」

ジューダスが慌てて追いつがる。

しかしバルバトスはそのまま術の行使直後で身動きが取れないスタン目掛けて斧を振り下ろす。

「ぶるああああ!!」

「なっ!!」

目前に迫る死に戦慄するスタン。

しかし、新たな死神の気配はバルバトスの後方からやって来た。

「な……に……!!」

バルバトスが驚愕のあまり目を見開く。

彼の胸には一本の剣が貫通していた。

「き、さま……ジューダス!!」

「……」

ジューダスはバルバトスを貫いた剣「イノセントキラー」を、勢いよく引き抜いた!

「ぐふう!!む……」

「……死ネ」

ジューダスはすかさず連激に入る。

バルバトスも必死に応戦するが、ジューダスの一撃が先ほどよりも重く、耐えるだけで精一杯であった。

「飛連斬!!崩龍斬光剣!!」

「ぐっ!ぬっ!!」

「幻影刃!!魔人滅殺闇!!」

「ぬぐっ!ぬがああああ!!」

「散レ!!」

ジューダスの剣に不気味なオーラが宿り始める。

ジューダスはそのオーラごと連続で剣を振り続けた。

「義憐聖霊斬!!」

そして……彼の仮面に一筋の光が走った。

仮面はその光からぱくりと割れ、彼の素顔をさらけ出した。

「あ……」

その時。スタン・エルロンは確かに見た。

ジューダスの仮面に隠された、その奥の素顔を……。

「真神煉獄刹！！」

渦巻く闇のオーラが剣先に集まり、それを開放するかのごとくジューダスが剣を突き出した。

「ぐぬ！！ぐああああああああ！！！！」

バルバトスはその強烈な圧力に耐え切れず、そのままはるか後方に吹き飛んだ。

「……ジュー……ダス」

スタンが呆然と、ジューダスの背中を見つめる。

ジューダスは、割れた仮面を拾い上げると、魔力を流してもとの仮面に修復し、それを被った。

「……行くぞ。まだ戦いは終わっていない。下の連中を助けに行くぞ」

「……」

「……」

二人は黙り込んだまま、下で戦っている仲間達を助けるために降りていった。

「ジューダス！！無事でしたか！！」

ジューダスとスタンが建物の上から降りてくると、セルシアが心配そうに出迎えた。

「問題ない……バルバトスがいたが……倒した……あとは、あの魔物を、倒すだけ……だな」

ジューダスは息も絶え絶えになりながら言うと、くらりとバランスを崩した。

「ジューダス！！」

セルシアが倒れそうになったジューダスを抱きかかえる。

「二人とも、危ない！！」

ファラの叫び声が聞こえたとき、セルシアとジューダスを狙うようにティガレックスの右前足が飛び込んできた。

「させるかああ！！」

カウスがセルシアとジューダスを弾き飛ばす。

そして、ティガレックスの前足はそのままカウスを握りこみ、建物の壁際に押さえつけた。

「ぐっ！うああああああああああ！！！！」

凶悪な握力で押しつぶされそうになるカウスが、断末魔の叫びを上げる。

「カウス！！」

「カウスを放して！！」

カノンノが大剣を振りかぶり、ティガレックスの突き出している腕に向かって攻撃した。

しかし、強固な筋肉で出来ている前足を一撃で砕くことは出来ない。

「！！……お願い、間に合って！！」

二撃目を振りかぶる。

その刹那。

「隙あり」

「あ……」

カノンノの細い体を、緑色に変色した禍々しい『腕』が貫いていた。

「あ……う……」

「バカな奴だ。ティガレックスの硬い部位を攻撃したところで、何の意味もない。ましてや仲間のピンチで気が動転した結果の行動など、バカの極みだ」

「……あ、なた、は……」

「死ね」

突如カノンノの背後に現れた男はその禍々しい腕を引き抜いた。

カノンノの体から大量の血液が流れ出した。

「カノンノ……」

「カノンノオー……！！！」

カウスが叫ぶ。

彼の体を、光が包み込み始めた。

「お前、よくもおおおお……！！！」

彼の体からまばゆい光が発せられると、その場にいた者は皆そのまぶしさに目を細めた。

やがて光が収まると、カウスの姿が変わっていた。白を貴重とした特殊な鎧を未に纏っていた。

ジューダス達は知らない。それがカウスというディセンドーにとっての奥の手である、『レディアント装備』であることを。

「つつ……はなせええええええええええ！！！」

カウスが強引にティガレックスの拘束を弾く。
あまりの圧力に腕を折られたティガレックス。

カウスはそのまま、カノンノを助けるために右腕が禍々しい男に接近する。

「ふん、無駄だ。ストーンプリズン!!」

男が叫ぶと、突如として岩が地面から隆起し、男とカノンノを包み込んだ。

「はあああああああ!!!!」

気合いと共に繰り出されるカウスの攻撃。

しかし、レディアントを身にまとった上での一撃も、その岩の牢獄を打ち破る事は叶わなかった。

「無駄だ。ストーンプリズンはそう簡単には破れない。術が解けるころにはこの女は出血多量でジ・エンドだ」

男はそう言っていると、倒れ付しているカノンノを見て凶悪に笑った。

「チェックメイトだ」

「私が行きます!!」

セルシアが叫んだ。

「行ってくて、どうやって!!?」

ファラが驚きと共に返す。

「……私なら、あの岩の結界を通り抜けることが出来ます!!」

セルシアが走り出した。

カノンノが閉じ込められている岩の牢獄に向かって。

（お願い……成功して!!）

セルシアが強くなじると、彼女の体の周囲の空間がゆがみ始めた。

やがて歪みが強くなると、セルシアの体から強い光が発せられ始め、そのままセルシアは姿を消してしまった。

「瞬間移動!!?」

ルークが驚く。

「で、でも瞬間移動じゃ、あの出口の無い岩の結界に入れないわ!!」

ティアが叫んだ。

そう。瞬間移動は常人の目には消えたように映るがあくまで移動でしかない。

出口の無い部屋からの脱出などにはつかえないのだ。

しかし、セルシアのそれは違ったらしい。

彼女は見事に、ストーンプリズンの結界内に到達した。

「な……なんだと!!」

「はあ……はあ……や、やった!」

セルシアは急いでカノンノに近付く。

非常に危険な状態であつたが、まだ息はある。

助かるのだ。この場から脱出できれば。

「貴様、どうやって!!?」

男が驚愕の目をセルシアに向ける。

その時、結界の外から声が聞こえた。

「セルシアー!! 無事かー!!」

「セルシア?」

男はそこで、何かに思い至つたように呟いた。

「セルシアという名……そして、ここに来ることが出来たその妙な

力……」

「……」

「貴様、まさか第6訓練施設の空間部門の実験体か!? あの事故で消滅したという!？」

「……!!!!」

セルシアの目が驚愕に見開かれる。

その言葉に、心当たりがあつたからだ。

「あ、貴方は……」

「セルシア!! 早くカノンノを連れて脱出して!!」

ティアが結界の外から叫んだ。

「……くっ!!」

セルシアが再び強く念じると、カノンノとセルシアを包むように光が発生し、そのままセルシア達は結界内から消えてなくなった。

「……空間部門の第2実験体……セルシア」

結界に取り残された男は呟いた。

「まさか……こんなところで俺の同胞に出会うとはな……」

セルシアは無事にカノンノを連れて結界の外に脱出していた。

「くっ……はぁ……はぁ……」

セルシアの息が荒い。

まるで使ってはならない禁呪を使ってしまったかのように。

「カノンノを、お願いします……」

そういつて気絶するセルシア。

ティアとルークがカノンノとセルシアを回収した。

急いでライフボトルをカノンノに飲ませるルーク。

ティアは回復術の詠唱を開始し、カノンノの傷を塞ぎにかかった。

その時、ストーンプリズンの結界が崩れる音が聞こえた。

「させん!!」

中から男が接近する。

右腕が魔物のような男は、そのままティアとルーク目掛けて突進した。

「やらせるか!!」

ルークがその突進を止める。

そして、その背後からユーリが飛び出した!

「蒼破刃!!」

風の刃は男にあたり、男の胸を切り裂いた!

「ぐはっ!」

「とどめだ!ルーク!」

「任せろ!!」

ルークが剣を振りかぶる。

男は、それが避けられないと覚悟し「ティガレックス、後は任せた!!」そう叫んだ。

直後に黒い靄が男の周囲を囲む。

ルークの攻撃は回避され、男はそのまま靄の中に消えていった。

「ごあああああああああ!!!!」

ティガレックスが叫び、動き回る。

しかし、今度は術の使い手を狙っていない。

「あの男が、ティガレックスを操ってたのか……」

呟きはリッドのものだった。

そして、ティガレックスを倒すために、カウスが力を解放する。

「これで終わりだ!!シャイニング・バインドオー!!!!」

ティガレックスの頭に接近したカウスが、そのまま秘奥義を放つ。

ティガレックスは強烈な光に飲まれ、苦しみもだえた。

「とどめは任せろ!!翔破蒼天斬!!」

ロイドがとどめの一撃を放つ。

その一撃はティガレックスの頭を砕き、かの者の命を終らせた。

五章三話 流血・覚醒（後書き）

いつも読了ありがとうございます。アラヤシキです。

今回は少し長めに尺を取って、戦闘シーンを描きました。

それだけ、今回の戦闘でさまざまな要素を詰め込んでしまった結果でもあります。

一つ一つ、簡単な解説をば。

「ジューダス、覚醒？」

ジューダスがカタカナで喋り始めたのはタイプミスではありません（汗）

彼の持つ何かが引き金となり、一時的にジューダスの戦闘能力を限界以上に引き出されたのであります。同時に冷静な思考も麻痺しています。でなきゃ、スタンの居る前で、あんな技を繰り出すはずが

……

「セルシア覚醒」

瞬間移動とはまた違った能力をもつセルシア。

彼女の能力、そして過去はこれから明らかにされていきます。今回の敵であった、右腕が魔物の腕をした男との関係はいかに！？ふふ……ワタシの楽しみの一つであります。

「カウス、レディアント装備を纏う」

ワタシのディセンドー、カウスは不幸にもレディアント装備を身につけないまま異世界をまたいでしまいました。しかし、彼も知らなかったことですが、異世界から『限定条件付』でレディアントを呼び寄せることが出来るのです。

そのあたりの解説とかも、このあとちゃんと本編で明かすことが出来ればな、と思います。

いかでしたでしょうか。
それでは今回はこの辺で。
ありがとうございました。

五章四話 友（前書き）

この作品は、複数のテイルズタイトル（TOD・TOE・TOD2・TOS・TOA・TOV・TWRM2）と、オリジナルを組み合わせた二次創作です。

複数タイトルのミックス作品や、本編のネタバレ、オリジナル要素が苦手な方はご注意ください。

前回のあらすじ：ファンダリアの地上軍跡地で手配魔物『ティガレックス』と戦うジューダス達。途中、バルバトスや右腕が魔物の腕をした男の襲撃にあうが、セルシアの空間転移能力の助けもありなんとか切り抜けることができた。その最中、スタンはジューダスの正体に一歩近付く。

五章四話 友

五章四話 友

スタン！！

バルバトスが自分を弾き飛ばし、スタンに急接近する姿が見える。
殺される。

術を使用した直後の隙を狙われた以上、スタンにあれを回避する術
は無い。

殺される。

スタンが、殺される。

その事実を必死になって否定しようとしたとき、声が聞こえた。

『貴様の魂を我が供物として授けよ』

響いた声は、低くおどろおどろしいものだった。

悪魔の声、と例えてもいいかもしれない。

そんな声に、僕が従ったのは、その次の言葉があったからだ。

『友を救いたくは無いのか？』

目の前で繰り広げられであろう惨劇を回避するためならば。

例え貴様が悪魔であろうとも、この魂を捧げよう。
それで

スタンを助けることが出来るのならば……。

そう願った瞬間。

自分の体を一本の槍が貫いた。

「あ……」

黒い装飾がされた禍々しい槍は、自分の心臓をギリギリ掠めるように突き刺さっている。

途端に襲う、激痛。

「あ、ああああああああああああっっ！……！」

らしくない、激痛に叫び声を上げる自分。

やがてジューダスたる自分の骨格は崩壊し、内側から何か禍々しい力が噴き出し始める。

それが、自分に与えられた新たな力なのだと理解した途端、理性は崩壊した。

コノカデ、友ヲ守ル……

思えば。

この戦いは、何のために繰り広げていたのか。

スタン達を苦しめるものが居るのならば、それを排除するためだっ
たはずだ。

だというのに、スタン達を戦いの渦中に巻き込んでしまった。

その責任は、僕にある。

それとも僕は。

あいつらと共に在る事を、良しとしてしまったのだろうか。

だからあいつらと行動を共にすることを、受け入れてしまったのだろうか。

それは、自分の罪を認めた男の行動としては、あまりに軟弱では無いか。

僕は……あいつらと一緒にいたいわけじゃ ない。

決して、ない。

くく地上軍跡地くく

「……スターン。起きなさいよー」

夜明けと共にルーティの声が聞こえる。

スターンは大して眠れなかったおかげで、すぐにテントから出てくる
ことが出来た。

「あら、起きてたんだ」

「ああ……」

「珍しいこともあるもんね。ファンダリアが砂漠化しちゃうわ」

「それは言いすぎだろ……ルーティ」

自分の寝ていたテントの中を見る。

そこには、まだリッド、ユーリが寝ていた。

「……セルシア。ジューダスは？」

ルーティと共に夜の晩をしていたセルシアに問いかける。

彼女は無表情のまま「まだ目を覚ましません」と言った。

「そっか……」

「ねえスタン？昨日、何があったの？あいつに」

「……」

スタンはそこで一瞬の迷いを見せた後、首を横に振ってルーティを見た。

「話すよ。きっと、大事なことだ」

「？」

「俺とジューダスはバルバトスって男と戦ったんだ。その時、俺のピンチをジューダスが救ってくれた」

「……ふ〜ん」

「そこで見えたんだ。ジューダスの素顔を。一瞬だけだけど……」
その言葉に、一瞬の緊張が走ったのをスタンは感じた。

ルーティは、ひどく真剣な表情のままこちらを見ている。

セルシアも、相変わらぬ無表情ながらこちらを見ていた。

「彼の素顔に、思うところがありましたか？」

「……ああ」

セルシアの問いに頷きだけで答える。

「ルーティ、それにセルシア。俺は、ジューダスが目を覚ましたら

……」

先の言葉を続ける。

ルーティは不安そうな面持ちで、セルシアは驚きを少しだけ表情に浮かばせながら、スタンの話を聞いた。

「……あんたはそれでいいの？もしかしたら、答えがわからないままになるかもしれないのよ」

ルーティが尋ねる。

「……分からなかった時は、その時だ。結局、俺には真実を知る力が無かったんだって、諦めるよ」

そういつて、スタンは自分の持つ剣を見た。

ディムロスならば、こんな時どんな返事をしてくれただろう。

自分の提案を受け入れてくれただろうか。

スタンは考えながら、ルーティたちと寝ずの番を交代した。

太陽が上がった頃、テントの中から一斉に顔を覗かせる仲間達。しかし、そこにジューダスとカノンはいない。

二人とも、昨日の戦いで気絶したまま目を覚まさないのだ。

「セルシア、体調はどうだ？」

ロイドが仲間を気遣って呼びかける。

「問題ありません。昨日はご迷惑をおかけしてすいませんでした」

「いやあ、元気になったんならそれでいいんだけどよ」

ロイドの言葉に、セルシアは少しの笑顔を見せた。

今度はリッドが口を開いた。

「ところでよ、昨日の瞬間移動は何だったんだ？セルシア。敵の結

界の中に簡単に入っちゃったけどよ」

「あれは……瞬間移動ではありません」

「瞬間移動じゃない？」

「はい。あれは私の能力である『空間転移』です」

「空間……転移？」

リッドが首を傾げる。

「はい。違う座標に直接繋げて転移することです。瞬間移動とは似ていますが、根本の論理が違います」

「????」

「例えば……瞬間移動は直接壁を通り抜ける事は出来ません。ですが、空間転移ならば、壁を乗り越えて移動することが出来るのです」
「つまり、牢屋に閉じ込められても脱出できるってことか？」

「はい」

セルシアの説明にリッドは驚く。

「すげえな、空間転移かあ」

「ええ……ですが、私のその能力は安定していません。今後この能力に期待されても、応えられないと思います」

「そうなのか？」

「ええ……」

セルシアは俯きがちに自分の両手を見た。

その能力は安定しないという。

カノンノを敵の結界から救い出したのも、奇跡ともいえる僥倖だったらしい。

その一方で、ファラはカウスの様子を見ていた。

「具合はどう？カウス」

「うーん……少しだるい感じ。体内のmanaが減ってるのかな？……でも、問題ないよ」

「無理しちゃダメだよ？manaとかよく分からないけど、減った栄養は戻るまで無理しないこと！」

「う、うん……」

カウスは昨日の戦闘の終わりと同時に、身にまとったレディアント装備が消えていくのが分かった。

本来あるべき場所に戻ったのかもしれない。あるいは、本当に消えてしまったのか。

カウスは気になったが、期待できる戦力では無い以上、あまりあてにしないことにした。

「おい、セルシアー！アルテって奴との連絡は着いたか？」

ユーリが遠くからセルシアを呼ぶ。

セルシアは「今連絡を飛ばしています」と応えた。

ユーリ達は黒の石を探していた。

今までの通りならば、黒の石が近くに転がっているはずなのだ。しかし今回はそれが見つからない。

「あいつらが持っていたのかあ？」

ユーリが瓦礫を剣で薙ぎ払いながら呟いた。

「そうですね……今まではもつと簡単に見つかっていた気がします」
エステルがユーリの呟きに答える。

「バルバトスと、なんだ、腕が魔物みたいな奴……あいつらが持ってたのかもしれない」

「でも、今まではそんな事はありませんでしたよ？」

「……嵌められたのかもな、俺たち」

「え？」

「敵も俺たちが黒の石を集めてるって事に気がついているみたいだし、黒の石を利用して俺たちを罠にかけようとしたのかもしれない」

「そ……そんな……」

「事実、今回の戦いは危なかっただろ？カノンノが重傷を負わされだし、ジューダスとセルシアの二人が気絶しちまったんだからな」

「……そうですね。私たちの敵は、今まで以上に私たちを警戒してきている、ってことですね」

「ああ、そういうことだ」

ふとユーリを見ると、エステルが不安げな表情を浮かべていた。

ユーリはその表情を見るや否や、エステルの髪をわしゃっと掴んだ。
「きゃっ!？」

「ははは！頑張れよーエステル！お前の治癒術がこれからどんな役に立つかもしれないんだからな」

「そんな……怪我しないに越した事はないですよユーリ……それに、私……」

「安心しろエステル。お前の事は俺が守ってやるよ」

「え？」

ぽかんとした表情でユーリを見上げるエステル。

「フレンの代わりに、お姫様のお守りをしてやるつつたんだよ」
にやりとした笑みで見返すユーリ。

ユーリはエステルがからかわれたと気がついて怒るものだと思っていたが。

「えへへ……ユーリ、ありがとうございます」

照れ笑いを見せるエステルに、思わず気恥ずかしくなってしまうユーリであった。

「仲良しこよしで結構結構」

「うおわっ！」

「きゃっ！す、スフィード！？」

突然瓦礫の先から聞こえた声に思わず驚くユーリとエステル。

「ったく、こんなときにラブラブってどういう見だね、お二人さん」

「ら、ラブラブなんてしてません！！」

エステルが必死に否定するが、スフィードは一向に聞く耳を持たない。

「いや、してたね。お互いがお互いを見詰め合っちゃって、今にもチューでもするのかと思って若干引いたぜ、俺」

「ちゅ、ちゅーって……」

エステルの頭から恥ずかしさのあまり湯気が出ていた。顔も真っ赤である。

大してユーリは、最初こそ驚いていたものの冷静だった。

「黒の石を見つけたのかよ、スフィード？」

「ああん？見つかったねーよ」

「そうか」

そこで考え込み始めるユーリ。アルテからの連絡次第だが、もうこの土地には黒の石は無いのでは無いか。

そう思つて、引き返そうとした。

その時。

「なあエステルとユーリは恋仲なのか？」

そんなスフィードの言葉に思わずユーリはつんのめりそうになった。

「な、ち、違いますよ！ねっ、ユーリ！」

「まあなあ。つてか何なんだスフィード、さつきから。俺とエステルの関係がそんなに気になるのか？」

「まあな。命を賭けた戦場に好いた好かれたの關係を持ち込むなんて、尋常じゃねえと思つてさ。どんな気持ちなのか氣になつただけだよ」

「……残念だつたな。俺達はそういう關係じゃないつてさ、エステルが言うには」

「む、どうやらそうらしい。あーあ、氣になつたんだが」
スフィードは振り返り、瓦礫の上を歩きながら呟いた。

「恋人が戦場で死ぬのは、どれだけ痛いのかつてさ……」

その呟きに、ユーリは答えない。

エステルがぽかんと首を傾げた。

「スフィード、どうしたんでしょう……？」

「さあな。俺たちをからかつてるだけなんじゃねーの？」

そうは言うが、ユーリの目には、スフィードに対する不信が宿っていた……。

「アルテから連絡が来ました！」

セルシアの大声で、黒の石を探していたメンバー達は一斉にセルシ

アのもとへと集まった。

「どうだった!？」

コレットが急いで聞いた。

「……やはりこの近くにあった黒の石の反応が無くなっているようです」

「くそ!」

ロイドが足元の雪を蹴飛ばす。

「やっぱり、敵が持つて行っちまったんだな」

ルークはそういつて、その場に座り込んだ。

「申し訳ありません皆さん。余計な労力を使わせてしまつて」

セルシアが周囲を見渡して謝る。

「いいつていいつて。アルテつて奴が気を利かせて俺達にすぐ連絡を寄越してくれば済んだことなんだ。セルシアは悪くねえよ」

ルークのその言葉に、セルシアは。

「いいえ。アルテは複数の守護者を使役して同時に様々な世界をモニタリングしているはず。私たちだけのバックアップをしてくれているわけではないのですよ」

そういつて目を閉じた。

黒の石がここには無いとわかった以上、ジューダス達の次に打つ手は無い。

「ねえ、一旦セインガルドに戻りましょうよ。ダリルシエイドで、神父さんから報酬を受け取らないと」

そう提案したのはルーティだった。

ルーティの提案をセルシアは考え込んでいたが、ユーリが横から呟いた。

「仕方ねえさ。もらえる物はもらつとくつて意味でも、戻つたほうがいいだろ」

ユーリがそう言つと、セルシアは「そうですね」と納得した。

道中、気絶しているジューダスをユーリが、カノンノをカウスが担ぐことで雪原を抜ける。

襲い掛かる魔物達はそれ以外の者が対処することで、何とかスノーフリーアまで戻ることが出来た。

雪原を歩き始めて最初の夜。

ジューダスとカノンノが目覚めた。

カノンノは目覚めると同時に皆に迷惑をかけたと謝罪し、セルシアに助けられてありがとうと礼を言った。

セルシアは微笑みで答える。

一方ジューダスは、無言のままだった。

ただ、自分の両手の手の平の感覚を確かめるように、何度も握りこぶしを作っていた。

そして……

ダリルシェイドに戻ってきてすぐに、ルーティは国王のもとへ向か

った。

手配魔物を倒したという証を持って。

同行しなかったジューダスは、町をうろつくことにした。

セルシアが、ジューダスの横と一緒に歩く。

「……なんだ」

「いえ、聞きたいことがあります」

「……なんだ、聞きたいことは？」

「あの二人……スタンとルーティは、この旅に参加させますか？」

「無論、ダメだ」

ジューダスはきっぱりと言い放った。

セルシアは無表情のままジューダスの顔を眺める。

「なぜ、ダメなんですか？」

「なぜ……それは……」

「貴方にとって居心地の良い相手だから、ですか？」

「……違うな」

「それでは、貴方が仮面を被っている意味が、あの二人だからですか」

「……そうだな。それに近い」

ジューダスはそういって、セルシアから離れるように歩き始める。

しかしセルシアはそれに気付きながらもジューダスを追うように歩いた。

「なんだ？」

「いえ、貴方だけの理由で、彼らのような貴重な戦力を連れて行かないのは、非効率だと思います」

「非効率でも何でもない。僕にとって、あいつらと一緒にいるのは邪魔なだけだ」

「珍しいですね。ジューダスが我が俦を言うなんて」

「我が俦……だと？」

そこでジューダスは足を止めた。

二人は崩れた商店の前で向き合った。

「我が俤でしょう。これからの旅には彼らのような実力者を迎え入れた方が効率的です」

「我が俤とでもなんとでも言え。とにかく僕はあいつらとはこれ以上関わらない！」

「ジューダス！」

ジューダスは言い終えると、セルシアの言葉を無視して足早に歩いた。

セルシアも追おうとするが、すぐに彼の漆黒のマントは道行く人々の波の中に消えてしまった。

「……ジューダスの過去に、一体何が……？」

セルシアは、それこそが謎の原因だと感じた。

セルシアから逃れるように歩いていたジューダスは、崩れかけの教会を見つけた。

「おや、君は……」

その教会の前で、瓦礫を運んでいる神父の姿が見えた。

ジューダス達にティガレックスを倒すよう頼んだ神父だった。

「お前は……バルドック神父……」

「やあ、久しいな。無事に手配魔物を倒したようだな」

神父は運んでいた瓦礫を地面に置くと、悠然とした態度でジューダスに近付いた。

ジューダスは神父の長身に臆することなく、神父と相対した。

「ふん。依頼達成はルーティが来てからだ。僕はあの魔物の体の一部など持ち帰っていない」

「結構だ。では待ち人が来るまで、少し話をしないか」

「……なに？」

「この世界でつい最近起きた出来事に、興味が沸いたのだよ……リオン・マグナス」

「！？」

ジューダスのはつと息を飲んだ。

怪しげな雰囲気を漂わせながら、神父は話を続ける。

「違ったかな？許して欲しい。リオンという少年の姿が映された絵画を、どこかで見かけてね。その少年と君の姿がだぶって見えたものだから、君がリオン・マグナスだと思

っていたのだが」

「……勘違いだ。リオンは既に死んでいる」

「その通りだ。だが、異世界を巻き込む異変が起きているのだ。

何らかの事情で死者が闊歩し始めても驚嘆に値することでは無いだろう」

「なぜ、そんな事を……」

その時、ジューダスは先ほどの言葉の中で引がかかった部分に気付いた。

「……待て、貴様さつき、この世界で、と言ったな」

「ああ、その通り。私はこの世界の住人ではない」

神父はジューダスの言葉を待っていたといわんばかりに口を開いた。

「私はあの手配魔物……ティガレックスと同じ世界の住人だ。こことははるかに違う文明、そして『死にかけの世界』からやってきた」

神父の言葉には、妙な圧迫感が感じられた。

死にかけの世界……その言葉は以前聞いたことがある。

確か、それは……

「スフィードと、同じ世界の住人なのか」

ジューダスは誰に伝えるでもなく呟く。

その呟きに神父は興味深そうに頷いた。

「なに？君たちの仲間に、私と故郷を同じくする者がいるのか？」

「……」

「興味深いものだ。ぜひとも会いたいのだが、会わせてくれるかね？」

神父の言葉に、ジューダスは頷かない。

この神父は、何か、おかしい。

そう感じながらも、どこがおかしいのか具体的につかむことが出来ないでいる自分が齒がゆかった。

「……返答は無しか。かまわんよ。いずれ、君たちと私の道は一つになる」

「……何？」

「君のすぐ後ろに、仲間達が集まっているよ。気付かなかったかな？」

「……」

ジューダスは目の前の神父に対する警戒心を高めていたせいで、後ろに仲間達が集まっていた事に気付けないで居た。

そこにはルーティとスタン。そしてスフィードが居た。

「神父さ〜ん！約束どおり、魔物を倒してきたわよ〜！！」

「ルーティ、はしゃぎすぎだって！」

「おっ？ジューダスもいるじゃん」

現れた三人はジューダスに近付く。

ルーティは真つ先に神父にティガレックスの鱗を見せた。

「どう！神父さん！これが証明よ〜！！」

「ふむ……確かにこれは、ティガレックスの鱗だ。間違いない」

「でしよでしょー！さあ、約束の報酬を……」

「待って、ルーティ！」

ルーティの言葉を遮るようにスタンが言葉を挟んだ。

「な、なによスタン……」

「この人、『ティガレックス』って名前を知っている……」

「あ……」

ルーティは咄嗟に鱗を自分の背中に戻して隠した。

スタンはルーティを守るように、長身の神父の前に立つ。

「神父さん……貴方は一体……」

スタンの問いに、代わりに説明したのはジューダスだった。

「こいつは、スフィードと同じ世界の住人らしい」

「お？こんなところで同胞発見」

「君か……私と同じ世界の住人というのは」

スフィードとバルドック神父は互いを見合うと、不敵な笑みを交し合った。

相性は悪くないのかもしれない。そう周囲のものに思わせるだけの笑みであった。

「神父さんも、あの世界からの脱出を試みたの？」

「いや……私は、より多くの世界を見渡したいと思ったただけ。い

ずれ帰るつもりだ」

「でも、どうやって帰る？」

「あてがある。君たちへの報酬でもあるな」

神父はそう言うと、懐から何かを取り出した。

それは、たくさんのガルドが詰まった袋と……

「黒の、石……」

ジューダスが呆然と、神父が取り出した石を見つめる。

「これは異世界と異世界を結ぶ鍵なのだろう？私がこれを持っていれば、いつか元の世界に帰れると思っている」

「これって……俺たちが探していた石じゃねーの？ジューダス」

スフィーダが確認するようにジューダスに問いかけた。

ジューダスは、自分の持つ荷物の中から黒の石を取り出す。

「反応している……」

互いの黒の石は光を強め合っていることが見て取れた。もう少し近づければ、異世界への扉が開くことだろう。

「このガルドが君たちへの報酬。そして交換条件に、この黒の石を渡すことにしよう」

神父はそういつて黒の石を懐にしまいこんだ。

「なに？交換条件って」

ルーティが不満げに神父を見る。

先ほどは報酬と言っていた黒の石を渡さない神父に、苛立ったからだ。

「なに、簡単な話だ。私を君たちの旅に同行させて欲しい」

「な……！」

驚きの声はジューダスのものだった。

「おお、いいね神父さん！同じ世界のもの同士、仲良くしようや！」

「ま、待てスフィーダ！」

ジューダスがスフィーダの誘いを止める。

ジューダスはしばし考え込むようにした後、ようやく口を開いた。

「なぜ、僕たちの旅に同行しようと思った」

「何。君たちの旅についていけば、いずれ私も元の世界に帰れるだろう。それに、私の旅の目的は、君たちと同じものだと思ったからな」

「なに……？」

「世界の救済。異変の解決。君たちの旅の目的とは、恐らくこんな所ではないかな？」

「……」

ジューダスの無言を肯定と受け入れた神父は、再び不敵な笑みを見せた。

「案ずるな。戦闘には多少なりとも経験がある。君たちの足を引つ

張るかもしれないというなら、私の実力を試してもらってもいい」

「……」

神父が握りこぶしを天に向かって掲げると、地面から沸き立つ闘気が現れた。

そのまま神父は近くの瓦礫に近付くと、拳をぴたりとあてて、目を閉じた。

「……せいっ!!」

その瞬間、瓦礫は衝撃を受けたらしく、粉々に離散した。

神父の拳は少しも動いていないように見える。だというのに瓦礫は粉碎された。

「わかるかね？ 今のは寸勁だ。下半身の力をフルに活動させて、密着させた拳から破壊力を生み出す技だ」

「す、すげえ」

ぽかんと口を開けているのはスタンだった。

今の一撃だけで、ジューダスは神父の実力は相当なものだと理解できた。

「……実力は、認める」

「ありがとう」

「……だが……いや、一晩待て。答えは明日にする」

「そうか。期待して待つでしょう」

神父はそういつて、再び瓦礫を持ち上げると、教会の奥へと消えていった。

瓦礫をどかして修繕作業を進めているらしい。

「ジューダス、話があるんだ」

宿屋に戻る道中で、スタンが口を開いた。

「俺を、ジューダス達の旅に同行させて欲しい」

スタンの言葉は、ジューダスが予見していたものでもあった。

そして、それに対する答えも当然決めている。

「ダメだ」

「どうして!？」

「……お前では実力不足だからだ」

「ちよつと待ちなさいよジューダス!」

ルーティがジューダスの言葉に待ったをかけた。

「こいつが実力不足?冗談は仮面だけにしなさい。あたしの目から見ても、こいつの実力はあんたと互角かそれ以上よ!」

「……スタンが、僕以上だと?」

ジューダスは、そこでくつくつと笑った。

「ふん……何を見てそう判断した?僕はスタンよりも強い……」

「なら、確かめようじゃないか、ジューダス」

スタンの目はひどく真剣だった。

ジューダスはその瞳に一瞬だけ怯む。

「俺が勝つたら、この旅に同行させて欲しい。そして……その仮面を脱いで、正体を明かして欲しい」

「……なに?」

「代わりに、俺が負けたら大人しく旅への同行は諦める……どうだ?」

「……」

ジューダスはその時、スタンが本気でこの案を提案していることに気付いた。

スタンは恐らく、気付いている。自分の正体に。

それをさらけ出し、再び共に旅をしようと言ってくれている。

「……ふざけるな」

ジューダスの心の底から、行くあてのない怒りが湧き上がり始めた。自身の存在を、罪を、根底から覆そうとするスタンの発言に、許せない気持ちがあった。

何故、一度殺しあつた者同士だというのに、スタンはそこまで……

「いいだろう。受けて立つ……」

今ここに、二人の再戦が決定した。

「いい！？勝負は一本限り！先に致命的な一撃を受けたり、武器を弾き飛ばされたほうが負けよ！！」

ルーティの声が、夜の平原に響き渡る。

ダリルシェイドから少し離れた位置にあるこの場所に、ジューダスの旅の仲間達は集まっていた。

これから始まる決闘を見届けるために、仲間達は一列になって見守る。

ジューダスとスタンは、互いに離れた位置に立ち、木刀を持った。

「……スタン。受け取りなさい」

ルーティが何かをスタンに向かって投げた。

「うわっと！なんだこれ……レンズ？」

「術を使うための特殊レンズよ。ソーディアンが無くても、術を使えるようになるわ」

「ルーティ、何時の間にこんな……」

「王様から貰った報酬で手に入れたのよ。あんたの分とあたしの分をね……敵は『あいつ』よ。術だって使ってくるでしょうし、あんたも全力で行きなさい」

その言葉に、ジューダスは皮肉に笑いながらルーティを睨んだ。

「誰と勘違いしているのか分からんが、安心しろ。術など使わなくても、こいつ一人十分だ」

そういつて、ジューダスは木刀を左手に持ち、短剣方の木刀を右手に持って構えた。

……ジューダスにとって、これが三度目になるスタンとの戦いであつた。

あの頃は、互いにソーディアンを持っていた。

しかし、今は違う。ソーディアン亡き後のスタンの戦闘能力が気にかかるが、負ける気はさらさらなかった。

（思えば、一対一は初めてだったな）

仮面の奥底で自身に溢れた笑みを浮かべるジューダス。

スタンには仲間がいる状態で過去戦闘を繰り返してきた。

それでも自分は一人でも一度目は勝ち、二度目はギリギリのところまで敗北した。

スタン一人で自分に勝てる道理が無い。そう考えた。

否。本当にそうだろうか。

スタンは、一人では何も出来ない弱い男だったか。

むしろ逆だ。どのような逆境でも諦めず戦い続ける強さを持っている。

ジューダスの実力がいかにスタンを上回っていようと、逆転するだけの執念を持ち合わせている。

それに、あの男はジューダスを受け入れようとしている。
そのために、ジューダスにスタンを認めさせるために、全力以上を
出すかもしれない。

(……ふん)

ぎりと奥歯を噛み締める。

苛立ちは剣を鈍らせる。だというのに収まる事の無い苛立ち。

これはきつと、スタンが憎たらしいからだ。あの男の、誰にでも心
を開くやさしさが、今まさに自分に向けられているという事実が腹
立たしい。

なるほどスタンは、きつとジューダスをリオン・マグナスとして受
け入れるだろう。その優しさで過去の自分の罪を水に流し、また仲
間として迎え入れるだろう。

しかし

それは、僕の望む所では無い

「準備はいいか？」

開幕の合図をスタンに送る。

「ああ……大丈夫だ、『ジューダス』」

ことさらに名前を強調して、スタンはジューダスに木刀を向けた。

二人の間に、一陣の風が吹き抜ける。

「それじゃあ……始めえ!!」

ルーティの掛け声と共に、両者は大地を蹴って接近した。

風をまくジューダスの接近のほうが早い。スタンは恐れずジューダスの攻撃圏内に飛び込む。

「飛連斬!!」

「虎牙破斬!!」

両者は飛び上がりながら切りつけた。互いの木刀がぶつかり合う。

「まだだ!!」

スタンが虎牙破斬二撃目を振りかぶる。対するジューダスは、空中で木刀と短木刀を交差させるように構えた。

「はああ!!」

スタンの振り下ろし攻撃を、交差させた木刀で回避するジューダス。さらに、ジューダスは短木刀を上手く使ってスタンの振り下ろしを予期せぬ方向へと流した。

「うわっと!!」

攻撃を流され、バランスを崩すスタン。

両者は同時に地面に着地するが、スタンは前のめにつんのめる。

「幻影刃!!」

ジューダスはその隙を逃さず、スタンに攻めかかる。

スタンは前から来るジューダスの攻撃を防御する。がそれはフェイントだ。幻影刃はその後背後に回りこんで斬りつける攻撃である。

「とつた……!!」

ジューダスはすぐさま振り返り、斬りつける。

しかし、スタンはそれを見越していたようで、そのままジューダスから離れるように前転した。

「くっ……」

「逃さん!!」

ジューダスが飛びかかる。スタンはすぐさま起き上がり、立ち上がる途中でジューダスの剣を防御した。

「双連撃!」

ジューダスの攻撃は続く。スタンは再び転がりながら防御するという状況に追い込まれてしまった。

「ありゃあ、ジューダスの方が有利だな。スタンは焦って防御することには集中できない」

スフィードが興味なさげに呟いた。

確かに、地面を転がるスタンをジューダスがたたきつけるという行為が連続している。これではスタンは攻めに転じられない。

「馬鹿言わないで。あいつがこのまま負けるもんですか!」

ルーティはスタンの勝利を信じて疑わない。

転機が訪れたのは、このときだった。

「しつこい……!! 魔神剣!!」

ジューダスは剣先を地面にこするようにスライドさせると、そこから斬撃の衝撃波が生まれ、スタン目掛けて飛んでいく。

スタンは、地面を転がった直後で避けられないとふんだ上でのジューダスの行動だった。

「負けるか!! 魔神剣!!」

スタンも同じ技を使う。

両者の魔神剣は激突し、互いに消滅した。

「魔神剣・双牙!!」

ジューダスはすかさずスタンに接近した。

また同じことの繰り返しになるかと思われた、その時。

「たあ!!」

スタンはジューダスの攻撃を地面ギリギリで交わすようにスライディングした!

「なに!!」

「その技は知っているぞ!! リオン!!!」

「!!!!」

スタンはスライディングでジューダスの足を蹴り飛ばした。

今度はジューダスが足を取られ、前につんのめった。

起き上がりざま、すぐに斬りつけるスタン。

しかしジューダスをつんのめったからだを庇うことなく前転し、スタンから距離をとった。

「はあ……はあ……」

「ふう……ふう……」

先ほどの劣勢を覆し、スタンは再びジューダスを睨む。

対するジューダスも、スタンの同行をうかがう様にステップを踏み始めた。

「今、リオンって……」

ロイドが呟く。

「リオンって、誰だ?」

その問いかけに、誰も答えなかった。ルーティでさえ、答えなかった。

「予想外だったな。僕の魔神剣・双牙をそうやってかわすとは」

「何度も見たことのある技だから、対抗策は思いついていたんだ」
スタンは再び地面を蹴った。

ジューダスはそれをサイドステップで華麗にかわす。

やはりスピードではジューダスが上らしい。スタンの剣は虚しく空を切り裂いた。

「もらった!!」

その隙をジューダスが見逃すはずが無い。

横から斬りつけるジューダス。

スタンはそれを振り向いてガードする。

「空襲剣!! 臥竜閃!!」

ジューダスは己の技を全て披露する覚悟でスタンに連続攻撃を浴びせる。

スタンはそれらの攻撃をなんとか凌ぎながら、何とか持ちこたえる。
一撃ごとに腕の痺れが増していくが、気にしていられない。

相手は『あの男』なのだ。この程度の苦戦は承知の上だった。

「月閃虚崩!!」

ジューダスが連続攻撃の最後にしかけた攻撃を防ぐと、こんどはスタンの攻める番となる。

ジューダスは連続攻撃による呼吸の乱れを整えながら、スタンの攻撃を受け流す準備をする。

「行くぞおお!! リオオーン!!」

スタンが剣を突き出す構えを見せる。

「閃光裂破!!」

高速の突きがジューダスを追い詰める。

(馬鹿なっ!? 重い……!!)

スタンはさらに間合いを詰める。

ジューダスの襟首を掴もうと、灼光拳を繰り出す。

ジューダスはそれを体を捻って回避した。

「空牙昇竜脚！！」

ひねった体を蹴り上げるようにスタンは回し蹴りを繰り出した。

それを木刀でガードするジューダス。

しかしスタンの炎を纏った蹴りの威力は想像以上のものでジューダスは空中に打ち上げられた。

「がはっ！！」

「うおおおおおお！！」

スタンも上空に飛び上がり、さらに回し蹴りを叩き込む。

最後の4度目の回し蹴りを叩き込んだ後、すぐにスタンは剣を構えた。

同時にジューダスも剣を構える。

「裂空斬！！」

「臥竜滅破！！」

二人の剣は激突しあい、空中でぶつかり合う。

ジューダスもスタンも、一步も引かないまま空中から落下する。着地と同時に距離を取る両者。

「いくぞ！！」

ジューダスは高速詠唱を開始する。

対するスタンも、負けじと詠唱を開始した。

「シャドウエッジ！！」

「くっ……ファイアボール！！」

ジューダスのシャドウエッジが先に命中したが、スタンはそれをギリギリのところかわしながらファイアボールを打つ。

しかし、乱れたファイアボールはジューダスとは違うあらぬ方向に飛んでいく。

「ふ……そんなものか！ネガティブゲイト！！」

再びの高速詠唱。

スタンはマジックガードを発動させて、何とかそれを凌いだ。
その時、ジューダスの体に異変が起こる。

「ぐあっ!!」

ジューダスは突然後ろから高熱を暗い、前のめりに倒れた。

「さっきのファイアボールは、外れたんじゃない! わざと外して軌道を反らしたんだ!!」

スタンが大地を蹴る。

ジューダスは急いで起き上がる。剣を構えたところには、スタンは自分の間合いに飛び込んでいた。

即ち スタンにとっても最適の間合い。

「爪竜連牙斬!!」

「させるか!! 爪竜連牙斬!!」

二人の連続攻撃が互いの剣を弾きあう。

全く同時に繰り出された流れる連続攻撃は、そのまま互いの技を相殺し合う。

「崩龍斬光剣!!」

「熱波旋風陣!!」

ジューダスは飛び上がり、更なる連続攻撃をスタンに浴びせようとする。スタンはそれを阻止するため、自分の体から炎の渦を生み出し、ジューダス目掛けて放った。

「おのれっ!!」

飛びのくジューダス。

そして、剣を突き出す構えを見せた。

「この距離ならば、かわせまい!!」

ジューダスの剣先に闇のオーラが集い始める。

そして、渦々しく渦巻くオーラは、剣の形となって放出される!

「魔人闇!!!」

熱波の渦に向かって繰り出される、ジューダスの奥義。

スタンはそれを回避する術を持たない。

もとより、回避するつもりなど毛頭無かった。

「なに!!」

熱波の渦からスタンが飛び出す。

魔人闇は直撃したかに見えたが、わずかにスタンの体を掠めるにとどまった。

炎の渦が目くらましとして機能したらしい。

「しまっ……!!」

「リオオオオ……!!」

肉を切らせて骨を断つ覚悟で接近するスタン。

その刀身には巨大な炎が宿っている。

スタンはそれを腰溜めに構えると、ジューダスに向かって一気に切り込んだ!

「殺劇……舞荒剣っつ!!」

舞い踊るスタンの焰。

灼熱の連続攻撃を、しかしジューダスは短木刀でかわし続ける。

(くう………これをかわし切ったとき、それがお前の敗北の瞬間だ、スタン!!)

ジューダスは間断なく繰り出されるスタンの攻撃を全て防ぐつもりでかかった。

スタンは息つく暇すらなく、疾風怒濤の攻撃を浴びせ続ける。

そして、ジューダスは確かに感じた。

次の切り上げ攻撃が、スタンの殺劇舞荒剣の最後の一撃だと。

(とった……!! 魔神煉獄殺で、とどめだ!!)

スタンの攻撃を防ぐため、そして自身の秘奥義に託すため、再び闇

のオーラを纏い始めるジューダス。
しかし、予期し得ない攻防が起こった。

「な……に……」

「うおおおおおおおおお！！！！」
スタンは止まらない。切り上げたその直後から、ジューダス目掛けで突進する。

秘奥義からの奥義への連携。幾らなんでも無茶の過ぎる連携であった。通常ならばスタミナが持つはずが無い。

スタンは、それをやってのけた。

「鳳凰天駆！！」

滑降するスタンの攻撃。

ジューダスは自身の秘奥義を開放せんと剣を構えたまま、無防備に空いた仮面をさらけ出す。

両者の体が交錯する。

スタンは、ジューダスの後方に着地していた。

そして、響く仮面の割れる音。

「はぁ……はぁ……」

スタンは、息がまとまらない。

ジューダスは、呼吸すら忘れて砕け散った仮面の破片が転がる足元を見つめた。

その場にいた全員の息を飲む音が聞こえる。

「はあ……はあ……俺の……」

スタンが振り返る。

月の光が、彼の顔を明るく照らし出す。

「俺の勝ちだ……リオン……！」

その言葉を、ジューダスはどう受け止めたのか。
ゆっくりと足元に転がる仮面の破片を拾い、それに魔力を通してもとの仮面に修復する。

それを　被らないまま、彼はスタンに向き直った。

月の光が、彼の正体をさらけ出す。

「ああ……そして、僕の敗北だ。スタン……」

二人の間に、一陣風が吹いた。
それは戦いの終わりを告げる、
風の音だった。

五章四話 友（後書き）

今回は怒涛の執筆の勢いでした。わずか2日で書き上げました。

スタンとジューダスの……いえ、リオンの決闘。いかがでしたでしょうか。

本当はこの話の続きも含めて一話にしようと思っていたのですが、きりがいいのでここで話を区切ります。

ジューダスは、なにを思ってスタンを危険から遠ざけようとして、スタンは、死んだはずの友が何かの戦いに巻き込まれている現実を知って……だからこそ、互いの願いを賭けた戦いは生まれました。その勝者は、彼となつたわけですが。

さて、これからの彼らの活躍にご期待いただけたらと思います。

感想、意見、その他コメント、お待ちしております。

それでは、失礼します。

五章五話 新たなる旅立ち

五章五話 　　ゝ新たなる旅立ちゝ

「リオン……なんだな……」

「……ああ」

スタンの問いかけに頷きと共に返すジューダス。
やがて、ルーティが駆け出し、ジューダスに抱きついた。

「バカっ!!」

「……………」

「生きていたんなら……さつさと会いに来なさいよ……この、おお
ばか……！うつつ……ああああああああ……！！！」

「ルーティ……………」

泣き崩れるルーティを支えるジューダス。

自身の目にも一粒の涙を溜め、危うくそれを流しそうになるのを懸命に堪えるため、ジューダスは天を仰いだ。

「おかえり……………リオン！」

スタンも涙を流しながら、戦友を迎える言葉を言った。

ジューダスはその言葉を確かに胸に受け止めながら、天を見続けた。

月明かりが、彼ら3人の再会を祝福しているような、そんな光であった。

翌日。

ジューダスは仮面を被り、ベッドから起き上がった。

窓の外を見れば、まだ朝食前だというのにルークとロイドとスフィードが互いの剣を競い合っている姿が見えた。

どうやら、ルークはスフィードにライバル意識を持っているらしい。たびたび彼を訓練に連れ出す姿が見える。

ジューダスはそれらの光景には構わず、部屋の外に出た。外に出ると、スタンとルーティが一緒に廊下を歩いているところに出くわした。

「あら、おはようリオン！」

「……ふん」

「昨日は失態だったわねー！まさかあんなに泣いちゃうとは！」

「……やけに元気だな」

「まあね。あんたとの再会に、あたしも浮かれてんのかもね」

ルーティはやけに愉快的声でそう言った。

ジューダスは思わず瞠目する。

「らしくないな、お前……」

「ルーティも嬉しいんだよ……リオン」

「……何度も言うが、僕は既に死んでいるんだ。ジューダスとして復活したわけでもない。この命は、何かの偶然で生きながらえているだけなんだぞ」

ジューダスは挑むような目つきでスタンを見た。

しかしスタンは笑顔のまま。

「でも、リオンはリオンだろ？」

そう言った。

はあ、とため息をつくジューダス。

この二人には何を言っても通用しないだろうと考えた。

「おはようございます、皆さん」

「ん……」

セルシアが廊下の奥から現れる。

スタンとルーティはジューダスに背を向けて、セルシアに挨拶した。
「おっはよう！」

「おはよう、セルシア！」

スタンはそこで何かを思い出したようにジューダスを振り返った。

「……なんだ？」

「あのさ、リオン……」

スタンは言いにくそうしていたが、やがて決心したように口を開いた。

「マリアンさんに、会いに行かないか？」

「……なに？」

ジューダスは、ひきつった顔でその言葉を受け止めた。

「放せファラ！僕は……」

「いいから、ジューダスにとって大切な人なんですよ、そのマリアンって人は……」

ファラにぐいぐいと引っ張られる形でジューダスが向かっているのは、崩れかけたヒューゴ邸であった。

スタンの提案はこうであった。

『異世界へ飛ぶ前に、せめて自分が守った人の顔を見ていくべきだ』と。

スタンの話は朝食の場にまで及び、他の者たちの耳にまで入ってしまった。

そこで話は止まる事は無く、ジューダスの意見を半ば無視する形で強引に連れて行くことになった。

その『マリアン』という女性の下へ。

ファラは積極的にジューダスを連れて行くべきだと言い、こうして連れてこられたのであった。

「私も会うべきだと思います。そのマリアンという人に」

ジューダスの後ろを歩いてついてきていたセルシアが呟いた。

「セルシア……なんでお前にそんなことを……」

ジューダスは引っ張られながらセルシアに不満の目をする。

しかしセルシアは相変わらざる無表情のまま、ジューダスの愛した人とよく似た貌を見せるのみであった。

「貴方は今一度確認するべきです。己の戦いの意義を。守りたい世界と、そこにいる人の姿を」

「……しかし、僕は」

「せめて、遠くから一目見るだけでもいいと思います。貴方は……」

「えーそんなのだめよ……」

セルシアの言葉を遮って、ファラは言葉を続けた。

「ちゃんと会って話すほうがずっといいよ！ジューダスだって、恋人と会えるの、懐かしいんでしょ？」

「だからお前は勘違いをしているといっているんだ！僕とマリアン

はそんなんじゃ……!!」

ジューダスが文句を言うが、ファラは気にせず、ずんずんとジューダスを引っ張っていく。

「諦めてくれ、ジューダス。ファラがあのもードに入ったらそう簡単には諦めねえからよ」

リッドがくくくと笑いながら、ジューダスに言った。

「貴様……愉しんでいるだろう……!!」

「いやあ、そんなことはないぜ?」

「リッド……覚えて置け!」

「はい、到着!」

先導していたルーティがある屋敷の前で止まった。

間違はなく、そこはヒューゴ邸。今のジューダスにとってもっとも足を踏み入れたくない場所であった。

「はい!頑張つて!ジューダス!!」

ファラが満面の笑みをジューダスに見せる。

ジューダスは頬をひくつかせながら、

「帰る!」

そう言つて踵を返した。

それを足払いで転ばせるファラ。

「もう!どーして帰っちゃうの!!」

「だからって足を払うな!!」

ジューダスは転んだ拍子に地面につけた手を払いながら、ファラに怒った。

しかし、ファラも負けじと不満そうな表情を浮かべている。

「いいか!この件に関してはそもそも部外者だろう!お前は!」

「部外者じゃない!私はジューダスの『仲間』だよ!」

「『仲間』というのはこういう時に余計な茶々を入れるものの事が！違うだろう！」

「茶々じゃないよ！私はジューダスがきつと後悔すると思ったから、こうして連れてきたんだよ！」

互いに一步も引かないジューダスとファラ。

その様子を見かねたリッドが、ファラの頭を上から押さえた。

「あー悪いなジューダス。強引に連れてきちゃって」

「ちょ、ちよつとリッド！何するのよ！」

ファラはリッドに頭を抑えられ半ばお辞儀しているかのような体勢をとらされている。

「ふん……」

「でもよージューダス。本当にいいのか？」

「ああ……」

「なら、俺は止めないけどよ……」

リッドはそういつて、ファラを連れて行こうとした。
しかしファラは動かない。

「なあ、ファラ……ジューダスにも事情つてもんがあるんだから……」

……

「……寂しいよ」

「は？」

「本当は会えるのに会わないなんて、寂しいよ……」

ファラが調子を落としたように呟いたその言葉を、その場にいた全員が聞いた。

ジューダスも、無表情ながら黙る。

「あなたの戦う理由……あなたが守護者として生きることが誓った理由……」

セルシアが口を開いた。

「その全てが、マリアンという女性に集約されるのならば……やはり会っておくべきだと思います」

「セルシア……」

「貴方にとって、大切な人なのでしょう？私の顔を見て驚くくらいなんですから」

「……」

ジューダスは苦心しているように表情を歪めた。

セルシアは、ジューダスにとってマリアンとよく似た顔をしている。そのセルシアの言葉に、ジューダスは悩んだ。

果たして、マリアンに会うべきか否か。

「俺はさ、ジューダス」

ロイドがジューダスに近づく。

「ジューダスが何でその人に会おうとしないのかわからない。けど、罪とか償いとか、そういうのが関係するんだったら、ジューダスは逃げちゃダメだと思うぜ」

「僕が……逃げているだと？」

ジューダスがきつと睨んだ。

その睨みにロイドは一瞬怯む。

「い、いや。詳しい事情は知らないから何とも言えないけどよ……」

「ふん。ならば余計な口を挟むな。時間の無駄だ」

「な……！そんな言い方ないだろー！？俺だってジューダスに後悔して欲しくないんだって……！」

ロイドはそう大きな声で言った。

ジューダスは相変わらず無表情のままだ。

「後悔、か」

「？」

「僕は、後悔なんてしていない。これまでも……そして、これからも……な」

ジューダスは踵を返して歩き出そうとする。

その行く手を、ルークが遮った。

「なんだ、ルーク」

「ジューダス。この闘いで死ぬかもしれないんだぞ？」

「……」

ルークは真剣な瞳でジューダスを見つめる。

「俺は、自分が死ぬかもしれないって思ったとき、いろんな人に会っておきたいと思ったよ」

「……それは」

「ジューダスは、これから戦いの旅に出るんだろ？ だったら、会える内に会っておくべき人って、いるんじゃないのか！？」

「それは、生き残った後も会える奴に限った話だ！」

ジューダスが突然ほえた。

ルークは驚いて後ずさりする。

「いいか！ 僕とマリアンはもう相容れない関係なんだ！ お前達に事情を話す気にはならないが、僕がマリアンに正体を明かせば間違いなくマリアンは僕に謝罪の念を抱く！ そういう関係なんだ、僕達は！」

「でも……！」

コレットがジューダスの怒りを遮るように叫んだ。

「でも……マリアンさんの気持ちは？ ジューダスに会いたいんじゃないの？ マリアンさんも……」

その言葉に、ジューダスは驚きの表情を浮かべた。
そして、しばし黙り込む。

スタンがその隙に付け込むように口を開いた。

「そうだよリオン。マリアンさんはお前に助けてもらったって、感謝してるんだ。だから……」

「忘れたのか。僕は……死んでいるんだ」

ジューダスはそういつて黙った。

スタンが納得いかないとい表情を浮かべているが、ルーティが遮った。

代わりにルーティはセルシアにたずねた。

「ねえセルシア。守護者っていう立場は、任務を達成したらどうなるの？……在るべき者は在るべき場所へって事で、消えちゃうの？」

「……どうでしょうか。アルテの手下として、また次の異変が起くるまで待機する。そんな感じだと私は思っています」

「そう……あんたにもわからないのね。……じゃあもししたら、アルテって奴から解放される可能性もあるってことね？」

「……可能性は、否定できませんが……」

セルシアがそう言いよどむと、ルーティは満足したように頷いてジューダスを見た。

「どうよりオン！もしかしたら、だけど、あんたはこの世界に戻ってこれるかもしれないのよ！」

「それがどうした」

「戻ってきたら、あんたの行く場所はただひとつ。マリアンのところじゃないの？」

「……バカな」

ジューダスはくだらないといわんばかりにルーティに背を向けた。

「あんたさあ。好きなんでしょ。マリアンの事が」

その言葉に、ジューダスはピタリと動きを止めてしまった。
壊れたブリキのおもちやのようにギクシャクとした動きで、ルー
テイを振り返るジューダス。

「き……さま……何を言っているー!!」

「だからあ、誰から見てもバレバレなのよ。マリアンに恋している
って」

「違うー!!」

ジューダスが叫ぶ。

しかしルーティはどこ吹く風といった風な態度でジューダスに接し
た。

「さっきから小難しいこと言って避けてるのだって、皆の前でマリ
アンに会いたくないからでしょ？」

「貴様……!!何を阿呆なことを言っているー!!」

「はー!見てらん無いわねー!弟の恋煩いなんて!」

「お、弟と言うな!あと恋煩いじゃない!!」

ジューダスとルーティの言い合いは続く。

その様子を見かねたリッドは、ファラに告げた。

「ここはルーティに任せて、いこうぜファラ」

「え……でも……」

「ジューダスの意志に任せるんだ。俺達はやっぱり部外者なんだか
らさ」

「……」

「仲間だけど、立ち入っちゃいけない部分って、あるだろ？」

「……うん」

ファラはまだ完璧に納得していない様子であつたが、リッドの言葉にも納得する部分があつたらしく、大人しく移動することにした。ロイドもコレットに話しかける。

「ジューダス次第だな」

「そうだね…… なんだか、私たちが無理矢理会わせるのはいけなかつたみたいだね」

「だな」

そういいながら歩き出す二人。

他の者達も、ここはルーティとスタンに任せることにして、それぞれ一時的に離れることにした。

「む……」

ジューダスがふと気がつく、周囲にスタンとルーティ、それにセルシアしか居なくなっていた。

「みんな、あんたに気を使ったのね」

ルーティが周囲を見渡しながら呟いた。

「ふん」

「それじゃあ、あたしも行くわ。スタンとセルシアを連れてね」

「……」

「どうするかはあんたが決めなさい。だけど、マリアンは間違いないくあんたを待っていると言っておくわ」

ルーティはそう言つて、スタンとセルシアの方を見た。

「さ、行くわよ、二人とも」

「あ、ああ」

「……わかりました」

スタンは素直に従つたが、セルシアは一瞬だけ動かなかつた。

「セルシア？」

セルシアはルーティの言葉を無視して、ジューダスに近づく。

「ジューダス」

「……なんだ」

「マリアンという方は、あなたにとって大切な人なのですか？」

「……だから、それがどうしたと」

「知りたいのです」

やけに強い語調で放たれたセルシアの言葉に、ジューダスは一瞬怯んだ。

セルシアは、始めこそ真っ直ぐにジューダスを目を合わせていたが、やがてその目を下向きにそらすと、顔を隠すようにして言った。

「……その……貴方にとって……な、人、なのか」

「なんだ？」

よく聞き取れず、ジューダスはセルシアの口に耳元を近づけた。

セルシアは驚いたように顔をそらし、

「と、とにかく！貴方の大切な、か……家族のような人ならば、会っておくべきだと思います！」

そう叫んだ。

「……家族、か……」

ジューダスが呟く。

「本物の姉ならここににいるけどねー」

ルーティが茶化すように笑顔で言った。

「ルーティ……」

スタンが苦笑しながらルーティの楽しそうな顔を見つめた。

全ての仲間達が去り、ジューダスはただ一人、崩壊したヒューゴ邸の前にたたずんでいた。

「……」

観念したように首を振ると、ジューダスはヒューゴ邸の門まで足を運び、そこから庭先の様子を見た。
そこには、マリ안의姿はなかった。
屋敷は崩壊しているので、ここに済んでいるとは限らない。
ということは、マリアンがヒューゴ邸に現れるまでまだ時間があるということだろうか。

「……」

ジューダスはゆっくりと足を運んだ。
かつて自分が住んでいた屋敷の庭に足を踏み入れる。
崩壊したヒューゴ邸だが、その壮大さはかろうじて残っていた。

「……」

ジューダスは更に進み、ヒューゴ邸の庭先にあったベンチに座った。

「……マリアン」

呟かれた言葉には、哀愁が漂っていた。
ここには、彼と彼女の思い出が多すぎる。

ジューダスはこの場にとどまることをよくないと思い、立ち上がって立ち去ろうとした。

「……」

だが、足が動かなかった。

自分はマリアンに会いたがっている。

「バカなのは、僕のほうか……」

一人で失笑するジューダス。

ここまで来たからにはと腹をくくり、ジューダスはベンチに再び座り込んだ。

随分と、長い旅をしてきたように感じる。

ジューダスは、自分の今までの闘いの日々を思い出し、その短さと経験の多さに驚く。

マリアンとすごした日々はその何倍にも多いというのに、マリアンとすごした日々のほうが短く感じられた。

それはやはり、自分とマリアンの距離は最後まで変わらなかったからなのだろう。

仕える者と、その当主。

それ以上の関係など、最初から望むべくも無かったはずなのに。

いつの間にかマリアンは自分にとって何よりも優先すべき、大切なものへと変わっていた。

それはヒューゴが仕組んだ罠であつたとしても、この心は本物だ。

誰が何と言おうと、リオン・マグナスはマリアンを愛し、彼女に全てを捧げると決めたのだ。

「……」

しかしリオン・マグナスはもう居ない。
その事を、伝えなければいけないだろう。

「マリアン……」

遠くからやってくるのは、セルシアではない。

彼が愛した唯一人の女性だった。

女性は門をくぐると、ジューダスから距離をとったまま足を止めた。

「あの……どちら様ですか？」

マリアンの声に、安堵するジューダス。

彼女の声には緊張が多分に含まれていたが、ジューダスは気にしなかった。

「旅の者だが」

「旅のお方……」

マリアンは仮面を被ったジューダスに対し、どうしても顔を覗こう

と近づいた。

ジューダスはマリアンが近づくにつれ、顔を伏せるように隠した。

「あの……貴方の、お名前は」

「……ジューダスと、名乗っている」

「ジューダス……様」

「敬称はいい。僕は、貴方となんら関わりの無い人間だ」

ジューダスはそういつて、マリアンから視線をはずし、屋敷の方を見た。

マリアンもつられて、崩壊した屋敷を見上げた。

「貴方は……何をしにここに来ているんだ？」

「私は……」

マリアンは言いよどんだが、伏目がちに呟いた。

「このメイドなんです。だから、ここを綺麗にするのが私の仕事なんですよ」

そう呟かれた言葉に、ジューダスは反応せず、呟いた。

「この主は、もういないんじゃないのか」

「……」

マリアンは静かに言葉を紡いだ。

「一人……帰っておられない方がいまして……」

その言葉を聞いたジューダスは歯を食いしばった。

「その帰ってきていない者……というのは……」

「ええ。貴方も知っているかと思います。リオン・マグナス様です」

彼女はここで待ち続けているのだ。
帰らぬ主を。

もうこの世にはいない自分を。

確かにここに生きている、リオン・マグナスではない自分を。

「……………」

ジューダスは苦心した。苦しんで苦しんで、やっとの思いで口を開いた。

「残酷かもしれないが」

「……はい」

「リオン・マグナスはもうこの世には」

そう、先の言葉を続けようとして。

「知っています」

彼女の、その言葉を聞いた。

ジューダスは初めて振り返り、マリアンの表情を真っ直ぐに見た。

マリアンは、悲しそうに、しかし真っ直ぐに、崩れたかつてのヒューゴ邸を見た。

「世間では、裏切り者と……そして、その果てに命を落としたと、知っています」

「じゃあ、何故」

「私は、信じていますから」

マリアンは、真っ直ぐにジューダスの瞳を見つめた。

「リオン様を……信じていますから」

「

ジューダスはその瞬間、マリアンに近づいた。

自分の顔を仮面越しとはいえ見られることに構うことなく、ジューダスはマリアンを睨んだ。

「貴女のそれは、現実逃避では無いのか！貴女のそれは」

「……」

「それは 叶わぬ願いだ！」

ジューダスは、大声で叫んだ。

ありったけの思いを込めて、マリアンに現実を教えるために。

しかし、マリアンは、ジューダスが怒った口調になったことに驚きつつも、またすぐに冷静な瞳を取り戻し、ジューダスを見た。

「……それでも私は、リオン様のお帰りを待ち続けます」

「……何故だ」

「それが私の、願いだからです」

「……願い？」

「ええ」

マリアンはジューダスに近づくように歩き、ジューダスの座っている隣のベンチに座った。

「……」

「仮面を、とつていただけませんか」

「……ダメだ」

「そう、ですか」

マリアンは残念そうに目を瞑る。

ジューダスはマリアンの方を見ずに、自分の足元を見続ける。

「ただ、ひとつ言っておきたいことがある」

「はい？」

ジューダスはマリアンから顔をそらしながら言葉を紡いだ。

「仮にリオン・マグナスが生きていたとして、アナタの様な一人のメイドを待たせることを、彼は心苦しく思うだろうか」

「……」

「所詮彼も、メイドに対して感情移入なんてしないんじゃないのか？」

「……そう、でしょうか」

「そうに決まっている」

ジューダスは皮肉に笑いながら、マリアンを挑戦的な目つきで睨んだ。

「貴女のことなど当に忘れて、自分の人生を好きなように歩んでいくかもしれないだろう？」

「……」

「それでも、貴女はリオン・マグナスを待つと言うのか？」

マリアンは目を瞑りながら熟考した。
そして、口を開く。

「リオン様が、私を特別扱いしないのは納得します。私を忘れて、自分の生を生きているというのなら、それも私の望むところです」

「……ふん」

「でも、彼はまだ子供ですから」

ジューダスの顔が驚きに変わる。

マリアンは微笑みながらジューダスを見つめた。

その瞳に、涙をためながら。

（僕の正体に　　）

ジューダスは息を飲んだ。

その表情のあまりの美しさに、見ほれている自分がいた。

「彼はまだ16歳です。だから、彼が大人になるまでは、彼がいつ帰ってきてもいいように、私はここで待ち続けます」

「……ああ」

「メイドとして、彼をよく知るものとして、彼の生を信じ続けるものとして、リオン様の帰りを、待ち続けます」

「……あなたの人生は、どうなる」

「……」

「あなたはあなたの幸せを掴むべきだ。リオン・マグナスに振り回され、貴女の一生を台無しにするのは間違っている！」

「……ええ。だから、彼が大人になるまで、です」

「え……」

「彼が素敵な大人になって、この家を必要としなくなったとき、私は私の人生を歩み始めようと思うのです」

「……」

ジューダスにとって、それは意外な答えだった。
マリアンはちゃんと、自分の生涯を考えていた。
リオン・マグナスに謝罪の念を抱き続け、沈んでいくものだと思っ
ていたが、そうでは無かった。

ああ。安心した。

「リオンが大人になるまで、後4年か。その歳月を、ここで待ちな
がら過ごすと」

「ええ」

満面の笑みを見せるマリアン。

その表情に、ジューダスは心が揺らいだが、決して表情には出さな
かった。

「勝手にすればいい……それが貴女の幸せならば」

「はい……」

「しかし、リオン・マグナスという男も幸せ者だな！こんな甲斐甲
斐しいメイドに付き添われていたのだから！」

「そ、そうでしょうか」

「ああ……」

ジューダスは、仮面の奥の瞳から一筋の涙を流した。

マリアンは驚きの表情でそれを見た。

「貴女と出会えた事で、リオンは幸せになれたのだろう」

「……エミ、リオ」

「……何を勘違いしているのか知らんが、僕はジューダスだ」

「……そう、でしたね」

ジューダスは、語ることは全て語ったと思い、ベンチから立ち上がり、歩き出した。
一歩一歩が別れを惜しむあまり重たかったが、それでも必死に歩き続けた。

「ジューダス様！」

マリアンが呼び止める。

「今度お茶をお出しします！ですから、また……」
「……考えておこう」

ジューダスはそういつて走り出した。

流す涙を、マリアンに見られなくなかったからだ。

自分はまだまだ子供であると、痛感するジューダスであった。

しかし、確かに胸に満ちるのは充足感であった。
これでもう恐れることは無くなった。

リオン・マグナスを信じる彼女のためにも、この世界を守ろう。

そう決意を新たにするジューダスであった。

「あれ、ジューダス……」

ダリルシェイドの商店を巡っていたコレットが、屋敷から出てきたジューダスを見かけた。

「……はわ」

「ん？どうしたコレット？」

隣にいたロイドが話しかけた。

「……見てロイド。ジューダス、とっても嬉しそう」

「え？」

コレットの見つめる方向にロイドも視線を合わせる。

そこには、いつもの無表情を顔に貼り付けたジューダスがいた。

「ああ……そうだな」

しかし、ロイドとコレットには、ジューダスのその表情は喜びに満ちたものに見えた。

「さて！ジューダスの用事も終わったみたいだし、いよいよだな！」
ロイドが元氣よく伸びをしながら言った。

「そだね～。私、みんなを集めてくるよ～」

「俺も、宿屋の前に集合しよう」

ロイドとコレットは二手に分かれ、ばらばらに散策している仲間達を集めに出かけた。

ジューダスが宿屋の前で待っていると、仲間達が続々と集まってきた。

全員が集まったことを確認するジューダス。

その最中、誰もジューダスとマリアンのことをたずねるものはいなかった。

どこことなく柔らかくなったジューダスの雰囲気から察知していたのだ。

「……なんだ、ルーク」

ジューダスが、にやにや笑いを浮かべていたルークを睨む。

「いやあ、別に。なあ？」

ルークは隣にいたカウスに声をかけた。

カウスも苦笑を浮かべながら

「別に、ねえ？」

とだけ言った。

「……ふん」

ジューダスはそれ以上深く詮索しないことにすると、続きの言葉を言った。

「それじゃあこれから、バルドック神父と合流する。あの男の持っている黒の石と僕たちの持つ黒の石を掛け合わせることで、新たな次元の扉が開くはずだ」

「そこから、新しい世界で調査を開始するんですね」
セルシアがジューダスの言葉に続く。
ジューダスは頷きでそれを返した。

「行くぞ……」

ジューダスが先頭を歩き出す。
残りの者達も、ジューダスに続くように歩き出した。

「待っていたよ」

崩れた教会の前で、バルドック神父は待っていた。
その手に黒の石を持って。

「お前との交換条件、こちらは了承した」
ジューダスがそう伝えると、バルドック神父は目を瞑って満足げに
頷いた。

「それでは、行こうか。新しい世界へ」

「ああ」

そして開かれる次元の亀裂。

バルドック神父が先に飛び込んだ。

ジューダス以外のメンバーもそこに飛び込む。

最後に残ったのは、スタンとジューダスであった。

「覚悟はいいか」

スタンに問いかけるジューダス。

「もちろんだ……リオン！」

凛々しい顔つきで、スタンは返答した。

そして飛び込む二人。

新たな次元の亀裂の先には　。

「なんだ、ここは」

今までとは、様子の違う世界が繰り広げられていた。

雷雲が轟き、曇天は太陽の光を遮る。

地面には細かな亀裂が走っていて、植物はどれも見たことの無い色で生えていた。

「おお。ここは……」

「ようこそ、って、感じだな」

バルドック神父とスフィードが感嘆の声を上げた。

そしてスフィードが振り返り、手を大仰に広げてジューダス達を迎え入れるように叫んだ。

「ようこそ！ここは『死にかけの世界』！『エルジアース』だ！！」

五章五話 新たなる旅立ち（後書き）

「ようこそ、ここは終わりかけの楽屋、ミナオツカーレだ」

そういつてクラトスはそつとグラスを差し出した。

それを飲むロイド。

「父さん、これ酒じゃないじゃないか！！」

「いかん、いかんぞ！ロイド！子供はお酒を飲んじゃいけません！
！」

「わ、わかつてるよ。でも戦闘中にパルマコスタワインのがぶ飲みは許してくれたじゃないか！！」

「あれは中身はジュースだから問題ない」

「ジュースだったのかよ！！だれだよ、あれ飲んで『大人にしか分らない渋みがある』って言ったの」

「むしろ聞きたい。私はそんなことを言っていたのか」

今日は疲れたのでこの辺で。

また次回、よろしく願いします。

六章一話 死満ちる場（前書き）

この作品は、TOD、TOE、TOD2、TOS、TOA、TOV、TOWRM2のキャラクターとオリジナルなキャラクターが登場するmix作品です。

上記のような設定が苦手な方、ご注意ください。

あらすじ：スタン達と和解し、仲間として迎えたジューダス。仲間達の進言もあってマリアンと会話したジューダスは、改めて自分が戦う意味を見出す。そして、バルドック神父と合流し新たな世界へと赴く。辿り着いた先は、バルドック神父とスフィードの故郷の世界、エルジアースであった……

六章一話 死満ちる場

六章一話『死満ちる場』

「ようこそ！死に掛けの世界、エルジァースへ！」

スフィードは心底おかしそうに言った。

まるで、招待したかった世界にようやくジューダス達を導けたというように。

バルドック神父も、しゃがみこんで大地に触れる。

そして、その感触を懐かしむように目を閉じた。

「間違いないな。エルジァース特有の竜脈が流れている」

「竜脈？竜脈ってなんだ？」

ユーリがしゃがんでいるバルドック神父の後ろからたずねた。

神父は立ち上がり、ユーリの方を向き直る。

「竜脈というのは、この世界に普く流れる力の本流のようなものだ」

「へえ……」

「マナみたいなものなんです?」

エステルが首を傾げながら聞いた。

「残念だが、わたしにとってはそのマナというものがわからない。

しかし、世界に広く存在する力の源という点が当てはまるのであれば、似たようなものだろう」

「そうですか……」

エステルは分からないなりに納得しようと頷いた。

「さてさて、この世界の仕組みはどうでもいいとして。まずはここがどこで、次にどこに向かうべきかを定めなくちゃなあ」

スフィードがそう言ってあたりを見回す。

ジューダスはロイドに視線をやると、言った。

「ロイド、天使になって、ここから街のようなものが見えないか探索できないか?」

「あ、ああ。やってみる」

「頼む」

ロイドはすぐに天使化すると、空高く舞い上がり、その目で周囲を見渡した。

「あ……あそこに見えるの、街か……?」

見えたのは、高い外壁に囲まれた街のようなものであった。

ロイドはその方向を確認し、ゆっくりと地面に降りてきた。

「あっちの方向に、街みたいなものは見えただぜ」

「……そうか。まずはそこを目指すぞ」

ジューダスはそういつて、なにもない平原を歩き始めた。

たどり着いた先は、街ではあったが廃墟であった。

高い外壁は魔物除けのものではなく、人間同士の殺し合い……「戦争」のために用意されたものであったらしい。

外壁のところどころもそうだが、中に入ってみると街の様子も悲惨であった。

ところどころ崩れている。戦火の傷跡が確かに見受けられる風景であった。

「廃墟……か」

ジューダスはそう呟くと、ロイドが「悪い。街だと早とちりしちゃって……」と謝罪した。

「ふん……別にいい」

「そ、そうか？」

ジューダスは振り向いてスフィードのほうを見た。

「それよりも、ここで何があったんだ？ スフィード」

「あ？ 知らねーよ。戦争だろ、どうせ」

「……」

「この世界の出身だからって、この世界のすべてを分かっているなんて思わないでくれよ。なにせこの世界では国同士が争っているって組み合わせが何通りもあるんだ。いちいち覚えてられるかつつの」

スフィードはにやにやと笑いながらそう言いきった。

争いの絶えない世界であると。

その言葉を聞いた仲間たちは、みな周囲の廃墟を見渡した。

このような爪痕が、ほかにもたくさんあるのだという。

その事実には、やるせない気持ちになった。

「この廃墟はおそらく、デフィート国の都市だろう」

そう言ったのはバルドック神父であった。

「あ？デフィートって確か、5年前位に亡くなった国だろう」

「そうだ。その戦火の残り火、とも言うべきだろうな。この廃墟はバルドック神父は無表情のまま、あたりのがれきを拾い上げる。

その中からこの廃墟がどこの国に属しているかの情報を拾い上げたらしい。

ジューダス達にはわからない情報であつたが。

「それで、これからどうする？」

ルークが廃墟にいてもきりがないと考え、発言した。

ティアがその言葉に頷く。

「人の住んでいる街を目差すべきでしょう。スフィード、それにバルドック神父。ここから人の住んでいる街のある方向はわかりますか？」

「残念だが、デフィートの地理に詳しいわけではない」

「俺もー。またロイドかコレットに飛んでもらうかした方が早いと思うぜ？」

スフィードと神父はそういつてティアに答えた。

「廃墟には廃墟特有の毒が残っているかも知れん。あまり長居するべきでは無いだろうな」

「そうなのか。じゃあ、また俺が飛んで街を探してみる」

ロイドが神父の言葉に頷くと、再び天使化して空を飛び始めた。

「ん？」

ロイドは上空に上昇する途中で、焼け焦げた3階建ての建物の中にきらりと光るものを見た。

「……なんだ？」

注意深くそれを見る。

突然、紫の閃光が矢となってロイドに飛来した。

「………うわっと！」

ロイドがそれをバランスを崩しながら回避する。
飛行姿勢を崩したロイドはそのまま落下した。

「ロイド……！」

コレットが悲鳴を上げる。

同時に、仲間達が戦闘態勢に入る。

「敵か！？」

スタンがジューダスに確認する。

ジューダスは無言で頷くと、ロイドを貫こうとした紫の矢がどこから飛来したかを見極める。

「あそこだ……！」

ジューダスが指差す方向に、全員が走り出す。

すると、進行方向の建物から紫電が飛び始めた。

飛来してくる電撃をかわしながら、リッドが最初にその建物の前に辿り着いた。

「おらああああ……！」

同時に、3階の窓を破壊し、落下するひとつの影。

「くっ！」

リッドが落下してきた影の攻撃を剣で受け止める。

同時に敵の姿を視認する。それは……

「てめえ！デルネイドッ！！」

「久しぶりだなあ！リッドオー……！！」

リッドたちの世界で2度戦った、闇の極光術使い、デルネイドであった。

デルネイドはその身の丈ほどもある大剣をリッドに向かって押し込む。

リッドはそれを弾くようにしてバックステップを踏んだ。

「は、ははは！はははははは！！まさか、こんな所までやってくるとはなあ！」

「てめえこそ、こんなところで待ち伏せなんて、随分じゃねえか」

「は！言ってくれるじゃないかあ。こんなところだつてえ？」

デルネイドはおかしそうに笑っている。それは狂気を湛えた笑みであった。

リッドはそれを不気味に感じながらも、隙をうかがっている。

「そつだよなあ！こんな廃墟だもんなあ！もう何も無いもんなああああ！！」

「てめえ……何がおかしい？」

「だのにわざわざ俺が待ち伏せていた理由は、わからねーか？」

「……」

リッドは敵の言葉に聞く耳は持たないと決めていたが、どうにも様

子がおかしい。

デルネイドの言葉は、まるでリッドたちがここに来ることを予め読んでいたともとれるからだ。

「お前……お前たちは、俺たちの行動がわかるのか？」

「はっ！ ははは！ どうか！？ 少なくとも俺は、お前たちがこの廃墟に脚を運ぶことはわかっていたぜ！？」

デルネイドは両手を大仰に広げて、周囲を見渡した。

「なああ？ リッドー？ この廃墟を見て、何か思うところはねえか？」

「……なに？」

「人間の愚かさ、哀れさ……せつかく作った文明を、同じ人間の手によって滅ぼされる……そして、同じ人間の手によって消滅されていく命……」

デルネイドはどこか哀れむように、同時にバカにしたような目つきで廃墟を見渡す。

崩壊した高層の建物が多く並んでいる。

積み重なった瓦礫が、ここで起こったという戦闘の激しさを物語っている。

「国が違うから、場所が違うからってだけでこんな目に会わされるんだぜ？ たまったもんじゃねえよなあ？」

「何が言いてえんだよ？」

「人間なんて、くだらねえ生き物だって事だよ！！」

突進するデルネイド、それをリッドが迎え撃つ。

同時に詠唱できる者達は詠唱の準備を開始する。多勢に無勢。充分

に勝てる。

誰もがそう思った矢先、異変が起こった。

「G A A a a a a a a a a a a ! !」

ジューダス達の左右を挟むように、黒い甲冑に身を包んだ兵士達が現れ、突進してきた。

「黒い狼じゃない!？」

エステルが詠唱を破棄し、すかさず迎撃体勢をとる。

黒い甲冑の戦士の一体は、エステルにむかって剣を振り下ろした！

「蒼破あ！！」

それをユーリが阻止する。黒い甲冑の戦士は蒼破刃をまともにくら
うが、よろけるのみですぐに体勢を取り戻した。

「ち……タフだな」

「デルネイドの手下、なんでしょつか？」

「十中八九な。エステル。俺達はいいつを相手するぞ！」

「はい！」

ユーリとエステルは黒い戦士に挑むように構えた。

黒い戦士も剣を抜き身に構えながらじりじりとユーリに近づく。

「いくぞぉ!!」

「いきます!!」

同時にユーリとエステルが飛び出した!

黒い戦士はそれを迎え撃つように剣を振るった……。

「きちんと準備をしてきたってところか?」

「は、ははは！！お前と一対一で戦いたかったんだよ、リッド！」
互いの剣をぶつけ合いながら、リッドとデルネイドは叫ぶように言い合う。

「今回は前回とは違うぜ！？上から許された戦士たちの最高クラスだ！そう簡単に仲間達の増援を望めると思うなよ！！」

「上等だ！！お前一人、俺だけで片付けてやるよ！！」

「一人じゃねーよ！！出る！ネレイドオー！！！」

途端にデルネイドの後ろからネレイドの姿が露になる。

そして、ネレイドはデルネイドを援護するように魔術弾を連射してきた！

「ふっ、はっ！」

それを左に回りこむようにステップを踏むことでかわすリッド。

デルネイドは両手で大剣を持っているため、機動力はリッドのほうが上だ。

そして、デルネイドの両腕のうちどちらかを仕留めれば、相手は剣を持てなくなる。

そこに勝算を見出し、リッドは自身のスピードを上げる作戦に出た。

「相変わらずちょこまかと動き回りやがって！！」

デルネイドは両手で大剣をぐるぐると回しながらリッドのほうに向き直る。

「お前にはできねーだろ！」

対するリッドは、一気に近づこうと踏み込んだ。

「忘れたか！俺はそういう戦い方のやつを止めるためのやり方って

やつを持ってるんだよ!」

デルネイドは大剣をリッドが近づくよりも早く地面に向かって振り下ろした！

「地龍擊！！」

デルネイドの大剣が地面に激突すると同時に、そこから地面がとがった岩が隆起してリッドめがけて連鎖的に走った！

リッドはぎりぎりのところでそれをかわすと、もう一度踏み込んでデルネイドの懷を目差す。

今度はネレイドの魔術弾がそれを阻止した。

リッドは舌打ちしながら、距離を取り、すかさず魔神剣を放った！

「魔神劍！」

それはリッドにとって最大の速度で放たれた魔神剣であつた。

「ぐあつ!!」

素早い動きのそれを、デルネイドは防ぐことができなかった。

足を挟まれ、倒れるデルネイド。

「もらった！」

「つつあ！なめんなあ————！！！」

圧倒的なピンチを振り払うためにデルネイドは絶叫する。

リッドは一気に接近しながら、デルネイドを無力化するために剣を構えた。

「ガアアアああああああアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアああああああああアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！

!!!

デルネイドが人間の者とは思えない叫びを発したかと思うと、突然デルネイドの周囲から湧き上がるように黒い色のオーラが現れた。

「……極光術が……重い……？」
極光術同士のぶつかり合いであったことのほかに、何かがりッドの体に疲労を与えていたらしい。
リッドは重たい体を引きずりながら、吹き飛ばされたデルネイドにゆっくりと近づいた。

「烈破掌！！」

ルークの右手から渾身の力が放たれ、黒の戦士は吹き飛ばされる。

「ホーリーランス！」

ティアが追い討ちの術を発動する。

黒の戦士はその光の槍を体に次々と受け止めるが、まだ動いている。

「強いわね……」

「ああ、化け物かつつの」

「事実、そうでしょう。あれは生きている気がしないわ」

「げっ。不死系のモンスターかよ」

「それにしても、光属性にも強いみたい……ルーク、油断しないで」
黒の戦士は立ち上がると、二人から距離をとるように逃げ出した。

「あ？逃げんのか？」

「……いいえ、違うわ！」

すると、黒の戦士が詠唱を開始した。

たった一体での詠唱、しかしどれほど強力な術を行使するかわからない未知の相手。

それを防ぐためにルークは更に追いかけた。

「はあ！！！」

剣を相手に向かって振り下ろす。

それを受け止める黒の戦士。

そして、戦士は再び逃げるように駆け出した。だんだんと崩れかけた建物の中へと誘い込むように。

「逃がすかよ！！！」

ルークとティアは内心に不安を感じながらも、黒の戦士の思いがままにならないように追いかけた。

そして、それは他のところで黒の戦士と戦う仲間達にも共通であった……。

（誘われてるな）

スフィードは内心で思いながら、しかし口には出さずにカウス、カノンと共に黒の戦士を追いかけた。

黒の戦士から離れてリッドの援護に向かうことも考えたが、それは黒の戦士の詠唱を見逃すことになってしまう。

最悪、最高クラスの術でも放たれたらたまったものではない。

（敵の術中で踊るのも時には必要なんだぜ、カウス。さて、お前は生き残れるのかねえ）

スフィードはにやりと笑いながら、黒の戦士を追いかけるカウスに追従した。

「あ、ああああ……てめえ、リッドオ……」

「よお、デルネイド。気分はどうだ？」

横たわるデルネイドの傍にリッドは立った。

デルネイドには、リッドの持つ剣が死神の鎌に思えてしまった。

「くそが……結局俺は、ここで死ぬ運命なのかよ……」
「なに？」

リッドは、デルネイドの言葉に問いかけた。

「ここは、お前と縁のある場所なのか？」

「……」

デルネイドは答えず、天を仰ぎ続けた。

そして、ゆっくりと息を吐きだすと、観念したように言葉を紡いだ。

「ここは……俺の生まれ故郷なんだよ……」

「……なに？」

「……ああ、そうだ！俺は、ここで生まれた！もう今はかつての栄華の欠片も残さねえ、無残な街でなあ！」

デルネイドはやけっぱちになったように叫んだ。

その叫びに、リッドは気味の悪さを感じながらも剣を外さない。

何時でも仕留められるように、剣を首筋に当てている。

「リッド……てめえにわかるか？何で、俺はネレイドを崇拜するのか？何で、物質から解き放たれたいと思っているのか？」

「……わからねーよ」

「わかれよ！こんな地獄みたいな光景がこの世界にはたくさんあるんだぞ！襲撃されて住民が逃げる間もなく殺されていくような地獄がどこにでもあるんだぞ！！」

デルネイドのそれは、必死な叫びであった。まるで、彼の思いの全てが詰まっているかのよう。

「今のは……!!」

リッドが攻撃が飛来したほうをにらみながら、弾かれた剣を拾いに行く。

瓦礫が積み重なったその場所の奥、瓦礫の間から長剣が垣間見えた。

「あいつまでここにいいのかよ!!」

どうやら新手がいるらしい。

リッドは剣を握りなおすと、禍々しいオーラを放ちながら起き上がったデルネイドに対して構えた。

「そうだ、そうだそうだそうだあ!!俺はなあ!物質を捨てて、世界を救ってやるんだよあ!!」

「勝手なことを言いやがって。物質を捨てるだあ?それなら一人で勝手に捨てやがれ。俺たちを巻き込むじゃねえ」

「はっ!俺の味わった苦しみを、俺だけのものにするのは癪に障るんだよ!だからなあ!この世界で勝利者面している奴らに復讐してやるんだよ!!」

「……結局それが本音かよ。くだらねえ」

リッドが剣を構えて駆け出す。

デルネイドも迎え撃つように剣を構えた。

「はあ!!」

「おらあ!!」

互いの剣が激突する。

デルネイドは大剣を台風のごとく振り回す。剣圧も圧倒的だが、先ほどと比べて格段にスピードが上がっていた。

(こいつ……!!)

リッドは致命傷を受けないぎりぎりのところで攻撃を回避するが、下手に近づけない。

このままではジリ貧になる。そう考えた矢先、ひとつの疑問が浮かんだ。

(あいつは……？なんで攻撃して来ないんだ？)

先ほどリッドの剣を弾き飛ばした人物が攻撃してこない。

すぐ傍にいたはずなのに。

リッドがその人物がさっきまでいた瓦礫の奥を見ると、すでにそこには誰の気配も残っていないかった。

(どういうことだ？)

デルネイドの猛攻をかわし続ける中で、リッドの中に一抹の不安がよぎった。

「……………」

周囲の戦況を眺められる位置に、男は陣取っていた。

長剣は鞘の内にしまわれている。右手には、何かの機械のスイッチらしきものが握られている。

「……………デルネイド。お前の闇の極光の力……………そしておまえ自身の憎悪の力……………見せてもらおうか」

男の眼下では闇のオーラを纏ったデルネイドがリッドと戦いを繰り広げている。

そして、遠くを眺めれば高層の建物の傍まで『誘導』された敵の姿があった。

「……………」

準備は整ったとばかりに、男は笑った。

デルネイドは先ほどから疲れを知らないかのごとく連続で攻撃している。

オーラを纏い始めてから異常な攻撃を繰り返し続けるデルネイド。そこに、人間を超えた力が隠されていると感じ、それを様子見しなければならなかったからだ。

デルネイドの猛攻の合間を縫って繰り出される突撃攻撃。

そして、
一氣に後ろに飛んだ。

リッドの息が上がっている。

スタミナをまったく減らしていないデルネイドに対して、リッドは違和感を覚えずにはいらなかった。

「……お前だって人間だろ。疲れてないところを見ると、ネレイドの力でも借りてんのか？」

530

「！！お前、それがどういいうことかわかってんのか！！」

ネレイドに存在を預ける。

それはすなわち、精神体であるネレイドの意のままに自分の体を操られるということである。

ネレイドは精神体であるため、物質の性能限界を知らない。その限界を突破するまで、体は酷使され続けるだろう。

「いいんだよ！！俺の精神力さえ保てれば、俺は自分という体を捨ててより強くなれる！！」

「その精神だつて、いつまで保ってられるのかわからねーんだぞ！！」

「はっ！敵に対して心配するなんざ余裕だな、リッドオ！！」

デルネイドが大剣を大きく振り上げた。

その一撃を受け止めるリッド。しかし、大剣の剣圧はすさまじいものであり、リッドの体は宙に投げ出された。

「追い討ちだあ！！」

デルネイドが空中に飛ばしたリッド目掛けて更なる追撃を加えにかかる。

リッドはそれをガードしようと剣を構える。

しかし、空中で踏ん張ることなど出来るはずもなく、リッドはデルネイドの攻撃を受け止めるとそのまま力の流れによって吹き飛ばされた。

「は！しゃあああああああ！！！！」

デルネイドはそのままリッドに向かって追撃を行う。

「！！」

そのとき、デルネイドは瞬間的に敗北を悟った。

リッドは腕を交差させて力をためている。

それは、まさしく極光壁を現出させる直前の予備動作であった。

「いくぜえ！デルネイドオ！！『極光壁』！！」

まさか二度目の極光壁が待ち受けているとはデルネイドも予測し得なかった。

極光壁は一度現出させた後、しばらくの間は発動するための体力、精神力が備わるまで使えない絶技である。それなのにリッドは極光壁を使ってきた。

「は、」

リッドは出来た。ならば自分に使えない道理は無い。

まして、ネレイドと半身が融合し始めている自分に出来ないはずが。

そこでデルネイドは、自分がネレイドに真に選ばれたわけではないことを思い出した。思い出してしまった。

「極光壁――！」

リッドの極光壁が発動し、デルネイドを包み込み始める。

「ぐっ――！極光壁――！！！」

対するデルネイドも、自らの最大出力を持って極光壁を放った。しかし、先ほどまでの力が出ない。

デルネイドの精神力が、極光をフルに活動させるためには回復していなかったのである。

「あ、がつ――！がああああああ――！！！」

吹き上がる極光の壁に押し流され、デルネイドは遙か上空へと吹き飛ばされる。

（嘘……だ、ろ……）

さらにデルネイドが驚愕したのは、リッドが自分の真下で極光剣を構えているという事実であった。

リッドはそのまま止めを刺すつもりらしい。このまま落下すれば、リッドの極光剣の前になすすべも無くやられてしまう。

活路は唯一。この体勢からリッドを倒す一撃を放つこと。

どうやって？

デルネイドは自らの疑問に対する答えを持ち合わせていなかった。真にネレイドに選ばれたわけではない自分では、闇の極光の深奥を

覗くことは出来ない。そんな存在に、真の極光術士であるリッドに極光同士で勝てるはずが無い。

極光の打ち合いになれば、負ける……。

（ちく、しょう……）

デルネイドはあまりの悔しさに歯軋りしながら、やがて待つ自らの死を受け入れ始めていた。

「極光剣……！」

最大出力で放たれた光の剣が、敵の姿を捉える。

しかし、あと少しのところでその極光剣は届かなかった。

「ち……ヴァン……！」

「ふん。リッド・ハーシエル。久しいな」

リッドから見て高い階層に、ヴァンがデルネイドの体を抱えてたたずんでいた。

「……デルネイドを助けに来たってか？」

「いいや。この男の回収も任ではあるが、それとは別に用があった」

ヴァンはそう言うと、右手に持った小型のスイッチを天に掲げた。

「……随分とおかしな作戦を思いつくものだと思うが、効率的では

ある」

「なに……?」

「何。実力行使だけが戦闘ではないという意味だ。時には卑怯な手に染めることもあるう」

「……!」

「運がよければ、再会するやもしれん。見事生き残って見せよ!」

ヴァンが右手のスイッチを入れる。

すると、リッドを中心とした360度あらゆる方角から、巨大な爆発音が聞こえた。

ジューダスには目の前にいる黒い戦士が自分たちをある地点に誘い込んでいることは気づいていた。

しかし、敵を野放しにすることも出来ない。逃がせば、術を使用してこちらを追い込んでくることはわかっていたからだ。

そして、その誘いの真の意味も、うすうすとだがわかっていた。

だからこそ、ジューダスは『そこ』からすぐに飛びのいた。

ドゴオオオオオン!!!

炸裂する爆発音。響き渡る破壊の音は、ジューダスたちのいる地点の上空から聞こえてきた。

そして、ジューダスの近くにいた建物が崩れ落ちてきた。

「ジューダス!!」

セルシアがジューダスの身を案じ叫ぶ。

しかしジューダスはどこ吹く風といった感じでバックステップを繰り返し、崩落から逃れた。

敵対していた黒の戦士は、そのまま瓦礫の崩落に飲まれて消えていった。

「……」

「ジューダス……さすがです」

「……ほかの連中が気がかりだ。いくぞ、セルシア」

「……はい！」

セルシアが素直にうなずくと、ジューダスたちは残りの仲間たちを探すために崩落を始めている廃墟の中を駆け出した。

「くそ、これがお前たちの作戦かよ!!」

リッドがヴァンに向かって叫んだ。

しかし、ヴァンは黙して語らず。やがてヴァンの上空に飛竜があらわれると、デルネイドを抱えたままヴァンは飛竜に乗り込み、そのまま遙か空へと消えていつてしまった。

「……くそ」

リッドは、内心でほつとしていた。もしあのままヴァンが自分に攻撃してきたら、自分は生き残れたか、怪しい物だったからだ。

そう。何故だかわからないが、極光術を使用するたびに体が重くなっている。リッドにとっては疲労の限界であった。

「……みんなの無事を確かめないと」

リッドはそういつて歩き出した。

そして、ジューダスたちはカウスとカノンノ、スフィードの3人以外が無事に合流することに成功した。

互いが無事であることを確認しあう仲間たち。やがて、カウスとカノンノもその場に近づいてきた。

「カウス！カノンノ！！無事だった……？」

ロイドが声をかけるが、二人の様子はおかしかった。

カウスは俯き続け、カノンノは泣きながら歩いていた。

「どうしたんだ！二人とも！」

スタンが急いで駆けつける。

そのとき、ルーティが小さくつぶやいた。

「ねえ、スフィードは？……確か、あんたたちと一緒に行動してたわよね……？」

その言葉に、カウスはゆっくりと顔を上げた。

「スフィードは……」

そして、先の言葉をつむいだ。

「僕たちを守って

死んだ」

六章一話 死満ちる場（後書き）

読了ありがとうございます。

アラヤシキです。

今回の話から雰囲気は変わり、第2部という位置づけになるかと思っています。

其のはじめとして、仲間の中から犠牲者が出ました。

戦いに犠牲はつきもの、という辛辣な世界を描いていきたいと思えます。

それでは、失礼します。

六章二話 闇の狩人（前書き）

この作品は、TOD、TOE、TOD2、TOS、TOA、TOV、TO

WRM2のキャラクターとオリジナルなキャラクターが登場するmix作品で

す。

上記のような設定が苦手な方、ご注意ください。

六章二話 闇の狩人

ドゴオオオオオン！！！！

巨大な爆発音は、カウスとカノンノ、スフィードの三人の上から聞こえてきた。

三人は黒の戦士の誘いのままに戦い、ある巨大な廃屋の1階層ホールで戦っていた。

そして、天井が爆発音と共に轟音を鳴り響かせながら崩れてきた。

「二人とも、急いで外へ！！」

カウスは崩れてきた天井に気づき、すぐに外に脱出する指示を出す。しかし、スフィードとカノンノが黒の戦士と戦っていた場所からカウスのいる出口までは距離が遠い。

カノンノは自分が間に合わないと思った刹那、自分の体がスフィードによって持ち上げられたことに驚いた。

「きゃっ！？ス、スフィード！？」

「悪いなカノンノ。こうしなきゃ間に合わねえからさ」

スフィードはそういうと、カノンノを思い切りよく投げ飛ばした！

「受け取れカウス！！」

「きゃああ！！」

カノンノはすさまじい速度で投げ飛ばされ、カウスの胸元に激突した。

カウスは何とかこらえ、カノンノを抱きかかえると、スフィードのほうを慌てて見た。

「スフィード！！君は　　！！」

その瞬間、カウスには目の前の光景がスローモーションになっていた。

ゆっくりと崩れ落ちる天井。

そして、そのホールの中心でにやりと笑ったスフィード。

「
悪いな」

そして、スフィードは剣先から突風を発生させたかと思うと、カウスはそのまま突風に押し出されるように建物の外へと弾き飛ばされた。

「うわぁー!!」

そして、天井が完璧に崩れ落ちたのだろう、カウスとカノンノが出てきた出口から土煙が大量に噴出した。

「
……あ」

カウスは、その光景を啞然としたまま見つめ続けた。

「
……うそ」

カノンノも、カウスの腕に抱きとめられながらスフィードの最後の姿を見たのだろう。その最後が信じられず、呆然としていた。

六章二話 『闇の狩人』

カウスの案内の元、スフィーダが潰されたと思わしき建物の瓦礫の前にジューダスは立った。

高層のビルが崩れただけあって、その瓦礫の山は大きく、スフィ
ダの生存は確かに絶望的な状態であった。

「……」

ジューダスは黙って瓦礫の山を見つめ続ける。そんなジューダスに
ルークが近づき、口を開いた。

「……瓦礫をどけることが出来るかもしれない」

「……どうやってだ？」

「俺の『超振動』って力を使えば……瓦礫だけを弾き飛ばせるかも
しれない」

「……」

ルークはそう言って、瓦礫の前に立った。

「……わかった。やってみるルーク」

「ああ……行くぞ！」

ルークは両手を瓦礫に向かってかざすと、精神を集中させるために
目を瞑った。

そして、ルークの体が輝きだす。

ルークの両腕から光が集まり始めると、それはそのまま瓦礫に向か
って飛んでいった。

瓦礫は弾き飛ばされ移動されていく。

「くっ……ふう……」

そして、すべての瓦礫を移動させたルークは、大量の汗をその手で
拭いながら言った。

「……スフィードは？」

ロイドたちがすぐに崩れた建物の中心部に近づく。
そこには、見るも無残な、潰されたスフィードの体があった。

「うつ……」

こみ上げる吐き気。先ほどまで共に行動していた仲間の死体を前に、
ロイドたちはただ顔をしかめた。

ジューダスが近づき、その死体の様子を探る。

「ジューダス……？」

ユーリがジューダスに声をかける。

ジューダスは死体の様子を眺め終わると、そのまま戻ってきてつぶ
やいた。

「……確かに死んでいる。偽者の死体でもないらしい」
「偽者って……？」

セルシアがジューダスの言葉に首をかしげた。

「いや……どうやら僕の考えすぎだったらしい……スフィードは死
んだ。確実に、な」

「おいジューダス！」

ジューダスの言い方に、ロイドが声を荒げた。

「……お前たちには悪いが、僕はスフィードを信じていたわけじゃ
ない。……あいつには何か裏がある。そう思っていたくらいだ」

「だからって……！」

「ふん」

ジューダスは話は終わりだとばかりに、歩き出した。

「……おいジューダス！」

「今、僕たちがすべきことは何だ？死者の弔いか？違っだろう」

「……だからって。一緒に戦った仲間だぞ！」

「……」

ジューダスは歩みを止めると、ふうと息を吐いて振り返り、ロイドたちの下へ戻ってきた。

「奴の墓を作る。……それでいいな？」

「……え」

「仲間の死を弔いたいのだろう。手伝ってやるから、あいつの墓を作るぞ」

「……ジューダス」

ジューダスはスフィーダの死体に近づいていく。

そして、ロイドたちはスフィーダの墓を作ることにした。

スフィードの死体に土を被せ、簡単な墓を作ったジューダスたち。
エステルとコレット、カノンノは泣きながらその墓を見続け、ロイドとリッドは苦みばしった顔をしていた。

「こうして見ると、虚しいな……人の命っていうのは」

リッドがつぶやいた。

ファラがリッドに寄り添いながら、聞いた。

「リッド……？」

「デルネイドが言ってたんだよ……物質に縛られているから争いは
絶えないって。物質じゃなければ、スフィードもこんな死に方せず
に済んだんじゃないかって、考えちまうよ」

「そんな……リッドは間違ってるよ……」

「……ああ。誰だって自分の命を守るために戦う……でも、だから
争いは絶えない……のかもな」

「リッド……」

リッドはそう言うと、目を閉じて黙り込んだ。

「主よ。其の魂を主の下へ導きたまえ……」

バルドック神父が祈りの言葉を言い終えると、そのまま振り返って
ジューダスたちを見た。

「彼の死を無駄にしないためにも、旅を続けるのだろうか？」

「……ああ」

「ならば行く。もうここで作れることは何もない」

「……ああ」

ジューダスはロイドのほうを振り返ると「ロイド。近くに町が無い
か飛んで調べてくれ」と言った。

「ああ、わかった」

ロイドはそう言っていると、天使の羽を広げて飛翔した。

やがてロイドが戻ってくると、「ここから北の方角に街が見えたぜ」
と言った。

「そうか……行くぞ。奴等の襲撃にも警戒を怠るな」

「ああ」

そしてジューダス達は歩き始めた。仲間を一人亡くし、新たな街を
目指す。

草原を歩き続けていると、前を横切るような形で街道を見つけた。どうやらこの街道に沿って歩けば目当ての街にたどり着けるようだ。ジューダスは街道の伸びている方向から北にある街にたどり着ける方角を歩き始めた。

「デフィードは敗戦国だ。今ではジオランデという国の植民地になっている」

バルドック神父がジューダスに向かって話しかけた。

ジューダスは神妙な顔つきでうなずくと、

「僕たちのような旅の者が、怪しまれず街に入れるか……」
と言った。

「……外交は復活していると聞いた。おそらく、問題は無いだろう」
「そうか。ならばとりあえずの所は大丈夫だな」

「ああ」
ジューダスとバルドック神父が隊列の前の方で話し合っていたところ、後ろの方では異変が起こっていた。

「ティア……大丈夫？」

その声をかけたのはファラだった。

ティアの顔色が優れないのだ。

「ええ……大丈夫、だと思っわ……少し、気分が悪いだけ……」

「……うつん。やっぱり今のティア、相当気分が悪そうだよ。待ってて、今ジューダスに伝えてくるから！」

「あ……ファラ……」

ファラはそそくさとジューダスの元に急いだ。

そして、ティアの現状を報告する。

「ティアの体調が悪いみたいなの。ちょっと休憩しよ？」

「なに？……わかった。休息をとろう」

ジューダスがそう言うと、皆歩みを止めた。

そして、ルークが心配そうにティアに近づく。

「おい、大丈夫か？ティア」

「ええ……ごめんなさい。少し気分が優れないだけなのだけれど……」

「……」
「いいから。ちょっとじっとしてろよ……」

ルークはそういうと、自分の右手をティアの額にあてた。
思わず驚くティア。

「ル、ルーク……！」

ティアの頬が紅潮する。ルークも目をそらして少しばかり恥ずかしがっていたが、左手で自分の額に手を当てると「うわ！ティア！すごい熱があるじゃないか！」と叫んだ。

「ね、熱？」

「ああ！全然平熱じゃねーぞ！？」

「そんな……」

「と、とりあえず座って休めよ」

ルークに言われたとおり、その場に座り込むティア。
そこに、バルドック神父がゆっくりと近づいてきた。

「廃墟の毒にやられたのかもしれないな」

「廃墟の毒……？」

ルークが尋ね返した。

「ああ。以前、新聞で読んだことがある。デフィードの戦場跡地には戦争で使われた兵器の毒が残っていると。今回、ティアが受けたものはその可能性がある」

「……俺たちもやべーんじゃないの？」

「そつだな。今の所は平気だが……一応、薬を用意しておくに越したことは無いだろう」

バルドック神父はそういうと、座り込んでティアの様子を見た。

「腕を見せてくれるかな？」

「は、はい……」

「……ふむ。使われたのはエディロナ草の毒液のようだな。これなら、ロムンハーブがあれば治療薬を用意できる」

「エディロナ草？ロムンハーブ？」

聞いたことの無い草の名前に、ユーリが首を傾げながら尋ねた。

「エディロナ草はこのデフィート国のある大陸に生えている毒草だ。それほど毒性が強いわけではないが、一度摂取すると体外に排出されるまで時間がかかる。ロムンハーブは比較的あらゆる地方に生えている薬草だ。これがあれば、エディロナ草の毒を中和することが出来る」

「へえ……詳しいんだな、あんた」

「人を癒す術を身につけようと考えて、覚えた」

神父は言いながら立ち上がると、ジューダスの方を見た。

「ロムンハーブはうっそうと生い茂る森の中に生えていることが多い。例えば……あのような森のなかとかな」

神父はそういつて街道から外れた地点にある、森を指差した。

「どうする？ジューダス」

神父の言葉に、ジューダスは即座に答えた。

「決まっている。あの森の中に行くぞ」

ジューダスの即答に、その場にいた誰もが安堵した。

口は悪いが、ジューダスは仲間思いなのだと思改めて確認する仲間たち。

先のスフィードの件でロイドはジューダスに対する見方を変えかけていたが、結局はジューダスは仲間のことを思いやっているのだと安心した。

「行くぞ……」

街道から外れた道を、ジューダスは歩き始めた。

森の入り口に立つジューダスたち。

ジューダスはそこで、考え込むようにしていた。

「どうしたんだジューダス？早く入ろうぜ？」

ロイドが急かすように言うが、ジューダスは聞く耳を持たなかった。やがてジューダスは納得したように一人うなずくと、周りにいる仲間たちのことを見回した。

「この森を全員で回るより、目当ての薬草を手分けして探した方がいい。それと、ティアの護衛もつける」

「……それはつまり、パーティを分割する、ということですか？」

ジューダスの提案にセルシアが問いかける。

ジューダスは「ああ、そうだ」と返した。

「バルドック神父。ロムンハーブの特徴を教えてください？」

「特徴よりも、写真があった方が早いだろう。待っている……」

バルドック神父は、そのまま自分の荷物から植物の図鑑を取り出した。

「エルジアースの世界の大まかな植物図鑑だ。このページにロムンハーブが写真入りで載っている」

「助かる。それじゃあ、チームを分けるぞ」

ジューダスは植物図鑑を受け取り、ロムンハーブの載っているページの右上部分を折った。

「私はジューダスと共に行こうと思います」

セルシアが最初に声をあげた。

「俺もジューダスと組むかな」

ユーリも手を上げる。

「あ、じゃあ私も」

エステルが声を上げた。

「ああ。じゃあ僕たちはこの4人で行動する」

ジューダスはそう言って仲間たちを見回した。

「では、残りのメンバーの内何人かは私についてきてもらおうか」
バルドック神父はそう言っで募った。

それにすぐに声を上げたのはルークだった。

「俺が行くよ」

「いいのか？君はティアの護衛についていたいのではないか？」

「いや……早く薬草を見つける手伝いをしたいんだ」

ルークはそう言っでティアを見た。

ティアは具合が悪そうだったが、ルークの言い分に納得しているようだった。

「悪いわね……ルーク」

「別にいいって。なるべく早く見つけてくるから、それまで我慢しててくれ」

「ええ……」

ルークはそういうと、振り返って神父を見た。

神父はふつとした笑みを見せながらルークを見た。

「では、行こうか」

「あ、待つてください」

呼び止めたのはカウスだった。

「僕も行きます」

「あ、じゃあ私も」

カウスとカノンノが名乗りを上げる。

神父とルークは二人の名乗りにならずくと、そのまま4人で森の中へ入っていった。

残りのメンバーは、ティアを護衛するために残った。

うっそうと生い茂る森の中をジューダスたちは歩き続けた。
ロムンハーブの載った図鑑は、エステルが持っている。エステルは
写真と森

の中の薬草を見渡しながら、ロムンハーブを探した。

「なあ、ジューダス」

ユーリが前を歩くジューダスに話しかけた。

「なんだ」

「スフィードの件だけだよ。なんであんな事を言ったんだ？」

「……何の事だ」

「信じてなかった、とか。裏があると睨んでた、とかよ」

「……その事か」

ジューダスは目を細めて地面を見ながら答えた。

「スフィードの持っていた余裕、言動……それが僕には不審なものにしか思えなかった」

「そうか？俺はただのひねくれ屋かと思ってたけどよ……」

「……そうかもな」

ジューダスはそれきり黙ったまま歩き続けた。

ユーリもこれ以上の会話は諦めて、ジューダスについていく。

それからしばらく歩いた時。

「ジューダス……右前方から視線を感じます」

セルシアが前方を睨みながらつぶやいた。

「ああ、わかっている……調べるぞ」

ジューダスはそういつて視線の方向に向かって歩き出した。

剣をいつでも抜けるように手をかけ、明らかな戦闘体勢を整えながら近づく。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよー！ー！！」

森の中に響いたのは、なんとも可愛らしい女の子の声であつた。
ジューダスを含めその場にいた全員が驚いて止まる。

木の陰から出てきたのは、肩の上に載りそうな大きさの『妖精』であつた。

金色の髪が人形のような印象を際立たせる。赤い衣服を身に纏い、緑色の透き通つた羽を広げて、パタパタと羽ばたきながらジューダスに近づいてきた。

「へ、変な事はしないから攻撃しないでよ……！！」

「……」

「な、なによその目は……私は別にあんた達に何かしようだなんてこれっぽっちも考えてないわよ！本当よ！」

「……」

「ね、ねえってば」

「……」

ジューダスはあとため息をついた後

「行くぞ……」

そう言つて歩き出そうとした。

「ちょ、ちよつと！無視しないでよ！」

「そつですよジューダス！こんなに可愛いのに！」

ふと見れば、エステルが妖精に随分興味を持ったようで、目を輝か

せている。

ユーリはそんなエステルの様子にあきれながら、現れた妖精に話しかけた。

「……で？なんだお前」

「ふ、ふん……見てわからない？妖精よ……」

「いや、そりゃわかるんだけどよ……」

「妖精さん？お名前は何ていうんです？」

エステルが好奇心をむき出しにして話しかけた。

「……アリス。アリスよ」

妖精　アリスは腕を組み、恥ずかしいのかこちらから目を背けながら言った。

「アリス！とっても可愛い名前です！」

「そ、そう……って、あたしの名前はいいのよ！」

アリスは叫び、ジューダスをきつと睨んだ。

「……なんだ？」

「あ、あんた達に、頼みがあるのよ」

「断る」

「早っ！！」

アリスの頼みごとなど聞いている暇は無い。ジューダスはさっさと歩き始めた。

「ちよつと待つてよ！！この森にある黒い石をなんとかしてよ！！」

アリスのその言葉に、ジューダス以下その場にいた全員が驚いて止まった。

黒の石。

「それが……この森にある？」

セルシアが呆然とつぶやいた。

「……」

ジューダスは睨むように妖精アリスを見た。

アリスは戸惑いながら「な、なによ……」とだけつぶやいた。

「お前の言う黒の石とは、これのことか？」

ジューダスは鞆の中から今までに手に入れた黒の石を取り出してアリスに見せた。

アリスはあつと驚く。

「どういうこと……黒の石をあんた達が持っているなんて……ちっちゃいけど」

「小さい？」

「うん。あたしが見たのは、こーんな大きい石だったわよ！」

こーんなと言いながら両手を目いっぱい広げるアリス。

しかし、もともと小柄な妖精のため、その動作からはどの程度大きい黒の石なのかジューダスたちには分からなかった。

「しかし少なくとも、これよりは大きな黒の石がある、ということか」

「そうよ！その石から現れる魔物が、あたし達の住処をいつ襲うかわからなくて毎日不安なの！！」

「石から、魔物が現れる……？」

「そう！ってほら！早速来たわよー！ー！！」

アリスは叫びながら指をさす。

その方向から、黒い甲冑に身を包んだ人ならざる剣士が襲い掛かってきた。

「こいつは、廃墟で戦ったデルネイドの手下だったな」

ユーリが鞘から剣を抜き、攻撃態勢を整える。

「ふん。一気に片付けるぞ」

ジューダスが駆け寄る。

黒の剣士は接近してきたジューダスに対して大きく剣を横に薙いたが、ジューダスは滑り込むようにその剣をかわすと、下から突き上げるように飛連斬を食らわせた。

のけぞる黒の剣士。さらにそこに、セルシアの銃による攻撃が襲い掛かり、

黒の剣士は衝撃を受けきれず倒れこんだ。

「ホーリーランス!!」

畳み掛けるようにエステルが術が発動し、黒の剣士に次々と光の槍が突き刺さる。

その光景を見ていたアリスは

「……すごい」

ぼんやりと、一言つぶやいた。

しかし、あれほどの攻撃を受けておきながら、黒の剣士は立ち上がった。

まさかこれほどとはな。

3人がかりの攻撃を浴びせても倒しきれないほどの耐久力を持っているとは、随分厄介な相手である。

「こーいう雑魚相手に使いたくねーんだけどよ、仕方ねーか!」

ユーリが飛び出す。体から闘気を滲ませながら。

立ち上がり、攻撃を仕掛けようとした黒の剣士の横を通り過ぎるように高速ですり抜けると、そのまま彼の秘奥義に連携した。

「閃け、鮮烈なる刃! 無辺の闇を鋭く切り裂き、仇為すモノを微塵に砕く!」

漸毅狼影陣!」

次々と切り裂かれる黒の剣士の体。

やがてその傷が多くなるに従い、黒の剣士の体の傷から黒い靄が噴出し始めた。

「とどめだ!!」

ユーリがとどめの一撃を浴びせると、黒の剣士の体は上半身と下半身に分断された。

そして、その切り口から黒い靄が大量に発生すると、黒の剣士は跡形も無く消えてしまった。

「ま、こんなもんだろ」

刀を肩に乗せ、ユーリはニヒルに笑った。

「か、かつこいい〜!」

アリスが手を合わせて叫んだ。

ユーリが「ん?」と言ってアリスのほうを見ると、アリスは目にも留まらぬ速さでユーリの顔の近くに飛んでいた。

「あ、あの! 貴方のお名前は! ?」

「お、おう。ユーリだ。ユーリ・ローウェル」

「ユーリ! 素敵な名前ね!」

「はあ?」

「あのね! あたしはアリスって言うの! よろしく!」

「お、おう……」

アリスはとても嬉しそうな顔をしながらユーリに話しかける。

それを見ていたジューダスが

「おい。何をやっている。お前の言う黒の石のところまで案内しろ」と言うと、アリスは途端に不機嫌な顔になり、ジューダスを睨んだ。

「ち…… お邪魔虫め」

「何か言ったか?」

「いいえ、別に〜!」

「なら、さっさと案内しろ」

アリスはぶつくさと言いながらジューダスたちを先導するように飛び始めた。

「ジューダス……ロムンハーブの回収はどうするのです？」

セルシアが前をいくジューダスに尋ねた。

「それも並行して行う。が、黒の石の大きいものがこの森にあるという情報も気になる。捨て置けない情報だ」

「そうですね……わかりました」

セルシアはそれきり黙り、ジューダスの後を付いて行った。

バルドック神父とルーク、カウス、カノンノの4人は、ロムンハーブを探して森の中をさまよっていた。

「……ふう」

ルークが足早に歩く。先頭に行く彼が周りが見えていない。

「ルーク！少し落ち着いたらどうだね？」

「バルドックさん……」

ルークは歩みを止め、後ろを振り返った。

「慌てていても良いことはない。むしろハーブを見逃す可能性がある

る。もう少しゆっくり進むぞ」

「……すいません」

「仲間を思いやる気持ちが強いのは結構な事だがな……」

神父はそういつて、周囲の草木を見渡す。

しかし、ロムンハーブラしき薬草は見つからない。

「ふむ。もう少し奥に進まなくてはいけないかもしれんな」

「どうして？」

「この森の入り口付近に自生していたロムンハーブは、根こそぎ刈り取られてしまったのかもしれない」

「……」

「奥に進もう」

そういうと、ルークが先導するように歩き始めた。

カウスとカノンノ、神父もそれに付き従って歩く。

森の中を歩き始めて1時間が経過したところ、ふいにカウスが尋ねた。

「神父さんは、どうして薬草に詳しいんですか？」

「ん？何かな、突然」

「いや……なんとなく、気になったんですけど」

「……」

神父は歩きながら、何を言うべきか思案しているようだった。

カウスは変な事を聞いてしまったかと少し心配になった。

やがてバルドック神父は納得したように口を開いた。

「昔、病に倒れた者を看取ったことがある。それ以来知識として得る事を始めた」

「え……それって」

「ふ。若いころの實力不足を嘆いているわけではない。むしろその病は不治のものだった。どうあってもその者は死ぬ運命だった」

「……」

「だが、それを機に薬草学に手を染めて見たが思いのほか相性が良

かつたらしい。ある程度ならば、凶鑑を見ずとも見分けがつく」

「そう、なんですか……」

「ああ」

バルドック神父は淡々と語った。

カウスはそれに納得すると、会話を区切った。

ふと、バルドック神父が歩みを止める。カウスたちもどうしたのかと歩を止めた。

「……気配を感じる」

「え？」

「……気を付ける。こっちだ！」

バルドック神父が指を刺すと同時に、森の木々を高速ですり抜けてこちらに近づいてくる影があつた。

カウスたちは驚いて剣を構える。

その影はやがて大きな体躯と四肢を持つ魔物へと姿を変えると、カウスたちに向かってその強靱な爪を振り下ろした。

「うわー!!」

カウスと近くにいたカノンはその場を飛び退く。

魔物は黒い毛で覆われた存在だった。両前足には刃物のような翼が生えている。

「ナルガクルガ……」

バルドック神父が現れた魔物に向けて呟いた。

「それが、こいつの名前か……？」

ルークが確認すると、バルドック神父はうなずきで返した。

「気をつける。こいつはすばやい動きでこちらを攪乱しながら襲ってくる魔物だ。各自散開し、一箇所に集中しないように気をつける」

「了解！」

神父の指示通り互いに離れるルークたち。

ナルガクルガは、ルークたちの動きを様子見しながら、どの獲物から襲うか決定しかねているようであった。

「まずは、様子見だな」

ルークがそう言って、拳に闘気を集める。

集めた闘気を地面すれすれにアッパーをして開放する事で、特技、魔神拳を繰り出した。

ナルガクルガは魔神拳が飛んでくるとを其の目で視認すると、その大きな体からは想像も出来ないような飛び上がりを見せてよけた。そして、そのままルークに向かって滑空してきた。

「おっと！」

ルークがぎりぎりのところでかわす。

そして、ナルガクルガの正面からルークは攻撃をしかけた！

「烈破掌！！」

右手に集約された闘気が、ナルガクルガの顔の前で弾けた！

ナルガクルガはその威力で首ごと仰け反ったが、致命傷ではないらしい。

「ガアアアアアアアアアア！！」

叫び声と共に、ナルガクルガはルークに背を向けるように飛んだ。

「いかん！！よける！！」

バルドック神父が声を荒げた。

ルークは何のことだかわからなかったが、神父の指示通りその場から横っ飛びで離れた。

次の瞬間、ナルガクルガの尾が長く延び、たくさんの棘を生やして、先ほどまでルークがいた場所をたたきつけた。

吹き上がる土煙の量から、その圧力の大きさが計り知れる。まともに食らっていたら、ひとたまりも無かっただろう。

「うへえ……！なんなんだよあの尻尾は！！」

「ナルガクルガの尾は奴の最大の武器だ。するどい棘と柔軟な尻尾を使いこちらを攻撃してくる。気をつける」

バルドック神父はそういうと、ナルガクルガに向かって駆け出した。

「はあああ！幻竜拳！！」

神父はすばやい動きでナルガクルガの顔に拳を叩きつける。

次の瞬間、ナルガクルガの巨体が後ろに後ずさりした。

「すげえ……俺の烈破掌じゃ首を仰け反らせる事しか出来なかったのに……」

ルークは啞然としたまま神父のを見た。

神父は一撃離脱の構えをとり、すぐにナルガクルガから離れる。

その場で格闘家特有のステップを踏みながら、次の行動に移る神父。神父は飛翔し、そのままナルガクルガの頭目掛けて踵落としを決めに入った。

。

しかし、ナルガクルガはすばやく横っ飛びでよける。さらにルークの頭上を飛び越えるように飛び上がり、そのままカノンノ目掛けて襲い掛かった！

「きゃあ！」

「カノンノ！」

ナルガクルガはそのままカノンノを爪で切り裂こうとするが、カノンノは間一髪のところまで防御する。しかし、その威力を殺しきれず、後方に弾き飛ばされる。

その時、

「くらえ!!」

カウスが今まで溜めていた詠唱を完了し、攻撃を開始した。

上級魔術、サンダーブレード!

ナルガクルガ目掛けて落雷の剣が突き刺さる。その瞬間、ナルガクルガは目にも留まらぬ速さでバックし、サンダーブレードをよけた。

「くっ!!? 早い……!!」

「ガアアアアアアアアアア!!」

ナルガクルガは今度はカウスに狙いを定める。

すばやい接近でナルガクルガはカウスの傍にたどり着いた。一瞬の早業である。

「くっ!!」

カウスは剣を構え、ナルガクルガに向かって振り下ろしたが、ナルガクルガは体をすばやく回転させ、硬い尻尾をカウスに向かって振り回した。

それが先に激突し、カウスは吹き飛ばされる。

「うわぁ!!」

「カウス!!」

カノンノが悲鳴を上げる。しかしカウスの傷はそれほど深くは無かつたらしく、何とか体勢を整える事ができた。

「!!!?」

カウスが体勢を立て直したとき、ナルガクルガはその場にいなかった。

一瞬の内に姿を消した。一体どこへ?

「カウス真上だ!!」

ルークが叫ぶと同時にカウスは真上を見た。

ナルガクルガが、頭を向けて真上からカウスの頭を食いちぎろうと接近してきた!

「くっ!!!!」

カウスは回避は間に合わないと判断し、攻撃に転じた。

剣を顔の前に構え、自分の周囲に光の魔方阵を展開させる。

「シャイニング・バインド!!」

カウスが飛び上がると周囲の魔方阵から強力な光の本流があふれ出し、ナルガクルガを飲み込んだ!

そのまま魔方阵から吹き飛ばされ、横向きに倒れた。

右足を負傷したらしい。

「グルルル……!」

しかしナルガクルガの目は死んでいない。

そこに、神父が飛び込んだ。

神父はナルガクルガの前に立つと、右足を大きく上げた。

そして、渾身の力を込めてその右足を踏みおろす!!

「震脚!!」

ドガンという音とともに、ナルガクルガの頭蓋が砕ける音が聞こえた。

ナルガクルガはそのまま動かなくなった。

「……終わったな」

神父はそういうと、大きく息を吐いた。

「すっげー威力……」

ルークが唖然としたままバルドック神父のとどめの一撃を評した。

「神父さん、強い……」

カノンもまた、神父の攻撃力にびっくりしたのだろう。

無意識の内に言葉を発していた。

「さて、先に行こうか」

バルドック神父はルークたちが呆然としている事を一切気にせず、先に進もうと歩み始めた。

「あ、はい！」

カウスたちが慌てて神父についていく。
その時。

「あ！あれって！！」

カノンノが指を刺しながら叫んだ。

バルドック神父はその指差された方向を見ると、そこには青い花を咲かせた薬草が生えていた。

「ロムンハーブだ」

神父が近づき、その草を摘み取る。

「やったね！これでティアを助けられる！」

カノンノがぴょんと跳ね、喜びながら言った。

「できればもう少しほしいな。奥に進むぞ」

バルドック神父はそう指示し、ルークたちはさらに奥に進む。

そこには、大量のロムンハーブが自生していた。

神父はそこから必要な量だけのハーブを摘み取った。

「戻るぞ」

神父はそう言って、きた道を引き返し始めた。

「……」

ルークは、その神父の後姿を黙ったまま見つめた。

妖精アリスの案内でたどり着いた場所には、確かに巨大な黒の石が置かれていた。しかし、さらにそこに驚くべき光景が待っていた。巨大な黒の石は、ジューダスたちの身長のおよそ3倍はあった。その石の近くに銀髪が印象的な男性がいた。

「あれ、誰かしら？」

アリスがその人物に近づこうとする。

「行くな……」

ジューダスが、緊張を押し殺した声でアリスを止めた。

「な、なによ……」

「黙っている」

ジューダスはもう視界に納めてしまった以上、敵がこちらに気づいている可能性が高いと思っていたが、それでも逃げられるならば逃げようと考えていた。

「久しいな。あの森で戦ったとき以来か」

銀髪の男性……レーヴァンは、振り返ってジューダスたちを見た。

ジューダスは小さく舌うちをした。

クオイの森で戦った最強の敵、レーヴァンと、こんなところで再会してしまった。

その事実が、ジューダスを焦らせた。

たった4人では、勝ち目が無いからだ。

以前の戦いを思い出す。圧倒的な剣術と闘気の開放によって全滅させられた。

……ジューダスは死を覚悟して、この場を切り抜ける術を考え始めた……。

六章二話 闇の狩人（後書き）

とうとう最強の剣士、『レーヴァン』と対峙してしまったジューダスたち。

圧倒的な火力を持つ相手に、勝ち目の無い戦いを挑むのかどうか、次回を楽しみにお待ちください！

それでは、失礼しますー。

六章三話 行方不明の救世主（前書き）

この作品は、TOD、TOE、TOD2、TOS、TOA、TOV、TOWRM2のキャラクターとオリジナルなキャラクターが登場するmix作品です。

上記のような設定が苦手な方、ご注意ください。

六章三話 行方不明の救世主

最強の剣士レーヴァン。

クオイの森でジューダスたちを圧倒的な力で倒した強敵。

その強敵と今、よりもよって戦力を分散した状態で出遭ってしまった。

「……」

ジューダスは、目の前にいる男の実力のすべてを見たわけではない。しかしそれでもわかるのだ。この場においては間違いなく敗北する。

この窮地をどうやって切り抜けるか、それだけを考えていた。

「……レーヴァン。それがお前の名前か」

「……ほう。俺の名を聞いているのか」

銀髪の男 レーヴァンは大して動揺もしない。ジューダスたちが自分の名前をすでに知っている事は予想していたらしい。

「ここで、僕たちと戦うか？」

意味の無い質問であるとジューダスは思っていた。こんな確認に何の意味がある。奴にとってこの場で戦いを放棄するメリットは無い。しかし

「……お前たちが武器を取らないのであれば、この場は見逃そう」

レーヴァンは意外にも、そう言った。

ジューダスの表情に驚きの色が浮かぶ。

「……何故だ。お前の実力ならば、僕たち4人をまとめて抹殺する程度、わけないだろう」

「ああ」

「……たいした自信だな」

「事実だ。クオイの森でお前たちは今以上の戦力を整えていたが、俺には適わなかっただろう。戦力を分散しているようだが、そんな状態で追い討ちをかければ、まず間違いなく俺が勝つ」

ジューダスはその言葉に違和感を抱いた。

まるで、今の戦力だから相手にしないとされている様であった。

「お前は、僕たちが戦力を整えていないから戦わない、という意味か？」

「ふ……そうしてもらっても構わん。それもまた理由のひとつだ。それ以上に、今はお前たちを相手にすることを優先すべき時では無いからだ」

「なに……？」

「お前たちを特別視し、これからは俺の仲間たちはお前たちを潰すために動く者が多くなる。そういった意味ではお前たちは俺たちにとって対処すべき問題の中でも優先される物だ。だがな、俺にとっては、どうでもいい」

「お前にとっては、僕たちの相手は急いであるものではないと？」

「いつでも殺せる　　そういうことだ」

レーヴァンの目がギラリと冷たく光った。

「……舐められた物だな。そのうちお前を倒すほどの力を手に入れるかもしれないぞ」

「……むしろ、その方が楽しみだな」

「……は？」

「俺を超えるもの……俺に勝ちうるもの……そういう奴と戦うために、俺は連中に協力しているのだから」

レーヴァンはそっぴい捨てると、ジューダスたちをすり抜けるように歩き始めた。

ジューダスは黙ってレーヴァンが通り過ぎるのを待った。

「あ……」

そうして通り過ぎようとしたレーヴァンを、セルシアが止めた

「なんだ？」

「……あなたの持っている、その花は……？」

「……アオレンゲの事か？それがどうした」

「……いえ……」

「……ふん」

レーヴァンはセルシアから視線を外すと、さっさと歩き始めてしまった。

そして、やがてレーヴァンの後姿が見えなくなったところ、ジューダスがセルシアにたずねた。

「奴の持っていた花がどうかしたのか？」

「いえ……何でも、ありません」

「……」

セルシアはそれきり黙りこんでしまった。どうやら話したくないらしい。

ジューダスもそれを汲み取って、話題を変える事にした。

「とりあえず、あの巨大な黒の石について調べるぞ。何かわかるかもしれない」

「ああ」

「はい」

ユーリとエステルがジューダスの言葉にうなずくと、3人はそろって黒の巨石に近づいていった。

セルシアもはつとすると、遅れて3人に続いた。

黒衣の守護者 六章三話 行方不明の救世主

「で、どんな魔物がこの石から現れるんだ？」

ユーリが近くを飛んでいた妖精アリスに尋ねる。しかしアリスは片手を顎につけたままうーんとうなるだけだった。

「おっかしいわね。前見た時は、黒い狼とか兵士、あと恐竜みたいなのもワラワラと生み出してただけ……」

「前と比べて、変化は？」

「変化？うーん……」

アリスは考え込んでいたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「そういえば、この石の近くって、もつとこう……場って言うか、空気が乱れてた気がするんだけど……今はそういうの一切無いわね」
「空気が、乱れていた？」

エステルがアリスの言葉を復唱する。アリスはうんとうなずいた後、
「そう。何かこの石を中心に力が渦巻いていた気がするんだけど、今は落ち着いてる……なんだろう、確かな一本の流れが出来上がっているみたい」

「一本の流れ、です？」

「ちよつと待つて。怖いけど……この石に直接触れて見るわ」

アリスはそういうと、黒の巨石に右手で触れて、目を閉じた。精神集中しているらしい。

「私たち妖精族は、ほかの種族よりも竜脈の力の流れとかに敏感なの。魔力の流れも、闘気の流れも、一緒に感じ取れるわ。この石は、そういう力をどこかに送り届けてるみたい」

「力を、送り届ける？」

エステルがうーんと考え込む。

ジューダスは「ほう」と呟いた。

「便利だな。今まで正体不明だった黒の石の持つ力が、お前にはわかるのか」

「わかるって言うても、力をどこかに送り届けてるってことだけよ？ どうして魔物が生み出されたり、昨日まで見たいに黒の石が力の渦を作っていた原因とかはわからないわ」

「それでも大した物だ。お前……僕たちの旅に同行しないか？」

「うーん……はあっ!？」

アリスは目を丸くしてジューダスを見た。エステルとユーリ、セルシアでさえもジューダスの発言に驚き、自分の耳を疑っている。

「ジューダス、今、なんて？」

エステルが口をあわわとさせながら言った。

「これでまたひとつ情報が手に入れられる。この黒の石が送っているという力の流れを追えば、奴らの目的の正体に一步步近づけるかもしれないだろう？」

ジューダスはニヒルに笑いながらアリスを仲間に誘った理由を話した。

しかし、当の本人は「嫌よ！！」と叫んだ。

「あんたねー！あたしは妖精よ！戦う力なんて持ってないんだから！」

「その点については任せろ。ユーリにお前を守らせよう」

「え？俺？」

突然出てきた自分の名前に驚くユーリ。

そんな交換条件に何の意味があるのかとみなが思ったが、

「え……ユーリが、あたしを……？」

アリスはその一言でゆーっくりと考え始めた。

やがて答えを出すと「いいわ！あたし、あなたたちの旅についていく！」と言った。

「うお！？いいのか？」

「その代わり！私をしっかりと守ってね！ユ・ウ・リ！」

「お、おお……わかったよ」

アリスは楽しそうに笑いながら、ユーリの周りを飛び回った。

ジューダスはしてやったりといった風な笑みを見せていた。

「ジューダス……」

セルシアが呆れながらジューダスに近づく。

「ふ……あいつがユーリに興味を持っていたのは理解していた。ユーリをあいつのお守り役にすればあるいは付いてくるかと思ったが、すんなり承諾したな」

ジューダスが小声で話したその言葉を聞いたエステルは、急に焦ったような顔を始めた。

「あ、あのアリス！」

「ん？なにエステル？」

「み、みんなであなたの事を守りますから！ユーリばかりと一緒にじゃなくてもいいんですよ！」

「……え？」

「だ、だから、ユーリといつも一緒っていう必要はないんです！」

エステルはなにやら必死にアリスに説得を試みている。その様子をジューダスは眺めていて、小さく笑った。セルシアにはジューダスが何故笑ったのかわからなかった。

「べ、別に私の好きでいいでしょ！ユーリと一緒にいるのも！」

「だ、だからユーリばかり信用してちゃいけないと思うんです！時には私やほかのみんながあなたを守りますから！」

「へへ。あなたはユーリのこと信じていないの！？」

「へ……！？い、いいえ！違います！違いますユーリ！」

エステルが慌てて訂正する。それをユーリは首を振って聞き流した。

「なんか頭痛くなってきた……」

そんな彼らのやり取りを見ていたジューダスだが、「ゴホン」と咳き込んで会話を中断させた。

「お遊びはここまでにするぞ。アリス。この黒の石の力の流れている大まかな方向は特定できたのか？」

「ええ。大丈夫よ！ここから北の方角に伸びているわ。独特な力の流れだから、そう簡単に見失うことはないと思うわ」

「よし。これからはその力の流れを追うぞ。先ほどのレーヴァンの話だと、僕たちを本格的に障害として認識し始めた奴らの攻撃が待ち構えているかもしれない。冷静になって戦うぞ」

「ああ」

「ええ」

「そうですね」

ジューダスが意を決した言葉に、3人は素直にうなずいた。

その時、遠くで独特な破裂音が鳴り響いた。

「あれは……？」

「バルドック神父の持っている、信号弾だ……ハーブが見つかったのだろう」

「ちようどいいな。俺たちはこの黒の石を発見したし、戻ってみんなに報告しようぜ」

「ああ」

そしてジューダスたちは来た道を引き返し始めた。

森の入り口で待機していたメンバーと合流したジューダスたち。バルドック神父が採取したロムンハーブを調合して解毒薬を作っているところであった。

ジューダスがバルドック神父に尋ねる。

「神父。解毒薬が出来るのにどれほどかかる」

「何、あと10分程度だ。比較的簡単な薬だからな」

「わかった」

ジューダスは仲間たちのほうを振り返った。

「紹介しよう。新しい仲間だ」

ジューダスはそう言って、アリスをみなに紹介した。

「ふん。アリス、よ。ジューダスに協力を頼まれたから、仕方なく付いていくことにしたわ。よろし……く!？」

「?どうしたアリス」

(やだ!あたしの好みの男の子ばかりだ〜!!)

アリスは内心で至上の喜びを感じていた。

この場にいるロイド、ルーク、リッド、スタン、ユーリが自分にとって好みの男性だったからだ。

ちなみにカウスは含まれていない。あとジューダスも。バルドック神父はいわずもがな。

ジューダスはそんなことを気にせず、説明を続けた。

「アリスは黒の石の持つ力を解析できる能力を持っている。僕たちの旅に必要な不可欠な存在だ。アリスを守りながら、旅を続けるぞ」
ジューダスがそういうと、全員は納得したようにうなずいた。

「ロムンハーブの解毒薬が出来たぞ」

バルドック神父がそういつて、小瓶をひとつティアに渡した。

「飲みなさい。しばらくすれば体内の毒を中和できる」

「あ、ありがとうございます」

それを見ていたルークが「良かったな!ティア」と言った。

「ええ。ルークも、ハーブを取ってきてくれて、ありがとう」

「へ?ああ、いや……そりゃ、仲間として、当然のことをしたまでだつて……」

気のせいかなルークの顔が赤くなっている。彼なりにうれしさと気恥ずかしさが混ざっているのだろう。

ジューダスはその光景をニヒルに笑いながら見届けた。

「それじゃあ、行きましょう。新たな街を目指しつつ、北へ……」
セルシアがそう言って北の方角を見た。

その先には、何が待ち受けているのか。

「出来れば街に立ち寄ってこの地域の地図を手に入れたいな」

バルドック神父が提案する。

「そうだな……街道にそって進んでいこう。街道の方角もアリスが指示した方角も幸いな事に両方北だ。このまま進むぞ」

ジューダスはそういつて、歩き始めた。

街道に沿って進んでいたジューダスたちは、やがてひとつの街にたどり着いた。

そのころにはこの世界の日も沈みかけており、今日はここで宿泊する事になった。

さっそく街の中に入るジューダスたち。その街は暖かな雰囲気と活気に満ち溢れていた。

敗戦国特有の閉塞感が感じられなかった。

「驚いたな……ここもデフィードの領土なのだろう？」
ジューダスがバルドック神父に尋ねる。

神父は「そう驚く事もあるまい。確かにデフィード自体は滅んだが、民間人の生活が根こそぎ奪われるような植民地化は免れたという事だ」と言った。

「さて、もうすぐ日も落ちる。早めに宿をとるべきだろう?」

「そうだな……行こう」

宿を目指す事にしたジューダスたち。

目的の宿はすぐに見つかった。3階建ての大きな建物であった。

リッドとファラが宿泊の確認をしたところ、16人という大所帯にもかかわらずすんなり宿の予約が出来た。

「今日はもう休むか?」

リッドがそう言うが、ジューダスはうむと考え込んだ後。

「いや、黒の石や魔物に関する情報が欲しい。夜になるまで聞き込みを行ってから今日は休むぞ」

そう言った。

「そうだなあ。リオンの言うとおり、みんなで分かれて聞き込みをしよう」

スタンがそう言うのと、皆がうなずいて、それぞれ分かれて行動を開始した。

ジューダスとセルシア、スタンとルーティは共に行動した。

街の中でも商店店が立ち並び一角を歩きながら、黒の石、黒の魔物についての情報収集を開始した。

その結果集まった情報を整理するジューダスたち。

「この街に、たまに黒の魔物が襲いに来る、と皆が言っていたな」

「ああ。ってことは、この街の近くに黒の石があるってことなのか、リオン」

「どうだろうな……調査して見る必要がありそうだが……」

ジューダスはそこで考え込んだ。

「アリスに力の流れを見つけてもらって、その方向に進むべきだろう。そこに黒の石があるのかもしれない」

「そういえば、アリスは何処に？」

セルシアが尋ねる。

「アリスなら、ユーリに付いて行ったわよ」

ルーティがそういうと、ジューダスはふんとうなずいた。

「……まあどの道、今日は探索できるような時間じゃないからいいがな」

ジューダスは納得すると、先の言葉が続けた。

「そろそろ宿に戻るぞ」

「ああ、そうだな」

そうして4人は、宿の場所まで戻り始めた。

他方ではルークとティア、カウスとカノンノが聞き込みを行っていた。

しかし、魔物の出現場所などの明確な情報を掴む事は出来ないでいる。

諦めてそろそろ宿屋に戻るかと相談しているところだった。

「魔物の襲撃つーのが気になるけど、今の俺たちに出来る事はあるかな……」

ルークの言葉に、ティアが反応する。

「ルーク。私たちの目的はこの異変の元凶を突き止めて、解決する事よ。この街を守る事じゃないわ」

「……わーってるよ」

「そう。ならいいけれど」

そんな会話をしている時、ふとカウスが周りを見渡すと、ある光景が目に入った。

「……なんだろう、あれ」

そこには、たくさんの子供たちが集まっていた。

中心には、青い髪の女性の姿が見える。

「子供たちが集まっているね。私たちも行ってみる？」

カノンノがそう言うと、ルークたちも頷いて近づいて見る事にした。

子供たちが取り囲んでいる場のすぐ後ろに立つて、何をしているのか様子を見る。

子供たちの視線の先には、一人の女性がいた。

右ひじに籠を引っさげている。その籠の中にはいろいろな種類の花が入れてあった。

青い髪は髪留めで短くとめられている。

「それでね、彼は見事に戦争を終わらせたの。ふたつの国のいさかいの原因を、自分ひとりの手で解決した事が、両国の王を感動させたのよ」

「すっげー！」

なにやら御伽噺をしているらしい。青い髪の女性ははっと気がついた顔を見ると、「大変みんな！もうこんな時間よ。そろそろ帰らないと」と言った。

「うん。ラーナ姉ちゃん、また明日ー」

「ええ、また明日ね」

子供たちが去っていく。

ラーナと呼ばれた女性は去っていく子供たちを見送った後、ルークたちと視線があった。

「あ……どうも」

「どうも……えーっと、今は、何の話なんだ？」

「あ、さっきの子供たちにした話ですか？」

ラーナはそう言つと、恥ずかしそうな笑みで答えた。

「笑わないでくださいね？……ディセンダー伝説っていう、御伽噺をしてたんです」

「え……」

その言葉に、カウスは驚愕する。

「ディセンダー……伝説？」

「はい？あれ、ご存知ないですか？」

ラーナは少し驚いたような顔をした。どうやらディセンダー伝説はわりと多く広まっている御伽噺の類らしい。

だが、カウスを驚かせたのはそんな事ではない。

「こ、この世界にも、ディセンダーはいるんですか！？」

「え？はい？」

ラーナはカウスの驚きに呆けさせられる。

カノンノがそんなカウスを落ち着かせようとする。

「か、カウス。そんなに慌てないで……でもびっくり……この世界にディセンダー伝説があるなんて」

カノンノも驚き混じりに自身の感想を呟いた。

「あの……皆さんは、一体……？」

ラーナの問いに、ルークが答える。

「あの、笑わないでくれよ……？俺たち、異世界から来たんだ」
「え……」

今度は、ラーナが驚愕を見せる番だった。

「さっき、この世界にも、って言っていましたよね。あなたたちの世界にもディセNDER伝説が？」

ラーナはひどく真剣な表情で尋ねてきた。
カウスが答える。

「はい。僕たちの世界には世界樹があって、ディセNDERはそこから世界に呼び出される存在として、言い伝えられています」

「そして、こちらのカウスが、私の世界のディセNDERなんです」
カノンノが付け足す。

すると、ラーナは驚いたように目を丸くした。

「ディセNDER……あなたが？」

「はい……と、いつでもここじゃない世界。グラニデって世界の、ですけど」

「グラニデ……異世界」

ラーナは先ほどの穏やかな表情から一変して、どことなく重い雰囲気を感じていた。

「それじゃあ、あなた達の目的は、異変の調査……この世界での調査ですか？」

「……ええ」

カノンノがラーナの問いかけに応答する。

「異変……調査……ね」

ラーナは何かぶつぶつと呟いている。

「あの……」

カノンノが何か問おうとしたその時、先にラーナが口を開いた。

「あなた方は、今晩はこの街で宿泊していくんですか？」

「はい、そうです」

「それじゃあ、お願いがあるんだけど、明日わたしとまた話をしてくれませんか？午前10時にこの広場で待っているから」

「え？いいですけど……」

「異変について……私も協力できるかもしれないから」

「協力って……」

カノンノが目丸くする。

「この街の近くに、異変に関係するかも知れない場所があるの。その場所をお伝えしますから」

「あ、協力ってそういう事ですか」

カノンノがほっとした。

「？何か？」

「いえ！ただ、ラーナさんってとても戦いに参加するような人には見えなかったもので……」

「あはは……そう見えます？」

ラーナはおかしそうに笑って見せた。それに伴ってカノンノも笑った。

「それじゃあ、明日、広場でお待ちしてますね」

「はい！仲間と一緒に、会いに来ますね！」

カノンノがにこやかにそう言うと、ラーナはお辞儀をして広場から去っていった。

「不思議な雰囲気の人だったな」

ルークがラーナに対する感想を述べる。

「何かわけありって感じだったわね」

ティアも忌憚無い感想を述べた。

「ディセNDER伝説……」

カウスがぼんやりと呟く。

「この世界にも異変が起こってるし、戦争も起こってる。世界がこれほど疲弊しているのに、ディセNDERがいないなんて、ありえるのかな……」

宿屋の大部屋にて宿泊する事になったジューダスたち。

本日全員が集めた情報を整理していく。

「この街に黒い魔物が襲ってくる可能性があるという事実……そしてカウスたちが出会った女性によると、異変に関係するかもしれない場所か」

ジューダスがたんと呟く。

その呟くジューダスの目の前を、ひとつの枕が飛翔する。

ガスッ！！

「よっしゃあ！リッドに当たったぜ！！」

「ロイド、すごい！」

「やったなロイド！くらえ！」

「きゃあ！リッド、ひどいです！」

「エステル、仇はとるぜ！とおりゃああああ！」

「が、スタン！よってたかって俺に投げるんじゃないやねえ！」

「ほらほら、リッド行くよー！」

「ちよつとー！ー！やばん過ぎー！あたしのユーリに枕をぶつけないでー！ー！」

「アリス！ー！ユーリはアリスのじゃないです！ー！」

多くの枕が行きかい、多くの笑いが響きあう。

ジューダスはその枕投げという戦争から外れた場所で、一人考え込んでいた。

ラーナとは何者なのか？いきなり現れた自分たちに協力を申し出たその真意は？

畏の可能性もあるなと考えていたところへ、セルシアがちよんちよんとジューダスの肩を叩いた。

「あの、ジューダス……」

「ん……どうしたセルシア」

「彼らは今、何をしているのですか？」

「……教えてやろう。あれは『ふざけている』んだ」

「……はあ」

決して枕投げという遊びを教えることなく、ジューダスはセルシアとの会話を区切る。

（というか、枕投げという単語を知らないのか）

などとも思ったジューダス。

セルシアは真面目な人間だから、そういうやんちゃな遊びとは無縁だったのだろう。

そう結論付け、周囲の遊び空気にはお構いなしにジューダスは明日以降どう行動するかを考え続けた。

「面白そうです」

「なにい!!!？」

思わず思考を放棄して突っ込みを入れるジューダス。

見れば、セルシアが指をくわえて枕投げをうらやましそうに眺めていた。

「セルシア……お前」

「はっ！な、なんですかジューダス!？」

セルシアも我に返ったようで、ジューダスのほうを慌てて見た。しかしジューダスは哀れみの目線をセルシアに向けていた。

「……うう」

「……やるならリッドに加勢してやれ」

「わ、私は別に……」

「……」

「……」

「……」

「……リッド、加勢します!」

キラんと目の奥を輝かせてセルシアが満を持して枕投げに参戦する。ジューダスはどことなく遠い目でセルシアのことを眺めた後。

（まあ、本人が楽しいのならば、それでもいいか……）
と思った。

出来れば、マリアンによく似た彼女、セルシアにはマリ안의イメージを崩すような行動は控えて欲しいとも思ったが。

「あのさ、ジューダス……」

そんな時、カウスがジューダスの傍に寄ってきた。どうやら枕投げ

には参加していなかったらしい。

「どうした」

「ラーナって言う人にあつた事は話したよね。ディセンダー伝説がこの世界にあることも」

「ああ。お前の世界と同じ伝説があつたということだな」

「うん……僕がディセンダーだから、なんだけど。この世界にはディセンダーが現れるかもしれない。もしかしたら、もう現れているかもしれない。そう思うんだ」

「……ディセンダー、か」

都合のいい救世主。その程度に考えていたジューダスであつたが、カウス話を聞く限りそう上手い存在でもないらしい。

「この世界は死に掛けている。スフィードとバルドックの言葉を借りればそういうことだな。その世界にディセンダーが光臨しているという噂が無い事が気かりなのか？」

「うん……世界が危機に瀕した時、ディセンダーは現れる。僕も、そうやって世界樹から生み出されたんだ」

「……ふむ」

「確かめなきゃいけないことだと思うんだ。この世界の世界樹はどうしたのか。ディセンダーはどうしたのか」

「お前はそれが、異変に関係している事だと思うのか」

「うん」

カウスはひどく真剣な表情でジューダスを見た。

ジューダスもカウスの目を睨む。

「……僕はあまり関係が無いと思うがな。個人的に調べるのはいいだろう」

「そう……ジューダスは関係が無いと思うのか」

「正直、ディセンダーという存在自体が胡散臭いと思うからな。お前を見ていればますますそう思う」

「え、ええ！？そんな……」

ジューダスの言葉に驚くカウス。

ジューダスはふつと笑いながら言葉を続けた。

「お前くらい人間くさい奴が救世主とは到底思えない。そう言ったんだ」

「……人間、くさい？」

「ああ。救世主を務めるには、お前はあまりにも人間らしすぎるんじゃないか。世界が生み出すには少々緊張感のかけた人材だろう」

「う……それって、どういう意味？」

「さあな。自分で考えて置け」

「……」

カウスはじとつとした目つきでジューダスを睨んだ。

ジューダスはそんな視線などどこ吹く風といった感じで、自分の武器の手入れをしていた。

「そついえばね」

ふと、アリスがパタパタと羽ばたきながらカウスとジューダスに近づいてきた。

「私、3年前に見たわよ。世界樹が光る所」

「えっ！」

その言葉にカウスが驚いた。

「あ、やっぱり関係あった？ディセNDERってのと」

「関係おありだよ！それはきつとディセNDER誕生の瞬間だ！」

「へえ」。じゃあ私の世界にもいるんだ。ディセNDER」

「……たぶん」

カウスは自信なさげに返事をした。

その時、鐘ががんと鳴り響いた！

「なんだ！？」

『黒い魔物群れが街に来たぞー！！戦える者は……』

音量を特殊な機械越しに拡大した音声は街中に響き渡る。

ジューダスはさっと立ち上がり、手入れしていた武器を鞘にしまった。

「行くぞー！！」

「おうー！！」

ジューダスたちは一同に大部屋から出て、街の中へと駆け出した。

街の中へと駆け出したジューダスたち。

どうやら魔物の群れは街の入り口に迫ってきているらしい。
急いでその場所へと駆けつける。

「おう！なんだあんたたち！旅人か！」

「そんな所だ。状況は？」

街の入り口を経過していた兵士の一人にジューダスが話しかける。

「黒い狼が10体強。黒い兵士10体強。ほかにこの辺のモンスターを引き連れてうじゃうじゃと攻めてきやがった！」

「対処できるのか？」

「ああ。いつもとそう変わらねえからな。ただ、黒い兵士のほうは問題だ。俺たちで相手した経験のある奴がいねえ」

「ならそいつらは僕たちに任せろ」

ジューダスが剣を抜きながら言った。

「いいのか!？」

「ああ。僕たちはあれを相手にしたことがある。しとめるのに時間はかかるかもしれんがな」

「頼むぜ旅人の旦那!俺たちも出来る限り敵を相手にする!」

そして平原へと駆け出したジューダスたち。

「スタン!ルーティ!セルシア!僕に続け!」

「了解!」

「残りの奴らも、4人以上で行動しろ!」

「わかった!」

「散開するぞ!」

戦場を縦横無尽に駆け抜けるジューダスたち。

その先には、強敵である黒い兵士たちが待ち構えていた。

「行くぞ!!敵を殲滅する!!」

街の外が黒い魔物との混戦状態になった中で、ひとつの影がその戦場に近づいていた。

「ユーリイ!!見つけたぞ!!」

影は全力でユーリに向かって接近する。その手に二本の魔剣を握り締めて。

接近してくる影からの殺意にいちはやく気づいたユーリは、すぐさ

ま剣を構えた。

「ザギ！！」

「ひやはははは！！」

飛び掛ってきたザギの攻撃を受け止めるユーリ。
二人は剣を合わせながらにらみ合った。

「久しぶりだなあユーリイイ！！会いたかったぜええ！！」

「そりやどうも……こっちは全く会いたくなかったけどな」

「ははは！！お預けを食らってばかりでうんざりなんだよ！！死ね死ね死ねええええ！！！！」

ザギは嵐のような連続攻撃をユーリに叩き込む。

ユーリはその攻撃をガードしながら、「エステル！！援護を！！」と叫んだ。

「はい！詠唱を開始します！」

エステルが詠唱を開始する。

「ははは！あの女の援護を待つか！？その前に終わらせてやるつか！！」

ザギは叫ぶと、ユーリからいったん距離をとった。

「ただの空破特攻弾じゃねえぞ！！くらえ！！『滅破特攻弾』！！」

「！！」

ザギが黒く禍々しいオーラを纏い、二本の魔剣を突き出しながら突撃してきた。

ユーリは防ごうと構えるが、

「！！なにっ」

剣が触れ合った瞬間、ザギの剣の先にオーラが集約し、一気に破裂した。

そのあまりの圧力に、ユーリの体は吹き飛ばされる！

「ぐああ！！」

「ひやはは！！まだまだまだあ！！」

ついでザギは剣を地面にこするように振り上げる。

すると、地面が抉れながら倒れたユーリに向かって牙を向け始めた！

ユーリの回避が間に合わない！

「ユーリ！！」

エステルが盾を構えて決めて行く地面の軌道上に立ちふさがった！

「エステル！危ない！！あなたの力で防げる威力じゃない！

！」

近くを飛んでいたアリスが叫ぶ。

エステルは歯を食いしばって立ちふさがるが、

「きゃあ！！」

地面を滑走する力の波に押し負け、吹き飛ばされてしまった。

「ひやははは！！！すげえ！！！すげえすげえ！！いいぞ！！俺の中の力が膨れあがってきやがる！！」

ザギは両腕を広げて天を仰いだ。

その目はすでに正気を失っているように見える。

ユーリ自身、今のザギは体を機械化していたあの時よりも狂っているように思えた。

（なんだこいつ……前より強くなってやがる！）

ユーリが立ち上がると、ザギは嬉しそうに歓迎した。

「ユーリィ……てめえを倒すためだけに、俺は地獄から這い上がってきたんだぜええ！」

「……はっ。這い上がってきたんだったら、もう一度突き落とす！」

「そうだよ！来いよ！俺を殺して見せるよユーリ・ローウェル！！」

ザギが再びユーリに接近する。

ユーリも剣を構えた。

「蒼破あ！！！」

ユーリの攻撃がザギに当たる。

しかしザギはひるまない！

「なっ」

「おらあ！！」

ザギが右腕を振り上げる。

「くっ！！」

すかさず防御の体勢をとるユーリ。

「死ねえ！！」

「！！」

ザギが振り下ろした一撃は、ユーリの予想した威力をはるかに上回っていた。

ユーリの刀が、折られた

「あ」

そのままザギの剣がユーリの体を袈裟切りする。

ユーリの体から鮮血が噴出した。

「ゆ、ユーリ！！」

エステルが痛む左腕を庇いながら叫んだ。

そのまま崩れ落ちるユーリ。

周囲の敵を相手にしていた仲間たちも、ユーリの倒れるユーリの姿がスローモーションに見えていた。

「はっ……つまんねえ」

ザギがぼそとつぶやいた。

そして、倒れたユーリの心臓に向かって剣を振り下ろす。

「ユーリイイイ！！！！」

エステルとアリスの絶叫が戦場に響いた。

まさにその瞬間。

一筋の閃光が戦場の遙か後方からザギに向かって飛翔した！

ガキンッ

！！

「！？」

ザギの剣が弾かれる。

ついで第二射。今度は赤い閃光がザギの目の前に迫る！

「なっ！？」

ザギがとっさにもう片方の剣でガードするが、剣と赤い光が触れ合った途端、その光が爆発し、ザギの体を炎で包み込んだ！

「なあ！？ぐああああああああああああああああああああああああああああ！！」

火だるまになって転げまわるザギ。

今度は天から激しい雷鳴と共に黄色い光が降り注いだ！

その光はザギの体に突き刺さり、ザギの体を感じさせる。

「あぐああああ！！つつ！調子にのるなあああああ！！」

ザギが叫ぶと、体の周囲を黒いオーラが包み込み始めた。

途端にザギの体を包んでいた火が消えはじめる。

そうして立ち上がったザギは、閃光の軌跡を辿って、誰が自分を攻撃したのか見抜いた。

「てめえか……邪魔しやがったのはっ！！」

「人外の魔ですか……完全に油断したところを射抜いたつもりですが、まさか生き延びるとは、驚きました」

そこには、ルークたちが街の広場で出会った女性　　ラーナが、
白銀に輝く弓を携えて立っていた。

「……その人は街を守るために剣をとってくれた人です。その人を襲う者があるならば、それは私にとって攻撃すべき対象です」

ラーナはザギを真っ直ぐな眼で睨みながら、矢をつがえた。

「……事情はよくわかりませんがね」

そう言つてエステルに向かって小さく微笑むラーナ。

エステルはラーナとは初対面であるため、驚きながら戸惑った。

「さあ、その人を助けてあげてください。この敵は私がひきつけます」

「は、はい！ありがとうございます！」

「何やってんのエステル！早くユーリを助けてあげて！」

アリスがエステルを急かす。

エステルは急いでユーリの元に近づき、治癒術をかけ始める。

「ラーナさん！？何でここに！」

カノンノがラーナの姿を見つけて駆け寄ってきた。

「あ……あなたはさっきの」

「か、カノンノです。ラーナさん、その弓は……」

「……実は私、以前、魔物討伐に特化したギルドに在籍しててね。こういう舞台には慣れているの」

「え、ええ……」

カノンノが驚きの声をあげる。

ラーナの持つ雰囲気は、とても戦場に似つかわしくない物だと思っ

ていたからだ。

しかしラーナがザギに対して向ける敵意はまさしく戦士のものだった。

ザギが左手に残った剣をラーナに向ける。

「邪魔するんじゃないよ……俺とユーリの殺し合いをなあ……！」

そうして突撃するザギ。

「カノンノ！どいて……！」

ラーナは近くにいたカノンノを左手で突き飛ばした！

「わわっ……！」

カノンノはそのままラーナから離される。

次の瞬間、ラーナは自分の足元に向け、矢を放った。

同時にラーナに接近するザギ。

ラーナが放った矢はザギの足元で炸裂し、ザギを激しい光に包み込んだ！

同時に、ラーナの左肩がザギの剣によって切り裂かれた！

ラーナとザギを包み込んだ光が消え去ると、そこには体中血まみれのザギと、左肩を抑えるラーナの姿があった。

「……ごはっ。てめえ……」

「っ……まだ……やるつもりですか」

「……くそ。白け切っちゃった。最悪だ」

「

ザギはそうつぶやくと、観念したのか黒いオーラを体から放出し始め、自身の体をその闇の中に溶け込ませる。
そうして、ザギは消え去った。

「ラーナさん!!」

カノンノが急いでラーナに近寄る。

「……痛い……」

ラーナがぼそりと呟いた。

「す、すぐ治療しますから!」

カノンノが治癒術の詠唱を開始する。

同時に。

「うゝ……痛い痛い痛いゝゝゝ!! いたあああああああ!!
! ! ! ! !」

先ほどの凍々しさは何処へ行ったのか。

ライナの絶叫が戦場に響き渡った。

六章三話 行方不明の救世主（後書き）

あああんまりだあああ~~~~!!!!

……どうしてエシ イシみたいなキャラにしてしまったし。

ラーナは火力的には高いですが、戦力としてはテイルズキャラと同等です。ユーリとまともにかち合ったらぎりぎり負けちゃうくらい
の女性です。

まだ仲間たちが戦っている中でそんな叫び声をあげるのはどうか
と思いますが、彼女のお茶目な一面ということで見逃してあげてく
ださい。

それでは、今回の話も読んでくださり、ありがとうございました。

六章四話 セルシアの過去（前書き）

この作品は、TOD、TOE、TOD2、TOS、TOA、TOV、TOWRM2のキャラクターとオリジナルなキャラクターが登場するmix作品です。

上記のような設定が苦手な方、ご注意ください。

六章四話 セルシアの過去

目の前の扉からエステルが出てきた。

ジューダスは足を止め、エステルに話しかける。

「ユーリの容態はどうなんだ」

「え、ええ。一応傷口がふさがるまでは治癒術をかけました。でも、目が覚めるまでは安静です」

「そうか……」

ジューダスは目を瞑り頷くと、きびすを返して来た道に戻った。

宿屋の外に出たジューダスは、今はもう真夜中の町並みを眺める。

つい先ほどまで魔物たちと戦闘していたのだが、今はもう平穩を取り戻している。

その雰囲気の違いが、この世界の町の強さを感じさせた。

「あの……」

すると、ジューダスに声をかける人物がいた。

「なんだ？ラーナ」

話しかけてきた女性、ラーナにジューダスはその眼差しを向けた。

ラーナは左肩に包帯をかけられた状態だった。

「ユーリさんはもう目を覚ましたのかと思って……」

「いや、まだだ」

「そうですね……私がもっと早くに駆けつけることが出来れば良かったのですが」

「……何にせよ、ユーリを助けてくれたことについては礼を言う」

ジューダスはラーナの背負う弓を見た。

街頭に照らされ、白銀に輝く弓は厳粛なイメージを漂わせる武器であつた。

「あの、明日私の家まで来てください。皆さんの旅の役に立てるか
もしれません」

「……どういう意味だ」

「具体的には、この街の近くにある不思議な黒い石……その場所
で案内します」

ラーナの言葉に、ジューダスは黙っていた。

お互いを見続ける二人。

そして、ラーナが口を開いた。

「信用、できませんか？」

「仲間にお人好しが多くてな。僕はむやみに他人を信用しないよう
にしている」

「そうですか……」

「それに黒の石の在り処については僕たちも見当がついている」

「え？ そうなのですか？」

「ああ」

ジューダスの言うとおり、ジューダスの仲間には妖精のアリスが
いる。

彼女ならば、その力の流れを読み取る能力から、黒の石の在り処を
大まかに特定できる。

「私の案内は不要ということですか……でも、私を戦力として加
えることは……」

「何故僕たちについてきたいのか。その理由で納得させて見る」

「……異世界の、ディセンドー」

ラーナがボソリと呟いた。

「あなたの仲間にいる、異世界のディセンダー。彼がこの世界に現れたということが気になるんです。私の世界にもディセンダー伝説はある。それなのに、現れた人は異世界のディセンダーと言った。ならば、この世界にもディセンダーは実在する可能性があるし、そうだとしたらこの世界のディセンダーは一体どこにいるのか。それが気になります」

「この世界のディセンダーか……その存在が僕たちに関係あるのかわからんぞ？」

「……それでも、あなたたちについていけば、この世界を巻き込んでいる何かに近づくことが出来る……そう思うんです」

ラーナは真剣な眼差しでジューダスをみつめた。

ジューダスは、瞳をいっさい揺るがせることなくラーナを睨んだ。

「お前も世界を救いたいと言うのか？」

「……まさか。私は世界を救う英雄ではありません。ただ……」
「？」

「この世界で黒い魔物が現れ始める少し前、私の前から二人の人間がいなくなりました……それが関係してるのではないか、そう思えてならないんです」

「……ふむ」

「そして、そのいなくなった内の一人が……ディセンダーなのかもしれない。そう思うんです」

「なに……？」

「彼は記憶喪失で、自分の名前以外何も忘れていました。そのくせ武術に魔術、あらゆる物事に積極的で、どんどん実力をつけていったんです。まるで、世界を救うだけの実力を養うためみたい
に……」

「……」

カウスに聞けばより詳細が分かるのだろうか、今はこの情報だけでも十分にその人物がディセンダーである可能性があることと判じることが出来る。

それに、その存在が行方をくらましてから、黒い魔物たちがこの世界にはびこり始めた。

「そのいなくなった者の名前は……？」

「アステイルとガイレツです」

「二人とも男なのか？」

「はい」

「……どちらも聞いた事がない名前だ」

「そう……ですね」

ジューダスとラーナは黙り込んだ。
そして、しばらくの時間が過ぎた後。

「お前の家はどこだ？」

ジューダスが突然たずねた。

「……広場につながっている、ミット通りの右手にあります」

「そうか。明日の朝、尋ねる」

「本当ですか？」

「ああ。そうしたら、黒の石の場所まで案内してもらおうぞ」

ジューダスがそう言うと、ラーナは微笑んだ。

そして背を向けて歩き出した。

「また明日……お待ちしてます。おやすみなさい、ジューダス」

「ああ……」

翌日。

ジューダスたちが宿屋が用意した朝食を食べているとき、エステルが二階の階段から駆け足で降りてきた。

「ユーリの目が覚めました！」

その言葉を聞いたジューダスたちは、朝食をそのままにして一度ユーリの様子を見に行った。

「まだ切られたところが痛むが……まあ、問題ねえよ」
ベッドに腰掛けたまま、ユーリがそういった。

「ふむ……念のため、ユーリにはこのまま休息をとらせるか」

「おいおいジューダス！大丈夫だって言ってるだろ？」

「ふん」

ジューダスが突然すばやい身のこなしでユーリに接近すると、ユーリの怪我した左肩付近めがけて拳を振った。

「がっ！……！！！」

ユーリが言葉にならない苦悶をあげている。

「じゅ、ジューダス!!」

エステルが驚きながらユーリをかばった。

「ふん。今の一撃でこれだ。お前は今、戦力として使い物にならん」
ジューダスが言い切った。

その言葉にリッドが「おいおい。そりゃ言い過ぎつてもんじゃないか?」と言ったがジューダスは無視する。

「僕たちはこれから、ラーナに会って事情を聞きながら、黒の石を目指す」

「ラーナに、です?」

「そうだエステル。昨晚、ラーナと二人で話したが、ラーナは異変に心当たりがあるらしい」

ジューダスの言葉に、ロイドが身を乗り出す。

「そうなのか!」

「やったねロイド! これでもっと解決に近づけるよ!」

コレットが嬉しそうに言ったが、リッドが眉をひそめた。

「その言葉、信用したのかジューダス」

「……ふん。虎穴にいらずんば虎児を得ず、だ。リッド」

「……最近、無茶がすぎねえか?」

リッドが頭をかきながら文句を言うが、ジューダスは目を瞑ってかぶりをふった。

「念のため、戦力を半分にわけて、半分はユーリの護衛につかせるぞ」

ジューダスがそういうと、周りのみなは互いを見合った。

「リッド。お前にユーリを護衛する組のリーダーを任せる」

「……まあ、いいけどよ」

「もしもの時は、冷静な判断をくだすんだぞ?」

「……へいへい」

やる気なさそうに呟くが、リッドはしっかりと頷いた。

ジューダスはそれを見て納得する。

「じゃあ、セルシア、スタン、ルーティ、それにカウス、カノンノ、アリス。僕について、一緒にラーナに会いに行くぞ」
ジューダスはひらりとマントを翻すと、そのまま朝食の席へと戻っていった。

「よく来てくれました。ジューダス」

ラーナが自宅を訪れたジューダスたちを出迎える。

「ラーナさん？昨日のお怪我の具合はどうですか？」

カノンノがラーナに心配そうに声をかける。

「大丈夫よカノンノ。あなたの治療術はよく効いたわ」

ラーナは穏やかな顔で言った。

「それじゃあ、行きましようか。あなたたちを黒の石の場所まで案内します」

ラーナは家の外に出てきた。その背に、白銀の弓を背負って。

街から出て、ジューダスたちは北西の方角に向かって歩き出した。先頭を歩くのはラーナとカノンノだった。ジューダスはしんがりをつとめて歩いている。

「ラーナさん、昨日は突然叫ぶんだもの。びっくりしちゃった」
カノンノが楽しそうに言った。

ラーナは少し気恥ずかしい気分を感じながら口を開いた。
「あはは……私、あんまり怪我したこと無いの。いつも後方で戦ってたから」

「でも、魔物との戦闘を何度も経験したんでしょう？」
カウスが尋ねる。

「ええ……でも、私の所属してたギルドは強い戦士が多くてね……中でもガイレツとアステイルは際立ってた……私はいつもその二人とパーティーを組んでたのよ」

「ラーナさんがそう言うなんて、その二人、とっても強いんですね！」

カノンノが目を輝かせながら聞いた。

「ええ、強いわ。すごく。ガイレツは猪突猛進って感じだったけど、アステイルは本当に、何でも出来た」

そこでラーナは背負っていた弓をカノンノに見せた。

「さっきアステイルは剣士だったみたいと言ったけど、彼、本当に何でもこなせたのよ。この弓も、もともとはアステイルの物だった

の」

「え？弓を使つてたんですか？」

「だから、何でも。剣も格闘技も、魔術も弓も、アスティルは何でもすごかったわ……」

そういうラーナの顔には少しかりの悲しみが宿っていた。

それを見逃さないカノン。おそらく、ラーナにとって大切な人なのだ。そのアスティルという人物は。

「……すごいですね。まるで……」

カウスが呟いた。

「まるでディセNDERのよう、か？」

その呟きの先をジューダスが口にした。

「ええ。昔の私はまさかと思うばかりだったけど、今の私なら……ディセNDERが実在するということを知った今なら、なおさら強く思うの。アスティルこそ、この世界のディセNDERだったんじゃないかって」

「そして、そのアスティルさんは行方不明……か」

スタンが考え込むように呟いた。

ルーティが口を開く。

「……もしかしたら、世界を救うためにそのガイレッツって奴と行動してるんじゃないかしら。だってディセNDERは世界を救う存在なんですよ？」

「……そうだといいいんですけど。……そうだったら、私も連れて行って欲しかったなあ……」

ラーナが目をわずかばかりに細めながら言った。

その言葉に、スタンが疑問を持った。

「どうして、二人は何も言わずにラーナさんの前から姿を消したんだろ……」

「ちよつと、スタン……」

ルーティがスタンの耳を引つ張る。

「いてててっ！！何するんだよルーティ……」

「ごめんなさいね……スタンったら本当にデリカシーの無い奴だから……」

「ふふ、いいですよ。……正確に言えば、デフィードが戦争負けたころ、デフィードに所属してた私のギルドが解体されたとき……その時二人はすでに居なかったんです」

ラーナが遠い昔を思い出すように言った。

そういえば、バルドック神父が言っていたのをジューダスは思い出していた。デフィードは敗戦国である、と。

「私が軍の命令で魔物討伐を行っていたとき、その帰りにギルドは敵国の手によって焼き討ちされてました」

「そんな……ひどい」

カノンノが悲痛な声を上げる。

「でも安心して。誰も傷ついた仲間はいなかったわ。ただ、ギルドとしての形を保てないようにするために、敵がした行為なの……でもその時、アステイルとガイレッツが姿を消した」

「……焼き討ちの被害にあったわけじゃないんですね」

「そう。焼け跡からは誰の死体も見つかっていないわ。ただ、アステイルとガイレッツ、二人が所持していた武器がなくなっていたの」その言葉を聞いたスタンが、

「ってことは、二人は自分の武器をしっかりと持って、焼き討ちされる前に姿を消したのか」

と言った。

「ええ……」

ラーナは頷いた。

広い平原をしばらく歩くと、遠くに黒の石が見えてきた。

そして、たどり着く。

黒の石は巨大なもので、ジューダスたちがレーヴァンと再開したときに見たものと同じ程度の大きさであった。

アリスが呟く。

「気をつけて……この黒の石、何か訴えてきてる」

「ええ！？黒の石ってしゃべれるのか！？」

スタンが驚きながら叫んだ。

「そうじゃないけど！何か、こう……私たちの持っている生命力を、欲しているみたい……」

「へええ。嫌なもの感じ取れるわね、あんた」

ルーティが素直に呟いた。

「……あんた達のためにこんな力の流れを読んでるのよ。それで、この黒の石に何かするの？」

アリスがむすつとした表情で呟いたが、ジューダスは答えない。

ゆっくりと黒の石に近づくジューダス。

「……何時までそうしているつもりだ。さっさと姿を現せ」

「！？」

ジューダスが言い放つ。

すると、黒の石の裏側から、一人の人間の姿が現れた。

いや、人間ではない。確かに人間なのだが、右腕がまがましい魔

物の腕なのだ。

ジューダスたちがファンダリアにある地上軍跡地で戦った男であった。

「よお……貴様ら、ついにこの世界にまで来たって聞いていたが……元気そうだな？」

「……」

「ふん。敵と交わす言葉は無い、か。それはそうだが……お前は何か言いたいことがあるんじゃないのか？セルシア」

男は挑戦的な目つきでセルシアを見た。

セルシアは黙っているが、その目は確たる敵意を男に向けていた。

「お前の知り合いか？」

ジューダスが尋ねる。

セルシアは「いいえ」と答えた。

「でも、向こうは私のことを知っているようです。私の過去を……」

「過去……生前の、お前のことか？」

ジューダスが尋ねる。

するとその言葉に魔物の腕をした男が反応する。

「生前？お前は一度死んだことになってでもいるのか？あの実験で消滅したのは事実だと聞いているがな」

「実験？」

スタンが呟く。

が、男は無視したまま続けた。

「アドバンスドチルドレンの訓練施設での実験で、お前はその能力を暴走させて消滅した。俺はあれが、お前が仕組んだ逃亡劇だったのではないかと思っていたのだがな」

「……」

男の言葉にセルシアは何を言うべきか迷っているようだった。

「あれは……あの実験は、私にはまだ早すぎただけです。その結果私という存在はあの世界から消滅した……」

「『あの』世界？」

男がピクリと眉を動かした。

「……セルシア。貴様、ひとつ勘違いをしているようだから教えてやる」

「……」

「アドバンスドチルドレンの実験施設、それを所持していた国アイカノルドは、この世界に存在する」

「……」

「貴様はこのエルジアースの生まれだよ、セルシア」

男は淡々とセルシアの過去を言い当てた。

ジューダス以外はみな驚いているようだったが、

「やはり、そうでしたか」

と、セルシアは小さく言った。

この世界が自分の生まれ故郷であることにすでに予感があったらしい。

「この死にかけの世界で、俺とお前は再会した。奇遇だな」

「私のほうはあなたの所属も名前も知らない……何も縁を感じません」

セルシアが冷たく言い放つ。

男は、ニヤリと、冷たい笑みを見せた。

「そう言うな……あの実験で被害を被った……そういう意味では俺とお前には不思議な縁がある」

「え……」

セルシアの瞳に動揺が浮かんだ。

男は魔物の腕をセルシアの目の前に見せ付ける。

「この魔腕を植えつける結果になったのは、貴様の実験の暴走の結果、施設内で爆発が起こったからだ。その爆発で俺は本来の右腕を

失い、狂った上層部の好奇心のせいで魔物の腕を移植されたんだよ」
「そんな……！」

セルシアが驚く、

男はニヤニヤと笑ったまま続けた。

「俺にはもともと魔物と意思疎通する能力が備わっていた……それが俺の能力だったんだが、それだけではおれ自身の戦闘力は低いまままだ。そういう考えで、俺は人間を辞めさせられたわけだが……」

「ちょっと待ちなさいよ！！」

ルーティが男の言葉をさえぎった。

「なんだ、女」

「さつきからわけわかんないこと言ってる間に口を挟ませてもらうけどね！あんたのそれは逆恨みじゃないの！？セルシアの実験の暴走ってのは、セルシア自身が企んだことじゃないんでしょ！！」

ルーティがきつとした目つきで睨みながら言った。

その言葉に、男はくつくつと笑い出す。

「恨んでなどいないさ……ただ、セルシアが過去を無かったことにしてるんじゃないかと心配しているだけさ」

「……それは、どういう」

「貴様の実験の暴走で、施設内にいた多くのアドバンスドチルドレンが空間断絶の被害にあって死んだ。あの施設は、お前のおかげで機能停止にまで追いやられたんだよ」

「……！」

セルシアの表情が強張る。

「もともと戦闘エリート育成を図るための施設だ。同胞たちに友愛の情など持つてはいない。だが、俺はあの施設がなくなつたせいで未来が途絶えた。エリートとして……人間として、アーカノルドの上層部に上り詰めるといふ未来がな」

「くだらん」

ジューダスが一言、そう呟いた。

「くだらなくは無いだろう。幼くして軍に入隊し、国の将来を託されて生きていたのだ。それ相応の見返りはあつてしかるべきだ」

「その見返りが無くなったから、お前は今こうしているのか？世界を混乱に陥れることをしているのか？」

「……」

男は黙る。

ジューダスは冷たい眼差しを向けていたが、やがてその腰から魔剣イノセントキラーを抜く。

「セルシアの過去がどのようなものだったのかはあいにく聞いていないがな。セルシアは貴様のような者から責められる立場にある存在ではないことくらい僕にもわかる」

「ジューダス……」

ジューダスの言葉に、セルシアは驚いた。

自分をかばうような発言をジューダスがするとは思っていなかったからだ。

「……俺が今こうしているのは、自分の存在を世界に知らしめるためだ」

男は魔物の腕となつてゐる右腕に力を込め始めた。

同時に、ジューダスたち全員が戦闘態勢に入る。

「生まれたときからその存在を国のためにと位置づけられ訓練してきた。その結果を生かすことなく、残つたのはこの魔物の右腕だけだ」

「……結果を生かすことなく？」

「アーカノルドはすでに敗戦した国だ。アドバンスドチルドレンは戦争に投入されたが、ほぼ戦死した」

「……なおさらセルシアは関係ないのではないか？」

「あの戦争に！！アドバンスドチルドレンがあと100人投入されていればアーカノルドは勝っていた！！貴様の実験の暴走の結果死んでしまった多くのものが、その能力を完成させていた！！その戦闘能力は期待されているものだった！！」

「……っ！」

セルシアが目細める。

「あの戦争に負けたのは……アドバンスドチルドレンが想定以下の戦力にならなかったのは、貴様の実験の失敗によるところが大きい。セルシア、だから俺はお前が憎い……」

「くだらないわ。本当にただの逆恨みじゃない」

ルーティが即座に言い放った。

「何が期待されていた、よ。戦争の道具としてしか育てられてなかったんじゃ、どの道将来は真つ暗だったんじゃない？」

「……」

ルーティの言葉にスタンが続いた。

「セルシアの実験の失敗が、どれだけの被害を生んだのか俺たちにはわからない……でも、セルシアは自分で望んでそうしたわけじゃないって言った！だったら俺はそれを信じる！」

「悪意があったかどうかを聞いているわけではない。俺は単純に実験に失敗するような未熟者が許せないだけだ」

「……ひどい！」

カノンノが叫んだ。

カウスが睨みながら口を開いた。

「こういう相手には何を言っても無駄なのかもね……勝手な理由で人を悪人扱いする。僕はそんなの、許せない！」

その時、セルシアが口を開いた。

「あなたの名前を教えてください」

「なに？」

「これから、あなたを殺す私が、あなたの名前を知らないのは無責任だと思っからです」

セルシアはまっすぐに相手を見た。

男は目を細めて、セルシアの意志を受け止める。

「フォーネインだ。貴様の同期にあたる」

「フォーネイン……許してくださいとは言いません。あの実験は確かに私の能力不足が招いたものであったかもしれないけれど……でも」

「だからといって、あらゆる世界に混乱を招くあなたたちを正当化する理由にはならない!!」

セルシアはそう叫ぶと、銃を即座に抜き放ち、込められた弾丸を撃ちなした。

フォーネインはそれを魔物の腕で弾き飛ばした。

「ふ……いい気迫だ！懺悔の気持ちに染まった相手では首をとるのは気が咎めるが……これならば問題ない！来い！！ジンオウガ!!」

フォーネインが叫ぶと、黒の石から黒い霧が現れ始めた。

やがてその霧がある巨軀をかたちどる。

蒼と黄色を基調とした鮮やかな毛並みがゆれる。

四肢は筋肉が発達しており、その荒々しい風貌とあいまってとても強力な魔物であることは容易に想像できた。

「さあ……このジンオウガはかつてのティガレックスよりも強力な魔物だぞ。それと俺を相手にどこまで戦えるか見せてもらおう!!」

「……ふん。いくぞ!!」

ジューダスが掛け声を発すると、その場にいた仲間たち全員が武器を構えなおし、そして……

「ゴオオオ……ガアアアアアッ!!!!」

シンオウガの咆哮が戦場に鳴り響いた。

六章四話 セルシアの過去（後書き）

かつてファンダリアで戦った敵、フォーネインとの再戦闘です。そしてフォーネインが語った、セルシアの過去。

大変遅くなりましたが、最近になってまた執筆意欲が湧いて来たので今のうちに頑張りたいと思います。

なんとなく分かっていただけるように、この死にかけの世界「エルジアース」でさまざまな過去が明かされていきます。

自分なりに考えたキャラクターたちが生き生きしてくるのもこの世界に入ってからだったんですよ……なのに途中で更新停止するとか、もう本当ね、バカかと。

これからどんどん盛り上げていこうと思いますので、よろしく願います！。

六章五話 赤髪の大剣士（前書き）

この作品は、TOD、TOE、TOD2、TOS、TOA、TOV、TOWRM2のキャラクターとオリジナルなキャラクターが登場するmix作品です。

上記のような設定が苦手な方、ご注意ください。

六章五話 赤髪の大剣士

「ジンオウガ、まずは小手調べだ」

魔物の右腕を持つ男、フォーネインはそう言うと、ジンオウガと呼ばれた魔物をジューダスたちに仕向けた。

ジンオウガはその体軀からは想像できないスピードでジューダスたちめがけて飛び込んできた！

「くっ！」

それを散開してやり過ぎずジューダスたち。

ジンオウガはジューダスたちに囲まれる形となった。

「その魔物がどのような攻撃手段を持っているかわからん！注意しろ！」

「ジューダス！ジンオウガの相手は私に任せて！」

ラーナがジューダスに向かって叫んだ。

「私はジンオウガと戦った経験があるから！」

「……ならば、僕がフォーネインを押さえる！残りのものはラーナにしたがって行動しろ！」

ジューダスはそう言うと、ジンオウガを無視してフォーネインに向かって切りかかる。

「はあ……！」

「ふん！」

ジューダスの魔剣とフォーネインの魔腕が激突する。

「ほう……その腕はこの剣の一撃を止めるのか」

ジューダスが鏖迫り合いながら呟く。

フォーネインは小さく笑って「言っただろう。この腕のおかげで俺

は人間以上の戦闘力を手に入れたのだと」と返した。

「まずは貴様から始末してやろう！ジューダス！」

フォーネインはジューダスから距離をとるようにバックステップを踏むと、即座に右腕を地面に叩き付けた。
すると

地面に亀裂が走り、ジューダスめがけてその亀裂は疾走した！

すかさずジューダスは亀裂から逃れるようにサイドステップを踏む。
すると、先ほどまでジューダスがいた地点の地面が隆起し、岩の槍
となって空を貫いた！

「グレイブの無詠唱発動か！……その腕、土属性と相性がいいた
いだな」

「ふん。今の一撃で俺の属性を見抜いたか。スペクタクルズも使わ
ずに大したものだ」

ジューダス自身が土属性のエキスパートである。

フォーネインの右腕が発する魔力が土の属性を帯びていることにい
ち早く気がついた。

「だがこんなものは序の口だぞ！降り注げ岩塊！！ロックブラスト
！！」

即座に詠唱を完成させ、空中より様々な岩がジューダスめがけて降
り注ぐ魔術を発動させる。

その降り注ぐ岩の多さにジューダスは驚く。

とても回避しきれる量ではない！

ならば！

「打ち砕く！粉塵裂破衝！」

飛んでくる岩をその剣の一撃で破壊する！

しかし岩は次々と降り注いできた。

ジューダスは舌打ちし、詠唱の構えをとる！

「ストーンウォール！！」

岩の壁を自身の目の前に出現させ、降り注ぐ岩塊を防いだ！

しかし、ジューダスの目の前の岩を砕く一撃が放り込まれた！
それは、フォーネインの右腕であった。

（僕のストーンウォールを、一撃で砕くだ！？）

ジューダスは即座に距離をとるように回避した。

「くくく……あまり見くびってくれるな？俺の魔腕の破壊力は相当なものだぞ？」

「……ふん。魔物を指揮して戦うのが貴様のスタイルだと少々見誤っていた」

ジューダスは再び剣を構え、フォーネインを中心にゆっくりと右周りに動いていく。

フォーネインは移動するジューダスに向きを合わせるように体を回転させる。

「俺の右腕から離れようとしているのは懸命だが、貴様にそこまでのスピードがあるかな？」

「ふん……貴様こそ見くびってもらっては困る。速さは僕の得意とする領分だ！！」

次の瞬間、ジューダスがフォーネインの視界から消えた！

（な　！？）

フォーネインはとつさにその場から飛びのく。

ジューダスは一瞬のうちにフォーネインの左側面に回りこんでいた。そのまま突撃するジューダス。風をまいて疾駆するその速度に、フォーネインは戦慄を感じた。

「速い　！」

ジューダスの剣が横なぎに払われる。それを右腕で必死にガードするフォーネイン。

ジューダスは返す一撃でフォーネインの首を跳ね飛ばす一撃を放った！

それをぎりぎりしゃがむことで避けるフォーネイン。

「はっ　　！」

しかし次の瞬間にはジューダスの剣が頭に振り下ろされる。

そう直感したフォーネインは右腕で頭をかばった。

しかしジューダスは剣を振り下ろすことはせず、右足でフォーネインを蹴り飛ばした！

「がはっ！」

フォーネイン体勢を崩して仰向けに倒れこむ。

ジューダスはそのままいノセントキラーをフォーネインの心臓に突きたてようとする！

その時だった！

「ジューダス！よけてー！！」

カノンノの叫びが聞こたと同時に、ジューダスの体はものすごい衝撃を受け、一気に吹き飛ばされた！

「ぐあ　　！！」

ジューダスはそのまま地面をごろごろと転がってうつぶせに倒れた。突然の視界の外からの攻撃に、対応できなかった。

いったい、今は　　？

「くくく……さっき言わなかったか？俺の特殊能力は『魔物と意思疎通する』ことだよ」

その声は先ほどまでジューダスに圧倒されていたフォーネインのものであった。

見れば、フォーネインのすぐ傍には、スタンたちに相手を任せたはずのジンオウガがいた。

「……く、そうか。指示をしなくても自分の意のままに操れる……ということか！」

「そうだ。お前の剣を裁ききれないと感じた時点で、俺はジンオウガを呼び寄せていた」

スタンたちはフォーネインとジンオウガを囲うように陣形をとった。
「リオン……この魔物は足止めなんて出来ない……さっきの突進力を見ただろう？」

スタンがジンオウガを睨み付けながらジューダスに言った。

「ああ……ごほっ！……隙を見つけて攻撃を積み重ねていくしかない」

そのとき、ジューダスの体を淡い緑色の光が包み込んだ。

「ヒール！……リオン！大丈夫！？」

ルーティがジューダスに治癒術をかけていた。

ジューダスはその術で痛みが引き、立ち上がった。

「ふん……問題ない」

「そ。ならさつさとシャキツとしなさい！」

ルーティの叱咤激励にニヤリとした笑みで返すジューダス。

そのとき、ラーナがジューダスの傍に駆け寄ってきた。

「ごめんなさいジューダス……あのジンオウガ、突然、標的を私たちからあなたへと変えたから、対応に遅れてしまったの」

「問題ない。あの魔物を操っているのはフォーネインだ。やつがいる以上、あの魔物はお前がよく知る魔物とは少し違うということを覚悟しておけ」

ジューダスの言葉に、ラーナが息を呑む。

「だが、おかげで勝機も見えた」

ジューダスがニヒルに笑って剣を構えた。

「全員、ジンオウガの攻撃を避けながらフォーネインを攻めろ！やつが対応できなくなるまでに戦況をかき乱せ！」

ジューダスの号令に、その場にいたものが全員うなずいた。

「なるほどな……確かに、ジンオウガを操る俺が冷静さを失えばこの戦局は変えられるが……」

フォーネインはくつと笑って、しゃがみこんで右腕を地面に当てた。

「そのための土属性の魔術だ。……ストーンプリズン!!」

フォーネインが叫ぶと、彼を囲うように石柱が現れ、完全にフォーネインを覆い隠してしまった。

「防御結界……！それもかなり強力なもの！」

ラーナが相手の術を分析する。

今のフォーネインに攻撃を当てる術がないことに思い当たった。

結界の中からフォーネインの声が聞こえる。

「ここからはジンオウガの本気を見せてやろう。さあ、その真の姿を開放しろ!!ジンオウガ!!」

「!!」

するとジンオウガは、咆哮をあげながらまばゆく輝き始めた！

「何だ、あれは！」

「超帯電状態！まさか、一瞬で移行するなんて!!」

ラーナが驚きの声を上げる。

その言葉に、カノンノが問いを投げた。

「ラーナさん!!超帯電状態って!？」

「ジンオウガはその体から一定の放電を開始すると、今までとは比べ物にならない速度、威力をその体から発するの！」

ジューダスが叫んだ。

「来るぞ!!」

その瞬間、ジンオウガは雷光の軌跡を描きながら高速でスタンに飛びかかった！

「うわぁ!!」

とつさに回避するスタン。

「ゴアアア!!」

ジンオウガはそのままスタンの居た地点を殴りつける。

すると、その場に大きなクレーターが出来上がってしまった。

「な、なんて威力なんだ！」

カウスが驚きの声を上げる。

ジンオウガは、今度は近くに居たルーティに狙いを定めた。

「ルーティ！避ける！！」

ジューダスが叫ぶと同時にルーティがジンオウガから離れるように走った！

ジンオウガはしかし、ルーティを追わず、その場で咆哮をあげた。

その瞬間、ジンオウガの背中から雷光を纏った塊が4つ飛び出し、ルーティめがけて飛翔した！

「な、なによそれー！？」

ルーティはとつさに魔術結界を発動させるが、ジンオウガのその攻撃をすべて防ぐことは出来ず、ルーティはそのまま吹き飛ばされた！

「きゃああああ！！」

「ルーティ！！」

スタンがルーティを心配するが、その隙を狙うようにジンオウガは再びスタンに向かって突進した！

スタンはジンオウガの突進を避ける！

同時に、剣に炎の力を溜め込み、放出した！

「翔鳳烈火！！」

炎の鳥はジンオウガに激突するが、ジンオウガはひるみもせずにもれまわり続ける。

「ジンオウガの弱点は頭部です！みんな！頭を狙って！！」

ラーナが叫ぶが、ジンオウガの動きが速く、みな上手く頭を狙えないでいた。

ジンオウガが突然叫ぶ。すると、周囲に雷の閃光が走った！

「うわあ！！」

カウスがその閃光を食らい、吹き飛ばされる。

「カウス！！」

カノンノが叫ぶ。同時に、ジンオウガがカウスめがけてその巨軀を繰り出した！

「くっ！！」

カウスはまだ起き上がれないで居る。このままではジンオウガの強

烈な打撃を食らってしまふ。

その瞬間、再びまばゆい光がジンオウガを包み込む。しかし今度の閃光はラーナがその弓から繰り出したものだった！

「奥義！烈光射！」

ラーナの手につがえられたのは3本の光の矢。

それらが射出されると、ジンオウガの周囲をまばゆい光が包む。

ジンオウガはそのまばゆい光に眩んでいるようであった。

「今のうちに、カウスを助けてあげて」

ラーナが隣にいたカノンノにそう言うと、カノンノは急いで走り出した。

カウスの傍に近寄り、治癒術をかける。

ジンオウガが動きを止めている今がチャンスとばかりにスタンたちは攻撃をしかけたが、ジンオウガの硬い皮膚に致命傷を与えるのは困難であった。

そうしているうちに、再びジンオウガが視界を取り戻す。

「ゴアアアアアアアア！」

先ほどの光でさらに怒ったのか、凶暴性をまして攻撃を繰り出してきた。

「ジンオウガ……やはり、強い！」

ラーナが悔しさを顔ににじませながらつぶやいた。

ラーナは弓から光の矢を放つが、ジンオウガはまったく動じない。自分の戦力ではダメージを与えられないのか。

そうラーナが思っていたとき。

「ラーナア！！爆撃破を撃つんだ！！！」

「！！！」

突如、ラーナの後方から声が聞こえた。

スタンたちはその声の主が誰なのか視認しようとしたが、ラーナの弓がその前に赤く光る矢を放った！

高速で射抜かれたその矢は、ジンオウガの足元に着弾すると、爆発して地面をえぐった！

ジンオウガは突然の爆発によるめいたが、別段ダメージを負ったわけではない。

そこに、巨大な剣を振り上げてとびかかるひとつの影があった！

「ガイレッツ！！！」

ラーナが叫ぶ。

ジューダスは新たな人物の参戦に驚いていたが、さらに驚かされることになる。

ガイレッツは身の丈ほどもあるかと思われる大剣を振り下ろすと、一撃でジンオウガの頭部を切断した！

「っしやああ！！！」

荒々しい勝どきを上げるガイレッツと呼ばれた男性。

身長は185cmはあるだろうか。その身の丈とほぼ同じ大きさを誇る幅広な大剣は、ガイレッツの筋力の強さがあればこそ操れるのだろう。

髪は燃えるように赤い短髪であった。

「ふん……久しぶりの再会が、まさかジンオウガの討伐でとはな。元気にしてたか、ラーナ」

「……本当に、本当にガイレッツなの？」

「ああ。……とりあえずの挨拶は済んだな。それで、あの結界はなんだ？」

ガイレッツはそのままフォーネインが作り出したストーンプリズンの

結界を指差す。

ラーナは「あそこには、さっきのジンオウガを操っていた私の敵が隠れているわ」と言った。

「お前の敵か……だったら俺の敵でもあるな」

ガイレッツは凶悪な笑みを見せた。結界を破壊するつもりでいる。

しかし、その前にストーンプリズンの結界をフォーネイン自らが解いた。

「……とんだ邪魔者の登場だな」

「へっ。何者なのか問うまでも無いな。察するに、その黒い岩の持ち主つてところか？」

「ガイレッツと言ったか？ 貴様の名は聞いているぞ」

「……なに？」

フォーネインは陰鬱に笑った。

その表情にガイレッツの顔が険しくなる。

「貴様は要注意人物だな。我らの邪魔をする者が現れるとき、ガイレッツがいたら気をつけろ、と」

「は……俺もいつの間にな有名になったんだかな。てめえらのことなんざまつたく知らないんだがな」

そこでガイレッツは突如何かに思い当たったようだった。

「一度、バルバトスとかいう男とやり合ったことがある。貴様、あの男の仲間か？」

「バルバトスと戦った!？」

スタンが驚きの声を上げた。

ガイレッツは別段驚いた風でもないままスタンを見た。

「あ？ お前からあの男の知り合いか？」

「知り合いつていうか敵よ!」

ルーティが叫ぶ。

「は……じゃあ、とりあえずこの場でやるべきことは決まったな」

ガイレッツは大剣をぐるぐると振り回し、大地にたたきつけた。

そして、フォーネインに向けて剣を向ける。

「てめえをひっ捕らえて、この世界で何をしているのか白状させてやる！」

「……」

フォーネインは無表情でガイレッツの睨みを受け止めている。

そして、深くため息をつく。

「セルシア」

フォーネインが呼びかける。

「貴様との因縁を終わらせるのはまた後だ。この場は引かせてもらう」

「……逃がしません。あなたはここで仕留める」

セルシアが銃口を向ける。

しかし、フォーネインが目を瞑ると、彼を包み込むように黒い霧が発生した。

「慌てる事はない。計画通りすすめば、俺は再びお前たちと対峙することが出来る」

「……フォーネイン。あなたの目的は何ですか。この黒の石を使って何をしようとしているのです」

「……ふん。新生アーカノルドの誕生さ」

「え……」

フォーネインはその言葉を残し、黒い霧とともに姿を消した。

セルシアはいつまでも銃口を向けていたが、やがて降ろすと、ジュ

ーダスのほうを見た。

「ジューダス……新生アーカノルド、とは……」

「奴の敗戦国のことだな。……奴らの目的は、敗戦国の復権か……？」

「くだらねえ！！」

ガイレッツが突然言い捨てた。

ラーナが声をかける。

「ガイレッツ？」

「何が新生アーカノルドだ！そんなことのために……黒の魔物を生み出してるってのか！？」

「……」

「……ふん。まあ、奴のことは今は置いておくとして、だ」

ガイレッツはそう言いつと、ラーナのほうを向き直った。

そして

「すまねえ！ラーナ！！」

ズバツと頭を下げたそう言った。

「が、ガイレッツ？」

ラーナが戸惑う。

ガイレッツは頭をゆっくりと上げ、口を開いた。

「ギルドが解散してから今まで、何の連絡もしないで居たことは悪かった。俺は……」

「……いいよ、ガイレッツ」

ラーナは小さく首を横に振って、微笑んだ。

「それよりも、今は町に戻りましょ。今、私はあそこに住んでるの。」

ジューダスの仲間とも合流しないといけないし、今は休息が必要だから……」

ラーナはそう提案するとジューダスを見た。

「用事が済んだら、戻りましょう、ジューダス」

「ああ……アリス。この黒の石が力を送っている方角を確認してくれ」

ジューダスがそう言うと、今まで遠くに避難していたアリスがパタパタと近づいてきた。

「あ、あんた達……なんって危険な戦い方なの！もつと余裕で勝てないの！？」

文句をこれでもかといわんばかりの音量でジューダスにたたきつけるアリス。

ジューダスはむっとした表情を見せる。

「うるさい。……さつさと用事を済ませて帰るぞ」

「あ、あんたねー！私、巻き込まれて死んじゃうかと思ったんだからねー！」

ぶつくさと文句を言い続けるアリスであつたが、いくら文句を言ってもジューダスが知らぬふりをしているのにやがて観念し、黒の石に近づいていった。

「……ここから北東の方角に向かって伸びているわよ。覚えたから、いつでも案内できるわ」

アリスはふんっ！とそっぽを向きながら言った。

「上出来だ。……町に戻るぞ。敵の待ち伏せがあつたんだ。あちらに刺客が送り込まれている可能性もある」

ジューダスはそう言うと、「待ちな」ガイレッツがそう言った。

「……なんだ？」

「この黒い岩をこのままにしておくわけにもいかなーだろ」

「……破壊するというのは？」

「……俺は今までそうしてきた」

ガイレッツの発言に、カウスが驚く。

「えっと……破壊して大丈夫なものなんですか？それ……」

「このままにしておく、またいつ魔物を生み出すかわからねえ。

それに、破壊するための技術はすでにこの大剣に仕組んであるんだよ」

ガイレッツはそう言うと、黒い岩の前に立った。

「黒い石を破壊する技術……だと？」

「ああ。こいつはジオランデで開発されたエンチャント兵器でな。

対黒の石破壊を目的として完成されたものだ」

ガイレッツがそう言うと、ラーナは驚いたように声を上げた。

「ジオランデ！？ジオランデに行ってたの？ガイレッツ……」

その言葉に、ガイレッツはうつむいて黙った。

「……ジオランデは俺たちのギルドを解散させた国だからな。納得いかなーのはわかる。だがこの世界を巻き込んでいる異変を解決するためには仕方ねえことだ」

ガイレッツはそう言うと、大剣を振りかぶった。
そして、

「はあああああああああ！！」

勢いよく黒の岩にその大剣をたたきつける！

すると、黒の岩と剣との間に虹色の輝きが火花のごとく散った。
そして……

バキイと黒の岩にひびが入ると、そのまま黒の岩は霧状になっていき、そのまま霧散した。

「……本当に壊しちゃった」

カノンノが呆然とつぶやいた。

ジューダスは黙ってみていたが、「あああああ——！！！！？」
アリスの悲鳴があたりにひびいた。

「何やってんのこの馬鹿！あんたが黒の石破壊しちゃったから力の流れが見えなくなっちゃったじゃない！！！」

「あ……？」

ガイレッツが戸惑いの声を上げる。

同時にジューダスたちもぎこちない表情でアリスを見た。

「な、なにiiiiiiii！！？」

スタンたちの驚きの声が周囲に響いた。

「ど、どうするんだ！？次の目的地が北東ってことしかわからなくなっちゃったんじゃ……」

「……い、一応、私の森から流れてくる黒の石の流れも残ってるから、そっちを追いかけることはできるけど……」

アリスがぶつぶつとつぶやいた。

すると、ガイレッツが「ふん。心配いらねーよ」と言った。

「心配要らない？」

カノンノが首をかしげる。

「あの黒の石がどこに力を送り届けているのか、それは既に見当が付いているからな」

「え、ええええええ！？」

カウスとアリスが叫ぶ。

ラーナも驚きながら「いつの間に……もしかしてガイレッツ、今までずっとその調査を……？」と言った。

「ああ……ジオランデでは既に妖精の協力の下、世界中に現れた黒の岩の正体を突き止めるように調査していた」

「僕たちがやっていたことは既にほかの組織もやっていたということとか」

ジューダスがつぶやく。

「な、なによー！あたし、働き損じゃない！！そのジオランデってところの妖精に任せとけば良かったのね！！」

「まあそう怒るなよ。ひとつの黒の岩からは近くの岩しか発見できねーんだ。この地方の黒の岩の居場所は不明なものが多かったんだ。てめえは働き損じゃねーさ」

アリスはまだ納得していないようだったが、スタンが「まあまあ」と言っただけでその場を納得させた。

「ある地点から黒の岩の流れを追っていった結果わかったんだが……どうにも、その力の流れってのは……『世界樹』に向かって伸びているらしい」

ガイレッツは、遠くを見つめながらそう言った。

六章六話 目指すべき地（前書き）

この作品は、TOD、TOE、TOD2、TOS、TOA、TOV、TOWRM2のキャラクターとオリジナルなキャラクターが登場するmix作品です。

上記のような設定が苦手な方、ご注意ください。

六章六話 目指すべき地

「よおジューダス。戻ってきたのか」

街に戻ってきたジューダスに声をかけたのは、留守を任せられたリッドだった。

ジューダスは宿屋の部屋のベッドのわきに荷物を置く。

「敵の襲撃にはあったがな。収穫はあった。あとでお前たちに紹介する男がいる」

「へ……？まさかまた仲間が増えたのか？」

「……そんなところだ」

ジューダスはそう言って、ベッドに腰掛けた。

「……どんどん大所帯になっくな」

リッドは苦笑した。

ジューダスはその腰から剣を抜くと、いつもの手入れを始めた。

「自己紹介させてもらうぜ。ガイレツ・シエルバイロスだ」

ガイレツはそう言って、集まったジューダスの仲間たちに己の名前を告げた。

皆、新たな人物に興味を持っているようであった。

ラーナがガイレツの横で口を開いた。

「彼は私の元ギルドのメンバーなの。ジューダスには話したわよね」

「ああ、知っている……」

ジューダスはそこで思い当たることがあったのでラーナに聞いた。

「……ディセNDERだと疑っていたのは、アステイルという男の方だったな」

「ええ、そう。彼、ガイレッツは記憶喪失なんて無かったから……」

「ふん」

ガイレッツが鼻を鳴らす。

「?どうしたの?」

「アステイルの事をまだ心配してるのか?ラーナ?」

「な、なに言ってるの。そんなこと、当たり前よ……そうだ。ガイレッツ。アステイルのこと、何か知ってるんじゃないの?」

ラーナが尋ねると、ガイレッツは険しい表情を浮かべた。

「さあ、な……ギルドが焼き討ちされた後、俺とアステイルは確かに一緒に行動してたが……すぐに別れたんだよ」

「……どうということ?」

「……正直に言えば、ラーナ。俺はジオランデ国に復讐するつもりで、ギルドが焼き討ちされたときに姿を消したんだよ」

「……」

「アステイルも誘ったんだが……あいつは乗ってこなかった。それで俺たちは別れたんだよ……その後のあいつの行動は知らねえ」

ガイレッツはそう言うと、ジューダスたちに視線を向けた。

「それで、どうする?お前たちは世界樹を目指すのか?」

ガイレッツが尋ねると、最初に口を開いたのはロイドだった。

「俺は当然、目指すべきだと思う。世界樹ってのは世界にとって大事なものだ。そこに黒の石が関係してるなら、この世界の異変と無関係ってことは無いだろうからな」

「そうだな」

ロイドの言葉にユーリがうなずく。

「でも、もう世界樹の調査は済んでるんじゃないの?」

「ユーリがそう言うのと、ガイレッツは「いや……」と言った。

「俺が所属してるジオランデの異変調査部隊には世界樹の付近がどうなっているかって報告はまだ入ってきてない」

「……そうなのか？」

「ああ。この世界の世界樹のある島に入るには、世界樹の門って所を通る必要があるんだが……通れないって報告が来てるんだよ」

「通れない？」

「スタンが尋ねた。」

「ああ。世界樹の門はただ出口まで一直線の洞窟の筈なんだが、兵士たちは皆、歩いているといつの間にか自分たちが来た道に戻っているんだってよ」

「あからさまに怪しいな……」

「ユーリが険しい顔つきで答えた。」

「ガイレッツもうなずく。」

「……派遣された兵士たちが戻ってこないって事もあった。……たぶん殺されてるんだろ。魔物か、あるいはさっきのみてーな俺たちの調査を邪魔する連中の手によって、な」

「ひどい……」

「コレットが言葉を漏らした。」

「ガイレッツは黙って考え始めた。」

「……直接乗り込んでみる必要はあるかもしれないねえな。罠だったとしても……」

「いつの間にか来た道に戻っているって、前にもあったよね」

「カウスがそう言うのと、ガイレッツは驚いたようにカウスを見た。」

「どういふこった？」

「あ、えーと。前に訪れた世界で迷いの森みたいなのがあるが、あつてね。そこは黒の石が作った空間のせいで、森から出られないようになってたんだ」

「……黒の石、か」

ガイレッツがジューダスを見る。

「お前らはさまざまな世界から黒の石を持ってきているんだったな……」

「ああ、そうだ。だから、黒の石を持ち歩いている僕たちが行くことで道が開ける可能性もある」

「……試してみる価値はあるな」

ガイレッツがにやりと笑った。

ジューダスは無表情のままうなずいた。

「今後の方針が決まったな。世界樹を目指して旅をする」

ジューダスが言うと、仲間達は素直にうなずいた。

「あ、あのさ……」

アリスがパタパタと羽ばたきながら、仲間達の前に出た。

「あたしはもう、用済みよね？」

アリスはどことなく気まずそうな顔でそう言った。

「……確かに。もう黒の石の力の流れとやらを追う必要は無くなったのだからな。お前の力に頼る必要は無くなったわけだ」

ジューダスがそう言うと、アリスは下を向いた。

「……あんたたちは、これから戦い続けるんでしょう？」

「ああ、そうだが？」

淡々と答えるジューダスに、アリスは一瞬むっとした表情を見せた。しかし、ぷいっとそっぽを向くと、今度はユーリの方を見た。

「ユーリ……あなたも戦うんでしょう？」

「ああ。俺の住んでいる世界も関係してることだしな」

「……ふう」

アリスは考え込むようにしていた。

やがて、口を開く。

「危ないことには関わりたくない……でも、あんた達のことも放っておけない」

そう言った。

アリスの言葉に、思わず驚くジューダスたち。

ロイドが最初に口を開いた。

「いいのか？アリス……これから危ない戦いを続けるんだぞ？」

「……それは、そうなんだけどさ」

アリスが口ごもる。どうやら、まだ決心しきれてはいなかったらしい。

試すようにリッドが口を開いた。

「アリスのことを絶対に守ってやれるなんて言えねえ。俺達の相手は、そのくらい手ごわいものなんだ」

「……」

「無理についてくる事は無いんだぜ？」

リッドの言葉に、アリスは黙ってうつむいた。

「俺達が心配だって気持ちは嬉しいよ」

ルークがアリスの傍に近寄りながら言った。

「その気持ちだけで十分だって」

そういつてアリスの頭の上にポンツと手のひらを乗せるルーク。

「な、なによルーク……」

少し頬を赤らめながら、アリスはルークを見た。

次に、ユーリが口を開いた。

「ま、そういうこった。アリス。お前はお前の身の安全のために、元の住処に帰ってもいいんだぜ？」

「……うー」

仲間達の言葉に、アリスは納得しながらも、まだ決めかねているようだった。

その時、ガイレッツがアリスに近寄った。

「妖精。お前には命をかけてでも戦う覚悟はあるのか？」

その言葉に、アリスは返答を詰ませた。

「それは……えっと……」

「お前の住処にも黒の魔物が出たんだったら、俺の仲間の調査員を派遣させて黒の石を破壊してやる。それで当分の間は安全なはずだ」

「……」

「お前が俺達について来るって言うんだったら、今まで以上の危険を迎えなきゃならねえ。そうまでしてついてくる覚悟はあるのか？」

「……私は……」

アリスは何を言うべきか迷っていると、エステルがアリスの傍に近づいてきた。

「アリス、私達を信じてください」

「……エステル？」

「私達は必ずこの世界の謎を解いて見せます！全員無事で！だからアリスは、信じて待っていてください」

エステルのその言葉を聞いたアリスは、小さくうなずいた。

「そうね……信じる……か」

「はい！」

「いいわ！信じる！」

アリスはそういつてパタパタと大きく飛び上がると、声を大にして言った。

「あなた達を信じて、一緒について行く！」

「……え、ええ！？」

仲間の驚きの反応を、アリスは楽しんでいるようだった。

「私の能力が本当に用済みになるか、わからないじゃない。妖精にしか分からないものってあると思うのよね。そんな時、私が傍にいれば何かと便利じゃない？」

「いや……それはそうだけだよ……」

ユーリが驚きを表情に浮かべたまま言葉を返す。

アリスはパタパタと羽ばたきながらユーリに近寄った。

「確かに、私は戦闘能力は持ち合わせてないけど……」

「……さっきも言っただろ？ 守ってやれる保証は出来ないって……」

「そこは、信じることにしたわ！」

アリスは自身満々にそう言った。

「異変の謎を解くためにわざわざ異世界にまで来るあなた達だもの！ 自分の腕には自信があるんでしょ？」

「……」

「それに、異世界から来たあなた達に問題を丸投げするなんて、私は嫌よ！ 私もこの世界の一人として、役に立つの！」

「……仕方ねえな」

ユーリはやれやれと首を振ると、

「俺はアリスがついてきてもいいと思うぜ」

そう言っただけで仲間達を見渡した。

ユーリの言葉に、仲間達もうなずく。

「どうする、リオン？」

スタンがジューダスに尋ねると、ジューダスは考え込むようにしてから。

「……そうだな。お前がついて来るといふのなら、いいだろう」

そう言っただけで、アリスの同行を許可した。

「ふふ！ 私もあなた達を手伝ってあげるから！ 私のこともしっかり守ってよね！ みんな！」

アリスは腰に手を当てて楽しそうにしながら言った。

エステルがアリスの傍に近寄って、口を開いた。

「アリス……ええ！一緒に頑張りましょう！」

「すごい！仲間がまたたくさん増えたね」

コレットが手を合わせながら言った。

その言葉を聞いたジューダスは、周囲を見渡して、そして深く息を吐いた。

「あまり大所帯になると行動が重くなるんだがな……」

その言葉に、セルシアは目を瞑ったまま答えた。

「今に始まったことでは無いでしょう？」

「……ああ。いまさら二人も三人も、一緒かもしれん」

ジューダスはそう言うのと、ガイレッツの方を見た。

「それではガイレッツ。世界樹を目指すことにするが、案内は任せていいか？」

「ああ、いいぜ。……道中よろしくな」

「ああ」

「とりあえず、今日のところは旅の準備をするっつーことで、一晚泊まって……明日から、世界樹を目指して出発するぞ！」

ガイレッツがそう言うと、仲間達は「おうっ！」と答えた。

そして、思い思いにその場を離れて行った。

「ガイレッツとラーナ。二人とも、改めてよろしくな！」

スタンがにこやかに笑いながら手を差し出す。

その手に、ガイレッツはニヒルに笑いながら握手を返した。

「よろしく頼むぜ」

ガイレッツが握手を止め、一步下がる。

そして、ラーナが今度はスタンと握手する。

「よろしくね。私達も、可能な限りあなた達をサポートするわ」
そう言ってラーナは手を離れた。

「それじゃ、俺達も旅の準備をしてくるぜ」

「ええ」

そう言ってラーナとガイレッツは二人でジューダス達から離れていった。

その時、バルドック神父がジューダスの傍に近づいてきた。

「ずいぶんと大所帯になったものだが、君はこれだけの人数で動くことに不都合を感じないかね？」

「……確かに旅をする上では不便も多いが……戦力を割く理由も無いだろう」

「確かに」

神父はそれぞれ買い物に出かけて行った仲間達の背中を見送りながら、言葉を続けた。

「彼らの実力は貴重なものだ。私の目から見てもそう思う。戦力は多いに越した事は無い……か」

「何か気になるのか？」

「いいや。ずいぶん頼もしい旅だと思ったただだよ」

神父はそう言くと、ひらりとその場を去り始める。

ジューダスはその神父の姿を見送っていたが、やがてセルシアの方を見て、

「僕達も明日以降の準備をするでしょう」と言った。

「はい」

セルシアはこくりとうなずくと、歩き始めたジューダスの背中少し後ろをついて歩いた。

街を照らす日の光が夕焼け色に染まり始めていた。

六章六話 目指すべき地（後書き）

大幅なプロット改編に悪戦苦闘しております……

しかし、完結までは何とか持っけていこうと思います。

それでは、今回も読了ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3602o/>

黒衣の守護者

2011年11月29日20時55分発行